新書太閤記

第八分冊

吉川英治

青空文庫

天機刻々

依然。——秀吉はさっきの所に坐ったままであった。

燭の下に、灰となった薄いものが散っていた。長谷川宗仁からの飛脚状を焼いたものと思われる。

飛脚の者を始末しおえた彦右衛門と久太郎秀政が、座にもどって来ると、間もなく、

「お見えなされました」

と、石田佐吉が、帰りを告げ、その佐吉が小姓部屋へ退がると、入れ代りに、黒田官兵衛孝高がびッこを曳きながら入って来た。

「やあ」

と、眼で迎える秀吉も、不自由な脚を折って、どかと坐る人も、いつもながらの風であった。

殊に官兵衛は、伊丹城中の遭難以来、不治の隻脚となっているので、君前でも、そのための横坐りはゆるされていた。なおついでにいえば、あのときの獄中生活でできた皮膚病も痼疾となったかたちで、今なお頭の毛の根はそれが治りきっていない。——だから余り燈火に近くすわると、そのうすい髪の根までが透いて見えて、この体躯矮短にして胆斗のごとき奇男児の風貌、いやが上にも魁偉に見せ過ぎる嫌いがある。

「この夜更けに、何事でございますか。……お召しとは」

いつまで、ものいわぬ秀吉へ、官兵衛からそういった。秀吉は傍らを向いて、

「彦右衛門から話せ」

と云い放したまま、腕拱みして、首を埋めてしまった。こういう間にも、むだなく思考をめぐらしているように見えるし、また、ともすれば嘆息となる意志の崩れを如何ともし難いような姿とも眺められる。

「官兵衛どの。驚かれるなよ」

こう厳粛な悲痛味を予告しながら、彦右衛門は手短に事実を告げた。長谷川宗仁からの飛脚もそのまま語った。豪気をもって鳴る官兵衛孝高の顔いろも、それを聞かされた一瞬は凡人以外のものではなかった。

「……」

何もいわず官兵衛もまた、大きな息と共にその胸へ腕を拱んでしまった。

そして時を措いて、じろと額ごしに同じ姿でいる秀吉を見た。

と、堀秀政はすすと膝をすりよせて、秀吉へ云った。

「はや過ぎたるを思うてみても致し方ござりますまい。世風は今日から吹き変りました。しかも風は順風と覚えられます。お船出の帆をお揚げなさるべき時節こそ到来。ふたつか一つかの御分別、いまこそ肝腎かなめかとぞんじまする」

それに応じて幽古も云った。

「秀政どのの御意、まことに至言。世間の様態、ものに喩えて申すならば、吉野の桜、雪とけて、東風の訪れに会いたるごとく、人もみな、やがてお花見を待つ心地やらんと思わるる。早々、お花見のおしたく、遊ばされますように」

「よういわれたぞ、御両所——」

と、官兵衛孝高も膝をたたいた。

「天地と永劫、万象も春秋に、そのすがたをかえてこそ、生命も久し。――そのあめつちの心をもて大きく申さば、このたびのことて、めでたしといえぬこともない。吉野のさくら、時来らでは見られぬものよ。雨情を孕み、風の陽気に、おのずから咲き出るに、何の御分別や要り申さん。――秀政、幽古などの申すとおり、この上は花見始めの御一戦。しかと御決意あそばして然るべきかと存じまする」

左右の者のすすめは秀吉をして、いうまでもないことよ、と会心の笑みを抱かせたにちがいない。

実に秀吉の本意もそこにあるのだ。――が、ただ、秀吉は人々がそれを云い出すのを待っていたに過ぎない。彼としては、信長の死をもって、

――天地の慶祝なり。

とはいえなかった。

その痛哀をして、天下の悲愁たらしめず、天下の慶祝とさせなければならない、とする小義や私情を乗り超えた信念が、よしいかほど自己のうちに固くあってもである――不用意にあらわしては誤解されやすい。総帥の死はやはり三軍の喪であり、しかも彼の臣だった。

臣なるがゆえに、信長の死を犬死にとさせてはならないのである。その生命を不朽に継ぎ生かすこそ遺された家臣の道と彼はかたく思う。けれど臣道なるものを、誰も口には説き、誰も行うに劣らずとしているが、その信行にはおのずから人まちまちな深さの差がある。

彼は彼の信念と深度を以てつらぬくしかない。その肚の底には持つものを確と持っての秀吉であった。

彼は、うなずきうなずき、面をあげて、左右の者へ答えた。

「官兵衛も、秀政も、また幽古までが、よくぞ励ましてくれた。実、秀吉の思うところもそれよ。それ一つでしかない。――ついてはだが」

充分、肚の底ができていた証拠といえよう。そこで一語を切ると、彼のことばはすぐ実際問題へ入って来た。要するに、対毛利とのこの戦場をいかに処し、いかに打開し転進するかであった。

「ここで、できるだけ迅速に、かつ機密に、毛利との和睦を取りきめねばならぬが。……彦右衛門、御辺はきょうも、恵瓊と会っていたろうが、どうだな、先の肚は」

「和議のことは、こなたからの申し出でにはなく、安国寺恵瓊を使いとして、両三日前から、内々毛利方より申し入れて来たことゆえ、彼の示して来た条件ならば、すぐにも取結ばれましょうが……」

「いかん、いかん」

――秀吉は、たとえこの際でもと、つよく首を振って見せながら、

「断じて、あのままではいかん」

と、ことばを重ねた。

「されば。――もとよりこの前から、ここは毛利で何といって来ても、耳をかたむけぬ、との御意でありましたから、今日も恵瓊が来て、そっと、よそで会談しておりましたが、頭からその斡旋を突ッ刎ねて別れたわけでございまする」

「そこだな。……そのまま手切れとなっては困ることになったのだ」

官兵衛の方へ眼を向けて、

「安国寺恵瓊は初めて、往年の知縁をたよって、彦右衛門を訪れて参り、二度目には、その方の陣屋へも行ったのではなかったか」

「左様でした」
「その方のところまでは、どのように云っていたか」
官兵衛は、秀吉の問いに答えて、
「やはり彦右衛門殿を介して、申し入れて来た条件とひとつに過ぎませぬ」
「――と、いうと？」
「つまり……毛利方から提示して来た条件というのは、この際、媾和するならば、備中、備後、美作、因幡、伯耆の五カ国を割譲しよう。そのかわりに高松城の囲みを解いて、清水宗治以下の城兵五千の生命は保証して欲しいと申すのでありました」
「ウム。それだな。五カ国を割いて献じるといえば大譲歩しているようだが、備後一国をのぞくほかは、今なお争奪の地で、必ずしも、毛利方の領下として治められている地ではない」
「仰せのとおりです」
「さるを唯々として宗治の一命をも助け、和議に応じるわけにはゆかない。これは信長公の御意を俟つまでもないことだった。勝敗の決はすでにわが手にあるのだから。――しかし今となると、この機会は、だいぶちがって参った。この和を逸してはならぬことになった」
「まことに、ここは間髪、伸るか反るかの大機と存ぜられます」
「敵の毛利が、京都の変を知るがさいご、到底、和議はむずかしい。戦いの主導は彼の手にうつり、必然、大勢すべてわれの不利となる。……が、毛利はなお気づいてはおるまい。おそらくはまだ」
と、秀吉は語尾に力をこめて、もういちど、
「おそらくはまだ何事も知っていまい。――天のわれにかし給える数刻の時は――敵がそれを知るまでの遑でしかない。大機をつかみ、大策を施すも、そのわずかな間にのみ限られておるのだ。一刻一刻が、いまほど尊いときもない」
「まだ今夜は、三日の真夜半、ようやく子の刻（十二時）頃と思われます。あす四日中に和議をおすすめあるとも、両三日中には纏められましょう」
これは蜂須賀彦右衛門のことばだった。
秀吉は、その彦右衛門や秀政へ面を向け直して、
「いや遅い。夜明けを待つまでもなく、すぐその運びにかかれ、幸い彦右衛門はきょう恵瓊に会っておる。そのはなしの縒を戻して、もういちど、恵瓊がこちらの陣地へ出向いて来るように取計らえ」
「では、すぐ恵瓊のところへ、使者など立てましょうか」
「待て待て。過日来から彼の斡旋を一蹴して来たものが、にわかに夜中、此方からただ使いを立てては、敵も、はて？　と不審をさし挟もう。――使いを遣るには、遣る口上も熟慮せねばなるまい」
それからしばしは、ここの声も洩れないほど密かだった。
間もなく蜂須賀彦右衛門がいそぎ足に出て行った。
小姓部屋のうちでは、幽古から眠気ざましの菓子を賜わったので、おでこ押しや腕相撲に興じ、更けるのもわすれて折々高い笑い声をあげていた。

電捉

秀吉の命をうけるとすぐ諸所の往来口へ早馬を打って、通行の検察にかかっていた浅野弥兵衛の手の者は、同夜間もなく、その迅速

な網の目に、一名の怪しげな男を捕えていた。

場所は首部という山村の、部落からも離れている間道だった。

「どこへ行く」

一小隊で取り囲むと、男は杖を止めて、

「備中の身寄りへまいります」

と、至極神妙である。

「備中のどこへ」

たたみかけると、

「はい、庭瀬で」

と、そら嘯く。

「庭瀬へ行く者が何でこのような山道を好んで歩くか。しかもこの真夜半」

「ほんに、仰っしゃるとおりで、黄昏に旅籠を求めそこね、一里先へ行ったらあるか、二里歩いたら泊まれるかと、ついつい盲人の勘と強情から、こう参ったのがまちがいの因でした。……どう参ったら旅籠のある人里へ出られましょうか、どうぞお教え下さいまし」

と、竹の杖に両手をのせて、さもさも愍れを乞うようにうなずいた。

じっと、様子を見ていた部将は、いきなり指さして、

「こいつ、偽盲だ」

と、一喝をあびせ、部下へむかって、縛りあげろと命じたのである。

すると、盲の男は、眼があいたような驚き方をして、ぱッとうしろへ跳びのきながら、

「と、と、とんでもない」

無性に地を叩いては言い訳した。

自分は都の者で、検校の允可も持っている。年久しく琵琶など教えて生活していたが、庭瀬にある老年の叔母が危篤というので、身の不自由も顧みず、取るものも取りあえず、こうして西へ下って来たもの。……あわれ、この目のきかない者を、そのようにおからかい下さいますな。と、手を合わせて拝まんばかり顫えていう。

「うそをつけッ」

部将は一歩つめて、

「目だけは、ふさいでいるが、貴様のからだのどこにも隙がない。かような物は要らないはずだ」

いきなり男のついている竹の杖をひッ奪くった。そして短刀の抜く手も見せず、杖を二つにぱんと割った。

すると竹の中から一通の書簡が落ちた。盲人の眼はいつの間にか鏡の如くまわりの兵を睨んでいた。いまはこれまでと決意したものか、突然、一方の囲みを蹴って逃げ出そうと試みた。

約二十名ほどの人数であったので、辛くもこの曲者は取り逃がさずに組みしくことができた。

がんじ縛めとなって、馬の上へ荷物のように括し上げられた後も、曲者は、

「残念だッ。今に見ていろ」

と、歯ぎしり鳴らして、何を期してか、やがてこの報復を思い知らせるぞ、というような意味を喚きつづけた。

「やかましいッ」

部将はその口へ土を喰わせた。そして馬腹へ一鞭を加え、部下二、三騎と共に西へいそいだ。

――これも同夜。

場所は、首部の間道で、偽盲の捕まったときよりも、時刻はだいぶ後であったが。

岡山の東方一里ばかり乙多見村附近で、一修験者が、検察隊に誰何された。

さきの偽盲があわれなふりを装ったのと反対に、この山伏は傲岸な態度に出て、

「それがしは聖護院印可の優婆塞で、京都因幡堂に住す金井坊というものである」

と、云い、訊問にたいしても、尊大にかまえ、

「真夜半あるくは、山伏のならいだ。修行となれば、道なき道も行き、眠らずにも歩く。――なに、行く先はどこだと。つまらぬことを問い給うな。行雲流水の身、あてなど持って歩いたことはない」

と、飽くまでひとを煙に巻いて逸早く去ろうとする気振りだったが、隙を見て、検察の一兵が、槍の柄でいきなり向う脛を払うと、口ほどもなく、

「痛いッ」

悲鳴をあげてぶッ倒れた。

半裸にして調べてみると、果たせるかな、本来の山伏ではない。石山本願寺系の僧らしく、本能寺の変と共に、毛利方へ密報すべく昼夜をかけて急いで来た者とわかった。

で――これも直ちに、秀吉の本陣へ、荷駄同様に急送された。

同夜の獲物は、この二人限りだったが、うち一名でも、警戒網を洩れて、その目的が成功していたら、信長の死は、即日毛利方へ知れていたわけである。僥倖といえば僥倖だが、秀吉の応急策も、確かによろしきを得ていたものといえる。驚くよりも哭くよりも前に、真ッ先に浅野弥兵衛を派して、この往来検察をさせたことが奏功したのである。

この山伏は、光秀の発した密使ではないが、さきの偽盲は、いうまでもなく明智の士雑賀弥八郎であった。光秀から毛利輝元へあてた一書を受け、二日の早朝、京都から立って来た者だ。

光秀の使者は、同日の早朝、二人立っている。もう一名の原平内は、大坂から海路備中へ入る経路を取っていた。

ところが、その原平内も武運つたなく、海上で風浪に遭い、そのため日数も費って、彼が毛利家へ着いたときは、中国の大機すでに決した後だったのである。

――こう観て来ると、

本能寺以後、光秀の画策は事ごとにうまく運んでいなかったことがわかる。またそれは人智人力を越えた微妙のものであることも頷ける。そしてかかる蹉跌や後の敗因は一体何から来ているかといえば、それは一に天意なりというしかない。人は人をあいてとして戦い、飽くまで人と人との戦場を描いているが、偉大なる宇宙の指揮も加わっているのである。陣上に天意をいただかず、人力を尽して神意に通ぜざる三軍であっては、いかに誇るも「人間の陣」にすぎない。「神人の陣」には打ち克てない。

安国寺恵瓊

和議の内交渉について、その日の昼、何度目かの会見を試みたが、やはり何の緒も見られずに、空しく別れたばかりの蜂須賀彦右衛門

から、急にかさねて、

（――さっそくに会いたい。できるだけ早いがよい）

という簡単な書面である。

時は、真夜中であったが、安国寺恵瓊は、

（これは、まとまるな）

という直感を信じて、すぐ身支度にかかった。そして使いに来た彦右衛門の子家政といっしょに、約一里ばかりの石井山へ急いで来た。

もちろん彦右衛門は寝もやらず自己の陣所で返辞を待っていた。恵瓊は彼の顔を見ると、

「明朝とも存じたが、何かは知らず、早いほどよいとの仰せに、すぐ罷り越した」

と、いった。

彦右衛門は、さり気なく、

「それは恐縮でござった。明朝でもよろしかったのに、文意の不備、お寝みもさせぬことに相成ったか。しかし早いに越したことはないので」

と直ちに、相伴って、石井山の中腹まで上ってゆき、途中からすこし曲って、俗に蛙ヶ鼻とよぶ所の一軒家まで導いた。

人のいない農家であった。彦右衛門は子の家政にいいつけて、燈火を点させた。毛利側を代表する恵瓊と、羽柴方の彼との会見は、いつもこの人目のない所で行われていた。

「貴僧とそれがしとは、思えば不思議な宿縁だな」

対坐すると、彦右衛門は何思い出したか、沁々いった。

「まことに……」

と、恵瓊もふかくうなずいた。

ふたりの胸には、二十余年前の蜂須賀村の小六のやしきが思い出されていた。わけて彦右衛門正勝には、その頃、僧侶としてはまだ多分に若気であった一旅僧の恵瓊の姿が追憶された。そして感無量な面でながめ入るのであった。

織田信長の清洲という小城のうちにも、木下藤吉郎という出色な人物がひとりいる――ということを恵瓊が親しく知ったのも、旅の修行中、その蜂須賀村に一宿した機縁によるものであったのだ。

以来、年は経ても恵瓊は、織田麾下に藤吉郎という一青年将校のあることを久しく忘れることができなかった。天正元年といえば、まだ今日の秀吉が、その頭角すら認められず、柴田、丹羽、滝川などの諸将から見ればずっと末輩に置かれていた頃なのに、当時、恵瓊が都から中国へ報じた吉川元春宛の書状のうちには、偶然か、炯眼かこういうことすら認めてあった。

――信長の代、五年三年は持たせらるべく候。来年あたりは公家などにも成らるべく見および候。左候ふて後、高ころびに、あふのけに転ばれ候ずると見申し候。藤吉、さりとはの者にて候。

恵瓊の予言は驚くべきものであったのだ。十年後の今日、まさにそのとおりになって来たのである。

――けれど、その夜の彼はまだ十年前に自分が云ったことが、かくまで的中していようとは夢にも知らない。ただ心ひそかに秀吉の人物に、敵ながらふかく傾倒しているにとどまっていた。

二十年も前に、秀吉の大器をすでに観ぬき、十年も前に、信長の運命を云いあてていた恵瓊もまた決して決して世のつねの凡僧とは

いえない。

まだ彼が幼少の頃、安芸の安国寺を訪れた毛利元就が、ひと目見て、

（あの小坊主を予にくれぬか）

と、求めたというはなしは、彼のひとつの名誉となってよく語られている。元就の在世中には、戦陣にも伴われて、小僧小僧と、つねに愛でられていたものだという。

中年に郷を出て、諸州を遊歴し、帰国したのちは、安国寺の西堂とあがめられ、小早川隆景や吉川元春の帰依もあつく、戦いのある日は、軍事顧問、いわゆる陣僧として従いもしていた。

（ここは御和睦あるが善策です）

と、小早川、吉川の両将へたいして切にすすめていたのも彼である。秀吉をよく識る彼には、秀吉を敵として中国の存立は考えられなかった。

またふたつには往年の知己蜂須賀彦右衛門というよい手づるもある。で、内々毛利側の媾和条件を提示してみたが、何度 折衝を重ねても、こちらから折れて出た五カ国譲渡と、清水宗治を助命してほしいという交換的条件とは、秀吉の容れるところとはならない――というのできょうも立別れたわけだったのである。

「いや、急においてがみを上げた次第は、きょう貴僧とお目にかかっての次第を、黒田官兵衛どのにはなしたところ、何、わが殿は、至ってお気持の寛闊なお方なのだから、もう一歩毛利方において譲歩を示すならば、きっと和談のととのわぬはずはない。今夕もふとそんなおはなしにふれた時、無造作にほかの条件はともかく、宗治の助命はいかん、守将まで助けて城の囲みを解いたとあっては、よくよくわが織田軍の戦力も精いっぱいとなってやむなく微々たる条件で和に応じたという印象を世上に与える。殊には、信長公にたいしてお執りなしも相成らん。宗治だけは宗治だけはと重ねて仰せられたということでおざった。……で、そこまでの和意をおいだきあるものゆえ、恵瓊どののもう一と骨折りによっては調わぬ筈はない。きっとこれは調う和談じゃと官兵衛どのは、かたい信念をもってそれがしを励ますのでござった。……どうあろうか、貴僧のお考えにある真底のものは」

彦右衛門のことばは昼間と変りのないものだったが、その人は恵瓊が昼見たようなものではない。

何事かこの間に大きな方針の推移があったものと、恵瓊の炯眼はそれを見のがしていなかったが、彼もあくまで平調な口吻で、

「さ。その真底はもう申しあげ尽しておる。毛利領十カ国のうち五カ国を献じても、清水宗治の助命を得ずば、天下にむかって、武門が立たぬとしておる毛利家の心中もお察しねがいたい」

「あれから後、今夕にでも、小早川殿か吉川殿に、御内意なりと質されてみられたかの」

「伺ってみるまでもないことゆえ、伺ってみませぬ。たとえ中国全土を失うとも、毛利家にとって忠義無比の宗治はころすには忍びぬと固く臍をきめておられまする。輝元様以下、小早川殿にせよ、吉川殿にせよ、毛利家の鉄則は百万一心、こうと定められたことに異存をいだくお方はひとりもない」

夜は白み、鶏の声が遠くする。いつか四日の朝となっていた。

恵瓊も応じない。彦右衛門も譲らない。

時はいたずらに経つのみで、和談はすこしも進んでいなかった。

のみならず行詰まると、
「では、ぜひもない儀」
と、まま物別れになりそうな危局にさえ度々落ちかけた。
恵瓊も毛利側の君命をふくんでいる者だし、彦右衛門ももとより秀吉の肚を肚としての交渉であった。しかもこんどは、めったにこの交渉を物別れにさせてはならないのである。その容子を、恵瓊は僧侶特有な眼でじいっと見つめては、根気のよい口調でぼそぼそと果てしなく同じことを繰り返していた。
「それがしの器量ではもう貴僧との折合いは見出し得ぬ。ここはひとつ黒田どのに代ってもらおう。貴僧もよく御承知のある黒田官兵衛どのともう一応、じっくりと、はなし合うてみるおつもりはないか」
「だれとでも熟談いたそう。野衲のねがう和議に、すこしでも目鼻のつくものならば」
「家政――」
と、夜半から次にひかえたままでいる子息を呼んで、
「もうお目ざめの頃、黒田どのを迎えに行ってくれい」
と、いいつけた。
家政はまもなく官兵衛を伴って来た。官兵衛は四名の家臣が支え上げている手輿の上に乗ってやって来た。降りるやいな、大きく体の一方を動かす歩みを曳いて、無造作にそれへ来るなり二名の側へ坐った。
そしてすぐ恵瓊にむかい、
「実はもういちど西堂（恵瓊のこと）を煩わして、和睦するか手切れか、さいごの談判をなさいと彦右衛門どのへすすめたのは、かくいう官兵衛なんじゃ。どうなすった、やはりだめか。半夜中かかっても、折合のめどはおつきにならなかったのか」
煮え詰まったような二人のあいだに、官兵衛の磊落な語調はよほど気分を前へもどすのに効果があった。恵瓊も朝の光に面を少しあらためて、
「せっかくでしたが、どうも依然たるものでした」
と、笑った。
彦右衛門はそれを機に、
「今朝、信長公の御着陣について、堀どのと、なにかと打合わせをひかえておるので、失礼なれどちょっと中座をおゆるし下さい」
と、席を外してしまった。
官兵衛は呟くように、
「右大臣家のお着きも両三日と相成っておるので、和議のことも、きょう一日を除いてはもう二度と会見もなり難い。……ところで、どうです。よい程に取極めませんか」
彼の外交は単刀直入だった。またひどく高飛車だった。到底、勝目のない戦局に立ちながら条件についてとやかくいうならば、もう一戦のほかはないというような極言まで敢えてした。そしてまた、「ここで一つ東軍にお骨折りを示しておけば、貴僧としても将来の大を約しておかれるものではないか」
などという彼一箇の利にわたることをも露骨にほのめかした。相手がちがってからの恵瓊は前ほどの雄弁を失っていた。しかしその顔つきは彦右衛門と粘り合っているときよりは大へん気がるそうに見えた。

笑歌

「城主宗治の切腹さえ確約あるならば、五ヵ国移譲の条件のほうは、いささかなりとも、殿へおねがい申して、こちらも譲歩をお示しいたそう。ともあれ今朝もう一度、吉川、小早川の両将へ、貴僧より切にお扱いを励まれてみぬか。和戦、その上でいずれとも一決いたそう」

官兵衛にこう説かれると、恵瓊は何となく腰をすえていられなくなった。吉川元春の陣地岩崎山までは僅か一里。小早川隆景の陣地日差山まで行っても二里弱にすぎない。彼は急に意をうごかされたらしく、

「お馬を拝借したい」

と、云い出で、この陣僧はやがて、馬をとばして駈けて行った。

「さて。何と返事があるか」

見送ってから官兵衛は、持宝院へ上がって行った。そして秀吉の昨夜の室をうかがうと、秀吉は衾も被がず手枕で眠っていた。

油の尽きた燭はすでに消えている。官兵衛は側へ寄ってゆり起した。

「殿。夜が明けておりまする」

秀吉は鼾をやめた。

「……明けたか」

と、むくむく起きて、すぐ恵瓊との会見のもようを聞き取り、ちょっと難しい顔つきをしたが、すぐ起ち上がって、

「飯のしたく」

と、いいつけ、一目散に廊下へ出て行った。

厠であった。小姓たちは湯殿口のわきに、洗顔の水をたたえて待っていた。

「飯をくうとすぐ陣廻りに出るぞ。平常のとおり馬を曳き出し、供の者を揃えておけ」

顔を拭きながらの命令である。朝飯は忽ちにすました。桜若葉の山門から彼はもう金瓢の馬じるしと朱の大傘をかざさせて、ゆらゆら麓へ馬を打たせている。

彼の日課である陣廻りには、もとより規定の時刻はない。しかし常になく早朝だったことは珍しい。彼は日頃よりも機嫌もうるわしく、折々、剽気た戯れなど云いながら悠々各陣地を視てあるいた。

やがて帰り途にかかると、

「筆を持て」

と、祐筆をそばへ呼び、

「――狂歌を一首思いうかべた。認めて毛利の陣所へ持たせてつかわせ」

と、いった。

そして馬上から自作の狂詠を供の人々に聞えるような声で誦した。祐筆はそれを懐紙に書いた。

両川が一つになつて流るれば
毛利高松藻屑にぞなる

「どうじゃ」

と、秀吉は左右を顧みた。人々は笑い興じた。ひどくお下手な歌ではあるが、味方の気概を示すには足りるし、あわせて一笑を放つには充分だ。

使いはすぐ敵方の陣へ出かけた。誰かよくこの機微を感知し得よ

う。

この余裕を誇示している人の胸に「信長の死」が秘せられていようとは。

為に、今朝なお味方の内にすら京都の変の洩れている気はいはなかった。秀吉はそれを見届けて緩々と石井山の本陣へもどった。すると山門の前に、官兵衛孝高が待ちうけていて、何か、眼でものを云いながら寺内へ従いて行った。秀吉は彼の顔色で、恵瓊の返事が不調に終ったことをすぐ覚っていた。秀吉のもどる少し前に、恵瓊も毛利の陣から帰っていたが、結果は予想どおりだった。最後の努力も何の効なく、毛利輝元を始め吉川、小早川の両川は依然、

（宗治を殺しては、毛利家の武門が立たぬ。宗治の助命を容れぬ媾和には断じて応じない）

という絶望的な返辞にきまったという――恵瓊の答えなのである。

「ともあれ、恵瓊をここへ召し連れて来い。わしが会おう」

秀吉はまだ絶望を絶望としていない。熱意を昂めている程だった。

待つ間、傍らの生駒雅楽助や蜂須賀彦右衛門に、何事か耳打ちしていた。

「安国寺どのが見えられました」

程なく官兵衛から披露すると、秀吉は朝陽のこぼれている書院へ彼を引いて打ち寛いだ。むかし話やら、都の噂などの末に、

「さて、御僧には、清僧か、妻帯か」

と不意にたずねた。

恵瓊はうろたえ気味に、

「清僧にござりまする」

と、答えた。妻は持っていないということである。

「やれ、やれ。それは」

秀吉はもったいないような顔をして、しかし、祝酒ならよかろうと、小姓に銚子を命じ、三宝に盛って出された昆布、勝栗、美濃の干柿などのうちから、柿一つ取って自分も喰べ、恵瓊にも、

「取れ、取れ」

と、すすめ、

「さて」

――と、本題にはいって、こう説いた。

「宗治の命一つが、双方の面目問題にかかって、和議もさッぱり埒あかぬようだが、顧みるに、天正六年播州の序戦で、わが軍は作戦上ぜひなく、尼子勝久、山中鹿之介たちの上月城を打ち捨てた。その折にも面目を失したし、次いで去年、伯耆の馬之山においても、吉川元春と対陣の末、われはわれから陣を払って引き退いた。――かく両度まで、われは天下に面目を欠き、毛利は武門を立てて来たことゆえ、このたびは高松の守将清水宗治に死を与えるとも、決して両川（吉川・小早川）の恥にはなるまいと思う。筑前はそう思うのだが御僧の分別はどうか」

「ごもっともにはござりまするが」

「――と真底、御僧もうなずくならば、なぜ御僧個人として宗治に会い、宗治に事態を告げ、自決をすすめんのか。――忠義な彼へ対して、主家より切腹は命じ難いであろ。しかし御僧からその主家の苦衷をよく伝えたら、宗治とても、己れの一死が、城中五千のいのちに代り、かつ毛利家の滅亡を救うものとなして、よろこんで自決するに違いないと思われるが」

それだけいうと、秀吉は軍務にかこつけて席を去った。生駒雅楽

助や官兵衛はなおあとに残って、恵瓊をかこみ、さらにひとつの秘密を打ち明けた。

それは毛利方の上原元祐から秀吉へ宛てた幾通かの書簡である。元就の聟たるこの人さえ内通しているという事実を見せるために恵瓊へ特に示したのだった。恵瓊はついに決意した。自己をふるい起して高松城へ出向いた。もちろんそれは濁水に棹さして蛙ケ鼻から舟で渡るのであった。

諾

水の城、孤立の城、高松のうちには将士や農民をあわせて五千のいのちが拠っていた。

「この水をのみ、壁を喰っても」

と、彼らは降伏を知らず、戦いにかたまっていた。

寄手の浅野、小西などの軍は、遠く海から山越えで運送して来た大船三隻を泛べ、それに砲を載せて城楼へ弾丸をうちこんだりした。

櫓は半崩れとなり、死傷者もだいぶ出た。それにこの梅雨どきである。病人はふえるし、食糧も濡れびたしとなり、廓内の惨状は目もあてられない。

西曲輪と東曲輪との往来さえ舟や筏でするほどだった。城兵は、染戸の染板数百枚をあつめて、軽舸を作った。水上戦のとき、それに載って寄手の大船へ攻めかかった勇者もある。そのとき二、三の軽舸は沈没されたが、泳ぎ帰って、ふたたびこの中で指揮している者もあり、何しろ農民までが、今は兵にも劣らない決死のすがたを持っていた。

「他郷へ逃げれば逃げてもよいお前たちなのに、われらと運命をともにさせたのは不愍であった」

と、守将の清水宗治が見廻っていたわると、彼らやその家族たちは声をあげて哭きながらも、

「殿さまと御一緒なればうれしゅうございまする」

と、みな答えた。

宗治の日頃の民望が今この声となったものである。

吉川、小早川の援軍が、彼方の山々に到着して、その旗幟をここから望んだときは、全城の士民はみな蘇生の思いを抱いて、

「もう大丈夫」

と、一日中、歓呼したものだった。しかし、それも遂に、自分たちを救うことの出来ないものであったと、彼我の地勢や作戦上の理解に知って、一時は落胆したものの、決して戦意を捨てはしなかった。むしろその後のほうが、誰の顔にも「死ぬもの」と思い極めた明るささえ見えた。そこから沸り立つ強味には底知れない不屈があった。

だから味方の援軍から、密使をもって、所詮、救い難い実情を城中につたえ、

（――この上は、羽柴へ降伏して、城中五千のいのちを保つがよい）

と、元春や隆景の名をもってそれをゆるしても、宗治以下すべての者は、

（われはまだ、降伏ということを、習ってもおりませぬ。こんな時のために、日頃からわきまえていることは、一死あるのみです）

と、慨然、恩を謝して、しかもそれには従わなかった。

こうして二十日余りを頑張り通して来た或る日の朝――六月四日の朝――はるか敵地の岸辺から漕ぎよせて来る一つの小舟が城兵の眼にとまった。

武士に櫓をあやつらせ、その舟の中には、僧形の者がひとり乗っていた。これなん安国寺恵瓊であったことはいうまでもない。

恵瓊は、宗治に会った。

――切腹をすすめた。

もとよりそれはさいごの言で、それをいうまでには、

「先頃から両軍のあいだに、和睦の内談がすすめられ、愚衲がその折衝に当って、数次、羽柴方と会見しておりましたが」

と、そのいきさつを語り、またこの城の守将の一命を助けん、助け難し、とする両軍の面目問題が暗礁となって、ついに行き悩んでしまった実情をも、事こまかに話した末、

「ここは其許のお心一つで、毛利家の安泰も確約され、ふたつには、多くの城兵や無辜の民も、つつがなく助け出されることになるのでな……」

と、縷々、真心と熱弁をかけて、彼にそれを説いたものであった。

宗治は始終だまって聞いていたが、恵瓊が、これ以上はいうべき言葉もなしと、総身を汗にぬらして、俯向いてしまったのを見ると、初めて穏やかに口をひらいた。

「……やれ今日は何たる吉日。ありがたい仰せを承った。おことばに違いなきことは、御僧の面を拝見してもわかりました」

承知とも、不承知ともいわないのである。――宗治の心はすでに諾否の先へ超えているのであった。

「さきには、数ならぬ身を、小早川殿、吉川殿にも、いたく御心配くださされて、城を開いて降れよとまで仰せ越しあったが、たとえ五千のいじらしき者どもを共に死なしても、宗治としては、降伏して命を助かるなどというは思いもよらぬことゆえ、お断り申しあげたが、御僧のおことばに任せれば、主家も安泰を約され、城中の士民も無事を得るとのこと。……さもあれば毛頭否むすじはない。むしろ大きな歓びでござる。宗治として歓びでござる」

語尾を強くかさねて云った。

恵瓊はからだがふるえた。これほど易々と――というよりは歓びをもって相手に容れられようとは思いもしていなかったからである。感激にふるえたのである。

と同時に、ひそかに恥じた。自分は僧侶であるが何かの場合、よくこの人のように死生に超然としていられるだろうか。死を受くるのに、顔いろもうごかさず、それを歓びとして迎えることができるだろうか――と。

「では、御承知下さいますな」

「御念には及びませぬ」

「御一族たちと御談合なくともよろしゅうおざるか」

「あとで告げます。みな共に歓んでくれましょう」

「それと。……甚だ申しあげ難いが、事は急を要しまする。信長の西下も一両日と沙汰されておりますゆえ」

「おそくも早くも、それがしにとっては同じこと。して、期日は」

「今日。……しかも午の刻までにせよとの筑前のことばでおざるが。午の刻までといっても、もう二刻半ほどのいとましかありませぬが」

「それだけあれば」

と宗治はうっすら笑って、

「死ぬには悠りと支度もできましょう。御僧には疾く立ち帰られて、宗治異存なき旨を、両軍へおつたえありたい。わけて長々微身をお目にかけられ下された主君輝元様。また小早川殿にも。吉川殿へも。……よしなに」

恵瓊の小舟は矢のように帰って行った。彼はすぐに秀吉に会って、宗治の一諾を報告し、また馬をとばして西軍の岩崎山へ急いだ。

吉川元春も小早川隆景も、いまや重大な関心を彼の復命一つに寄せていたことはいうまでもない。

「破談か」

てツきりそれであろうと予想していたもののように、彼のすがたを見るとすぐ隆景は云ったが、恵瓊は、

「否」

と、答え、

「――ようやく曙光を見ることができました」

と、次の息でつけ加えた。

元春も隆景も、

「では、秀吉が譲ったか」

と、やや意外な顔したが、恵瓊はそれにも否と面を横に振って、

「この和議のため、身一つ捨てんと、誰よりも御和睦を祈っている者の力でござりまする」

「はて、それは誰をさすのか」

「宗治どのが申されました。かくまで微臣を庇うて給わる御主君に報わでやあるべき。このうえは、われだに切腹なせば、御和談も成り、かたがた、主家の御名にも傷つくことはあるまいと」

「西堂。御辺はその宗治に会ったのか」

「たった今、会うて参りました。今生の拝顔も成り難けれど、輝元様以下、元春様にも、隆景様にも、くれぐれよしなにとのお言伝てにござりました」

「秀吉のすすめによって会いに行ったのか」

「もとより羽柴方のはからいなくては舟もやれませぬ」

「そして宗治には、御辺から仔細を聞くに及んで、腹を切ると云い出たのであるか」

「午の刻を期して、一舟を泛べ、敵味方の見る中で腹切らん。そのときをもって、和議を結ばん、毛利家を万代の安きにおすえ下されよ。また、城中五千のいじらしき者をお救い給われと、入念のごあいさつでありました」

「ううむ」

と、隆景もうめき、元春もうめいた。そして熱い眼と眼を見あわせていたが、その感動の波をふかい息として吐ききると、

「して、秀吉の意嚮は？」

と、隆景が再度たずねた。

「城将の首を見ねば断じて和せず――とされていた筑前どのも、野衲からそれを聞くといたく感じられた態で、さすがは大国の毛利、よい家臣を養いおられる。さてさて、清水長左衛門宗治は、毛利無二の忠臣なる哉――と、幾たびも長嘆して左右に語られておりました」

恵瓊はさらに云った。

「なお筑前どののいわるるには、それ程の忠臣を殉じさせ、彼の忠魂に報いぬは、敵たりとも、心なきわざ、かつは中国の名族毛利に、全土の半ばを割かしむるのも気のどくの至り、五ヵ国の移譲の約束

であるが、われは三ヵ国を取り、残り二ヵ国は宗治の忠節に免じておもどし申さん。……かく両川にも申し伝え、異存なくば、宗治の切腹を見とどけた後、直ちに誓紙を取りかわすであろうとの明言にござりました」

間もなく、恵瓊をのこして、両川は毛利輝元の前にこれを伝えていた。元より異議を立てる理由はもうどこにもなかった。

男をつくりて

わたくしもお供に。

それがしも何とぞお供に。

高松城の士たちは、次々に主人宗治の前へ出て死を願った。

「成らん。相成らん。いけない」

宗治は、それを叱ったり、諭したり、なだめるのに、口を酸くした。

一時は当惑につつまれた程だった。しかしすべての者に一様にゆるさなかった。

恵瓊の舟が城を辞して離れるとすぐその後で、彼は自己の決意を全城の者に告げたのだった。

あわせて、また、

「きょう午の刻に、この濁水の湖上に舟をすすめ、敵味方見る中において腹切る所存」

と、その舟支度を士たちにいいつけていた。

号泣の声が城に満ちた。いたずらに彼の屠腹をかなしむのではない。人の死は日々眼にも見、耳にも聞き、おのれの死もそれと変らぬものと常に観ている人たちである。

宗治の犠牲によって、はからずも自分たちのその命が救われたことを狂喜した哀号でもなかった。彼らはそれほど利己でもない無情でもない。

全城にみちた一瞬の号泣は、実に、人の真美が人の真美を衝ったのである。宗治の無私大愛のあたたかさに触れて、先頃からみな鬼の如く防戦に凝り固まっていた一心が、突然、雪解の如く溶けて誰も彼もの嗚咽となったものだった。

ようやく、諸士の願いを退けて、すこし座右に暇を見出したと思っていると、こんどは宗治の兄の月清入道が来て、彼に説いた。

「長左衛門（宗治のこと）。いま仔細は聞いたが、お前が死ぬには及ばぬことだ。この兄が代ってあげる。死装束はわしに譲れ」

「兄上は桑門のおん身、宗治はここの守将でござる。せっかくですが、代役はおねがいできませぬ」

「いやいや、元々、わしは兄の身だから、家督を継ぐべきであったのを、生来、仏道になずみ、武門にはうとい身ゆえ、強って、弟のお前に家名を継いでもろうたのだ。為に今日、この事に当って、お前が切腹するような立場になったのを、この兄のみ、余命を長らえているわけにはゆかない」

「僧門のお方は、世事死生の上に高くあるべきです。俗の古事など、何の今日の事とかかわりありましょうや」

「そうでない。僧たる者は、人の範ともならなければ、その道も行われぬ。さるを、世人から見て、月清入道こそは、弟にも似ぬ命惜しみの人かなと嘲われては、わしはともかく、桑門の道も教えも廃りになる」

「いかに仰せられても、宗治が切腹は、決してかえるわけに参りません」

「それも、もっともじゃ。しからば舟までのお供いたそう。それならよろしかろう」

月清は去った。

すずやかな姿である。それを見ると長左衛門宗治も気安くなった。小姓どもにいいつけて、水裃や水いろの袴など、死に就くべき曠のものを揃えさせていた。

「そのまに一と筆」

と思いついて、三原にのこしてある妻と子の源三郎へてがみを書いた。源三郎には、武士の一生のための処生の歌三首を書き遺した。

城中には目付として、また督戦のためもあって、味方の吉川、小早川の両家から来ている検使の将、数名がいた。

そのうちの一人末近左衛門は、宗治の部屋を窺って、

「すこしの間、お邪魔してもよろしゅうござるか」

と、常のような容態で話しに入って来た。

ふと見ると末近もいつの間にか垢の見えぬ夏小袖に死装束を重ねているので、

「御辺のお支度は何のためか」

と、宗治はわざと、いぶかって訊ねた。

末近左衛門は事もなげに、

「御一緒にまいるつもりで」

と、答え、

「――幸いに、天気も快くして、舟の中での切腹は、さだめし爽やかなことでござろう」

などと、もう同行を独りぎめにしている口吻だった。

宗治は固く断った。

「貴公には、ここの次第をよく見られて、隆景様や元春様へお伝えあれば、それでお役目は、尽されておる。お立場上、誰も卑怯とは云いますまい。――それがしの相伴はむしろ迷惑。おやめ下されたい」

「いや、御報告には、いくらも他に人がある。てまえはどうしても、其許と共に死ぬことに思いきめ申した」

「それはまた、どういうわけです」

「されば。――すでに当城へ臨むときに、もし貴公がいささかの異心でもさしはさみ、敵に通ずるごとき兆あらば、直ちに貴公と刺しちがえる覚悟でござった。しかるに、志もお変えあらず、この城を守り通して、しかも今、主家の安きを祈り、城中一同の命に代って御切腹あるとは、何たるここちよき、御辞世であろう。義に感じてまえも共に自刃いたしたい。それは、隆景様より厳命をうけてこれへ参ったとき、すでに、貴公とは死生一つなり、二度と郷地に帰らんと思うべからずと、独りかたく職分に誓っていたことでござれば、当然な勤めの一つと、笑って、お目に入れず、おゆるしおき下さい」

宗治は黙ってそれをうけた。左衛門の辞色には少しも騒がしいものは見えなかったが、たとえ説いても説き伏せ難い程のものがその姿を厳のように見せていた。声の裡にこもっていた。

ところへ、大手の矢倉の上に在る部将白井与三左衛門から、一武士を使いとして、主人宗治の許へ口上で、

（甚だ、憚り多いことですが、自分はなお、お矢倉の守りについて

おる身なので、たとえ和談の議があろうと、誓紙の調印あるまでは寸時もこの部署を離れることはできませぬ。御足労、痛み入りますが、今生一期のごあいさつを兼ね、ちと申しあげたい儀もございますので、お矢倉の上までお運び願いとう存ずる）

と、伝えてよこした。

何事か知れないが、白井与三左衛門は多年仕えてくれた家の子のうちでも年頭の方である。宗治はすぐ矢倉へ上って行った。与三左衛門はうれしげに、主人の姿を、そこの不断の戦いの場所に迎えた。

与三左衛門は負傷していた。

まだこの城が水攻めをうけない卯月二十七日の大寄せに、敵の鉄砲に中って、片脚にかなり痛そうな怪我をしていたが、この矢倉を預けられた以上、仆れてもここは降りない。眼のあいている限り死守してみせると頑張って、昼夜、物の具も解かず、きょうまでなお、満々たる城外の濁水を睨みまわして、弓を懸けつらね、銃口を並べ、手に陣刀の柄を放さずにいる老部将であった。

「おう、ようお越し、ようお越しを」

彼は、喘ぐような声をして、主人の足もとにひざまずいた。

そして武士に、

「御床几をあげてくれい」

と、いいつけ、自分は、さらに片脚を寝かせて、どすと、武者坐りに腰を落した。

「与三左衛門。仔細は、月清からも聞いたであろう。間もなく、自害に赴くこの宗治ぞ。相見るも今のみ。年来のそちの奉公、あらためて礼をいうぞ」

「おめでとうござりまする」

与三左衛門は片手を落した。どうしたのか、急に首の根が折れたようにがくと前へ下がったからである。肩で大きく呼吸をして後、また宗治を振り仰いだ。

「さてさて、またなき御武運にお会いなされましたもの哉。人の一生も生涯の士道も、その仕上げは、よくも悪くも死によって定まるとか申しますが、今日の御生害は現し身の人をも数多生かし、また御自身の一命をも末代に生かす曠の一期。およろこび申さずにいられませぬ」

「よういうてくれた。与三左衛門。悲しんでおくりゃるよりは、ずんとうれしいぞ」

「左様にお心も確とおすわり遊ばしているわが殿のこと。無用の憂いとは存じましたが、何せいきょうのお場所は、敵味方の両大将はもちろん、中国勢も上方勢も眼をこらして見まもっている真っただ中での御生害。万が一のことでもあってはと、年寄の取りこし苦労から、切腹とはいかなる味のいたすものかを、お先に試みてみましたところ、案外、軽いものでござりまする。――致さぬ前に思うほどのた打つものでもござりませぬ。……まずまず、左様に思し召して、おこころ悠やかに遊ばしますように」

与三左衛門はそう云いながら、よろいの胴を外し、腹帯を解きはじめた。そしてことば静かに、

「――御覧候え」

宗治は眼をみはった。――見事に老腹を掻ッ切っているではないか。紅の腹巻を解くとともに、さすがに気丈な与三左衛門も鬢色に死をあらわして、

「憚りながら……」

と、首をさしのべ、眸で介錯を求めた。

その耳元へ口をつけて、

「与三左衛門、案じるな。やがて見ておれよ。彼方の水の上を」

一颯の光は戛然と鳴った。宗治は、自分に先立つ道づれを、涙とつるぎの下に見た。

午の刻は近づいていた。

宗治はすっかり身支度も調え終った。

きょうまでは、一滴たりと、城中の者の生命をつなぐ大事な物としていた飲み水も、今はよかろうと、手桶に一杯持てと命じ、その水で、籠城四十日以来の身の垢を浄め、髪も梳いた。

麻の小袖に水裃の姿もすずやかに見直された。小姓に、舟の支度を問わせると、

「まだ羽柴勢の堤に合図の小旗が見えませぬ。合図が見えたらお知らせ申し上げまする」

と、ある。

何という休戦の静けさだろう。陽は無心に似て、刻々、中天にかかってゆく。

この日、風もなく、城外四方、百八十八町歩にみなぎる濁水の色は、依然として赤く濁ったままであるが、梅雨の霽れ間のさざ波は、そよそよ陽を射返して、折々、白鷺の羽音のするほか、敵味方の陣営も、ここの一城も、実にしいんとひそまり返っていた。

そのとき、十数名の直臣たちは、やがて間もなく城を出る主人のおすがたに、さいごの名残を惜しもうものと、目顔で語らい合いながら、打ち揃って、そっと宗治のいる居室の外に居並んだ。

見ると、その宗治は。

時刻の来るのを待ち遠しげに、部屋の中で伸々と身を横たえ、ふたりの小姓に毛抜きで小鬢の白髪や耳の毛を抜かせていた。

縁の端からその態をながめた老臣のひとりは、じんと瞼に衝きあげてくるものを、わざと軽い戯れにして、宗治へ云った。

「これは、これは。殿には、時節がら不相応な男振りをお作りでござりますが、いかなる思し召しでございますか」

すると宗治は、片肱起して、むくと面をもたげながら、一同の者へ、

「さればよ。この首は、今日まで男競べいたした秀吉の見参にも入り、信長の前にも供えらるべきもの。――余りに窶れていては、一旦の籠城にかばかり老いさらばいつるかと、中国武士の荒胆を軽んぜられも致そうか。――さもありては口惜しきゆえ、かくは男をつくりて候ぞや。嗤うな。嗤うな」

と、いって笑った。

迎えが来た。――時刻とみえ、対岸の蛙ケ鼻に赤い小旗が見え出したという。

「さらば、参ろうか」

宗治はつと立った。

不覚と思いながらも抑えきれずに、この時、衆臣の中から嗚咽がながれた。宗治は耳なき人のように、さっさと、城壁の方へ歩いた。

小舟は、新しき藁の莚を敷き、白き死の座を備え、あくまで清浄に、舷を洗って彼を待っていた。

宗治の兄月清入道と、末近左衛門のふたりがさきに乗っていた。

ほかに宗治の郎党難波七郎次郎が櫓を把って控え、介錯人を命

ぜられた幸市之丞が端にいた。

薫風一扇

舟は城を離れた。

難波七郎次郎の漕ぐ櫓のあとに、ゆるい波紋が残されてゆく。

「あれよ、殿さまのお舟が」

「真っ白なおすがたで」

「わしらの命にお代りくださるのじゃ」

「勿体なや。勿体なや」

城中五千人のうちの三分の一は領下の百姓老幼であった。それらの者がみな水漬いた城壁の破れ目や、屋根の上や、狭間や小高い所などから、声こそ揚げないが手をあわせ、眼を拭いつつ、見送っていた。

長年その人に仕えて来た家中の将士にいたってはいうまでもない。みな断腸の思いを嚥み、眼には悲涙を沸らせていた。為に、彼方へ遠ざかる舟の影すら、涙にかすんで熟視していられなかった。

――しかし、舟と人とは、うららと、さも長閑けき途のように、雲の影の映っている静かな水面を漕ぎすすんでいた。

振り向くと、高松の城は、かなり後になった。ちょうど、蛙ケ鼻と城との中間あたりと覚しき所まで来ると、

「七郎。この辺でよかろう」

と、宗治の兄の月清入道がいった。難波七郎次郎は黙って櫓を上げた。

待つ程もなく。

この舟が城を離れたとき、同時に対岸の蛙ケ鼻からも、一艘の舟が湖心へむかって漕ぎ出していたのである。それは秀吉の陣から派せられた検使舟であることはいうまでもない。目印には舳先に赤い小旗を立て、舟にも緋の毛氈が布かれ、中央に武者三名ほど坐っていた。

検使の将は堀尾茂助吉晴であった。吉晴のみ陣羽織を着ていた。白い死装束の人を乗せて漂い待つ小舟と、紅の小旗をひるがえした検使舟とは、ようやくいま、この満々たる水上の中心で相会おうとしていた。

水も静か。四山も静か。――漕ぎよせてくる検使舟の櫓の音のみが耳につく。

はるか西の岩崎山から、今日はこの辺りまで手にとるように望まれているだろう。そしてそこには毛利輝元、吉川元春、小早川隆景などが座をつらね、味方三万の将士も鳴りをひそめて、この一点に眸を凝らしているにちがいない。

さらに。――羽柴筑前守秀吉の本陣石井山は、もっと近々とここを俯瞰する位置にあった。その麓から堤上数十町にわたる陣々も馬印と旗で埋められていた。

宗治は遠く岩崎山のほうへ向って、心のうちでは多年の恩顧を謝し、なつかしの主家の旗を見ては、ひとみに惜別をこめていた。

「それへお渡りありしは、高松城の守将、清水宗治どのでございますか」

検使の舟は、すぐ側へ来た。こう呼びかけたのは、使者の堀尾茂助である。

宗治は、こなたの舟から、

「おことばの如く、長左衛門宗治でありまする。御和睦の一条を相果すべく腹を切りに参ってござる。御検使の役、御苦労にぞんずる」

と、一礼した。

「なお、申しあげたいお言伝もござれば、少々、お待ち候え」

茂助は、そういってから、扇子を上げて、宗治のうしろにいる難波七郎次郎へ、

「もすこしお舟を寄せ候え。こなたよりも寄せ申さん」

と、云った。

相互の舷と舷とが近づきあって、軽くどんとゆれた。

茂助は、威儀を正した。

「――さて。余の儀でもありませぬが、それがしの主人秀吉様の申さるるには、この度の和議も、其許の御一諾なくば、到底、調い難きはずのところを、忠義のためには、一身もお顧みなき御返辞に、ほとほと感じ入って候との儀でござった。――今日はまた、時刻もおたがいなくお立ち越え、まことに殊勝のいたりに存じ申す」

と、まず慇懃なる挨拶を呈して、次に、

「――ついては、永々の籠城、さだめし御辛苦の事もおわしつらんと、主人秀吉様より心ばかりの品お慰めにと、これへ持参いたしてござる。……まだなかなか陽も高うござれば、われらの役儀にお心づかいなく、悠々と名残をお尽しあるように」

一樽の美酒と、幾重ねの佳肴などが、舟から舟へ手渡された。

宗治はよろこびを顔に湛えて、

「これは思いがけない好物のお贈り物。わけて秀吉どののお志とあれば風味喫すべしと存ずる。遠慮なく頂戴いたそう」

と、杯をとりあげた。

そして、兄の月清入道に、

「兄者人も、おひとつ」

と、すすめ、末近左衛門にも、難波七郎次郎にも、杯をまわして、順に酌み交わした。

「久しゅう、かような美酒もいただかなんだせいか、はやちと微酔うてござる。――無骨者の余芸、おかしゅうお眺めあらんも、一さし舞うて堀尾どのへお目にかけん。――兄者人。左衛門。鼓はなけれど、手拍子、膝拍子。いつもの曲舞の一節、共々に謡われよ」

宗治は、小舟の上に起って、さっと白扇をひらいた。そして日頃の一つ芸、誓願寺の曲を舞った。

舟がやや揺れる。波がやや立ちさわぐ。――高松の城中にある五千の人のこれは涙か。はるか彼方の山々や岸にある三万将士のこれは感動の波か。――眼のあたり近々といた堀尾茂助吉晴は、正視するを得ず思わず頭を垂れていた……。

と。――謡声がやんだと思うとすぐであった。

「堀尾どの。確とお見届けおかれよ」

先方からいわれて、はっと顔を上げると、宗治はもう坐り直して、腹一文字に切っていた。

「市之丞。介錯」

促す声は凄愴を呼んだ。凜々、血は舟中を紅にしている。

「弟よ。わしもゆくぞ」

すぐ、兄の月清も屠腹した。さらばと、末近左衛門もつづいて自刃した。

また、検使に首桶を渡して帰ると、郎党の七郎次郎も、介錯人の市之丞も、主人に殉じてともに後を追った。

清水宗治はときに、四十六歳であった。

持宝院では、秀吉以下、堀尾茂助の帰りを待ちかねていた。

小舟から上がるやいな、茂助は首桶をかかえて、息せわしく登って来た。そして、宗治の切腹を復命し、その首を、秀吉の床几の前に供えた。

「あわれ、よい侍を」

秀吉は惜しんだ。きょうほど深く心を打たれたことはないような容子だった。——が、すぐ、

「恵瓊を迎えにやれ」

と、急き立て、やがてその恵瓊が来るまでの間にと、風呂所にはいって、水を浴び、清衣に着かえ、潔斎して待っていた。

恵瓊が来た。

秀吉はすぐ別間に出て、

「宗治の切腹も相すんだ。この上は誓紙の取り交わしが残されておるのみ。いま潔斎して、起請の一文は約束のごとく認めておいたが、予の筆元を御僧が見とどけ、また、毛利の筆元を見届けるために、こちらからも一名の陣僧をさしつかわすであろう。——まず一読いたすがよい」

と、恵瓊にそれを示した。

読み下してみると、

起請文のこと

一、公儀（信長を称う）に対せられ御身上御理りの儀、われら請取申し候条、いささか以て疎略に存ずべからず候事。

一、申すに及ばず候と雖も、輝元、元春、隆景、深重如在を存ぜず、われら進退にかけて見放し申すまじき事。

一、かくのごとく申し談じ候上は、表裏抜け公事これあるべからざる事。

右の条々、もし偽りこれあるにおいては、日本国大小の神祇、殊に八幡大菩薩、愛宕白山摩利支尊天、べっして氏神の御罰、深重罷りかうむるべきもの也。

仍つて起請文如件。

羽柴筑前守秀吉

毛利右馬頭殿
吉川駿河守殿
小早川左衛門佐殿

恵瓊が謹んでそれを秀吉の前へもどすと、秀吉はうしろの侍臣たちへ向って、

「白い小皿を持って来い」

と、命じ、さらに硯筥をこれへと求めて、恵瓊の眼のまえで書判を誌した。そして白い小皿のうえに左手の小指をかざし、刃をあてて血しおを出し、書判のわきへさらに血判を加えた。

「かたじけのう存じまする」

恭しく押しいただいて恵瓊が納めると、秀吉はさらりと打ちくだけて、めでたいめでたいと繰り返し、侍臣へむかって、

「さらば、吸物を」

と、酒、土器を促して、一献酌み、使者にも酌して、また受けた後、

「土器は手前にて納めておく」

と、祝の寸儀をすませた。

安国寺恵瓊は、すぐ辞して、毛利の本陣へいそいだ。毛利の筆元拝見の使いとしては、大知房という陣僧が彼に従いて行った。

大知房も程なく毛利三家連名の起請文をうけ取って帰って来た。和議調印はここに成ったのである。だが、それから幾刻も経たないうちに、毛利方の陣営は旋風のごとき驚きと茫然たる自失に見舞われていた。――初めて信長の死をその日の夕方に知ったのであった。

喪を討たず

「出し抜かれた」

「秀吉めに、まんまと、乗せられたものだ」

「和睦の誓紙は破棄すべしだ」

この声は、そのせつなの、毛利の帷幕全体のものだったといってもさしつかえあるまい。

信長の死を、彼らが知ったのは、その日の七刻下がり（午後四時）の頃だったから、宗治の切腹直後、誓書の交換が行われてから、わずか一刻（二時間）ぐらいな後でしかない。

知らせて来たのは、当時上方方面に配してある諜報方の一名で、これが全軍に知れ渡ると、毛利方のうちでも今度の和議を心から迎えていなかった強硬組の面々は、

「それ見たことか」

と云い、

「秀吉を討て」

と、さけび、

「討つは今だ。絶好なときだ」

と、たったいま調印交換をすましたばかりの和睦などは、頭のうちから消し飛ばして、陣々の諸士も、囂々と私議紛説を放ちあい、天下一変の予想される昂奮の坩堝のなかに各　その感情を極端に揺すぶられていた。

輝元の帷幕にも一時はあわただしい動きが見えたが、間もなく厳しい守兵を立てて一切の出入を断ち、ここは反対にひっそりとしてしまった。

「決して、お味方が欺かれたものではない。和議のことは、元々、後月の末頃から、御当家よりはなしを進めさせたもので、秀吉から云って来たものではなし、その秀吉も、神ならぬ身の、何で京都の兇変を、事前に知って計ることができよう」

これは小早川隆景の言であり、それに同意していないのは、この際、秀吉を討たずにおいてどうするものかと、熱心に輝元へ説いている吉川元春であった。

元春は耳朶を熱していう。

「信長の死は、即ち、織田勢力の分解といい得られる。同時に、わが毛利家に比肩する強大はどこにも見られなくなったのだ。いま当面としている秀吉のごときは、織田氏の後継者としては、第一に指を屈しられる者だが、それすら今、ここにおいて一撃を加えるならば、その背後に持つ大きな弱点からいっても、易々たることであろうと思う。さすれば、天下はいやおうなく毛利の掌握に帰するほかない。――また和睦のことは今暁以来、秀吉の方から急速に運びすすめて来たもので、すでに昨夜あたりは、京都の兇変を、秀吉としては知っていたものに違いなく、それを秘して取り結ばれた調印である以上、たとえ当方で破棄しても、決して毛利家の不信義とは

相成らぬ」

「いやいや。ここは大きな考えどころでしょう」

隆景はあくまで理性である。澄明な頭脳はそのいうことばの適切と冷静がよく証拠だてていた。

「馬之山の対陣の後も、あなたは秀吉の人物を絶讃しておられた。正直それがしも彼の弓の取りようを見、その大志と智略を知るにつけ、敵ながら推服している。おそらく信長の後、天下の仕置をなす者は彼ではないでしょうか。……武門には、敵の喪を討たず、という古言もある。いま誓約を捨てて悲境の彼を攻めても、もしなお、彼がよくここを生き抜くときは、骨髄のうらみをもって、将来長くわれを仇するに至ろう。――一山中鹿之介の敵対すら、あれほど年久しく禍いとなったことを思うと、ここはうかつには御方針も変えられますまい」

じゅんじゅんと説く隆景の常道論も、容易には元春を説得できなかった。元春は、飽くまで兵機を主眼として、

「時は今をはずせぬ」

であった。理論でなく熱情だった。兵家として、かかるまたなき機を逸す法はない。弓取の冥加につきるというのである。

隆景は兄の主張だけに、説きつけるのに一倍も二倍も骨が折れた。遂に元就の遺訓まで持ち出して、

「先主の垂訓にも、わが家は分を守るを一義とし、天下をのぞむ勿れと戒められておられる。いかに富強でも中国は辺土に過ぎず、中央を占むる利は持たない。先君もそこに遠いおもんぱかりをなされていたものではあるまいか」

家憲は絶対である。元春もこれには口を噤むほかなかった。また輝元も家の遺訓に照らして、

「隆景のことばは尤もと思う。この際、破約して、ふたたび秀吉を敵とすることは避けたい」

と、云い断った。

密議の終ったのはもう四日の夜であった。ふたりは輝元の前を辞して各　の陣所へ帰ったが、途々も元春が悄れている体なので、隆景は弟として、すまない気がしてならなかった。

途中味方の物見の一隊に出会った。その一部将すら甚だしく昂奮している眼をもって、遠くの闇を指さして告げた。

「――羽柴方では、すでに撤兵を開始し始めました。五つ刻（八時）頃から続々と岡山方面へ引き揚げてゆく隊伍が見られ、それは多分、宇喜多勢でないかと思われます」

「そうか」

聞き流してすれ交ったが、元春は舌打ち鳴らしていた。

――ついに機は逸したかと、心中歯がみしているのであろう。隆景はその気もちを読むが如く云った。

「まだ、残念に思し召しておられるのですか」

「そうだ」

問うまでもないことだと、鬱勃を色にあらわして元春は答えた。

隆景はそれへまたいった。

「――では、かりに毛利家が天下に臨むと致して、その場合、あなたが天下を取る思し召しか」

「……」

「御返答がないところを見れば、それまでの御所存はないものと思われる。――ではこの隆景は如何といえば、われらとても同様、輝

元公をさし措いて、天下を掌握するなどは思いも寄らぬこと。……しかるに輝元公の器量はどうか。果たして天下人たる器を備えておられるでしょうか」

「……」

「その器ならざる者が天下をうごかすの座にあるときは、天下の乱れはいうまでもなく、天下をも失い、家をも亡ぼし、宇内の不幸は一毛利家の滅亡には止まりますまい」

「隆景。……もういうな。分ったよ」

元春は面をそむけた。悵然と中国の夜空を仰いで、落涙しかける瞼を抑えた。一毛利家の家憲の下に在らざるを得ない遣り場なき武魂は声なく哭いていた。しかも彼は齢はすでに晩節近き五十三であった。

堰を切って

即時撤兵は両軍媾和の原則だった。

羽柴方では、もうその日の夜から実行にかかっていた。

が、それは高松城の北方を抑えていた八幡山の宇喜多忠家と、龍王山麓の羽柴秀勝の二軍が陣払いしたに過ぎない。

兵略上、毛利方と遠く隔てたこの二陣は、すでにそこに在る必要を持たないものであった。高松の城にはもはや抗戦すべき守将もなければ精神もない。――なお万一の不測にそなえて依然うかとは動かし難いものは、毛利方の直前にある石井山の本陣と、足守川の線に沿う抑えあるのみであった。

夜をとおして宇喜多勢は岡山へ撤退していた。けれど秀吉の本軍はまだ一兵も退いていない。もちろん秀吉自身もじっとそこの持宝院にいた。

かくて四日の夜は明け、五日の朝となったが、なお彼はうごかなかった。心はすでに上方の空へ駈けていたろうが、滅多に陣を払う気色すら見せていない。

一昨日もごろ寝、ゆうべもごろ寝。用事があらば時を選ばず起せといいつけては手枕で横になった。そして今朝、起きぬけに、蜂須賀彦右衛門から受けた報告のひとつは、

「お約定によって、今朝、毛利方から二名の人質を送って参りました」

という件であった。

これも彼の気がかりとしていたことだった。まず毛利に豹変はないとほっとした容子に見える。しかしなお油断はできなかった。なぜならば、京都の兇変を、今朝もまだ彼が知らないものとすれば、たとえ質子を送って来たにせよ、それを知った彼の変心は測り難いからである。

何もかも、ここは秀吉の肚一つにかかっている。秀吉はその肚芸を意識していた。和議が成立したからといって、余りに慌ただしく退くことは、毛利をしてわが虚を覚らしめるものと考えられた。東へ逸る心を西へ向けて、無策な顔をしていたのも一に毛利の虚実を測るためだった。

「彦右衛門。水はいくらか減じ始めたか」

「一尺程退いたようです」

「急には流すな」

秀吉は持宝院の庭へ出た。きのう宗治が切腹した一舟の跡も小波

のみ見るだけだった。一部の堰を切らしたため、わずかずつの水量は減じ始めたとはいえ、まだ彼方の高松の城は水の中だった。

秀吉の麾下杉原七郎左衛門は、昨夕すでにそこへ入って、城受取りを完了していた。――今そこから渡船や小舟で続々陸上へ運ばれているのは、宗治の死によって救われた無数の領民である。籠城の将士は、それらの老幼を先にあげて、自分たちはいちばん最後に上陸した。

事なく一日は暮れた。

夜に入ると秀吉は、森勘八高政に毛利方の監視を命じ、また黒田官兵衛その他と何事か凝議し、終ると、小姓一同にも引き揚げを伝え、急速に陣払いを準備し出した。

夜はまだ深いが、正しくは六日の朝といってよい。それは夜半をすぎた丑の正刻であったから。

総軍引きあげ準備を命じておいた秀吉は、いよいよ持宝院を出て、

「直ちに発足」

を伝えさせ、念のため、もういちど伝令をもって、

「毛利方に何の異状も見えないか」

を殿軍の森勘八に問い合わさせた。なお、その間にも官兵衛孝高を招いて、

「すぐ、諸所の堰を一斉に切れ」

と、命じた。

孝高はこれを家臣の吉田六郎太夫に託し、六郎太夫は駈けて山つづきの蛙ヶ鼻へいそいだ。

六郎太夫は水攻めの築堤工事に当った奉行人のひとりだった。去月十九日にそれが成ってからちょうど半月目である。満々百八十八町歩にみなぎらした水は、思えば偉大なる歴史を劃した時代の分水嶺でもあった。

その水は、四日の和議締結とともに、一部の堰を落して少しずつ減水を示していたが、今や十数ヵ所にわたる大堰を一時に切り落して、もとの高松盆地に回そうとするのである。彼は蛙ヶ鼻の岩頭に立って、部下の兵が灯してさし出した松明を両手に持った。

ふたつの松明は。

颯、颯、颯――

と三度ほど、六郎太夫の手に振られて、美しい焔の線を闇に描いた。

それは鮮やかに、原古才から福崎までの長堤一里に待機していた味方の見張小屋から見とどけられたに違いない。間もなく、眠れる湖沼の水面にはむくむくと諸所に活動が起りはじめた。無数の大きな渦とそれに伴う水と地殻の咆哮であった。ぐわうッと闇を鳴る異様な音響でもあった。

「よしッ」

六郎太夫は松明を踏み消してもとの方へ駈けもどった。――時すでに、秀吉と秀吉をかこむ近衆小姓、将士たちの一群は、金瓢の馬簾を中心に、槍の光を並べ、弓をつらね、鉄砲をそろえ、青葉の露の頻りに降る暗い坂道を、一糸の紊れもなく、粛々と麓へむかって降りかけていた。

進撃はなおやすく退軍はより難しいという。

和睦成っての引き揚げとはいえ、秘中の秘はなおつつまれている。ひとたび彼に豹変があろうと、その責めは秘を包んでなした秀吉に帰さねばならない。

「おう。あの声は……」

彼は馬を止めて、虚空に耳をすました。嵐か海嘯かとも疑われる水の唸りが夜空を翔けまわってゆく。——一時に十数ヵ所の堰を切って、阻めるものを知らず流れ狂う濁水は、瞬く間に、毛利方のいる岩崎、天神、黒住などの高地を余す以外の地をことごとく水と泥とに化してしまうであろう。秀吉は想像した。

その水脚が迅いか、一鞭東へさす彼が迅いか。石井山はあとになった。全軍また奔河のごとく急ぎに急いでいる。

急行軍二里余。道はもう備中から備前に入っていた。

辛川村である。秀吉は、

「ここから先、本軍は別れて、べつの進路をとれ」

と、しばし馬を駐めて、その行軍路を各隊の将に指示した。

すなわち一軍は、西大川、真可上、和気、金谷を経て三石に至る旧道をすすむ。また一軍は、国府市場、沼、長船を通って西片上に出、三石に合する。そしてふたたび全軍一つになって舟坂峠をこえ、有年から姫路に入る。

この命令に、どの隊は旧道へ、どの隊は新道へと、一村に溢るる軍馬が一時に混み合っているところへ、おくれ走せに追いついて来た官兵衛孝高が、その率いている黒田隊をひかえさせて、自身一騎だけ秀吉の所へ来た。

歩行に甚だしい跛行をひくが、馬に乗るにはさして不自由を覚えないらしい。彼は駒をひとの手にあずけて秀吉の前にひざまずき、あたりの騒音を幸いにそっと囁いた。

「高松城の周囲一時に干潟と変りました。その代りに低地はすべて河と化し泥田となり、もはや毛利勢がお味方へ追い討ちかけんといたしても、ここ両三日中は急に踏み渉ることも相成りますまいか」

「そうか。それでまず一方はよし、というわけだな」

「——が、ここで毛利方の人質は、きれいにお返しあっては如何ですか」

「人質を返せと」

「そうです。留めておいても効ない人質などは、御返還あるこそ、良策かと思われますが」

「……ム。いかにもな」

孝高の説明をまつまでもなく、孝高の考えは、すぐ秀吉に頷かれた。

帰するところ、これから羽柴の征かんとする一戦は、光秀を撃つか、光秀に撃たれるかにある。もし光秀に敗るるほどなら、毛利家の人質を抑えていたところで何の益にもならないであろう。

もしまた、光秀を誅戮して信長のとむらい合戦を果し、義を天下に唱えんか、天下はおのずから秀吉の手に傾いて来ないわけにゆかない。そうでもなれば、たとえ人質を取っておかなくても、毛利氏一族がふたたび反抗を示そうとは考えられない。むしろこの際、彼に対して恩を施し、彼の歓心を求めておくことのほうが、いかにその効果が確実に後でものをいうことになるか知れないとなすことが、官兵衛孝高の意中であり、秀吉の察したところだった。

「たれを添えて返しにやるか」

「てまえの家臣を遣りましょう。返還するについては、先方から借用して置きたいものもございますから」

「まかせる。よいように計ろうておけ」

秀吉は直ちに、陣後に伴っていた毛利方の人質、吉川経言と毛利

元総のふたりを、彼の手にゆだねて、先へ立った。

いまや彼の心は、矢のように急がれていた。一日遅れれば一日味方の不利である。それだけ明智の軍容は強化され、光秀の横奪した天下を天下にゆるしておくことにもなる。

本軍と別れた秀吉は、ここから馬をすてて輿へ移った。なるべく疲労を少なくするためである。そして、麾下の将士と共に矢坂、野殿、野田を経、半田山までくると、さきに引き揚げていた宇喜多主従が、岡山から迎えに出ていた。

秀吉は陣輿を停めさせた。

そして、宇喜多忠家以下、出迎えに来ていた岡山衆へたいして、

「やあ。大儀大儀」

と、洩れなく愛想をこぼし、またふと、諸士の中に囲まれている一少年の姿に目をとめて、

「お出で。お出で」

と、さしまねいた。

忠家は少年の手をひいて、陣輿の側へひざまずき、

「ごあいさつ遊ばせ」

と、教えた。

少年は礼をした。蘭の新芽の如く素直である。まだ童髪で、武者人形のように化粧されていた。

「忠家、これか。――亡き直家どのの孤子は」

「はい。直家同様に、行く末とも、お引き立て下しおかれますように」

「案じるな、故人へもここで誓うておく。かならず筑前が育ててみよう。以後は秀吉の養子ともなして」

「ありがとうござる」

一族の忠家は涙をこぼした。岡山城主の直家はすでにこの一月頃病死していたので、幼い遺孤を守り立てて高松へ参陣していた岡山衆の心境は、いとど多感であったのである。

そうした遺臣たちの心をとらえて、この急ぐ途上でありながら秀吉が「養子にする――」と約したこの宇喜多家の幼主こそ、後の宇喜多大納言秀家であった。

このとき秀家はまだ十歳で、現下の旋風にも父の死にもほとんど何らの感傷もうけていないふうだった。秀吉は可愛らしくて堪らないように、

「これへ乗れ」

と、手ずから抱いて陣輿の中へ入れ、自分の膝のあいだに置いて、

「幾歳になるか」

と訊ねたり、

「何が好きか」

と、問うてみたり、また、

「きょうから和子は、この小父さんの養子になったのだぞ。……どうだ、欣しいか。欣しくないか。この小父さんは嫌いか」

などと戯れたりしていた。

その間にも彼はすぐ輿の者へ急げと命じていたのである。だから陣輿は舟のように揺れていた。かくて岡山の城下まで来るうちに、秀吉と少年とはすっかり仲よしになっていた。

城下には着いたが、城中には入らない予定なので、秀家を輿から降ろし、忠家以下の岡山衆にも別れを告げた。

「ぜひとも、お先手について、御加勢申したいと望む者も少なくご

ざいませぬ。二千でも三千でもお召しつれ下さいませ」

忠家の好意にたいして、秀吉はあきらかに断った。

「かたじけないが後も大事だ。万一、毛利家に豹変あるときは、お汝らの力に俟つものが多い。ここの一塁は、毛利への抑えとして、筑前が恃みおくもの。呉々、抜からぬように」

種々策は授けたが、兵力は借らずに、ただ宇喜多家の旗だけを借りて去った。その後から、東へ東へと急ぐ軍馬は、ひッきりなしに城下を通過した。半日以上たっても、騎馬のいななきはなお断続していた。

一浴

六日夜は、沼城に泊まった。夜半ごろから暴風雨となった。すさまじい風雨の声をよそに、秀吉は深更まで、ここを守る宇喜多家の諸将へ、万一の場合の計を授けていた。

眠るも束の間しかない。秀吉は未明の頃から出立を発令して、残る人々へ、

「さらば」

と告げ、きのうは陣輿だったが、今朝は馬上で、風雨の中をもう真ッ先に急いでいた。

この日は七日、福岡の渡しまで来ると、河は出水に激している。沼城の者が、

（この大雨では、とても御無理でしょう。一日程も御休息あって減水をお待ち遊ばしては）

と引止めたのを、何のと、無碍に急いで来たことなので、秀吉はもとより難儀も覚悟であった。

荷駄と荷駄とを繋ぎ合わせて馬囲いを作り、人と人とは手をつなぎ、或いは槍の柄を握り合いなどして、一陣一陣濁流を渡るのだった。

さきに越えた秀吉は、彼方の水際に床几をすえて、

「急ぐな、あわてるな。心しずかに河越しいたせよ」

と風雨もよそに落着きを見せていた。

「こういう時に、人ひとり取り落すと、五百も三百も損じたようにいわれるものだ。荷物一つ流しても、百荷も二百荷も捨て去りたりと沙汰されよう。かたがた、戦場とちがい、不覚といわれては、いのちも軍器も捨てがいがないぞ。悠々渉れ、悠々と」

高松のあとへ殿軍として残して来た森勘八の一軍も、この頃、追いついて来たし、そのほか遅れた部隊も、続々見えて両岸にむらがった。

森勘八は秀吉の前に来て、あとの模様を報告していた。――味方の引き揚げは六日の未の刻（午後二時）までに全部終了したということ。また、その後も、毛利方の陣営には、追撃に出て来る気配はなく、ぼつぼつ兵力の後退にかかっているらしく思われる、ということなどであった。

秀吉はほっと一と安堵したような眉を見せた。これで初めて全力を一方へ注ぐことができると確信を得たような面持でもある。

強行軍は続けられた。人馬も旗も濡れて、みな雑巾のような姿となってゆく。雨は折々小やみにもなったが疾風は終日やまない。

西片上まで来て、さきに別れた本軍と合し、一方は船坂越えから姫路へ急行したが、秀吉はそこの嶮を避けて船で赤穂へ上陸した。

船問屋の灘屋七郎右衛門の家で小憩みして、またすぐ陸路を姫路へ急いだ。この途中でも秀吉は、度々陣輿と馬とを乗り換えたが、輿の内では正体もなく鼾をかき、馬上でも居眠りをし、幾度か落馬したということである。

こうして彼がわが城たる姫路に帰り着いたのは、八日の朝であった。全軍は、昨夜のうちに着いたのもあり、この朝、前後して着いたのもあって、ほとんど揃った。泥土を浴び、大雨疾風を冒し、一日二十里も歩いた軍馬は、ここへ来ると皆もう綿のようになっていて、思い思いの場所を選び、ともあれ一睡をとるに急であった。

姫路の居城は、沸き返すような騒ぎである。手の舞い、足の踏むところも知らずという有様だ。留守居の面々は、城門、玄関、その他へ走り出て、主の秀吉を、歓呼のうちに迎え入れると、そこにも此処にも、

「先ずまず、おつつがもなく――」

「真ッ黒にはおなりなされたが、お元気はいちばいのようにお見うけ申された」

「なんと、御武運のめでたさ」

と、ほっとしたような声が全城に聞かれた。

留守居の衆の心では、この城へ無事に主人を迎える日があるか否かすら、今朝まで確信もなく案じていたところである。

――で、今、秀吉の泥まみれな姿を見ると、その眼は、熱くならずにいられなかった。余りの歓びに度を外して、大廊下を往来するにもつい駈け足になり、互いに告げる用事も声を弾ませ合うので、秀吉が本丸へ入った後も、城内は物音でいっぱいだった。いや城下もまた馬のいななきや兵の声で沸いていた。

秀吉は本丸に坐るとすぐ、

「何よりは、一風呂浴びたい、湯殿のしたくを」

と、小姓にいいつけ、さて、

「骨折り骨折り」

と、自分の苦労は忘れて、他の者をねぎらっていた。

留守居の将、小出播磨守と三吉武蔵守も、彼の前に平伏していた。

ふたりは、主人の帰着を祝してから、長浜からの使いが別室に待っていること。またほかにも一名の客がひかえている旨を告げた。

「御用意がととのいました。御入浴、いつでも」

小姓が伝えて来ると、秀吉はとたんに起ち上がって、

「まず一浴してその後のこととといたそう。あの大雨に、鎧下着まで濡れひたったせいか、湯が恋しさよ」

つぶやきながら室を出たが、ふと、侍たちを顧みて、

「堀どのは、どこに休息しておるか」

と、訊ねた。

「桐の間におられます」

と告げると、秀吉はつかつか立ち寄って、そこを覗いた。堀秀政は濡具足を側に置いて、寛いでいた。

「久太郎どの。どうだな。きつかったであろう」

「何の。それがしは、あなたより十も若い。あなたこそ、随分お眠そうであった」

「ははは。正直、まだ眠たい。――いま風呂の湯が沸いたところだが、実は、長浜の母の許から使いが見えておって至急会いたいと申すゆえ、先へ御免蒙る。お許は後で秀勝（信長の子。秀吉の養子）とでも一緒にお入りあれ」

「御会釈でおそれ入る。さあ、どうぞお先へ」

秀吉の大股な歩みを追ってゆく家臣たちの跫音も忙しげである。湯殿の窓には雨後の朝陽が美しく刎ねていた。このとき時刻は八日朝の巳の刻（午前十時）頃であった。

ここのは蒸風呂でなく、中国風の浴槽だった。秀吉は、湯へ肩まで沈めて、

「あ。あ」

と、大きく肺を呼吸させた。

湯気の中なる彼の顔へ、高い櫺子から日光が降りそそいで来る。見るまに、彼の顔は赤黒く茄って、その額から玉の汗がにじみ出し、無数の小さい湯気の虹が立った。

早湯、早飯は、習性である。ざぶッと、滝のような音をさせて出ると、

「おいよ。誰か、背を流せ」

と、外へ命じた。

揚り屋にひかえていた小姓の石田佐吉と大谷平馬のふたりは、はいッと、待ちうけていたように、すぐ秀吉のうしろに廻って、ごしごしと襟くびから手のさきまで、力にまかせてこすった。

秀吉は突然笑い出して、

「おもしろいほど、出るなあ」

と、自分の足もとを見まわした。小鳥の糞を撒いたような垢である。

「痛い痛い。もうよい」

後はざっと自身で洗って、もう一度湯ぶねにざぶと沈むとすぐ揚って来た。

戦陣で見られるこの人の威容というものは、いったいどこに備わっているものなのか。こんなとき、一糸まとわぬ彼の肉体を熟視すると、それはまことに貧弱なものだった。ここ五年越しの打続く戦陣生活にもずいぶん無理はして来たに違いないが、それにしても四十七歳という体にしては余りに脂肪がなさ過ぎる。——この頃になってもなお依然として、尾張中村の貧農の子であった発育不足な面影がどこかにある。深刻な苦労を経て来たその筋骨は、たとえば岩礁に生えている痩せ松か、風雪に痛めつけられて来た矮梅の如き感じで、強くはあるがもう人間の老成を呈していた。

しかし彼の場合は、尋常の人の年齢や肉体と較べては考え得られないものがある。それはそうした皮膚や筋肉とはまったく別箇のものみたいにある絶倫な精力だった。また音声、動作、眼ざし、笑うこと怒ることなどを見ては、到底まだ老成の影もない若々しさである。いや時には、幼稚ですらある場合も見ることがある。

「市松」

秀吉は、浴後の身をへ揚り屋の腰掛にかけると、まだ乾かぬ汗を拭き拭き、小姓の古参福島市松を前に呼んで、こう軍令を口授した。

「すぐ天守から一番具を吹かせて、全軍に兵糧をつかわせること。二番具の鳴るときは、人夫荷駄などを先に出立させること。次に、三番具は、城外に総揃いの合図ぞと、表方へ触れておけ」

「はいッ」

市松が駈け去ると、また直ちに、

「彦右衛門を呼んで来い」

と、べつの小姓を走らせ、その蜂須賀彦右衛門の姿もまだ見えないうちに、さらに、ほかの小姓たちを派して、姫路城の金奉行、蔵

奉行などを、みなここへと、呼びにやった。

「彦右衛門にござりますが」

「見えたか。そこにいてくれ」

「はッ。何ぞ？」

「待て。いま金奉行を呼びにやってある。その上で、用事を申そう」

秀吉はまた汗を拭く。湯上がりの体は拭いても拭いてもすぐ汗になる。が、それは一浴したためというよりも、彼の五体を駆けめぐっている血行と頭脳の活動から垂るる滴々のものだといったほうがあたっていよう。

湯殿の揚り屋といってもかなり広い。彦右衛門は板敷の一方にひかえていた。そこへ金奉行と蔵奉行が一緒に来た。

腰打掛けたまま、秀吉はすぐ訊ね出した。第一に、

「いま当城の金蔵には、いかほどの金銀があるか」

であった。

金奉行は、言下に、

「銀子七百五十貫、金子八百枚余りありまする」

と、答えた。

「彦右衛門――」

と、向き直って、こんどは彼に向って命じた。

「ある限りの金銀すべて、その方の手にうけ取って、番頭、鉄砲頭、弓槍頭などへも、洩れなきよう、知行に応じて分配せい」

「かしこまりました」

「速やかにせい」

「はいッ」

打連れて、二人が退座すると、

「蔵には米がどれほどあるか」

と、蔵奉行へ在高を問うた。

「八万五千石ほどは」

と、答えると、秀吉は、

「よしよし、今日から大晦日まで、日頃、扶持取りの者の家族へ、五倍加増してつかわすがいい。ここに籠城する気はないゆえ、城米を蓄えて置くは無用である。――弓、鉄砲の組下や足軽小者などの残る妻子に、せめては煎じ茶のひとつもゆるゆる飲ませてやりとう思う。――その心もちをうしなわずに計らえよ」

「ありがとうぞんじまする」

「そちの退がるついでに、小西弥九郎に、すぐこれへと言伝けせい」

蔵奉行が立去ると、彼はその間に、鎧下着に着かえ、忽ち具足を身につけ始めた。

弥九郎行長は走って来た。

秀吉は、具足の緒を結びながら、陣中の所持金を彼にただした。高松陣の経理は弥九郎の任だったからである。費い余してあるかねは、銀子のわずか十貫目、金子四百六十枚に過ぎなかった。弥九郎がその旨を答えると、

「それだけは持って行け。使者や飛脚に与え、また何かの褒美につかう必要もあろう。よろしい、それだけを聞きおくのみだ」

彼は、浴室を出た。

そしてすぐ、小出播磨守に案内させて、長浜から来て待っているという使者の部屋へ自分から出向いた。

かかるうちにも、彼の心の一隅には、長浜の城にのこしてある老母と妻の寧子の身が、絶えず案じられていたであろうことは、彼な

ればこそなおさらのものがあったに違いない。

平伏している使者を見るや、

「無事か、何かあったか。――そちのこれへ来るまでに、母上には、どう遊ばしておられたか」

と、秀吉は早口に訊ねた。

この使者も例外なく疲労しきった態であった。病人の喰べるような物を喰べ、一室に休んでいたところである。そこへ何の予告なしに秀吉が入って来て、直接、あれこれと早口に訊ね出したので、彼はひどく慌てていた。

「はい。御母堂様にも、奥方様にも、まずは御無事でいらせられます」

「そうか。しかし長浜の城は、よも無事ではあるまい」

「さればで。――てまえが長浜のお城を脱して来たのは四日の早暁でございましたが、その時もうお城へは少数の敵が襲せ始めておりました」

「明智方の誰の手勢か」

「いえ。浅井の旧臣阿閉淡路守の浪人兵で、おそらく光秀に加担してのことだろうと思われまする。けれど、てまえが安土から瀬田へと急いで来る途々のうわさでは、明智の将の妻木範賢の軍勢が長浜を目ざして続々下って行ったと聞きました」

「そちの出立が四日とあれば、以後の安否は知るよしもあるまいが、留守の者どもの覚悟はどう決めておるか」

「所詮、籠城するほどの御人数もおりませぬゆえ、万一のときは、御母堂奥方様などを、どこか山深き地へお移し申しあげて、あとはあとのことと、侍衆は死を期して申し合わせておられました」

使いの者は、ようやく落着きを得て、懐中から一通の書面を取り出し、秀吉の前へさし出した。

それは妻の寧子からのものであった。浅井の残党や明智勢の襲撃に備えつつ一面留守をあずかる主婦として、老母の処置を案じたり、家中の女どもや、侍たちをも励ましながら、嵐のような不安と混雑の中で書いたものとしては、文字のすがたも落着いていて、日頃の便りと変っているふうは見えない。

しかし、さすがに内容の辞句には、これが最後の便りかも知れないと感じている痛切なものがこもっていた。

まず、老母のつつがなきを告げ、中国表の御進退も今こそ大事、おからだもこの時こそお大事――と述べ、お国許の儀は一切お案じ遊ばし下さいますな。日頃は何不自由なく安穏に暮させて戴いている私たち女どもでありますが、こういう時に巡り合ってこそ、内助の功とかも出来るものとありがたく思って、御老母さまを中心に、侍女の端までみな励み合っております。――ということから、終りに、

――たとえ万一の事あろうと、秀吉の妻がなどと、世に嘲われるような始末はいたしませぬ。万々、この方にはお心遣いなく、どうかこの大事の時をお乗りこえ遊ばしますように、それのみを、御老母さまも念じ上げていらっしゃいます。

さすがに、手紙の末になるほど、筆のあとも走り書きに見えた。

秀吉は満足した。そして使いの者へ、

「立ち帰って後、もしなお、母や妻が無事でいたら、見た通りを伝えておけ」

といったのみで、彼は忽ちその一室を出ていた。折ふし城頭で吹

く一番貝の音が城内城下へ流れていた。

風は追手

姫路城の内外から立つ炊煙は一時天も賑わうほどだった。一番貝の音とともに将士は、みなみな飯を喰いにかかった。秀吉もまだ広間の中央にあって、具足のまま飯茶碗をかかえていた。養子の秀勝、堀秀政、彦右衛門正勝、官兵衛孝高などみな同座だった。

「何杯目か。これで」

秀吉は自分の喰べた量を傍人に訊いていた。給仕の侍が、

「四膳召し上がられました」

というと、苦笑して、

「湯漬を、もう一碗」

とまた求めた。

箸の間にも、彼は、その旺なる食欲と同じように、絶えまなく時務を聴き、処置を断じ、また発足の措置をあれこれと左右へ命じておくなど、飽くまで旺盛な気力と周到な頭脳を働かせていた。

さきに金奉行へいいつけておいた在庫金の分配のことも、

「終りました」

と、告げて来たし、庫中の在米を家中の家族へ残りなく頒け与えることも、

「一同へ布告いたし、割当てが相すみました」

と、それへ報告された。またその中へ、

「ただ今、亀井殿が鹿野城から馳せつけられました」

という取次もあった。

「亀井茲矩が来たか。これへ通せ」

と、秀吉は座のまま、そこへ迎えて、茲矩の姿を見るや、やあ元気か、と訊ね、

「因幡は辺土といえ、いつまた、吉川勢が変を窺わぬものでもない。後いよいよ守りを固く頼むぞ」

と、いった。

亀井軍は吉川勢の一面を牽制するため、天正八年以来、因幡の鹿野城に拠っていたものである。秀吉はいま、彼をここに見て、以前の口約を思い出した。

「中国の事成る上は、御辺には、出雲の国を与えるであろうと、信長公にもその儀は御内諾を得ていたが、今度、俄かに毛利と媾和したため、そこを与えるわけには行かなくなった。で、御辺へはべつに他の封土を遣わそう。どこか望みの地もあらばいうがいい」

「お忘れもなくありがとうぞんじまする」

と、茲矩も抜からず礼を述べた。そして、いうには、

「このたび、明智の御征伐あるにおいては、自然、六十余州は風に靡いて御麾下と相成りましょう。従って私の望む地といっても日本国内では諸国共にさし合いがありましょうゆえ、願わくば琉球を賜りたいもので」

秀吉はふと眼をまろくして、こやつ俺の上手に出たなというような顔をしたが、直ちに手に持っていた金扇へ「亀井琉球守」と書き、傍らへ「秀吉」と署名して茲矩へ与えた。

諸将がそれを羨んで、

「今日のお門立ちに、逸早くかばかりなお墨附を戴いた者は他にない。琉球王は抜け目のない奴じゃよ」

と、打ち興じているところへ、留守として姫路に残る小出播磨守と三好武蔵守が、

「はや二番貝が鳴りましょう。ただ今から先発の荷駄隊や人夫が発足いたしまする」

と、また座の一方へ来て報らせていた。

「さらば」

と、秀吉も起ちかけた。

そしていよいよ、出陣するにあたって、彼は、留守役の小出播磨守と三好武蔵守のふたりへ、こう云い遺した。

「勝敗は天運にもある。万一、秀吉が光秀のために討たれたときは、この城に火をかけて、一物ものこすな。わが母、わが妻、一族にも皆、然るべく云いふくめてある。総じて、本能寺にみまかられた御方に従い参らすつもりで、潔くあることだ」

一瞬、残る人々も、征く人々も、一様な厳粛に打たれていた。すると、播磨守のうしろにひかえていた一僧がやおら膝をすすめて両手をつかえ直した。これは日頃秀吉も帰依している城下の真言僧なので、何か善言を呈する心であろうと見まもっていると、彼はようやく眉をあげて、憂わしげに忠告した。

「ただ今から諸軍を閲して、御本陣は明九日の、暁天の御発足の予定とうかがいましたが、量るに明日は、出でて再び帰ることなしという大悪日にあたります。何とぞ、吉日を卜して、明後日、当所を御出陣なされますように。――この儀何とも心がかりのまま、折角のお立際ながら、御賢慮に入れ奉ります」

――と。秀吉は、もうぬッくと褥から起ち上がっている。そして真言僧の切なる諫言が耳にはいったのか聞き流していたのか、突然、満座の者の憂いを吹きとばして哄笑した。

「何をいう。それなれば、明日はわれにとって大吉日ではないか。出でて再び帰るなしとは、明日ばかりか、毎度出陣ごとに、兵家の常とするところだ。――このたびとて、一死君恩に報ずるの覚悟、もとより生還を期してはいない。もしまた、幸いに、秀吉死なず、戦いに勝たば、何でこれしきの小城を我が居となすに足ろうか。べつに天下の地を相し大城を築いて住もう。――易経にもいう、卦は卦面に非ず解心にありと。いずれにしても、またなき吉日。明日こそ待たれる。さあ、出ようか」

そのまま、彼は室を出た。そして城門の外、大手口の欄干橋で、なお後から続く小姓組の面々や諸将の出揃うのを待ち合わせていた。

二番貝が高らかに鳴った。すでに荷駄隊は発足を開始していた。そして陽も西に傾く頃、秀吉はここから三番貝を吹かせ、自身の床几場を城外へすすめて、海道口の印南野に移した。

三番貝は勢揃いの合図である。秀吉が印南野に床几を置いた頃、もう海道の広野も松並木も夜になっていた。蜂須賀彦右衛門にいいつけて、十数名の祐筆を臨時に選び、明々と高張を左右に掲げて、参陣者の姓名を着到帳に記させた。

宵から夜半過ぎるまで、先鋒、中軍、後陣の配備に人馬の影は地を埋めて濤のごとく揺れていた。なおそのうちにも、後から後から、取る物も取りあえず、具足を投げ懸け、得物を押ッ取って、着到場へ来て姓名を記入する者がひきもきらぬ有様であった。

秀吉は床几に倚って、終始、高張の下でそれを見とどけていた。

着到帳に記された姓名は一万余にのぼった。時はすでに九日の丑の刻（午前二時）を過ぎている。秀吉は左右にある彦右衛門正勝、

森勘八、黒田官兵衛などに向って、
「出発の用意はよいか」
と、問い、一同が、
「何刻でも」
と答えると、さらば貝を吹かせよと命じ、起って、床几を畳ませた。
螺手が貝を吹く。
長く緩く、また高く低く、合図の貝が鳴りわたると、先鋒鉄砲組の大将中村孫兵次の部隊から一鼓六足にて前進を開始していた。
第二軍は、堀尾茂助吉晴。次に中軍がつづき、羽柴秀勝は、養父秀吉の旗本たちより二、三町先に立って行軍し、後陣には、秀吉の弟秀長が将として続き、総軍一万は、五段になって、姫路城外の印南野を立った。
この頃ようやく、夜が明けて、海道の松のすがたの一つ一つも鮮やかとなり、東の方、播磨灘の水平線と横たわる黎明の雲のあいだに、真ッ赤な旭日が出陣の足なみを祝ぐようにさし昇っていた。
「風は追い手だ。見よ、旗、馬じるし、吹貫なんど、この西風に、みな京の方へ吹き靡いておる。一個の人命如きは、朝あって夕べも知れぬが、量るに、わが軍の門出は、天もその名分を嘉し、前途を味方し給うものと思われるぞ。まず、腹いっぱい、鬨をあげて、この発足を天下に告げよう」
貝の音をもって、人馬の足なみを止め、まず中軍から、大喊呼をあげた。それに和して、全軍も濤の如く武者声を張りあげた。中には、朝陽に向って、馬簾を打ち振る隊もあり、一斉に槍の穂をさし上げるのも見え、いななく馬の意気までが、すでに北勢明智光秀の軍を呑んでいた。
一路、摂津に入り、尼ヶ崎に着くまでは、これまでの急行軍とひとしく、落伍する者は捨て去り、人馬ともに息を休めず、敢えて隊伍諸卒の整列や規矩にとらわるるなく、ただ、急ぎに急ぐことを旨として来た。
尼ヶ崎に着いたのは、十一日の早朝だった。際限なくなだれ入って来る軍隊に戸を開けたばかりの民家はただ目を瞠りあっていた。
秀吉は路傍に馬を止め、
「禅寺でもないか」
と、休息する場所を求めさせていた。
「あれに一小庵がございます」
と指さす小姓を案内に、海道から少し横道へ入って、附近の松原に馬を繋がせた。
「どこでもいい。どこでもかまわん」
秀吉は頻りに云っていた。なぜならば仰天して迎えに出た和尚も左右の者までが、余りに何の設備もない小寺に過ぎないことを諄く言い訳するからだった。
「上がるぞ」
彼はもうそこの濡れ縁を上がって、気に入った部屋の一つに坐りこんでいる。堀秀政もつづいて坐す。諸将、小姓などはそこには詰めきれないので、裏から表まで、ある限りの空地を占め、この小さい禅寺の内に人々はなく、人々の軍中に禅寺があるような恰好になってしまった。
「秀勝。これへお坐り」
白湯ひとつ飲むと、秀吉は、すぐ隣室に座をとって休んでいた養

子の秀勝を膝近く呼びよせた。

秀勝は、十五歳であった。

信長の第四子として生れ、幼名は於次丸とよばれていた。秀吉の養子となってからも、もう五、六年にはなる。

秀吉が中国出征中は、長浜の城にいて、領下の政治を沙汰していたが、ことしの三月頃、信長の命をうけて、養父秀吉の麾下に参じ、具足始めの式をうけ、児島の城を攻めて、初の戦功をたてたのであった。

「秀勝」

「はい」

「お許の眼元を見ておると、亡き御方が偲ばれてくる。信長公にようにておられる」

秀吉はしげしげと眺めた。秀勝は、諸将の中で今日この時、何事を養父からいわれるのかと俯向いた。秀吉は眼をうつして傍らにいた堀久太郎秀政と秀勝とを等分に見てからこう云い出した。

「先君御落命の報らせをうけて以来、高松から当地にいたるまで、お許らも見て来た通り、筑前は精進潔斎を守って来たが、ここ尼ヶ崎の地は、すでに敵の明智軍とも指呼の間近にある。——きょうにも、明日にも、いつ敵とまみえて、合戦に及ぶかもわからぬ」

秀勝は丸ツこい眼をあげた。若々しい感情はもうその眼の中に沸る湯となってあふれかけている。秀吉の親としての気持も、信長の死後は一しおいじらしさと慈しみを加えていた。

「わしも四十七歳、はや老武者の組に入りかけて来たが、このたびの合戦こそは、畢生のもの、先君のとむらい合戦、いざといわば、みずから鑓も持ち、太刀打ちもなす覚悟でおる。——が、年はあらそえん、食物を精進物に限っておると、何となく力づかぬ。そこでわしは今日をもって、精進を廃めるが、お許らは、若いのだから、なお、精進をつづけておれよ」

「はい」

秀勝は明答した。久太郎秀政もうなずいた。

「——次には」

と、秀吉はなお語をつづけて、秀勝へ諭した。

「敵の日向守光秀は、お許にとっては親のかたきたり、また主の仇たり、申さば、二重の敵である。いうまでもないことながら、光秀を討たずして、お許の生命は天地にあり得ない。誰よりもさきに先陣せよ。わしより先に討死せい。養父も汝の健気を見とどけた上で討死いたすであろう」

「かならずおくれは取りませぬ」

秀勝は両手をつかえた。諸将は厳粛な気に打たれていた。秀吉がこの勝敗に一死を期している容子は、疾く姫路から見ていたが、さらに、強固な覚悟を、敵近きこの尼ヶ崎へ来て、ふたたび胆に銘じ込まれたのであった。

「お湯が沸きましたが」

との、寺僧のことばに、彼は禅庵の裏へ出て、行水をつかった。そして、命じておいた食事を摂った。彼の膳には調理された魚鳥の肉が豊富にのっていた。彼は、幾日ぶりの精進落しに、胃の腑をみたした。

終ると、一房へ入って、ごろりと眠った。一刻、軍馬もしずかに、蝉時雨の声のみがつつんだ。食と眠りが、秀吉の戦備であった。

涼しき頭

ここ天下の諸相は急激に一転したが、経て来た日かずを顧みれば、信長の死後、まだわずか今日で十日程しか経っていない。

近畿の人心は、本能寺以来の動揺を、今なおそのまま抱いていた。柴田、滝川は遠隔にあり、徳川は自国へ退き、細川、筒井の向背は知れず、丹羽は大坂表にあって織田信澄を始末したという風聞のみで、これもそれ以上に出ていない。

「――今朝来、尼ヶ崎には、はや筑前守の先手、中軍の諸勢が、続々到着して、大物の浦、長洲のあたり、兵馬が充満して見える」

この噂は、事実のまま、十一日のその朝から風の如く、摂津を中心に拡まった。

けれど、なお、

「よもや、そう迅くは？」

と、半信半疑の者が多かった。

それというのが、やれ徳川殿が西上して来るとか、北畠殿が進撃中だとか、どこで誰と明智とが接戦中だとか、余りに耳を捉われやすい類似の風説が多いことと、もう一つは、

――羽柴軍は毛利に釘付けにされておるため、そうやすやすとは中国をうごき得ない。

という先入観も、一般の常識になっていたからである。

しかし、事態の中核に身を置いて、真に、秀吉を観、時代の推移を直視していた一部の人々にだけは、もちろんそんな錯誤はなかった。何といっても、旧信長麾下の諸大将のうちには、すでに動かない秀吉の支持者が存在していた。

多年、秀吉が中国で示して来た実際的な経略は、西日本の戦雲を背景として、遠地にある諸将のうちへも、いつのまにか、秀吉なる者の真価とその偉風を、かなり大きく投影していたのであった。

これをもって見ると、彼の長い苦節は、ひたすら信長への忠勤にほかならなかった。が、結果的にいえば、秀吉は秀吉自身の素地をこのあいだに築いていたということになる。

ともあれ、一部の人士は、秀吉が毛利と和を結んだと聞いたときから、

「さてこそ。東上の肚」

と、彼の意中を読み、また、日頃の期待を裏切られなかった歓びをも加えて、彼が現地を去り、姫路を経、奔転、摂津へ向けて驀進して来るあいだにも、その途上へ向けて、

（早々来り給え。待つこと切）

と、飛報したり、また、

（明智方、その後の動静は、かくかく也）

などと早打して、その旗幟へ鶴首していたものだった。

大坂の丹羽長秀なども、

（まずは、彼の来るを待って）

という態度で書簡を通じていたし、中川瀬兵衛、高山右近、池田信輝、蜂屋頼隆等、みな同様に心を寄せていた面々である。

わけて高槻の高山右近と茨木の中川瀬兵衛の二将は、在城の地も近いので、秀吉が尼ヶ崎辺に着いたと聞くと、すぐ一部の手勢をつれ、また各、ことし八歳ほどになる質子を伴って、秀吉の休んでいる禅寺へたずねて来た。――陣門の士は、前後して来た中川瀬兵衛へも高山右近へも、

「殿はただ今、お寝み中ですが」

と答えたのみで、二将の来会を狂喜して、あわてて取次ぐなどということはなかった。

ふたりはやや意外だった。

瀬兵衛も右近も、内心、自分たちの向背が持つ価値と力を知っている。

信長の生前までは、二将とも明智の麾下に置かれていた者である。その兵力ぐるみ一方の陣営へ転じて来ることは、敵味方の比率に二倍の狂いを生じさせるわけになる。

また、瀬兵衛は茨木の城主だし、右近は高槻の城を持っている。この領内を通らず京都へは出られないし、明智勢と接触はできない。ほとんど敵中にあるといってよいこの二基地を、戦う前に足場となし得るのは、作戦にも運輸糧食の上にも、大きな利といわなければならない。

で、当然、ふたりは、自分らが秀吉の陣門に参会してゆけば、秀吉としても、待っていたという顔まではしなくても、

――よくぞ、早く。

と、迎えもし、歓びもして、歓待を示すであろうと思っていたらしい。

ところが、案のほか、いまはお寝み中だからしばらくお待ち下さい、と陣門の将士はいうのである。それもよいが、寺内ほとんど人馬で、待つ間を休息している特別の設けもない。

中川瀬兵衛も、高山右近も、兵を外におき、伴れて来た質子と少数の従者と共に、境内の一隅に佇んでいるしかなかった。

ただ、その間も、時を忘れて眺められていたのは、後から後から

と到着して来る遅れ馳せの軍馬に見える旺んな流汗であった。後に大村由己が記録にも、

――諸卒相揃ハズト雖モ、九日ニ姫路ヲ立チ、昼夜ノ境モナク、人馬ノ息ヲモ休メズ、尼ヶ崎ニ至ル。

とある秀吉の文字通りな急行軍のために、途中で落伍したものが、ひきも切らず、続々と、まず門前に来て、

「何の某ただ今、着陣」

と、呼ばわると、これに立っている蜂須賀、森の二将が、どの辺に屯して命令を待てとか、また、誰の部隊が彼処におるから、その手について休めとか、いちいち指さして、それらの軍隊に所属と位置を与えていた。

また、どこの使者か、どこから帰って来た使番か、寺中と外との往来も頻繁だった。その中には、どこかで見覚えのある武士もあって、

「はてな。今のは丹後の細川家の士ではないか」

と、瀬兵衛は、ひとりの背を見送って、呟いた。

光秀と細川藤孝、その子忠興との関係は密接である。藤孝と光秀とは、多年、莫逆の友たるのみならず、光秀のむすめの伽羅沙は、忠興の妻でもある。

（細川家から何の使いを？）

これは今ここにある二人の関心であるばかりでなく、天下の衆目がみな強く意識している問題だった。――瀬兵衛のつぶやきに和して、右近もふとこう疑った。

「昼寝と申していたが、実は筑前はもう眼醒めておるのではあるまいか。何にしても、余り無愛想な」

不満を顔色に現わして、すでに帰ろうかとすら思っているとき、ようやく、秀吉の小姓が走って来て、どうぞと、狭い禅庵の奥へ案内に立った。

通された一室にも秀吉は見えなかった。しかし疾うに目醒めていることは確実である。方丈かどこか近い所で大きな笑い声がしているからだ。かかる応対をうけるのは、中川瀬兵衛にしても高山右近たりとも甚だ心外らしかった。

――秀吉、何者ぞ。とつい思いたくなって来るのだ。彼も信長の遺臣なら自分たちも信長の臣下だ。いまだかつて、彼から高下の差別をうけるような恩顧をうけた覚えもなし、主従の約をしたわけでもない。

ただ、今日これへ自分から駈けつけて、彼の陣門に駒をつないだものは、故主の敵光秀を討たんという一片の耿々の志を一つにする者と思うたからにほかならない。しかるに、その同僚を迎えるに、この態度は何事か。こんなことなら吾れからここに臨むのではなかった。秀吉が礼を厚うして迎えに来るのを待って来てやるのであったに――と、右近もほろ苦い顔して悔いているようだし、瀬兵衛も頗る渋面をつくっていた。

それと、この二人の不快を手伝ってよけい堪らないものにしているのは、その日の暑さだった。梅雨はとうに明けているはずだが、いっこう空気は乾燥しない。そして空にはのべつという程、この頃の天下を象徴しているような去就の定まらない雲が往来していた。その雲間から折々かっと照りつける陽はまた脳膜を麻痺させるような執こさと強烈な光を持っている。

「暑いのう、瀬兵衛どの」

「ムムム。風もないし」

ふたりも勿論、脛から籠手まで身を鎧っていた。近来の具足は年々敏捷を貴んで軽略になって来たとはいっても、厚い革胴の下には汗が流れるようだったにちがいない。

「筑前も、もうよい加減に、出て来そうなものではないか」

瀬兵衛は軍扇をひらいて、しきりに頸をあおいでいた。そして、敢えて下らざる意志を示すもののように、右近とともに、上座を取って坐っていた。

ところへ、やあ、という声が風とともに入って来た。秀吉である。二人の前へ来て坐るやいなや繰り返して云った。

「やあ、どうもすまぬすまぬ。寝起きに御本堂へ出て、これをやっておると――（自分の頭をぺしゃぺしゃ叩きつつ）ただ今、遠路から細川藤孝、忠興父子の使者が見えて、帰国をいそぐとのことに、さきにその方の談合をすませた。そのため、まことに、お待たせしたようだが」

と、いつに変らぬ体で、座の上下などは眼のうちにない。

「ほう」

とのみで、ふたりは挨拶もわすれて、秀吉の頭ばかりながめていた。

秀吉が剃髪していたからである。剃りたての頭に庭木のみどりがてらてら映って見える。

「先君の弔合戦と申して、せがれ秀勝も髪を剃ろさんといい、堀秀政も剃髪すると云い出したが、お身らは若い、それまでには及ばぬ。武者振こそ作れと、ようやくあちらで止めて参った。――そして今、二人の髪の端だけを切らせ、筑前のと添えて、お位牌の前に供えて

参ったが、おかげでこの暑さにも、頭だけは涼しくなった。ははは。入道とは涼しいものよな」

とはいえ、気になるものとみえて、秀吉はしきりにそれを撫でまわしていた。

瀬兵衛も右近も、最前からの不快は拭き消された。こんどの一戦を前にして、秀吉が剃髪して臨むまでの決意を見せている以上、些末な私情に駆られるなどは、みずから恥ずべきだと思った。

ただ、いかんせん、談話中、秀吉の頭を見ると、折々、おかしくなって堪らなかった。

近頃は余り面と向っては人もいわなくなって来たが、秀吉をさして「猿々」と呼び慣わしていた頃の先入主が、今もこの二人のどこかに潜んでいた。そしてその旧観念と、眼の前のものとが、見る者の心のうちで、相互に擽ッたい感情が挑み合っているのらしい。

「迅いには一驚を喫した。高松からこれまでの間、ほとんど、眠るまもなかったでござろうに。——いや、お元気を見て、われらも安心いたした」

瀬兵衛が、おかしさを怺えて、まずは尋常に挨拶すると、秀吉も急に思い出したかのごとく、

「いや、途上度々、お飛脚を賜わって、かたじけない。それによって、明智方のうごきも知れ、また何よりの儀は、御両所の味方だにあればと、大いに意を強ういたして参った」

と、世辞をいった。

高山右近も中川瀬兵衛も、そんな下手な世辞にすぐころりと欣ぶほど甘くはない。聞き流して、すぐ秀吉に注意した。

「いつ大坂へ向われるか。われはともあれ、大坂表には神戸信孝様もおられ、丹羽五郎左も、貴公の来るのを待ちぬいておる」

「いや、敵のおる方角でもない大坂表へなど、いま参っておる暇はない。大坂へは、今朝すぐ使いを出しておいた」

「信孝様は、先君の第三子。貴公から出向かなければ動くまい」

「秀吉の陣門へ来いと申し上げぬ。先君の弔合戦に参会せられよと云い遣った。側には丹羽長秀もおることゆえ、常時の礼や、つまらぬこけんにこだわっておられるようなことは万あるまいと思う。かならず明日は参陣されよう」

「伊丹の池田父子は」

「これは相違なく会同する。まだ見えぬが、自分が兵庫まで来たとき、使者をよこして、此方まで誓紙をとどけて参っておる」

味方の糾合については非常な確信をもっている容子だ。わけて山陰の細川父子が、明智家とは切っても切れぬ姻戚関係にありながら、光秀の誘いを退け、却って、今も今とて、家臣の松下康之を遠くから使いによこして、

（断じて逆徒には組みさない）

という誓約を入れて来たばかりである——という事実を、秀吉はかなり得意そうになって、また、これが当然な世間の大勢であり武門の大道でもあるといって、二人へ力説した。

そしてなお種々談しの末、やがて中川、高山の二人が、いずれも伴って来た幼い者を、質子として、秀吉の手許へあずけようと申し出ると、秀吉は大いに笑って、

「無用無用。御両所のお心はよく分っておるし、かつは、このたびの一戦は、そんな旧い習慣によって辛くも結ばれ合う味方同士ではないはずだ。幼少の和子たちは、早速、各　のお城へお返しあるが

よい」

といって断った。

雷気

秀吉の休んだ禅庵は栖賢寺であったが、これと並んですこし先に広徳寺がある。彼の本陣はこの二寺をあわせ用い、刻々に増える軍勢を、附近の長洲から大物の浦まで充たして、十一日はここで過した。

その晩は、広い闇の諸方で、しきりに軍馬がいななき狂った。

「明智方の四方田政孝の斥候隊が、近くの村落に出没している――」

というような風説もあって、陣中は夜どおし緊張しきった裡にこもごも一睡をとっていたが、馬が寝つかないのは、それとは無関係であった。宵の頃からいちめんに掻き曇っていた空から折々電光がひらめいて、遠く近く雷鳴も伴っていたせいであろう。

「天王寺辺から東のほうは、ひどい大雨だそうな」

大坂表から来た早馬の者にそう聞いた哨兵が、共に哨戒に立っている友の影へ向って話している。

「この辺はポツーとしか降らないが、この風はどこかで降っているようなあんばいだ。あすは雨かな」

「嫁入りの晩と、戦いの出がけに降るのは、縁起がいいというから、ざッと来るのもいいだろう」

「敵もそう云っているかも知れまい」

「大きにそうだが、同じ大地へ天から降る雨でも、光秀の部下とおれたちとでは、濡れ心地が違うだろう。みろ、馬さえあのように勇んでいる」

「よかった、おれたちは」

「なにが」

「明智の家中でなくてさ」

「ははは。まったくだ」

闇の中の人声を聞きとめて、秀吉はふと佇んだ。昼間、快睡したせいか、眠れぬままに、彦右衛門と茂助をつれて野営している士卒の様子をそっと見廻って来たところだった。

「彦右衛門。聞いたか」

秀吉は顧みた。いま、哨兵が大勢で語り合っていたことばをさして云ったものであることは勿論である。

「戦いは、勝っておる。もう勝った。そう思わぬか」

「まことに」

彦右衛門も茂助も、主人の気もちを正しく解いてうなずいた。また、ここに聞く人ありとも知らず放言していた士卒たちの正直なことばにも心から共鳴した。

「もう丑刻の頃か」

「そうなりましょう」

「戻ろう。やがて進撃の貝も鳴るであろう」

裏門を探って寺中へ帰った。附近の農家であろう、長い声を曳いて牡牛が啼く。総じて、野良犬も鶏も鼠も何となく官能を尖らせているとみえて、どこの営でも兵は深々と眠っているが、動物たちは夜どおしかさこそと物音をたてていた。

「お尋ね申していたところでした」

秀吉が灯もない縁先に腰を休めると、小姓たちが来てすぐ告げた。

「大坂表の丹羽どのから、早馬のお使いが着かれております。すぐ御返書をいただいて、即刻、立ち帰らねばと、しきりに急いだり案じたりしておりまする」

「また、来たか」

同じ所からこれで三度目の早馬である。秀吉は苦笑した。この方面の問題だけでも今夜は彼を寝かさぬようにできていた。

秀吉は縁に腰かけたまま「大坂の使者をこれへ呼べ」と迎えにやり、やがて彼の前に来て平伏した使者の手から、丹羽長秀の書簡を直接受けとった。そして一読すると、祐筆に筆を執らせて、

「すぐ持ち帰れ、仔細は書中に」

と極めて簡単な一札を使者に託した。

けれど返書の文意だけでは余りに簡に過ぎると思ったか、使いの者が倉皇として起ちかけると、なお、ことばをもって伝言をたのんだ。

「やがて夜明けと同時に、秀吉は軍をすすめて、きようにも敵と一戦の覚悟である。すでに敵は眼前にあることゆえ、たとえ味方の諸勢が揃わぬまでも、兵機さえよろしと見れば、いつでも時を移さず交戦に入るであろう。――折角、信孝君をお迎え申して、子としては、父なき御孝道を尽させ給い、臣としては先君の弔合戦、ここは死生も御一緒に、御旗をひとつに、昨朝来、書簡を以て再三御参会を促しまいらせたが、何のかのと御理由のみ立てられて、いっこうお腰の上がらぬ様子。……さもあれば是非なし。悠々、いつまでお待ち申しあげておられぬ場合。後に、お悔い遊ばすことなどないように、丹羽殿も切にお心入れあるこそ輔佐のお役目であろうと。――左様に、筑前が申しおったと、あからさまに伝えてくれい」

使いは恐懼して帰った。使いの者のうけた感じでは、秀吉が多少、癇癪を起しかけているように見えたかもしれない。

事実、きのうから三度も四度もむだな早馬と時間を空費しながら、まだ煮え切らない書面をよこしたり、返書を求めて来る神戸信孝の態度には、秀吉もこの多事と兵機を寸刻たりと、ゆるがせに出来ない中だけに、やりきれないような鬱陶しさを覚えていた。

神戸信孝としては、秀吉が、尼ヶ崎まで来ていながら、大坂へ来て自分に謁を執らないことが第一の不満らしく、

（自分は、信長の子だ。我から彼の陣へ参じる理由はない。予のこけんにもかかわる）

という面目に囚われているのは確かだったが、それはそうとはいわず、丹羽長秀の名をもって、

（部下の大半が逃散したため、なお御軍勢の整備がつかぬ）

とか、また、四国の長曾我部の動静がさだかでないから、一両日はなお見定めたいとか、あらぬ理由を立ててしかもなお、いちど貴所の方から大坂城へ来て、ここで御軍議を固められては如何か――などと悠長なことをいって来ている。

で、秀吉はいま帰した使いに託した書中にも、これが最後の書状と断って――

（かくの如き時は生涯二度とはありませぬぞ。秀吉とて明日はこの世の者でないかも知れず、かかる時を逸して悔いを千載にのこし給うな）

と極言して遣ったほどだった。

一方の朝雲が白みかけた。今朝も雲脚は早く、まだ他地方はゆうべから吹き暴れているような天候である。

兵糧用意の貝の音が陣々で鳴った。

海の近いせいもあろう。夜明けの一頃は濃密な霧だった。それに一万以上の軍勢がつかう兵糧の炊ぎに、陣々の炊煙もたちこめて、松の多い尼ヶ崎一帯は、松か霧か人か煙か。

秀吉は寺内の一隅にある老松の根がたに筵を敷かせ、堀秀政、中川瀬兵衛、高山右近、黒田孝高、蜂須賀彦右衛門などと、膝組んで何か談笑を交えながら、そこで一緒に兵糧の握り飯を喰っていた。

「精進を廃めて、魚鳥を充分に喰べたせいか、きょうは何かしら非常に力づいた気がするよ。やはり食は士気の根元だな」

秀吉の矛盾を、彦右衛門が側から笑った。

「御剃髪と同時に、肉食をお始めになられた御出家は、古今、殿をもって嚆矢といたしましょう」

「什※生。それがわしの真骨頂だ。秀吉の出家は坊主の出家と甚だ意味がちがうからな」

これが生還を期せざる戦いに入る前の筵だろうかと思われるほど賑やかな朝餉である。そこへまた昨夜来、高槻の北方、芥川方面へ偵察に行っていた加藤作内光泰、福島市松などが帰って来て、

「おいいつけの地方、隈なく巡りましたが、敵らしい者には会いません。けれど民家は相当騒いでおります。昨日の昼、明智の小部隊が通過して、当所のお味方の動静を訊きあるいた上、勝龍寺方面へ立ち去ったと申しおりました」

と復命した。

秀吉は直接二、三の要領をたずねた上、ひと休みして、早く兵糧をとっておけと犒らった。

程なくまた、

「ただ今立ち帰りました」

と、中村孫兵次、山内猪右衛門などの一小隊が復命に来た。これも昨日の昼から出てようやくいま帰った斥候部隊である。そして命ぜられた先も、渋川筋から洞ヶ嶺附近の地域なので、かなり深入りして来たことが察しられる。

「洞ヶ嶺にある筒井順慶を訪ねて参った光秀は、きのうお味方がこの尼ヶ崎に着いたと聞き知ると、にわかに下鳥羽へ立ち退いたということでござります」

孫兵次の齎らしたことは重大な情報といわなければならない。諸将は聞き耳たてた。秀吉の眼も急にらんとして輝きをおびた。

「して、筒井は？」

「依然、洞ヶ嶺にあります」

「光秀はそれに抑えの兵をのこしておるか、否か」

「斎藤利三の一軍を留めて去ったようです」

諸将は顔見合わせた。秀吉も黙然とうなずいた。それによって、筒井順慶の向背はほぼトし得たからである。

秀吉はまた、下鳥羽へ移った以後の光秀が、さらに前進して来るもようか、後退する気配かを訊ねたが、そこまでのことは、中村、山内の二人にもわからないので、ありのまま、

「予察いたしかねます」

と答えた。やがて二番貝が鳴る。秀吉の周囲にいた諸大将は皆どこかへ駈け散って行く。間もなく各隊は尼ヶ崎を発し、山崎方面へ向って進軍を開始していた。秀吉の馬上姿もまた、馬簾とともに押し流さるるように軍勢の中に見えた。

淀・山崎・天王山

伊丹の池田信輝も、一子勝九郎を伴って、この日、途中から秀吉の軍に投じた。信輝も、今朝出陣の間際に、剃髪して、名も勝入とあらためていた。

秀吉とは、清洲時代からの莫逆の友であり、おたがいの莫迦も知っていれば長所も知り合っている仲である。

「やあ、御身も髪を剃ろされたのか」

「貴公も剃髪したか」

「期せずして、ひとつだったな」

「むむ。ひとつ心だった」

秀吉と信輝とは、それだけで他のことばを必要としなかった。信輝は携えて来た手勢四千人と共に行軍に加わった。

昨日以来、目立って、軍勢は強力になっている。秀吉の手兵約一万が最初のものであったが、高山右近の二千人、中川清秀の二千五百人、蜂屋頼隆の一千人、それに今また池田隊四千を加えたので優に二万を超えようとしている。

こうして全軍が、右に淀川を見、左に能勢や有馬地方の山々を見ながら、北進して行くうちにも、なお二十人、三十人の郎党や家の子を率いて来る地方郷党の小部隊の参加もひきもきらぬ程だった。

それらの者は、口々に参会の意志をこう表明した。

「明智の行為はゆるされぬ不道である。逆を討ち順を扶くるは武門の当然な鉄則でござれば、従来の行きがかりや旧縁の誼みなど一切かえりみなく麾下に馳せ参じてござる」

このことばはほとんどみな一致していた。あながち羽柴軍の優勢だけを見て勝目に体を賭けて来た者ばかりとはいわれない。

午ごろ茨木に着き、小憩のあいだに、秀吉は諸方の情報を聞きあつめ、また前進をつづけ、茨木と高槻の中間、富田に陣営をさだめた。

布陣の令が終ると、秀吉はすぐ部下を会して、作戦を評議した。そのとき端なくも中川清秀と高山右近のふたりが、

「先鋒はそれがしが」

「いや、先陣は自分に」

と、互いに云い張って、いずれも譲ろうとしない小争論を起した。

高山右近はいう。

「敵近き地にある城主がその手の先陣たることは古来弓矢の作法でもあれば、何と申されても、中川殿のあとにつくわけには参らぬ」

中川清秀も負けずにいう。

「先陣後陣のわけ目は、何も戦場と居城の近い遠いなどということで定めらるべきものではない。要は士馬精鋭の如何にある。将たる人の覚悟と質にある」

「では、この右近には、先鋒として敵に当る資格がないといわるるか」

「いや、御辺のことは知らん。しかしそれがしこそ、余人におくれは取らぬものと、みずからかたく信じておる。故に、先陣はそれがしにと、誰へ遠慮もなく望む次第でござる。中川清秀にこそお命じあれ」

清秀はそういって秀吉に迫った。右近も秀吉に手をつかえてその命を仰いだ。秀吉は、当然、主将たるの態度を床几に構えて決裁した。

「いずれの申し条も道理であれば、中川も一線に陣取れ。高山ももちろん一番合戦の所に出て、ことばに辱じぬ功名を取ったがいい」

評議中にも、続々、斥候隊からの情報が入った。

「きのう以来、洞ケ嶺、八幡の陣を撤した光秀は、山崎、円明寺あたりの兵力も結集し、或いは、京都坂本方面まで後退するのではないかのような空気も見えましたが、俄然、今朝以来、明らかに攻勢を示し、その一枝隊は早くも勝龍寺あたりまで転進しつつある情勢にござります」

この報らせをうけると、帷幕の諸将は俄然、緊迫した眉を示し合った。ここから山崎、また勝龍寺との距離は、ほとんど、電馳一突の間でしかない。諸将のぎらぎらした眸にはすでにその辺に出没する敵影が見え始めているようだった。

中川、高山などは、先鋒の任を負ったので、すぐ立ちかけた。そして秀吉に向い、

「時を移さず、ここの本陣も直ちに、山崎あたりまで、お進めあっては如何」

と決断を促した。

秀吉はこの場合の色めき立って来たものには乗らず、至極悠長に答えた。

「自分はここでもう一日、神戸殿のお出を待つ所存だ。半日一夜たりと、大事な機の刻々うごく時とは思うが、何としても、このまたとなき戦いに、幾名もおる先君の御遺子のお一方ぐらいはお加え申しあげたい。神戸殿をして生涯、悔いをのこし、世上にも顔向けならぬようなお立場にさせたくない」

「でも、とこうする間に、敵に有利な地勢を占められては」

「されば、神戸殿を待つにも、おのずから際限がある。――明日ともなれば、いずれにしても、山崎まで秀吉も出向かおう。全軍、山崎に集結した上、さらに聯絡を取るから、各　はすぐ前進しろ」

「よろしい。ではなお刻々の状況は、後刻、使者をもって」

と、中川、高山は立ち去った。

すなわちここを発した先鋒は一番隊高山、二番隊中川、三番隊池田勝入という順序であった。

富田を離れるや否、高山隊二千余は、もう眼のまえに敵軍を見ているような迅さで驀進し出した。中川瀬兵衛以下、二番手の勢も、その馬煙を望んで、

「山崎にはもう敵勢が入っているのか」

と、疑い合い、

「それにしても、余りな急ぎ方だが」

と、あやしまれる程だった。

山崎の町へ入るとすぐ、高山右近の部下は、町をつらぬいている道の木戸を封鎖して、附近の小道まで一切交通を遮断してしまった。

あとから来た中川隊は、当然、その遮断を喰って、さてはと、高山隊の急いだ理由を覚ったが、こうなると意地でも彼の第二陣に控えてはいられない。

「よし。その分ならば」

と、中川瀬兵衛はここの要所を捨てて、急に山の手方面へ向って行った。その方面に見える一高地、名は天王山。

秀吉はついにその夜は富田に宿営したが、翌十三日の午近い頃になって、ようやく、

「ただ今、神戸信孝君、丹羽長秀様などの一軍が、淀川の岸まで到

着されました」

という報らせをうけた。

「なに。信孝様が、見えられたとか」

そのとき秀吉は、それを耳にすると共に、ほとんど、床几を倒して駈け出さんばかり歓んで云った。

「馬を、馬を」

彼は、営外に立って、あたりの者へ急きたてた。そしてそれへ乗ってから、

「お迎えに行って来る」

と、陣門の人々へ、馬上から振り向いて、ひと言告げ、淀川の岸まで急いだ。もちろん数騎の部下はあとから駈けつづいた。

満々たる水をたたえた大河のそばには、約四千人一隊、約三千人一隊と、ふたつに別れた軍隊が、船や筏をすてて、馬に草を飼い、兵は河原に憩うていた。

「信孝君はいずれにお在すか」

秀吉は大声で求めながら、自分を見まもる汗くさい兵の中に跳び降りた。

たれも秀吉とは思わなかった。

「どなたでござるか」

「筑前じゃ」

諸卒は初めて目をみはった。

秀吉は迎えも待たず、一部将のあとを見て、兵馬のあいだを押し分けて行った。

照り返す河原の水べりを避けて、出水あとの堤崩れが見える一喬木の下に、三七信孝は、馬印を立て床几をすえて憩うていた。

ふと、振り向くと、秀吉が、何事かを大声で呼びかけながら近づいて来る。

その顔、その目、その声に接すると、信孝は何かしら、はッと、すまないような気持に胸をうたれた。

また、父信長が、多年手塩にかけて来た一家臣が、このときは、主従の情をこえて、骨肉にも近いような感情で、つよく眼に映った。

「オオ、筑前か」

彼が手を伸べるも待たず、側近くまで早足に歩いて来た秀吉は、いきなりその人の手を取ってかたく握りしめ、

「信孝さま！」

それだけをいった。そしてあとは何もいわず、いい得ず、眼と眼に語らせていた。

どっちの眼にも滂沱たるものがながれた。その涙のなかに信孝は父亡きききょうの気持をことごとくこの一家臣に語り尽していた。秀吉もその胸のうちを察すればこそであった。彼はやがて、固く握っていた相手の手をやわらかにはなした。それと共に、地にひざまずいて、なおしばし嗚咽しつつ云った。

「よくぞ。よくぞ……お渡り下されました。いまは何事も申しあげている遑もなし心も他にありません。……ただ、それのみをありがたくお礼申しあげまする。またこのことこそ、先君の御霊もかならず泉下において御満足に思し召しておらるるであろうことを信じて疑いませぬ。……やれやれ、筑前もおすがたをここに拝して、臣下の道のひとつを完ういたしたような心地がされまする。真実、高松以来、初めてのうれしさにござりまする」

信孝は、秀吉の手をとって、

「ここはすでに戦場、主将たる御身が、左様にしておられては、信孝の居りようがない。まずまず床几を取られよ」

と、自身すすめた。

べつの一軍は丹羽隊であった。丹羽長秀はその中にいたが、報らせをうけるとすぐこれへ来て、参会の遅延を謝し、またともにこの一戦に臨む同生共死のよろこびを誓った。そして程なく秀吉の案内で、この軍馬七千も、彼の陣営の一翼となった。

信孝を迎えた河原では、信孝の前にぬかずいた秀吉も、ひとたび自己の陣営に入ると、左右すべて彼に慴伏し、威風払わざるものはなく、たとえ神戸三七信孝たりとも、丹羽五郎左衛門長秀たりとも、全軍の指揮者たるその位置には、自然憚らざるを得なかった。

――といって、秀吉自身が、ことさらに信孝を下におくというようなところはみじんもない。むしろ、宥り慰めて事ごとに気を労うふうすら見える。そして富田の陣営に迎えるとすぐ、

「いまのところ、敵方の情勢はこうなっており、味方はかように進み出ております」

と、手にとるごとく、作戦図について、詳しく説明を与えていた。

きのう中川、高山などの先鋒が進出してから、夜に入って、すでに勝龍寺の西方あたりで、足軽隊同士の鉄砲戦があり、その附近で、探り合いの放火が行われたという報らせは――まず前線部隊からこれへ伝令されていた。

そしてゆうべは、遠方からもその火の手がボウと見えたが、大した展開も見せず、鉄砲の音も止んで、そのまま夜明けとなったものである。

きょう十三日も、空は依然荒れぎみで、折々、沛然と驟雨が来ては、また霽れたりしているが、ゆうべも山の方ではだいぶ降っていたらしい。そのために鉄砲隊の足軽は、敵味方とも火縄の火が消えて難儀しているということだった。

それも一因であろうが、またひとつには、富田にある秀吉が前進して来ないため、中川、高山、池田、すべての軍は、満を持したまま、ただ彼の一令を待っているというすがたでもあった。

「合戦は恐らくこれから今日中に開かれましょう。大勢の決するところも今十三日中になりましょう。いずれにせよ、今日こそ定まる日です。御休息のおいとまもなかったでしょうが、秀吉と共に御出馬なされませ」

程なく、彼は信孝を促して、富田の陣を払い、山崎へ向った。

出がけにも、また一雨来た。金瓢の馬じるしは鮮やかに濡れかがやき、諸将の陣羽織や太刀からも雫していた。

「おお。虹が、虹が」

途中、秀吉は指さした。

しかし人々が仰いだときはもう見えなかった程、天相の変化は迅かった。

山崎へ着いたのは申の刻（午後四時）、先鋒三部隊の八千五百に、予備軍一万を加え、山も河も町も、兵馬の影のないところはなくなった。

「今、明智方の一軍は、天王山の東のふもとへ、死にもの狂いの突撃を開始し、お味方の中川隊と激戦中との報らせでございました」

着くとすぐ秀吉はこの一報を聞いた。秀吉は、戦機熟すと見た。で、予備軍中の加藤光泰を池田隊へ加え、また堀秀政の軍を高山右近、中川清秀の二隊へ増援させて、

「いざ。われも」
と、全軍全面にわたる大攻勢の命令を一下した。

裁きの悲歌

九日。――それは秀吉が早暁に姫路を出発していた日にあたる。
明智光秀は、この九日の朝、坂本を立って京都へ引っ返していた。
同じ日月の下に在るふたりの者の居所とその行動を見くらべて見ると、秀吉があのような心と姿で送った姫路城の八日の晩を、光秀は同じ夜、坂本の城に、どんな感慨と夢を抱いて過していたろうか。

ここで一応、本能寺変の後、それからのわずか五、六日間には過ぎないが、光秀の行動と彼に蒐まった世の衆目の機微な現われとを、顧みてみる必要もあろう。
本能寺の余燼もまだいぶっていた六月二日の当日、未の刻（午後二時）頃には、彼はもう京都を去って、
「安土へ。安土へ」
と狂風のごとく急いでいた。
もちろん京都にも部下を残して、残党狩りによる織田色の一掃に努めさせ、町々には地子銭免除（減税令）の高札とともに軍令をかかげ、また万一を思い、山城摂津方面のうごきに対し、その圧えには明智家の属城勝龍寺の城へ、重臣の溝尾庄兵衛を入れておくなど、朝来急速、万端の手配を終った上であることはいうまでもない。
だが、洛外を出た彼の第一歩は、その日、粟田口から瀬田まで来ると、もうそこに、

（そうは、させぬ）
となす障碍につまずいていた。
午まえに、あらかじめ誘降状を送っておいた山岡美作守の兄弟はその使者を斬り、城を自爆し、瀬田大橋にも火を放って、家中とともに甲賀の山中へ遁走していた。
この違算のため、瀬田は通行できなくなった。光秀は憤りを眼に燃やした。焼き落されて半ば破壊された大橋の残骸は、彼へむかってこういっているようにも見える。
（汝が世を観るごとく、世は汝を観ない）
光秀はやむなく、坂本城に留まって、むなしく両三日を過し、橋の急修理をおえて、ようやく安土へ襲せかけた。
安土はすでに死の町と化している。主なく人なき巨城であった。
蒲生賢秀以下の留守居衆が、信長の妻子眷族をつれて悉く日野の城へ退いていた後だし、町の家々にも、暖簾も見えず商品の影もない。
しかし天下第一の大城の天守には、多年蓄積されていた金銀や名物ものなどの財宝がそのままあった。
城を収めた後、光秀は、それを見た。けれど彼の心は少しも富まなかった。却って反対な感情が呼び起された。
（自分の求めているものはこんな物ではない。こんな物を求めてしたと考えられたとは心外だ）
光秀は庫中の金銀を悉く取り出させた。そして部下の賞与や寄附や治民の費用に惜し気なく撒いた。小禄の者にすら数百両ずつ与え、上将たちの賞賜には、三千両、五千両と頒け与えた。
安土に居あわせて、その状を見ていた宣教師のオルガンチノは、

「日向どのには、幸運を楽しむ日もそう長くないことを、もう自覚しておいでとみえる」

と、独りつぶやいた。異国人の眼にすら光秀の無理な力で持った「天下人」の威権はそう観察されていた。

――われ光秀はいったい何を求めている者か。

光秀はそれを自分にしばしば問うてみる。「天下人たらん」と、当然な答が湧く。しかし、どうしたものか、われながらその響きはうつろにしか血に響かない。

信念からの発足でなかったことを自認せずにいられない。元来そういう大望を抱いていなかった自分であることも誰よりも自分が知っている。

その器でもなく、その大望もなかったと知る彼が、かくなって来たわけはただひとつ、「天下人信長」を討ったからにほかならない。天下人は、天下人を仆した者が代るという不文律が時代の中にある。それを否みようもなく光秀をして大難業に駆らしめ、光秀自身もまたひたぶるにその権化たらんと見せている。――にもかかわらず、光秀の心の奥底に棲む光秀の本質は、すこしもそこに自身の前途も理想も見出していない。

信念の根のない熱情を強いて振おうとする姿は狂躁にしか見えなかった。彼のねがいと満足とは六月二日の一火をもってもう果されていたのである。あの朝、信長の死を聞くや、堀川の陣にあった彼はうそか本心か、

（妙心寺の一室をかりて予も自刃せん）

といったという。そういう巷説が一時行われた。心ある者はそれを取って云った。

（なぜ死なせてあげなかったのか――）と。

伝えられるところによれば、その際、帷幕の重臣たちが極力それを引き止めたものだといわれている。或いはそうだろう。信長という者が一火の灰と化したせつなに、光秀の胸に凝り固っていた万丈の氷怨は雪解のごとく解け去ったであろうが、彼をめぐり彼とともに事をなした将士一万余は必ずしも彼と同じような心態ではない。彼らにとってはむしろ事はこれからだと期せざるを得ない。元々、信長一箇を討つのみが挙兵目的の全部ではなかったからだ。そして彼らはみな信じた。

（今日以後現実に、わが光秀様が天下人に成られたのだ――）と。

ところが、彼らの仰ぐ当の光秀は、このときすでにその実を失って虚になっていたのである。六月二日以前の彼とそれから後の彼とで、別人のようにその容貌も気魄も、叡智までが変っていた。ひと口にいえば、虚化していた。どこかにうつろが窺われるのである。

――それは単なる疲労などとは大いに違う。

とはいえ、天下は動いた。愚者の暴挙と軽視し去る者はない。天下は光秀自身の肚以上、彼の一挙を計画的なものにも観ているし、彼の才腕、彼の智嚢を大きく買っている。刻々として、彼の誘いに応じ、彼の軍に投じ、また遠くにいても、呼応するかのごとき表情を見せている分子も少なくはない。

五日から八日の朝まで、彼は安土にいたが、その間とて、彼はただいたずらに、庫中の金銀や満城の綾羅珍什の処分をしていただけではなく、次の段階にたいするあらゆる努力を一面に傾けていたことはいうまでもない。

丹羽長秀の本拠、佐和山を攻めさせてこれを収め、秀吉の城長浜

も同時に陥れた。そして人的には美濃の諸侍を誘降し、六角家の旧臣や京極家の一族、また、若狭の武田義統などを加えて、それぞれ適所に用い、ひたすら兵力の増強にあせっていた。

一応、江州附近の攻略をすませると、光秀は留守居軍の一部をとどめ、全軍装備を新たにして、ふたたび上洛の途についた。

途中は坂本城で泊った。

そこでも、軍勢の一半を割いて、山科から大津方面へ陣取らせた。気を労えば限りのない程、諸方面に万一の備えが要る。それ程に、彼の期待の対象はまだはっきりした意志を表示しないでいる。

明示しているものは、蒲生賢秀の如く、細川藤孝父子の如く、きっぱりと、彼の誘いを断った者のみである。

わけて、細川忠興は、またなき彼の愛婿である。信長を倒した以上、一も二もなく自分に従いてくるものと、光秀は決定的に思いこんでいた。

ところが、使者の齎して来た返事によれば、その忠興も父藤孝も、

（もってのほか）

という立腹であったというばかりでなく、

（故信長公に二心なし）

と、髪を切って、誓いを示し、また直ちに、明智家から嫁いでいる忠興の妻の身は、子供を添えて山ふかき里に隠し、一方即刻、秀吉の許へ使いをたてて、

（共に逆臣を討たん）

という誓約を送ったとも――その宮津から立帰って来た使者から、彼はつぶさに聞かされていたのである。

このときまで、彼は、味方に引き入れる者の対象にばかり気をとられていて、いったい天下の何者が、自分にとって、最大な強敵として立ち現われて来るであろうかを――まだ的確に想定していなかった。

秀吉。

という存在が強く彼の胸を打ったのもようやくこの日頃からのことだった。

中国在陣中の彼の兵力と、その人物などを、まったく埒外において、観過していたのでもないし、軽視していたわけでもない。

むしろその存在には甚だ脅威を感じていた程だが、なお光秀をしてひそかに安んぜしめていたのは、

（毛利と四つに組んでいる秀吉は急にうしろを振り向けまい）

と、予想していたところにある。

かたがた、本能寺襲撃の早朝、堀川の陣から急派しておいた毛利向けの二使者が、海路陸路、いずれかの一人は、疾くに芸州へ行き着いて、中央の異変を知り、自分からの書簡を見て、

（時こそ到る）

と、歓呼をなしている時分であろう。そしてやがて、東西挟撃して在中国の羽柴軍を粉砕せんと答えて来るにちがいない。――そう希望し、そう判断して、吉報の到るのを、今か今かと、心待ちにしている程だった。

が、この方面の使いも、梨のつぶてである。のみならず、自分の麾下に属し、しかも京都と近接している摂津あたりの中川瀬兵衛、池田信輝、高山右近などからさえ、まだ何らの返答がない。

また、大坂表にある織田信澄は、光秀の婿でもあるから、彼がこれにも望みをつないでいたことは確かだが、その信澄は、僚将の

丹羽、蜂屋などの手に襲われて死したというわさが、もう一般に聞え渡っていた。

夜の明けるたび、光秀の耳に入るものは、事ごとの齟齬と、裁きの悲歌であった。

洞ケ嶺

彼にとって、坂本の城は思い出がふかい。

まだわずか半月前。

信長に面罵され、饗応の役を褫奪され、憤然、安土を去って、居城亀山へ去る途中、幾日もここに留まって、悶々、迷いの岐路に立ったものだが――

いまは迷いもない。恨みもない。同時に反省も失った。

光秀はいつのまにか、正しき知識人の本質を、一時的な「天下人」の虚名と取り換えていた。

従兄弟の左馬介光春は、安土の守りに残して来たが、この城には、光春の夫人や、その子女たちや、また例の、ひょうきん者の叔父、明智長閑斎などという身内の者がたくさんいる。

わずか半月ぶりで接した光秀に、なぜか今度はそれらの内輪の者までが、何となくあらたまっていて、窮屈に覚えたが、相変らずなのは長閑斎であって、

「このたびは、天下様にお成り遊ばして、われらはまるで、夢かとしか思えません。瓜や茄子が、急に花園の壇に上されたようなもので、御眷族の端たるわれらも急にお行儀をあらためております。末々公家衆などとのお交際も繁くなれば、瓜や茄子も冠して厳かにおらねばなるまいと惧れましてな。――いや正直を申せば、先の短い愚老などには、迷惑やら仕合せやらで」

などと軽口を弄して、その楽天振りに少しの変化も来たしていない。明智一族中、この老人だけは、べつな暦でも持って暮しているようである。

どんな無用人でも、その所を与えれば、世に無駄人はいないとよくいう光秀は、日頃、従兄弟にむかっても、この老人を祝して、

（左馬介の家庭には、あの屈託のない年寄がおるので、何ぼう奥が明るいか知れぬ。家に後顧がなくてよい）

と、称えていたものだが、今度の一泊には、長閑翁と戯れあう子らの嬉々たる声もうるさい気がした。

――明けると早暁に、白河越えを経て、京都へ向っていた。

吉田神社の神官吉田兼和とは日ごろの交誼も深い。その兼和が白河口に待っていて彼に告げた。

「御入洛と聞いて、摂家以下の公家方が、公式にお迎えに出ようと、慌ただしく装っております。この辺で御小憩ねがいたいが」

光秀は、拝謝した。

「いや、洛内もまだまったく鎮まったといえぬし、近畿の情勢もなおわからぬ今日、左様な重々しい儀礼は相互の迷惑。やがて御所へ御礼に伺候する日まで、おあずけ願っておこう」

その折、彼は、銀子五百枚を御所へ献上したいとて、その手続きをこの友に依頼した。同日また五山、大徳寺その他へも多額な寄附をしたので、安土から携えて来た手許の軍用金はすっかりなくなってしまった。そして夜は、下鳥羽に陣営して眠った。この夜九日である。彼はまだこの時まで、秀吉の動向については何ら知るところ

もなかったが、河内、摂津方面に散在する諸大名の態度には、何となく不安を感じ出していた。

光秀は、翌十日の朝、本軍を下鳥羽において、一部隊だけをひきつれ、山城八幡に近い洞ヶ嶺へのぼって行った。

ここは山城の綴喜郡と河内の交野郡との境をなす峠路である。光秀は旌旗を立てて、終日、何ものかをこの国境に待ちうけていた。

「筒井家の先鋒は、まだ見えぬか」

「見えませぬ」

「高山、中川、池田などの使いは？」

「何の訪れもありません」

陽の傾く頃まで、光秀は幾度も、同じ問いを、帷幕から陣外へ発してみた。

そして自身も折々、

（そんな筈はないが？）

と、いぶかる如く、陣外に出て、河内摂州の山野をながめ、焦躁の眉へ、手をかざしていた。

彼がここへ来た唯一の目的は、大和の筒井順慶の軍を待つためだった。もちろん事前に順慶とは諜し合わせてあることでもあり、平常の関係としても、一子十次郎を養子にやる約束まで結んである筒井家のことなので、この来会と協力は当然なものとして、ほとんど、何らの疑いもさしはさまず、約を履んで、旌旗を立てていたものであった。

ところが、日も暮れかかるに、その順慶は遂に来ない。――のみならず、一面、疾く檄を飛ばしていた高槻の高山、茨木の中川、伊丹の池田などの、わが麾下と見なしていたところの諸将も、いい合わしたように、ひとりとしてここに会合する者を見ないのである。

光秀の焦躁は当然であった。

「利三。何の手違いであろう？」

彼はなおこれをもって、諜状の手ちがいか、或いは諸軍勢の用意が遅れているもののような程度に解したがっているふうだったが、そう質問をうけた老臣の斎藤内蔵助利三は、すでに非なる大勢が心のうちに読めていた。

「……いや。筒井殿には、来会の意志がないのでしょう。さもなくば、大和郡山からここまでの坦々たる道、かように時遅れるわけはございませぬ」

「いや、左様な道理はない」

光秀は敢えて云い張った。そして急に藤田伝五を呼び、一書を認めて、急に郡山へ催促の使いにやった。

「伝五、乗換馬も良いのを曳いてまいれよ。駒の足で急ぎに急げば、明朝までに立ち帰れるであろう」

「筒井殿がすぐお会いくださりさえすれば、夜明けと共に帰れましょう」

「会わぬなどというわけはない。深夜たりとも、すぐ会って、返辞をただしてまいるように」

「かしこまりました」

伝五は部下数騎をつれてすぐ峠を下り、木津川沿いに郡山の道を急いで行った。――が、この使いもまだ帰らぬうちに、諸方面の偵察隊は、秀吉の軍勢が疾くも続々東上を開始し、すでにその先鋒部隊は兵庫辺まで来ているという事実を相次いで、ここへ報らせて来た。

「あり得ないことだ。何かの誤報ではないか」

初めのうち、光秀はまだ、そう左右の者へいっていたほど、そのことについて、味方の物見が頻々と報じて来るような秀吉の迅速な行動は、頭から信じきれないような容子だった。

――どうして秀吉がそう簡単に毛利と和議を取り結べよう。また、和議を計ったところで、あれだけの地域に膠着されていた大軍を急に撤回して、上洛して来るなどは思いもよらない。到底、至難なことである。と絶対に信じていたものらしかった。

「いや、虚報とは思われませぬ。何しても早く、御対策を決せねば相成りますまい」

この際にも、正しく事態を直観していた者は、かの老将斎藤利三であった。そして光秀が逡巡なお決しかねている進退にたいしても、

「それがしのみは、ここに止まって、筒井殿に備え、後おあとを慕うて参りますれば、殿には、急遽下山あそばして、秀吉の上洛を阻止なさらなければなりますまい」

と、明確に指針を与えた。

「筒井は望みなかろうか」

「十中八、九までのところ、まずお味方には参りますまい」

「秀吉阻止の策は、如何したものだろう」

「伊丹、茨木、高槻などの諸勢も、はや秀吉に款を通じおるものと見るほかありません。筒井勢もまた同様とすれば、機先を取って彼を摂津の入口に邀撃するには、遺憾ながらお味方の兵力は不足であります。――が、量るに、いかに秀吉といえ、ここへ到るまでには、なお五、六日を費やしましょうから、その間に淀、勝龍寺の二城を固めて、隘路の南北に堅陣を設け、その間に江州その他の諸勢を糾合するならば、一時の防ぎにはなりましょう」

「なに。それでも一時の防ぎに止まるのか」

「爾後のことは、大策を要しましょう。局所の合戦のほかのものです。しかし今は焦眉に迫っております。一刻もはやく下鳥羽へ」

利三は急き立てるように云った。

光秀が山を下りたのは、まだ夜明け前の暗いうちだった。――明けると十一日。前夜、郡山へ使いに行った藤田伝五は、怒りを眉に持って立ち帰って来たが、利三の顔を見るやいな云った。

「だめだ。順慶めも、裏切りおった」

そして、相手の不信義を鳴らしてなおも、

「順慶坊主め、口の先では、程よく申しおって、いっこう去就を示さなんだが、帰途、探り得たところでは、彼からも秀吉からも、頻りと使者の取り交わしがあったようだ。――げに頼みがたきは人心か。日頃、明智家とは、あれほど好誼ある仲と思われたものすらかくの如しだ」

と、罵ってやまなかった。聞く老将利三の方には、何らの感情のうごきも見られなかった。当然なことを当然と聞いているふうでしかない。ただ白い眉と、まばらな髯を持つ面を、ありのままに彼へ向けていた。

粽のこと

光秀が、むなしく洞ヶ嶺を去って、下鳥羽の本陣へ帰って来た頃――十一日の午頃――には、すでに一方の秀吉は尼ヶ崎に着いて、

一睡の快をとっている時刻だったのである。

光秀の本陣は、下鳥羽の秋山という一丘にあった。

この日の暑さは、尼ヶ崎の禅寺も、この丘も変りはない。光秀はもどると直ちに諸将を会して帷幕のうちに作戦方針を議した。――とはいえまだ、いよいよ当面の敵とわかった秀吉が、ここから指呼のあいだ尼ヶ崎に来ていようなどとは思いも寄らないふうであった。この先鋒部隊や先発の小荷駄隊は摂津口にぽつぽつ現われても、秀吉自身が到着するのはなお数日を要するものと観ていたのである。

しかしこれをさして彼の叡智の混乱というのは当らない。彼はそのすぐれたる常識をもって常識の水準からこう判断を下したに過ぎない。しかもこの判断は世人すべての常識でもあったのだ。

「では、即刻工事を急がせましょう」

明智茂朝がまっ先に帷幕から出て行った。評議は時をうつさず終ったのである。茂朝は駒をよせて淀へ急いだ。急遽、淀城に補強工事を加えて、敵に備えるためだった。

淀を右翼とし、勝龍寺の城を左翼とし、能勢、亀山の諸峰と、小倉之池に狭められたこの京口の隘路を取って、羽柴軍を撃摧せんとなす準備行動のそれは第一歩とみられた。

また、前々から、散陣的に、淀川の対岸から山崎方面へ出しておいた幾つかの部隊にも伝令をとばして、

「勝龍寺へ籠って、防塁をかため、満を持して、敵を待て」

と伝えさせた。

伏見には家臣池田織部を。宇治には奥田庄太夫を。淀には番頭大炊助を。また勝龍寺の城には、三宅綱朝をそれぞれ籠めてある。

配するに万全を期しているが、敵方の兵数を推し量るとき、光秀はなお一抹の弱味を抱かずにいられなかった。朝来、午を過ぎても、諸方から麾下に集まって来る兵は相当あったが、いずれも近畿の小武門や浪牢の徒で、いわば、名もなき輩が出世のいとぐちを求めて来るに過ぎなかった。大量の兵力をひっさげて、一方の将たらんといって来るような曠ある参加者はほとんどなかった。

「いまのところで、味方の兵数はどれ程にのぼっておるか。勝龍寺、洞ヶ嶺、淀なども合わせて――」

光秀が左右に質すと、祐筆は着到帳と、亀山以来の譜代の者と合算し、また安土、坂本その他、遠くに散在してある兵力とを差引いて、次のように書き出して、光秀へ示した。

斎藤利三の隊　二千人
阿閉貞秀。明智茂朝の隊　三千人
藤田伝五。伊勢貞興の隊　二千人
津田信春。村上清国の隊　二千人
並河掃部。松田政近の隊　二千人
――御本軍　約五千

ざっと、計一万六千である。光秀は心のうちでつぶやいた。

「……もし丹後の細川と大和の筒井だにこれへ加わっていたならば、日本中部を縦断して、われは絶対に不敗の態勢を取り得たであろうに」

すでに作戦方針を決定した後までも、彼は甚だ兵力の差に重点をおいて苦慮した。

由来、彼の頭脳は計数的であって、にわかに、寡をもって衆を破るが如き飛躍は、ひらめいて来なかった。

それと、秀吉と直面するの大戦を前にしたが、どこかに一抹、敗

戦を意識する気おくれが潜んでいた。これは決定的な敗戦の因をなすものであるが、光秀の性格とここ数日の齟齬がかくさせたもので、彼自身にも、どうにもならないものだったろう。

彼は、彼自身で起した怒濤の高さに、今や溺るる怖れすら自覚していた。しかし、それは表面の彼の姿ではない。彼自身も気づかないでいる潜在意識においてである。

その夕方、この下鳥羽の陣へ、一群の町人たちが伺候した。京都の町代表たちで、

「地子銭御免除の御礼のため、町民一同に代って参じましたもので――」

とのことだった。そして、祝福の意を表するため、

「御合戦の大勝利をお祈り申しあげ、併せてお門立ちのお祝いまでに――」

と、手製の粽を献上した。

これらの者を迎えて、扈従の将星を左右に繞らし、悠然と床几に倚っている光秀のすがたには、まさに新しき「天下人」たるの威風に欠けるものはなかった。

侍座の一将は、京都市民のよろこびと、献上の粽とを、光秀の前に披露して後、一同へ向って、

「洛内の取締りは、厳に戒めてあるが、なお日も浅いゆえ、さまざまな流言も撒かれ、陰にあっては、御行動を誹謗し奉るような説をなす者もあろう。しかし政をなす主権者に悪行あるときは、それを廃せし例は、わが朝のみならず、唐土にもあることで、周武がその主紂王を弑し、諸民の困窮を救い、周の八百六十年の基を開いたのを見てもわかろう。わけてわが日の本は上に万代不易の大君がおわしての武門であり、将軍職でもあれば、決して一信長が絶対の天下人でなければならぬ理由はない。汝らも、この辺をよく弁えて、市民の者が妄説に惑わされたりすることのないようによく努めい」

と、申し渡した。

光秀も、一言与えた。そして折角、志の粽だからといって、彼らのいる前で、そのうちの一つを取って喰べた。

ところが、剝ぎ取った粽の笹が、まだ少しこびりついていたとみえて、光秀は横を向いて舌のさきからベッと吐き捨てた。

「――あかんぜ、あの御大将は。きっとあきまへんぜ」

帰り途。口さがない京童の性を持っている代表たちは、口々に語り合って行った。

「粽の皮はよう残るもんじゃ。それをよう見もせず口に入れるような大将ではあきまへんわい。戦いは明智方の負けでっしゃろ」

このことを、後の諸書が、みな誇称して、光秀が粽を笹の皮ぐるみ喰ったというように伝えているが、恐らくこの程度に過ぎない小事であったろう。

けれど京都人は由来、人に接すると、そうした小事を見つけて、すぐ相手の寸尺を量る性癖をもっている。中原へ中原へと、古来から多くの武門が侵入して来ては没落し、あらゆる有為転変を、いつも被治者の立場から長い眼で見て来たため、自然養われて来たものかと思われる。

桂川

法体の施薬院秀成が、

「惟任どのにお目にかかりたい」
と、下鳥羽の本陣を訪ねて来たのは、京都町民の代表者たちが、そこを辞してから間もない頃だった。
光秀は、藤田伝五、その他四、五の将を交えて、兵糧をつかっていた折である。
伝五の報告で、筒井の変節はもうあきらかだったが、なお順慶の余りなる豹変ぶりには、ここでも諸将の憤りのたねとなって、武門の風上にも置けぬ男と罵られていた。
そこへの取次であった。
「はてな、施薬院が？」
光秀は眉をひそめた。施薬院は本能寺変の少し前に、信長から中国の陣へ差向けられていた者である。
「ま、通せ。――ともかく」
気のゆるせぬ心地もするが、また多大な感興と好奇も抱いた。秀吉の近状を知る者として、絶好な便りとも考えて面会したのである。
「まずは、御健勝で」
と、施薬院は事もなげに平常どおりな挨拶をのべた。信長のことにはすこしも触れて来ないのが、光秀には何となく痛痒い気がした。
「お許は、中国へ下ったばかりと聞いていたが、どうして、にわかに立ち帰って来たか」
「筑前どのが、直ちに、京都へ攻め上られるため、われらの如きは、足手纏いと思し召されたのでしょう。急に、お暇を下されたので、早々立ち帰って来たわけでございまする」
「なるほど……ムムム」
と頷いてから、ほんの言葉のつぎ足しに過ぎないような語調で、
「筑前は達者か」
と、訊いた。施薬院も、至極、無造作に、
「はいはい、いよいよ頑健な御様子に見られました」
と、答え、
「あのお方の御精力というものは底がわかりません」
と、問われぬことまでいった。
「筑前には早や、毛利と和睦して、北上の途中にあると聞くが、お許がこれへ来る頃には、どの辺まで来ておったか」
「何を仰せられます」
施薬院はその迂を嗤うように、
「もはや、ついそこの、尼ヶ崎まで来ていらっしゃいます。それも今朝ほどのことです」
「えッ……？」
「まだ御存じなかったので」
「先鋒ではないのか」
「おそらく先鋒の方がおくれたでしょう。筑前どの自身、紛れもなく着いております。途中の風雨も陸路船路も、ほとんど、不眠不休のおいそぎ方で」
「……そ、そうか」
語気やや紊れるのを、光秀は強いて沈着をよそおいながら、
「尼ヶ崎では面会いたしたか」
「余りに夥しい軍馬を見、わざと通り過ぎて参りました」
「兵数は」
「わかりませぬ。武家なれば目づもりでも知れましょうが」
「尼ヶ崎へは立ち寄らず、この下鳥羽のわが陣へ立ち寄ったのは、

何か用向きがあってのことか」

「中国でお暇をいただく折、日向守に会うたら申し伝えよと、筑前どのからお言伝てを頼まれておりましたので――」

「筑前からこの光秀へ言伝てとな？　……。おもしろい。何と云いおったか」

光秀は異常な昂奮を抱いた。人をもって言伝てして来たことばといえ、まさにそれは、敵将の決戦状ともいえるものと思ったからである。

施薬院は、次のように、それを伝えた。

「中国でお別れする折、道中用心のためにと、私へ手ずからお槍を一本下された上。――さて、筑前どのがいわれるには、その方は仕合せな仁じゃ、いずれ光秀と会うだろうが、このところ、後の天下は、光秀が取るか、自分が取るかだ。その両将のいずれにも心証のよいその方の家はまことに安全を保証されているものといわねばならん。――ついては、自分より先に光秀に面会いたした折は、筑前がかく申しおったといえ。……そう仰せられまして」

と、施薬院は、ここでちょっと、額の汗を、懐紙で軽くたたいた。そして秀吉の口吻そのままいった。

「――日向守とは毎度会いはいたして来たが、戦場で会うは初めて。大将と大将とが、直の太刀打ちいたすも、数日のうちにある。主君の敵なれば、部下の槍も待たず、かならず直の太刀打ちいたして、勝負を決すであろう。日向にも左様に心得おられ候え――と、かように屹と仰せられました」

「……」

光秀はあきらかに感情をうごかしている。しかしじっと押し黙って聞いていた。がやがて、その硬直を解くと、しずかに一笑を見せて、

「筑前が云いそうなことよの」

と、立って、うしろに立て懸けてある槍を取り、施薬院に与えて、こう云い足した。

「言伝てたしかに聞いた。大儀である。――秀吉からも一槍を貰うたそうだが、わしからも贈ろう。洛中はまだ物騒じゃ。供の者に持たせて、用心怠りなく帰るがよい」

施薬院が辞去した頃は、すでに下鳥羽は宵だった。風が出て、雲脚が迅くなりかけている。

「暗いぞ。気をつけて参れよ」

光秀はそれを見送って、陣外の丘の端に佇んでいた。――が、彼を送るのが主ではなく、白眼、天を仰いでいたのである。

「降りそうな……」

と、彼は独りつぶやいた。この風では降りもしないかと思われる一方に出た呟きだった。戦いに臨まんとするや、まず気象を見定めておくことは将の肚として重要である。光秀はかなり長く雲のうごきや風の方向を案じていた。

さらに、脚下の淀川を見た。

チラチラ、と風にそよぐ小さい灯は、味方の哨戒舟であろう。大河のうねりは白く、山崎その他、摂津一円は、ただ漆にひとしい闇でしかない。

「筑前風情が、何ほどのことを！　……」

この河の、はるか海口、尼ヶ崎の空へむかって光秀のひとみが、光芒を放ったようにすわったとき、彼のくちびるはかつて吐いたこ

とのない強い語気をもらした。

「作左。作左。作左衛門はおらぬかッ」

彼のすがたが大股に身をひるがえして元の営内にもどって行くとき、暗い烈風は、しきりに附近の幕舎に大きな波を立てていた。

「はいッ。堀か。そちでよい。すぐ貝を吹け。――全軍に出陣の用意をと」

「堀与次郎、おりまする」

陣払いの終るあいだに、光秀は洞ヶ嶺、伏見、淀、その他の味方へ、急使を派した。遠くは、坂本城にある従兄弟の光春へも、

（――退いて防がんよりは、前進して彼を邀撃、一戦に大事を決せん）

の覚悟を告げて、その来援を促して発したのである。

夜は二更。星ひとつ見えない。

軽捷な戦闘隊をまず丘から降ろして、桂川の上下を見張らせ、荷駄、本隊、後軍とつづいた。

驟雨が来た。全軍、渡河を半ばにしつつ、真っ白な雨に打たれた。風も伴っている。西北の冷たい風だった。暗い川上を望みながら足軽たちはつぶやいた。

「この川の水も、この風も、丹波の山を越えて来たものだ」

昼ならば見えもしよう。老坂も遠くはない。その老坂を越え、丹波亀山の故郷もとを出て来たのは、つい十日余の前だったが、彼らには、三年も四年も前のことだったように回顧された。

「溺れるなよ。火縄を濡らすなよ」

部将は、組々の者へ注意していた。山岳地方は、大雨だったにちがいない。桂川の水勢は常よりも烈しかった。

槍隊は、槍と槍をつなぎ持ちにして渉り、鉄砲隊は銃座と筒口を持ち合って越えた。

光秀をかこむ騎馬の一隊は、迅い水泡を残して対岸へ上がっていた。どこともなく前方の闇でパチパチと湿っぽい銃音が断続して聞え、民家の火か、単なる篝か、遠くに火花が見えたが、小銃の音が止むと同時に、それらの閃きも消えて、真の闇に還っていた。

「お味方の先駆が、敵の斥候隊を追い払ったものでござります。火花もまた、円明寺川附近の農家へ、敵の小勢が、逃げるに当って、火を放けたのでしたが、直ちに、消しとめました」

伝令将校から報告がある。

光秀は意に介するなく、久我畷をすすみ、味方の勝龍寺城には入らず、わざとそこから西南方約五、六町ほどの御坊塚に本陣をさだめた。

この二、三日の天気癖である雨はすぐ霽って、墨を流したような濃淡を見せている空に星すら燦めき出している。

「――敵もしずかだの」

光秀は御坊塚に立つと、山崎方面の闇を一望して呟いた。

すでに秀吉の軍と、わずか半里を隔てて相対したと思う無量な感慨と緊張とが、その語の底に大きく呼吸をしていた。

ここを全軍の基点として、勝龍寺を後方の補給兵站基地とし、さらに西南方の淀から円明寺川の一線を扇なりに引いた。前衛各部隊をそれぞれ配し終った頃――夜はすでに明け近く、淀の長流もほのぼの所在を描き初めていた。

突然。

天王山の一面に烈しい銃声が迸し出した。陽はまだ昇らず、雲は暗く霧は深い。天正十年六月十三日。山崎街道にもまだ一馬のいな

なきすら聞えない時刻であった。

火ぶた

両軍が山崎に会して、この晨を、生の日か死の日かと期して相対峙したとき、秀吉から光秀へ「戦書」を送ったとも伝えられているが、果たして、そういう余裕があったかどうか。

また、そうした古法の陣押しによって、接戦の口火が切られたかどうか。

事実は。

光秀もまた御坊塚に着陣して間もない頃。また秀吉も、まだ後方の富田に在って、大坂から神戸信孝の来会あるを待っていた——十三日未明——まだ暗いうちに、期せずして、秀吉方の山之手隊と、明智軍の奇襲部隊とは、暁闇のうちに、もう激烈なこの日の序戦に入ったのである。

——今しがた。

天王山方面に聞えた烈しい銃声がそれである。夜来、折々湿っぽい小銃音の小ぜり合いはしていたが、このときのものは、

「すわ！」

と、耳あるほどな者はみな毛穴をよだてて、やがての戦況如何にと、彼方なる雲か山かの一山影を凝視していた。

北軍光秀の陣営御坊塚から見るときは、天王山はここから約二十余町の西南にあって、その左の麓に、一すじの山崎街道と、一条の大河とを擁している。河はもちろん淀である。

山頂はかなり高く嶮しく、最高二千七百尺はある。別名をこもりの松山ともいい、宝寺の山ともいう。峨々たる岩山で、全山、松の木が多い。

——きのう秀吉の本軍が富田大塚附近まで進出すると、麾下の諸将はみなまッ先に、この山に目をそそいでいた。

「あれは何山というか」

「あの東麓が山崎の駅か」

「敵の勝龍寺は、あの山の、どの辺の方角にあたるか」

など口々に土地の案内者に問いただしていた。

地理に詳しい者を陣中に伴うことは、どの隊でも必携の具としていた。それに問うて、天王山の軍事的価値に目をつけたこともまた、多少戦略眼のある人々のあいだではみな一致していた。

「あすの合戦はあの山を先に占めて、高地から敵を俯瞰して打つの有利に立った方がまず勝ちであろう」

また必然、諸将の胸には、

「——先駆けて遮二無二、天王山にお味方の旗を立てた者こそ平野の一番首よりも、戦功第一の誉れたらん」

と、ひそかに期するものがあったので、十三日の前夜、それを秀吉に献言し、或いは、みずからそこに赴かんと願い出た諸将が、幾人もあったらしい。

「いずれは明日一日できまる戦いと観る。淀、山崎、天王山を中心に、死ぬも生きるも、およそ数里の外には出まい。われと思わんものは行け。ただし、味方争いするな。わたくしの功を競うな。ただ念ぜよ。故右大臣信長公の在天の霊と、弓矢八幡の照覧を」

が、秀吉のゆるしを得るや、勇躍して、真夜中のうちに、ここを立って天王山へ長駆したもの、鉄砲大将の中村孫兵次、堀秀政、堀

尾茂助など、黒白もわかぬ一勢であった。

南軍秀吉の麾下がみな目をつけた重要な地点を、北軍の光秀が、迂闊に見のがしているわけは絶対にない。

光秀が、長駆、桂川を渡って、にわかに御坊塚まで出る決断をとったのも。

――同時に天王山を占めて。

と、作戦態勢をすでに描いていたればこその行動だった。

この辺の地理に明るいことにおいては、敵の先鋒の中川清秀や高山右近にもゆずらない光秀でもある。かつは、同じ山河の地勢を観るにしても、光秀の観るところおのずから彼ら以上のものを観ていよう。

で、光秀は、桂川を越えて、久我畷を行軍中に、もうその途中から一軍を割いて、

「下海印寺村を北に見、天王山の北側より攀じ登って、山上を取れ。敵襲せ来るも、構えて、要地を譲るな」

と、激励して、そこへ送っていたのであった。

命をうけた者は、勝龍寺城にいた松田太郎左衛門で、並河掃部の配下であり、この辺の地理に精通しているところから特に選ばれたものである。

松田太郎左衛門は、弓鉄砲組をあわせ、約七百余の兵をひきつれて急いだ。

ずいぶん迅速といわねばならない。光秀の司令も行動も、決して戦機を外してはいなかったのである。

にも関わらず、この時すでに、南麓の広瀬方面を突破して来た秀吉の諸勢は、先を争って、山へ取ツついていた。

しかし、なお真ッ暗な時分であるし、土地に不案内の将士が多い。

「登り道がある」

「そこは登れまい」

「いや、登れる」

「間違った。このさき、崖だ」

などと麓を巡って、各攀路を捜り合うにあせっていた。

ここまではほとんど後先なく、一斉にかたまって来た堀秀政の隊、中村孫兵次の隊、堀尾茂助の隊なども、忽ち分散して、あなたこなたに、石ころを落し、灌木を掻き分け、騒然と、麓一帯に物音を起しているに過ぎなかった。

さきに――前日の昼――先鋒部隊を命じられて、山崎まで出ていた高山右近と中川瀬兵衛の陣も、ここから近いのである。

わけて瀬兵衛は、高山右近に先んじられて、山崎の町から関門の閉め出しを喰って、この山之手方面へ陣していたので、忽ち味方の奇兵的行動に感づいた。

「そこの要地たることは、此方とて気づかぬではないが、筑前どのの命令もまたず、みだりに逸まった行動を起してはと、ふかくみずから慎んでいたのだ。――さるを、後方にひかえていた諸隊が、われらにも無断で、先駆けするとは怪しからぬ。その分なれば、瀬兵衛とて、彼らごときにおくれるものではない」

憤然と、旗本数名、銃士わずかを連れたのみで、山麓から数町上の宝寺へ駈けあがって行った。

この道こそ、唯一の登り口で、あとは容易に頂へ行けない樵夫道にすぎない。瀬兵衛は、それを知っていただけに早かった。しかし宝寺の門前まで近づいてみると、もう先に来て、そこの山門の扉を、

大声あげながら叩いている一群の武者があった。

「誰だッ。味方か」

瀬兵衛が、声をかけると、山門の下の人影は、振り向きもせず、

「問うもおろか」

と、答えた。

これは堀尾茂助の声だった。

茂助吉晴は、いまでこそ、錚々たる羽柴麾下の一将だが、その青年期までは、岐阜の稲葉山つづきの山岳中に育った自然児である。彼の眼をもって見るときは、この天王山の如きは、ほんの一小丘としか思われないにちがいない。

「寺僧、起きろッ。山門を開けぬと踏みやぶるぞ」

堀尾の部下は、そこを叩きつづけている。戦いを予感して、寺内ふかく潜んでいた僧は、やがて紙燭を持って出て来た。そして山門をあけるや否、どこかへ隠れてしまった。

「つかまえろ、一名、道案内に――」

瀬兵衛たちが、それを求めているうちに、堀尾茂助の主従は、十数名しか見えなかったが、わき目もふらず境内を駈けて、裏山の道へのぼっていた。

瀬兵衛は、それを見送って、舌打ちしながら、捕えた僧を追い立てて、

「山上まで、案内せい。早く早く」

と、槍で脅していた。

とこうするうちに、山崎の町に陣していた高山右近の部下までこれへなだれて来た。――実にこの未明に行われた天王山先陣の士気の烈しさには、味方と味方のあいだにおいてすら相ゆるさぬものを互いに示していた。

味方と味方の負けじ魂は、時にきわどい摩擦を起こすし、全戦局を過るような危険もなしとはしないが、さりとて、この気魄もないような気魄では、敵と相見えても、直ちに、霊魂そのものとなって、身を投げこむことはできない。

功を競うべからずであるが、男は各　磨き合え、恥はたがいに恥と知れ、というのが秀吉のこころであったろう。

とまれ、この暁闇中天王山一番駈けは、いったい誰が早かったのか、どこの部隊が先駆だったのか、ほとんど我武者羅のあらそいで、後の軍功によるも、記録によるも、皆目、見当がつかない。

堀、堀尾、中川、高山、中村各家それぞれ自家の先登をその家の記録には主張しているし、「堀家家譜」「川角太閤記」「池田家譜集成」「武功雑記」「明智軍記」などの諸書の記載も、また、みなまちまちになっている。

しかし、想像に難くないのは、いずれにしても、逸早く山上近くに達した人数は、各隊のうちの極めて少数だけで、それも一将の下の一隊と限らず、諸将の部下が交じり合って、偶然、早足者だけの混成部隊となっていたろうと思われることである。

道は嶮しいし、夜はまだ明けないし、味方には違いないが、誰の手勢やら組やら分らない中に伍して、ここの将士はただえいえいと山上へ急いだのだった。そして、はや頂上も近いかと思われた頃、いきなり方角も知れないところからつるべ撃ちに弾をうけた。

撃ち出したのはもちろん明智方の松田太郎左衛門の銃隊である。

しかし、松田勢が先に火ぶたを切ったからといって、天王山の山上を先に踏んだのは明智方であったかといえば、そうはいえないも

のがある。

なぜならば、それよりずっと前に、羽柴方の侍、山川七右衛門、山川小七、岸九兵衛の三名が、こっそりそこへ登っていた。そしてまだ人気なき山上や麓の闇を見下ろしながら、

「この要地を真ッ先に乗っ取った者は恐らくわれらが一番であろう。この三名を措いてはあるまい」

と、遅れている味方や、まだ気配もない敵の静かさを嗤っていた。

すると、どこやらで、

「やかましい。黙ってその辺に身を伏せておれ」

と、叱った者がある。

驚いて、あたりを見廻すと、何ぞ図らん、自分たちより先に、この山上に来て、岩陰にうずくまり、居眠りをしていた男があった。

「誰か」

と、訊くと、

「高山右近の手の者、中川淵之助重定」

と、答え、

「貴公たちが、ががやいうので、折角、敵が来るまで一睡りと思っていたのに、眼をさまされてしもうたではないか。ただ高い所へ登っただけでは、てがらでも何でもない。お互いにてがらを談じ合うていいのは、明智を全滅してからのことだろう。まだ勝敗もわからぬうちに、はしゃぐのはちと早過ぎはせんかの」

ひどく愛想の悪い男である。こうぶつぶついうと、彼はまた自分の膝を抱えて居眠りを始めている。

しばらく経つとここへまた、中川家の臣、阿部仁右衛門も登って来た。二人の鉄砲足軽も一しょだった。――で、山上にはこの頃までに七名の羽柴方がいたわけだった。

そのうちに麓の宝寺やその他の方角から、味方の大勢の声がかすかに聞えて来たし、同時に――ほとんど同じゅうして――北側の下海印寺方面からも、すさまじい勢いで、明智方の松田隊七百が、これも先は、先頭、後は後、隊伍の順もなく、先登を争って、あらしの如く駈け登って来た。

「まだ撃つな」

例の仏頂面した中川淵之助は、あだかも自分が、この手の指揮者でもあるように、逸りかける他の六名を戒めて云った。

「――ずんと敵をそばまで引きつけてから一度に撃て。この下の道の曲り角に、白いものが見えるだろうが。あれは俺が松の枝に括しつけておいた白鉢巻の小布だ。銃の標的をあの下に狙いさだめておけ。そして敵の影がそこを曲って来たら、途端に浴びせかけるのだ」

小面の憎い味方だが、云い分は良策だし、頼もしいところもあるので、みなその言に従って、敵の来るのを、待ち構えていた。

ところが、松田太郎左衛門の先鋒隊は、まだ山上に間のある八分所からはや後方の山腹に羽柴勢の影を認めたので、忽ち機先を取る戦法に出て、一斉に銃火を浴せかけたのであった。

当然、羽柴方も応射した。

しかし、これはまだ距離も距離だし、暗くもあり、敵味方とも極めて目標の不的確な気勢射撃に過ぎなかったので、どっちに取っても、大した効はない。

むしろ、七名の小人数ではあったが、この途端に、山上から数百歩駈け下りて来て、明智兵の影を認めるや否、銃先下がりに撃って来たわずかな弾丸のほうが、はるかに奇効を奏した。

最初の七発の弾のうち、三弾は確かに敵を仆した。のみならず多寡はともかく頭上に羽柴勢の現われたことは、明智勢をして少なからずあわてさせた。敵の顔まで見える距離で敵を見たのは、この大決戦において、この一瞬が初めてであったのだから、全隊が一時ぎくと衝撃をうけたことには相違ない。

敵の形相も、阿修羅の姿も、戦いが酣となって、自分もそれとなったときは、何でもないものであるが、もっとも不気味なのは、初めに接近したときである。

その刹那には、敵と名のついた者は、人にもあらぬ悪鬼か羅刹の如き感じがするものだった。しかしこれは、敵方が視る心理も同様なのであるから、その殺気に眩いをせず、日頃の丹田で、沈着に押し迫った方が、序の勝口を取ることはいうまでもない。

松田隊の先頭には、主将の太郎左衛門はいなかった。太郎左衛門の部下の将、辻義助が指揮に立って来たものである。義助は、よく肚もすわっていた侍とみえ、すぐ奇襲の敵が六、七人に過ぎないことを看破して、

「騒ぐな。小勢だ」

と、不利な低地を取っているため怯みがちな味方を励まし、

「銃口をみなあの上の岩角にあつめろ。一斉に撃て」

と、呶鳴った。

少なくも、七、八十挺はあろうかと思われる鉄砲の影がうごいた。それが皆、ひとつ焦点へ銃口を向けたのである。上の岩頭に立っていた七名は、当然、蜂の巣となるべき的に位置していた。

――と。中川淵之助は、他の岸九兵衛、阿部仁右衛門、山川兄弟などに対って、

「間に合わん。俺は突ッこむぜ」

云い捨てると、鉄砲を捨てて高きから低き敵へ、猛然駈け向って行った。

一弾放つと、一弾こめて、火縄を点じ関金を引くまで、かなりの時を要するのが、この時代の火器のどうしてもまぬかれ難い弱点だった。

殊に、明智方の銃士は、桂川を渉るとき、驟雨のために、だいぶ装備を濡らしている。中には幾筋もの切火縄がみな役に立たず、後に退っている者もいた。

その虚を衝いたのである。淵之助に倣って、阿部仁右衛門も岸九兵衛も、劣らじと、捨身に出た。パパパッと慌てた弾煙が立った。こう撃つ弾は中っていないこと確かである。淵之助の陣刀は、もうそこらの敵を薙ぎ分けていた。山川七右衛門の弟小七は、素手で取っ組んでいた。槍を向けて来た敵がいたので、その槍欲しやと奪いにかかったためである。

松松松

後に思いあわせると、松田隊の七百余人の部隊は、このときもう二分されていた。

南軍のほうでは、堀尾、中川、高山、池田の各手の将士が、先を争って天王山の先登を競っていたが、堀秀政だけは、

「横道をとって、北側の麓へむかえ」

と、急に山の腰を迂回して、行動を別にしていたのであった。その目的は、すでに山へかかっていると観た敵勢の退路を断つに

あった。

果然、その横襲は、松田隊を中断して、主将の松田太郎左衛門を、目前に見ることができた。

ここの激突は、山上よりも烈しかった。松樹や乱岩の多い山坂の混戦なので、鉄砲などはまどろいとなして、槍、太刀、長柄で喚きあう者が多かった。

組んで、岩頭から落ちる者がある。惜しくも組みしきながら後から一と突きに刺されるのもある。

もちろん、弓組もいるので、弓鳴りや銃声は間断もない。しかしそれ以上なのは、敵味方約五、六百の喊声だった。その声は、たれひとりとして、喉から出しているようなのはない。満身の頭髪と毛穴から発しているとしか聞えない。

押しつ押されつだ。いつか陽はさし昇っている。めずらしく青空と白い雲が見える。こう照り出すと、いつもなら満山に聞える蝉の声もきょうは唖となったかのようである。

そして山をも揺がす武者の叫喊が、それに代っていた。累々、あなたやこなたに、はや数えきれぬ朱の屍が点綴された。或いはひとつに或いは重なり合っている姿は悲痛を極める。しかしそれが味方を叱咤する力は非常なものだった。その屍をふむ戦友はみなすぐ死生の外へ駈けた。堀隊の兵もそうである。明智隊の兵もそうである。

山上の戦況はまだ不明だが、ここも一勝一敗をくり返していた。そのうちに、北軍の松田隊に揚っていた諸声がふと急変した。陽声から虚声になったのだ。わあッ――と、まるで嬰児が泣くときのような退く息を示したのである。

「ど、どうしたのだッ？」

「なぜ退くかッ。退くな」

味方のみだれを怪しむ者は、味方にむかって憤怒した。しかしそうした人々も、忽ち雪崩に巻かれて、麓のほうへ駈け出した。自分たちの主将、松田太郎左衛門が一弾に中って、部下の兵に担がれてゆくのをようやく眼に見たからである。

「追えッ。突きまくれッ」

堀隊の大半は、すでに追撃をかけている。――が、秀政は、声をかぎりに、

「追うなッ」

止めていた。制していた。

けれどその間髪の勢いは到底、制止も何もきくようなものではない。果たせるかな山上から、松田隊の先鋒がまるで濁流のように駈けて来た。後続隊が来ないところへ、主将討たると聞いて、当然降りて来たものだった。

数においては、堀隊は彼の比でない。一戦どころか、ひと支えもなし得ず、急坂を駈け降りて来た敵の部隊に、つき飛ばされ、踏みつぶされてしまった。さきに麓へ追って行った堀隊の一部もまた、秀政の案じたとおり挟撃をうけて、惨たる苦戦に立ってしまった。

そのとき堀尾、中川、高山、池田の混成山之手隊は、山上にむらがり立って、

「取ったッ」

「天王山は、わが軍のもの」

と、序戦第一の歓呼を張りあげていた。

けれどそれは一部の将士だけに過ぎない。あらかたの者は、そこ

を占拠するや否、なだれを打って麓へ退いた明智勢を急追していた。そして途中から堀秀政の手ひとつになった。

秀政もこの時は、多くの味方を得たので、ためらいなく、さきに駈けた部下の一部を救うためにも、急きに急いて、追撃戦へ移っていた。

逃げ散る敵は道を選んでいないので、追う者また道を見てはいなかった。

このすさまじい「駈落し」のうちに、宮脇又兵衛（後に長門守）は馬を用いていた。そして宝寺のうしろの断崖の上に来てしまったのである。馬は当然、硬直してうごかない。その間に、身軽な敵勢は、小道を駈け下り、或いは、藤蔓などにすがって、蜘蛛の子のように逃げ降りてゆく。

「武門に伍して、日頃は人並の言を吐いている又兵衛も、いざとなっては、わずか数丈の切岸に怯んで、馬を捨てたといわるるも口惜しい。――源九郎がひよどり越えの嶮しさは知らねど、ままよ彼も人、我も人」

又兵衛は両の手に手綱を結んで、ひたと馬の背に胸を伏せると、逆落しに絶壁を乗り落した。

人に見せんためではないが、せつなの勇姿を目撃した者も多かった。敵とも味方ともつかず、ただ一つの喊声が、わあッと、その蹄から立った砂煙へ驚嘆を送った。

砕けたか？　脚を折ったか？

と人々は、刹那のあとを、なお見まもったが、何のこともなく、馬は又兵衛を乗せたまま、追いついた敵勢のなかを狂奔していた。

この道筋ではなかったが、堀尾茂助も、馬で敵を駈け落していた一人であった。彼は、用い馴れた十文字の槍をふるい、目ぼしき敵を三名まで引っかけて突き伏せたが、そのたびに、徒歩の家来、堤五兵衛、松田又市、柿権八などを顧みて、

「いまの首を取れ」

と、いいつけ、自身はなお、寸間の時も惜しんで急追をつづけていた。

このほか、ここ一山を中心として、払暁から午まえの二刻ばかりにわたる合戦中に、武功を示した将士は列挙するに遑もないほどである。以ていかに、秀吉麾下の面々が、たがいに手に唾して、たとえば宇治川の先陣に臨むがごとき――嚮と、意気とを――心に期していたかがわかる。

この意気は、もとより彼ら箇々のものに違いないが、大きく観ると、秀吉の意気の投映であり、秀吉という主体を得て、初めて、太陽系を環る諸衛星のような勢いと燦きを持ったということもできる。

が、秀吉はこのときまだ前線に着いていなかった。神戸信孝の来着を淀川に迎えていたためである。信孝や丹羽長秀などの軍を加えて、彼がその本陣をここへ進めて来たのは、まだ陽ざかりの未の下刻（午後三時）頃であった。この炎天に、暁の雨も乾いて、人馬は汗と埃にまみれ、華やかな縅の色や陣羽織もみな白っぽくなっていた。ひとり燦々として烈日を射るが如きものは、金瓢の馬じるしだけであった。

秀吉はその馬印を、山崎八幡宮の社前に立てさせた。

天王山に銃声の siなしていたうちは、空家のようだった町も、明智勢が退却して、ここに新たな甲冑の潮が混み入ると、忽ち戸ごとに、水桶や瓜の山や、麦湯などが持ち出された。そしてその接待に、

羽柴兵がむらがってくるのを歓びとする町民たちの中には、女子供まで立ち交じっていた。

「敵はもう一兵もあれにいないか」

秀吉は馬も降りず、間近の山上に見える味方の旗じるしを凝視していた。

「おりませぬ」

答えたのは蜂須賀彦右衛門である。諸隊の戦況報告を綜合して判断を加え、概念を秀吉に伝えていた。

「出ばなに、指揮者を亡った敵の松田隊は、その一部は北の麓へ、残る一部は友岡附近にある友隊と合したようにござりまする」

「光秀ともあろうものが、なぜこの高地を左様にあっさりと抛棄したろうか」

「おそらく、彼とても、かほど迅速にとは思い得なかった結果でしょう。『時』の量り違いです」

「彼の主力は」

「勝龍寺をうしろとし、円明寺川を前にして、淀口から下植野にわたって、満々と陣しておるようです」

神官や小姓組が来て、木蔭の涼しい所へ、お床几を設け置きましたが——と休息をすすめたが、秀吉はなお馬を立てたまま見向きもしない。

堀尾茂助、堀秀政、中川淵之助、宮脇又兵衛など、やがて続々これへ帰って来た。そして各 、馬前に一閲を受け、かつ、秀吉自身の前線出馬を賀し合った。

「山麓まで行ってみよう。まだ死骸もそのままだろうが」

休むいとまを秀吉は血戦のあとへ馬を向けた。そして、聖天堂のわきから中腹近くまで登って行った。ここからは淀も、円明寺川の一線も、敵の布陣も、一眸のうちだった。

「秀政も茂助も、馬で駈け落したそうだの。中川や高山も、よい家来をもち、他家に恥なき戦功をあげたのはめでたい。とりわけ、宮脇又兵衛は、信長公の先発として、中国へ下るべきを、引っ返して、きょうの働きは、聞くも胸のすくような心地がする」

彼は、又兵衛を呼んで、手ずから長刀一と振りを与えた。

敵味方の累々たる死屍は、松の根がたや岩角に、そのまま、撩乱の朱を見せていた。

「お味方もお味方ですが、敵もなかなかよく戦います。明智方にも、恥を知るさむらいは多いようです」

堀秀政がいうと、秀吉は、さもあろうと頷いた。そしてそれらの死屍のあいだを歩いて、すぐ山を降って行きながら、こう連歌の上の句を口誦さんだ。

松松松どれも日本の姿かな

「たれぞ。下の句を附けてみんか」

——しかしそのとき、円明寺川の方面に、喊声と銃声が揚った。きっかり申の刻（午後四時）頃の陽脚であった。

相搏つ両軍

円明寺川は、山崎の駅の東方にあたる。一とすじの流れは川の姿をなして、淀川に注ぎこんでいるが、附近は葭や蘆におおわれた一帯の沼地である。そして常ならば行々子の声が喧ましく聞えるのだが、きょうは一鳥の声すらない。

――が、この附近にはすでに、その日の午前から、明智方の左翼と、羽柴方の右翼とが、一水を挟んで、じっと対峙していたのである。

折々、ザアと、葭の葉裏を白く翻して、沼地を渡る風の中には、わずかに旗竿の先が見えるぐらいで、軍馬らしいものは両岸共に見えなかったが――北岸には、斎藤利三、阿閉貞明、明智茂朝などの兵力は、先頭予備を合わせて、約五千はいるはずであり、また南岸には、高山右近、中川瀬兵衛の部下四千五百に、池田信輝の兵四千というものが、重厚に陣列をかさねて、いわゆる一触即発の幾時間かを、むなしく湿地の暑熱に蒸されて戦機を待っていたものだった。

これはもちろん秀吉の来着と、その命令一下を待っていたもので、はや味方の山之手隊が、天王山を占領したとも聞えていたので、この方面の将士は、なおさら武者ぶるいして、

「いったい、本軍は何をしているのだ」

と秀吉の着陣が遅いことを罵りたいばかり歯痒がっていたのである。

一面、御坊塚に本陣をおいていた明智光秀は、疾く天王山へさし向けた松田太郎左衛門の討死、またその部隊の全面的な敗退を聞いて、

「遅かったか」

と、自己の指揮が、時を誤っていたことを、まずみずから責めていた。

そこの一高地を、味方の勢力下に置いて戦うのと、敵の手に委して決戦に臨むのとでは、作戦上、重大な相違を来たすぐらいなことは、もとより彼も充分に知っていた。

けれど、これへ進出するまでの間に、光秀は、その機を掴む寸前において、三つの「未練」に惹かれていたのである。未練とはいわゆる決断を鈍らせる迷いにほかならない。

一は、筒井順慶との会約にひかれ、むなしく洞ケ嶺に一夜を焦躁して送ったこと。二は、下鳥羽に帰陣して後も、なお淀城の修築などを命じていたほど――秀吉の進撃に対して時間的な過誤を抱いていたことである。

また、その三としては、根本的な彼の肚の問題になる。つまり積極か消極か。攻勢をとるか、守勢を選ぶか。御坊塚へ進出する直前まで、彼の大方針は多分に、岐路を決していなかった。

これは、老臣斎藤利三などの意見も大いに彼を迷わしていたといえよう。利三は、使いをもって二度まで、光秀にこうすすめていたのである。

（ここの御一戦では、どうしてもお味方の不利と考えられます。如かず、秀吉の鋭鋒を躱して、ひとまず坂本まで御退陣の上、江州その他に散在しているお味方の勢を一つに結束し、不敗の陣容を確とかためた上、敵をお邀え遊ばすが、ここにおいては、唯一の良策ではございますまいか）――と。

斎藤利三の献言は、決して理由なきものではない。

一万六千と数えられる明智勢も、その質を見ると、内二割は、山城新附の兵である。これは子飼の士卒にくらべると、断然見劣りがする。あちこちで新たに糾合された未訓練の兵であるから、弱いことは知れきっている。

また部将のうちにも、諏訪飛騨守とか山本山入とか、その他、旧公方家の遺臣だの、丹波武士と称する土豪なども交じっている。

これらの者の闘志を、果たして、明智譜代の旗本たちと同様に視て、この戦列に恃んでいられるかどうかも甚だ疑わしいのである。

これに反して、敵秀吉の軍容は、圧倒的な優勢にあるといわなければならない。

数においても。

中国から引っ返した彼の直属軍一万に、池田信輝の四千人、高山、中川の両軍をあわせて四千五百人。ざっと一万八千五百人を擁している。

加うるに、大坂表から参加した神戸信孝、丹羽長秀、蜂屋頼隆の総勢約八千を容れたので、総計すると、

二万六千五百人。

が、その実数となった。明智方から比して、断然一万は多いのである。

のみならず、その麾下は、いわゆる精鋭であり、また故信長の譜代であり、かつ、絶好なる――

「故右大臣家の弔合戦」

なる大旆を持っているのだ。

これに対して、その出足早な潮さきにむかって行くのは、到底、明智方の不利である。

この際、明智方としては、京都という政略上重要な地をひとまず敵に委ねても、坂本まで退いて、そこにある三千の兵と、また味方のうちでも最も恃みがいある良将としている明智左馬介光春をも帷幕に加え、かたがた、四国の政治的変化や、信長の遺臣中にも必然起るであろう内訌と自壊作用などを待って、おもむろに陣容をかため、ここに玉砕を選ぶよりは、万全な戦いをなすべきではあるまいか。

これが斎藤利三の考えるところであったのである。

老将の見解にはおのずから肯綮に値するところが多い。光秀も内心は大いに心を惹かれないこともなかった。けれど彼は、

「ここで敗るる程ならば、坂本にたてこもるとも敗れ去らんは必定である。もし京都を敵に委すならば、光秀の名分は何によって立てようぞ」

と思った。たとえ幾多の不利はあるとも、一戦も交えず、京都を明け渡すことは、彼の心事として、断然、忍び得ないものがあった。

人にも語らず、檄の文にもそれは称えないことだったが、光秀の心事というのは、実にこうであった。

（たとえ主と名のつく信長を一朝に討つも、われも御民。信長も御民。弓矢の精神になど変りのあるべき。さるを、一戦もせず、御所の地たる京都を易々として敵に渡すからには、あれみよ光秀こそは、何を奉じて天下に立たんつもりぞ。不利と見れば、禁門の御所在も打ち忘れて、引き退く心根の卑しさを見よ。信長を討ったる心も、それをもってみれば、まったくの乱臣賊子の出来心に過ぎまい。そういわれても是非がない。よし屍はいかに辱めらるるも、その一点を疑わるるは百世までの心外である。――光秀は断じて、都をうしろに、この山崎で一戦を決しよう。なんの秀吉、何する者ぞ）

かくて、この戦いに面した光秀の心事は、すでにこれへ臨む前から、おのずから悲調を奏でていたものと観てよい。

――秀吉、何する者ぞ。

との気概は示しても、心の底には、必勝を期すまでの確信はなかった。

その悲壮な決意は、主なる将にはみなよく酌み取られていた。その点、彼にもまた、彼のためにはいつでも死のうとする腹心は多い。とりわけ斎藤利三のごときは、年も老齢ではあるし、忠諫すでに容るるところとならず、大勢の見透しにも老将だけに、

「きょうこそ、一期と覚えたり」

とは、誰より先に、ひとり決めていた覚悟であったろう。

――で、円明寺川口の銃声も、その斎藤隊から突如として揚ったものだった。

戦いの切っかけというものは微妙である。両軍とも小半日は葭藺のあいだに、ブヨや蚊に喰われながらも、じっと対峙したまま、上将の号令を神妙に待っていたが、そのうちに、羽柴方の陣から美しい鞍を置いた一頭の放れ駒が、水を呑もうとしてか、ふいに円明寺川の岸へ跳ね出して来たのである。

馬の持主は郎党であろう。それを追いかけて来た四、五名の兵が見えた。それへ向って、対岸の葭の中から、ぱッと弾煙が立ち、つづいて、パチパチパチとつるべ撃ちが注がれたのであった。

「あッ、殺られた。撃て、撃て」

川べりに伏した味方の兵を救うために、此方からも、北岸の弾煙へ向って弾が送られた。かくてもう命令を待つ遑はない。

「――全軍突撃」

という秀吉の命令は、実に、この銃声が揚ってから後に届いたものであり、明智方もまた、敵の動きに反動を起して、果然、川を渡って来たものだった。

淀へそそいでいる川口はかなり広いが、少し上流のほうは、さしたる川幅ではない。

ただし、水は数日来の驟雨で相当激している。鉄砲を持った明智の銃隊が北側の藪に姿をあらわして、南側の堤上に立つ羽柴勢を狙い撃ちするあいだに、はや彼方此方、しぶきを蹴って、押し渡ってゆく甲冑群は、明智の精鋭級と目されている槍隊の士たちであった。

「槍組ッ。出ろッ」

堤の上でも高山隊の一将が、躍り上がって、指揮していた。

川幅が狭いので、銃の効果は少なかった。前の一側が撃って、弾込めするため、後列の一側が入れ代る間に、はや此方の岸へすがりついた敵は、直ちに、銃隊のふところへ跳びこんで来る危険があった。

「銃隊は横へ開け。味方の前を塞ぐな」

槍の穂をそろえて突き出した中川隊の一群は、あらかたその槍をふりかぶって、堤の下や水面を撲りつけた。

もちろん目ざすものは敵兵だったが、槍を繰り引いて突き出すいとまよりは、振りかぶって撲りにかかったほうが、より迅速に、敵の出足を防ぎ得るからであった。

激突は、川の中で起った。

槍と槍。槍と太刀。――或いは長柄。

斬ッつ、斬られつ、である。

「面倒ッ」

と、吠えて組む者。

しぶきを揚げて戦列から水中に没し去る者。

濁流は渦巻いた。

いや、武者と武者の中に、わずかに流るる水があるといってよい。

川は戦う武者で埋められている。

血あぶらは、水面にぱっと泛いては、ぱっともとの水に回ってゆく。

そのうちに、南軍の第二陣、中川清秀の一隊は、下流の戦闘を、高山右近の手勢にまかせて、

「突ッこめ。突ッこめ」

「ただ、突ッこめ」

「横にも、後にも、顧みするな」

「突ッこめ突ッこめ」

「ただ突ッこめ」

御輿舁ぎの懸声をそろえて社を出るように、わっしわっしと、重厚な戦列を押し出していた。そしてはやくも、円明寺川の東岸の藪に迫り、遮二無二、敵の中へ駈け入った。

この辺は、明智の左翼第二隊、阿閉貞明の陣地である。北軍の破綻はまずこの一線から生じた。すでに味方の左翼が猛突撃を起しているにかかわらず、しきりと弾煙のみ立てて、火器の威力を恃み過ぎていたためである。

藪を踏みこえると、所々の湿地のほかに、畑や野道や団栗林などが見える。明智勢はそのいたる処に真ッ黒なうごきを呈しており、今や、味方の陣地内へ一歩突き進んで来た敵を見ると、怒濤のように、思い思いの相手を目がけて駈け蒐まった。

「ありゃありゃ」

と、異様な声を発して、明智方から挺身して来る巨漢がある。見るまに、彼の重そうな強槍は、中川隊の士を四、五名突ッかけて、左右に刎ねとばし、なお此方へ奮迅して来た。

具足はつけているが兜はいただいていない。鉢巻から逆立つ乱髪は一炬の炎のように赤ッぽく見え、その大きな双眸の光と共に、いかにも万夫不当のさむらいらしく見えた。

その漢に突き崩されて、中川隊の一角は、ふたたび川の側まで押し返された。――と見て、中川勢のうちから、

「おのれ、われ独り武者顔する憎い奴。ここに織部のあるを知らぬか」

と、呼びながら、颯爽、前を遮って、猪武者の槍のなかばを、槍をもって、ぴしッと搦み合わせて行った一将があった。

中川清秀の婿の古田織部重然であった。

この二者の戦闘は、余り烈しくて、人交ぜをゆるさなかった。彼に比して、織部の槍は、細目だったせいか、戛然、けら首のあたりからポキンと折れて、その穂先だけが、あたかも氷片のように遠くへ飛んだ。

「あなや。若殿危うし」

と、周囲に戦っていた中川家の家士たちは、思わず眼前の敵を捨てて、救けに向いかけたが、織部は咄嗟に、折れ槍をふりかぶって、敵の手許を強く一打ちし、同時にそれを捨ててむずと猪武者のふところへ組みついていた。

中川家の家士達は、途端に後へ迫って、織部の相手方を、滅茶苦茶に斬りつけ、また、突き抉った。

秀吉の第二軍中川勢の突出は、明智方の最左翼にある斎藤隊が克ち取った凸形を、忽ち危いものにした。

中川勢が急に右転して来れば、うしろを巻かれる惧れが生じるからである。

その斎藤隊の鋭鋒を、防ぎかねて見えた高山右近の部下も、

「二の手の中川勢はもう遥かに先を取っているぞ。中川勢におくれるな。彼らの下風に措かれて堪るか」

と励まし合って、押されては押し、押しては押し返され、ほとんど、川の中を両軍の死者で埋めるばかり吠え戦った。

「退けーッ。陸へ退がって、敵の奴輩を、寄せては叩け、寄せては突き伏せろ」

斎藤勢のあいだから振り絞るような号令が響いた。これは早くも味方の中川勢が敵のうしろへ迫った証拠と高山隊も見て、

「突け、突け、突けッ！」

「息つかすな」

と、対岸へ退く敵のしぶきをかぶって、追撃の槍を一斉にそろえた。

川口に近いこの辺には藪もない。湿地に続く湿地帯であった。それだけに、いちど退き足となると、防禦物もなく、事実上総崩れとならざるを得なかった。

馬が駈け渉る。旗じるしが突き進んで来る。高山右近の隊も、ほとんど、北岸へのぼり尽した。

この頃、西陽はようやく傾いていた。たそがれ迫る茜の雲は、悽愴な夕空の下に、喚き合う真ッ黒なかたまりとかたまりを照らしながら、寂寞と、ひとり夜空のたたずまいを整えるに他念がない。

ここでもまた、約半刻にわたる激烈な戦いが繰り返された。いちど崩れるかと見えながら、また取って返して、沼地や灌木地帯の足場の悪い所に立ちながらも、なおよく防ぎ戦う斎藤勢の粘りづよさには、驚くべきものがあった。

ここばかりではない。

阿閉貞明の隊といい、明智茂朝の隊といい、総じて明智勢のうえには、一種不気味なる死に物狂いがあった。何とはなく光秀の胸中に予期されていた悲痛の奏でこそ、この死に物狂いが揚げる破軍の声だったのである。

「ここは、孤立する惧れがある。味方の山之手隊は、潰滅されたという。並河掃部どのも討たれた。諏訪飛騨守も討死した。――つつまれぬうちにはや引き退こう。退けや、退けや」

悲歌は、しきりに立ち、悲報は風の如く、明智方の一軍二軍、さらに中央の第三軍をもつつんだ。

予備隊としては中軍には、御坊塚を中心とする光秀直属の五千人を真ん中にして、右は藤田伝五、伊勢貞興らの二千人が陣し、津田信春、村上清国らの二千人があった。

そしてこの中央部には、蜂屋出羽守頼隆が当って来た。

藤田伝五は、押太鼓を打ち鳴らして、歩武堂々、戦列を展開した。さきに立てた弓隊が、一斉に弓鳴りを発して、物凄い矢風を送るや、蜂屋隊もそれに報いて鉄砲をあびせかけた。

「交われッ」

と、伝五の麾が、一令、風を截ると、弓隊は散開して、こちらも鉄砲隊が出て応戦した。漠々、立ちこめる硝煙の霽れるを待たず、次には、間髪をいれず、鉄槍鉄甲の武者が敵へ向って、その下を掻いくぐっていた。

藤田伝五と、部下の精鋭は、蜂屋隊を撃退した。

蜂屋隊に代って、神戸信孝の麾下、峰信濃守、平田壱岐守が、新手を出して、明智勢に当った。

伝五行政は、それをも撃砕して、追い退けた。

一時は、当る敵もないような勢いに見えた。

蓼々と、無敵をほこる藤田隊の押太鼓は、信孝の身辺をむらがり守る騎馬の士たちの足なみをも、しどろに乱して脅かした。

ときに、国分佐渡守やほか二、三の部将が、およそ四、五百の兵をひきいて、藤田隊の横から、急に、攻め鉦を鳴らし、喊の声をあげ、さも大軍のように、喚き襲せた。

雲はほの紅いが、地上はもう夕闇だった。藤田伝五は、自身、やや深入りを自省していたところでもあったので、

「右転！」

と、麾を振り、

「曲がれ、曲がれ、どこまでも右へ」

と、急に指揮をかえた。

全軍、円を描きながら、徐々にもとの中軍と合して、手固く戦うつもりだった。

ところが、急に左方から、秀吉の麾下、堀秀政の一手が、猛襲して来た。これは伝五にとっては、地から湧いた兵みたいに見え、

「退く策はない」

伝五は、咄嗟に思い返したが、もう陣容を立て直すいとまもなかった。堀隊は疾風のように、敵を中断し、一方の勢を包囲にかかった。

伝五の前には、金色の杵の馬印が、近々と揺れて来るのが見えた。

「さては、神戸三七信孝、自身進まれたな」

と見たので、いまは猶予なく、子息の伝兵衛秀行、舎弟の藤三行久、伊勢与三郎などと共に、一団四百七十騎、

「この首渡すか。あの首を申しうけるか」

と、真ッ黒にかたまって、敢然、数もわからぬ敵の中へ駈け入った。

腥風野を蔽うとはこの一瞬のことであった。宵はすでに暗く、死闘のおめきは、一声一声、血のにおいをふくんで天を翔ける風となった。

羽柴軍の全陣のうちでも、神戸隊は最も兵力の多い点で重厚だったのである。それに丹羽長秀の三千人もそれを救けている。いかに、藤田伝五やその骨肉どもがみな豪勇であっても、到底、刀槍をもって掻き分けられるような薄手な線ではない。

伝五は、全身六カ所の傷をうけた。

そしてついには、戦い戦い駈けまわる馬の上で、われ知らず昏々と神気を失いかけていた。

すると、うしろの闇で、

「ち、父上ッ」

と、子の絶叫が聞えた。

息子の伝兵衛秀行の声よと思うと、彼はハッと馬のたてがみから面を上げた。途端である。何やら右眼のうえに打つかったのは。——彼は空の星が額に落ちたように感じた。

「あッ。——鞍へ、鞍へ。固くおすがりになっておいでなさい。矢はそれています。額のお傷は浅手です」

「だれだ。わしを支えたのは」

「藤三です」

「舎弟か——伊勢与三郎はいかが致した」

「はや、討死を遂げられました」
「誰訪は」
「誰訪どのも」
「伝兵衛は」
「――また、敵に囲まれましょう。お供いたしまする。鞍の前輪に、身をお伏せなされませ」
伝兵衛の生死には触れず、藤三は兄を乗せた馬の口輪を把って、乱軍のなかを一散に落ちて行った。

金瓢押し

相搏つ味方の咆哮は、申の刻（午後四時）から酉の下刻（七時頃）までつづいた。
久我畷から円明寺川に沿う北野一帯は、この咆哮のうちに、とッぷり暮れた。
「――思いのほか手強い」
と、秀吉をして、つぶやかせた程、明智勢の抗戦も熾烈を極めた。
が、何としても、この総決戦を展く午まえのうちに、明智方が、天王山の一高地を敵手に委ね、その山之手支隊の大半を失い、かつまた、松田太郎左衛門、並河掃部などのこの手の大将を早く亡っていたことは、決定的な敗因をすでにそのときに約したものというほかない。
機を見るに敏な秀吉は、この薄い線を衝いて進出した。まだ赤い斜陽が円明寺川を染めているうちに、自身の率いる予備隊一万をのこらず押し進めて、上流から敵を圧縮したのである。果ては、ほとんど敵の中に自己の中軍を置いたとも云い得るほど、大胆なる積極性をその馬印に掲げて、前進また前進、一歩たりと、退くことをしなかった。
とはいえ、こことても、決して易々として、進み得たわけではない。
御牧三左衛門、奥田宮内、明智十郎左衛門、進士作左衛門、妻木忠左衛門、溝尾庄兵衛など、明智家譜代の名だたる勇将は、ことごとくこれへ殺到したといってよい。
「筑前、あれにありとみえたり」
「ござんなれ、猿面」
「われこそ、一と槍」
と、およそ名のある程の者は、みな彼の夜目にも燦たる金瓢の馬印を目がけぬはなかったのである。
秀吉の姿は、秀吉を狙う敵方の将たちを、著しく勇気づけ、死をも忘れさせたことは確かだった。
故に、彼の予備軍は、一万という大軍とはいえ、尺地を刻むジリ押しにしか進み得なかった。
もっとも、この時もうその予備軍中から、加藤光泰や堀秀政に、各　二千ずつをさずけて、中川、高山などの他の手薄な方へ救けに廻していたので、実数は五、六千しかなかったにちがいない。
で、ここの戦況も、一時は勝敗いずれともいえなかったというほうが正しいであろう。――光秀にとってもまさにここは本陣そのまま前衛であり、秀吉も自身剣光戟風のあいだに馬を進めているので、いわば主力と主力の真の決戦は、ここにおいて定まるものと観るべきである。

思い出されるのは、秀吉が、さきに僧形の施薬院をして、下鳥羽にある光秀の陣を訪わせ、

（毎度、合戦はしておるが、まだ大将と大将との、直の太刀打ちはしたことがない。このたびは主の讐たる敵の討伐に向うのであるから、三日のうちに攻めのぼって、光秀と直の太刀打ちをいたすであろう。そう伝言しておいてくれ）

と、施薬院の口から光秀へ通じておいたことばである。きょうの秀吉の進撃ぶりを見れば、その予告は決して一場の戯れでも恫喝でもなかったことが今思い当る。彼は本気に光秀と直の太刀打ちをせんと望んでいる血相だった。しかし馬前馬側の旗本たちとしては、甘んじて彼にその先駆を誇らせてはおかないことはいうまでもない。

川角太閤記が誌すところの記述――

秀吉ガ御馬ノ先手衆、鑓合セ申スト等シク、日向守ガ備ヘヲバ突キ崩サレ、一町バカリ引退ク処ヘ、又々、敵ノ先手詰カケ候ヘバ、秀吉、味方若シヤ押掛ラレ可クヤト思シ召ケム、味方ノ鑓ノ石突モ働カザル程、御馬印ノ瓢ヲ御詰カケナサレ、ソレヨリ又敵ヲ突キ立テラル

とある辺りの情景は、まさにそのときの情景を描いて躍如たるものがある。

由来、秀吉といえば、智策に富み、攻城野戦にも、多くは敢えて戦わず、これを謀収する計に出で、また自身勇戦をなすは甚だ得意でもない人であると見られているが、必ずしも、彼が勇将でないという確証はどこにもない。

彼はただ、能うかぎり兵を損ぜず、無血の戦果と最大の戦果を希っているに過ぎないのだ。青年将校時代すでに、箕作城の激戦には、味方に先がけて身に数ヵ所の手傷を負うほどな勇気を衆に示している。彼に、摩利支天の一面がないとは決していわれまい。

わけて、山崎の一戦には、

（大将と大将との太刀打ちにて勝敗を決せん）

と、光秀へ云い送り、また、その場に臨んでは、

――味方ノ鑓ノ石突モ働カザル程、御馬印ノ瓢ヲ御詰カケナサレ

とあるを見ても、いかにこのときの彼の形相が、見敵必殺の意気に燃えていたかがわかる。

きょうこの時の彼の戦法は、あだかも永禄の頃、越後の上杉謙信が、敵信玄の陣域深くへ基地を取って、一鞭、妻女山から川中島の敵幕中へ突入した――あの捨身不退の構えにも似ている。

何で、この前に立ちふさがり得る敵があろうか。

明智方にも、勇者は多かったが、奥田市之介、溝尾五左衛門、桜井新五、逸見木工允、堀口三之丞、磯野弾正、鳥山主殿助など、枕をならべて、討死を遂げてしまった。

星が暗く、道は湿地。

血か、沼か、びしょびしょしたものを、踏みこえ踏みこえ秀吉の中軍は、間断なきジリ押しを進めてゆく。

そのうちに、一窪地から、頻りにパチパチ撃つ者がある。

前列の四、五名が、次々、撃ち仆された。弾継ぎの早さから見て、一小隊も伏せてあるのかと思うと、撃手は、一名らしい。ただ左右に家来を三、四人置いて、撃っては弾をこめさせ、一弾撃ってはまた、ほかの鉄砲をとって狙っているらしく思われる。

「退かざる敵はない中に、さりとて健気な敵。虎之助、参ってみよ」

秀吉がうしろへいうと、あッと、主人の声を潜って、もう駈け出

している若武者が見える。当年、二十二歳となる小姓組の加藤虎之助であった。

ダン、ダン！　二つばかりの弾音に出会ったが、虎之助の迫る脚のほうが、その弾煙の消えるよりも迅かった。

窪地の敵は、もう間に合わないと見ると、銃を抛って、

「汝、何を望んで来たか」

と、猛然、突っ立って、眼をいからした。

虎之助は、初陣ではない。

中国在陣中、冠山の城、そのほかでも、一かどの戦功はあげている。

手馴れの槍を横に進めて、

「戦場での望みは、名のある敵の首。名もない汝なれば、取るに足りぬ。――俺の槍にかかってよいほどの首か、さまでの値打もない首か。もう一度、吠えて見よ」

と、云い返した。

敵は猛者だった。

からからと打ち笑って、

「日向守様の御内、伊勢与三郎貞興の侍頭、進藤半助とはそれがしのことよ。主人貞興は、はやお討たれなされた。この半助も、生きて何かせん。――この上はただ一弾をあの馬印の下にある秀吉に報わんと身を伏せていたものだ。汝、まだ年ばえも未熟な小冠者、半助が討ち取る相手には足らん。――退けッ。邪魔するな」

「烏滸なお人よ。これでも相手とするに足らぬかッ」

虎之助は、いきなり槍の穂先を高目に、びゅッと、敵の真眉間をかすめた。

およそ槍は穂先下がりとなりやすいものである。顔を狙えば喉のあたりに、喉をねらえば胴のあたりに来るのが普通である。半助も、その的確には驚いたとみえ、

「かつッ」

と、首を交わしざま、陣刀で払った。

払わせた槍を、咄嗟、そのまま、虎之助は抛り捨てた。――ひどい乱暴である。兜の鉄鉢を砲弾のように向けて、彼の横っ腹へぶつけて行った。

「あッ」

半助はよろめく。

虎之助は組みついている。

もう勝った形だ。

――が、両方とも無手。そうして双方とも、鎧通しの柄に手をかける違がない。

「小癪な若者め」

半助の足軽三人が、わらッと、虎之助のうしろへ廻った。鉄砲の逆手、また、ふりかぶった刀、一度にその背へ落ちんとした。

どたッと、その三人が地ひびき立てて仆れた。虎之助危うしと見て、味方の前列から飛んで来た武者たちが、一人一人、敵の足軽を討ったのである。

軍鶏と軍鶏のように、羽がいを組み合わせたまま、地上に諸倒れとなっていた虎之助は、自分の具足の緒をつかんでいる死力の拳を※ぎ放すと、ぶるぶるッと、血ぶるいしながら、何物をか引っ抱えて、秀吉の馬前へ、一目散に駈けもどって来た。そして、

「仰せつけの物、持って参りました」

と、進藤半助の首のもとどりを掴んで、星明りに翳して見せた。

「祐筆、筆を」

と、馬上のまま求めて、秀吉もまた、星の光に、白紙へこう書いて、虎之助へ投げ与えた。

武勇心掛手柄者の若者とは汝たるべし。いよいよ武功を尽すべし

六月十三日　　秀吉判

加藤虎之助どの

真情率直だ。何の文辞も、誇張もない。――が、この一片の紙は、黄金の兜、名物の茶入れにも優ること数等の勲章となろう。これを約された若い一武者は感涙にむせんで押しいただいた。市松、助作、佐吉、孫六などの他の小姓たちは、羨望の眼をみはって、ひそかに後の自己へ誓っていた。

御坊塚

暗い松風が陣営を搏つ。

陣幕は白い生き物のように、大きく膨れる。はたはたと翻ってはまたしきりにただならぬ悲歌を謡う。

「与次ッ、与次ッ」

「はいッ」

「いまあれへ来て、何事かを告げるや否、すぐまた、取って返した使者は、誰からの使いか」

「はッ」

「なぜいちいちこの光秀に告げぬ」

「まだ……事実や否やも、確と定まりませぬゆえ」

「何であろうと、伝令のつたえを、光秀の耳に入れぬ法やある。与次郎ッ」

「はいッ」

「しっかりせいッ。――味方の敗色にそちまでが度を失うたか」

「残念なことを仰せられます。堀与次郎は、死を期しておりまする」

「……そうか」

光秀はふと、自己の甲高さに気がついて声を落した。そして堀与次郎をたしなめたそのことばは、そのまま、自分に向けて聞くべきだと思い直した。

さるにても、御坊塚のこの本陣も昼の一頃にくらべると、何と、寥々たる松風の声ばかりではあると、彼は、憮然として見まわした。

ゆるい傾斜の下は、畑と野面へつづいている。東は久我畷、北は山岳、西は円明寺川まで一眸の戦場もいまは青い星のまたたきと、一色の闇のみであった。

申の刻から酉の下刻まで、わずかまだ一刻半（三時間）のあいだでしかない。野に満ちていた味方の旗幟は、いずれへ潰え去ったのか。

――誰も討死しました。誰も敵の中で相果てました。誰も誰もと、相次いで報じて来る味方の名を、彼は胸に留めきれないほどここで聞いた。

一刻半の間にである。

今も、堀与次郎が、その悲報の上にまた一つの悲報を受け取った

にちがいない。

けれど彼ももうそれを光秀の耳へ取次ぐ勇気を失っているのであろう。――光秀に叱られて、ふたたび丘の下へ立ちに行ったが、見ていると、力なげに松の幹へ鎧の背を凭せかけて、黙然、星を仰いでいる。

「――何者だッ」

その与次郎は、ふいに、杖としていた槍を持ち直して、彼方の闇に馬を止めた者へどなった。

「お味方だ。お味方だ……」

息を喘ぎながら此方へ登って来る影は、その足つきから見ても、明らかに傷を負っている。近づいた与次郎は、愕然と、自分の肩をその者へつき出した。

「刑部じゃないか。つかまれ。俺の肩に」

「お。……与次郎か。御主君は」

「上におられる」

「まだここにおられるのか。あぶない。もうここもいけない」

香川刑部。それは、藤田伝五の手に加わっていた明智の一部将であった。

刑部は、光秀の床几の前に、のめるが如く手をつかえた。

「斎藤どの。阿閉どの。津田どの。そのほか藤田伝五どのを始め、諸軍、総くずれと成り果てました。お味方の将、精鋭の士、屍を重ねて、討死を遂げ、いちいち指折って、名を思い出すことも出来ません」

「……」

この暗い松影の下なのに、光秀の顔ひとつが、白く泛いているように仰がれた。

返辞はない。

聞いていないかのようである。

刑部は苦しげに語をつづけた。

「いちどは、秀吉の中軍へまで迫りましたが、闇迫る頃から、退路を撃ち乱され、主将伝五どのの行方も知れずなりました。……また、御牧三左衛門どのの一軍も、敵の重囲に落ちて、苦戦を極め、辛うじて、御牧どの以下、およそ二百ばかり、一団となって、西久我の部落まで、落ちのびておられましたが――その御牧どのが、それがしを見て申さるるには――はやここもこれまで、御主君には、一刻もはやく、勝龍寺の城へ退いて、御籠城の用意あるか、さもなくば夜のうちに、江州へお落ちあるこそ良策と思われる。御辺は、御坊塚へいそいで、はや疾く、三左衛門のことばを主君へ伝え給え。それまでは、三左も死を逸まらず、ここにあって、殿軍を構え、主君がお立ち退きの合図を見て後、われら生き残りの二百余名、一手となって、秀吉の陣へ駈け込み、斬り死にして果て申さん所存――と、かように、申しおられました」

「……」

光秀はなお沈黙していた。

使命を終ると、刑部の影は、急に平たくなった。地に俯っ伏したまま、呼べど答えぬ者になっていた。

光秀は、じっと、床几から見まもっていたが、冷然と与次郎をかえりみて、

「刑部は、深傷を負っていたのか」

「はい」――与次郎は悲涙を眼に溜めていた。

「ことぎれたものとみえるな」
「左様に思われます」
「……与次郎」
と、まったくべつな声がらをもって光秀はふいに訊ねた。
「最前、そちの受け取った使番の報らせは何であったのか」
「今はつつまず申しまする。あれは、筒井順慶の軍勢が、にわかに、洞ヶ嶺を降って、淀方面からお味方の左翼を強襲しに出て来たため、さしもの斎藤利三どのを始め、お味方の諸隊も、踏みこたえる力も尽き、総くずれになったものと、その敗因を報らせて来たものにござります」
「何だ。そのようなことか」
「今さら、お耳に入れても、この挽回はつきませぬ。いたずらに、御不快と焦躁を加えるまでのことと、実は折を見て、お話し申すつもりでおりました」
「なんの、人の世じゃ。とりわけ順慶のごときは、人の中でも、最もありふれた人柄。あれのやりそうなことよ。たれが歯牙にかけようぞ」
光秀は笑った。強いて笑ったといえないこともない。そして彼の手は陣後をさし招いた。馬を曳け、馬をと、にわかに、焦心って呼ぶのであった。

深夜行

援軍また援軍と追いかけに兵を出したので、残り少なくなっていたが、ここにまだ老臣旗下以外、二千に近い兵力はある筈。
光秀はその手勢をひっさげて、敵中の御牧三左衛門兼顕の残軍に合し、最後の一戦を試みようとしたのである。
馬上に身を移すと、全御坊塚の営にとどろくような声で、自身、進撃の令を叫んだ。そして、全営の兵がむらがり寄るいとまも待たず馬首を振り向け、左右の土わずか数騎と共に丘を駈け下っていた。
「あッ。――立つは誰だ」
光秀は急に馬を止めた。ふいに一つの陣幕の内から転び出た人影が、傾斜を駈け下って、いきなり道に立ちはだかり、光秀の馬の前に、大手を拡げて立ったからである。
「帯刀。なぜ止める？」
光秀の声はするどかった。
老臣の比田帯刀なのである。帯刀の手はすぐ主人の馬の口輪をつかんでいた。ひとたび、悍気にまかせた馬は容易にその本能を制しきれないもののように、頻りに土を蹴って足掻いた。
「与次郎も、三十郎も、なぜお止めせぬか。降りろ、降りろ」
比田帯刀は、数騎の旗下をさきに叱って、慇懃、光秀へ頭を下げた。
「常のわが殿とも覚えませぬ。――勝敗は一場の変に過ぎませぬ。目前の一敗をもって、直ちに、おん身を捨てんと遊ばすような軽挙に出るは、日向守光秀様らしくもないことです。血迷えりと嗤われましょう。――なおなお、ここには敗れても、坂本には御一族もあり、各地にやがてを待つ諸将の散在すること、必ずしも、後図の策なきではありません。……まず、ここはひと度、勝龍寺の城まで、お立ち退きがしかるべくと思われまする」
「おろかよ、帯刀」

光秀は、悍馬のたてがみと共に、顔を振った。

「――常ならぬ今だ。常の光秀をもってわれと視るか。駈け崩された諸隊の兵も、光秀先陣に立てりと聞けば、ふたたび結集して鋭気を取り戻そう。――かたがた、御牧三左の一隊を、敵中に捨て殺しはできぬ。秀吉にも一泡ふかせん。筒井順慶の不信義も懲らしめてくれん。――光秀はただ漠然と死に場所を求めにゆくわけではない。光秀の光秀たるところを示そうとするのだ。――放せッ、要らざる妨げするな」

「ああ、さすが叡智の殿の御眼も、きょうに限って、なぜかそのように曇らせ給うておらるるか。――きょうわが全軍にうけた傷手は、討死の者、尠なくも三千人は降りませぬ。傷負いは数知れず、しかも重将ことごとく討たれ、新附の兵はみな離散し、この御本陣においてすら、今は幾何の兵が残っていると思し召すか」

「放せ。……何でもよいわ。放さんか」

「その御放言こそ、すでに死を急がれておる証です。帯刀はあくまでもお止め申しあげる。――ここになお、三、四千の屈強があるならともかく、御馬に続く者どもとては、おそらく、四、五百もありますまい。あとは皆、黄昏ごろから忍び忍びに陣地を脱して逃げ散っておりまする」

老臣の比田帯刀則家の忠諫は、声涙ともに下るものであった。

人間の智性などというものは、かくも脆弱なものか。ひとたびその叡智に齟齬を来すと、こうも愚に還るものだろうか。

帯刀は、光秀の狂躁を眺めて、

（こうもお違いになられたか）

と、痛涙して、以前の光秀の深慮聡明なすがたを偲ばずにいられなかった。

「――比田殿のおすすめは、われらも至極のおことばと存じまする。勝龍寺の城はすぐ間近、ひとまずそこにお入りあって、善後の策をお立て遊ばすも決して遅くはございますまい。いざ、御供仕りましょう」

進士作左衛門、明智茂朝、その他の将も、いつか馬前へ来ていた。二人は、いちど前線に立ったが、やはり光秀の身を案じて、これへ退がっていたものだった。

「こうしている間にも、敵勢に近々と詰め寄られたら、百事空しくここに終ろう。さ、一刻も早く、お轡を把って、勝龍寺へお移し申しあげい」

帯刀はもう主人の意志を問わなかった。貝を吹かせて急に北方へ後退を命じた。村越三十郎、堀与次郎などは、自身の馬を捨てて徒歩となった。そして主人の馬の轡をつかんで北の方へ無性に駈け出した。丘上の将士もまた追い慕った。しかし、比田帯刀のことばに違わず、その数はわずか五百ぐらいに過ぎなかった。

勝龍寺の城には、三宅藤兵衛が守将としていたが、ここも敗色の外ではあり得ない。一種暗澹な凄風が満城に漲っていた。

微かな燈を囲んで、一同はこの敗戦の収拾を凝議した。それを理性の正しい判断に求めるとき、光秀も、もう策なきことを覚った。

城外の哨兵は、頻りと敵軍の近づくのを告げている。この城もまた秀吉の破竹な軍勢を防ぐに足る堅塁ではない。元々、摂津の中川、池田、高山らにたいして、万一の変あらばと、擬勢を張っていたに過ぎないものだった。

淀の城ですら、つい昨日、その修築を命じていた有様だ。怒濤の

音を聞いてから築堤にかかったといえないこともない。事ごと逆にゆくと、光秀ほどの人物も、こう目先の晦くなるものかと思われるばかりである。

ただ、彼としても、おそらく遺憾なかろうことは、年来の宿将や家士たちに限っては、彼の恩顧を裏切るなく、まったく捨身奮迅の戦いをなし、涙ぐましき主従の義を示していたことだった。主筋の人を討った明智家のうちに、なおこの主従の道義の破れずにあったことは、一見、矛盾なようでもあるが、やはり光秀の徳といえるし、また、道義に生きるほか生き所も死に所もない、武門の鉄則を明示しているものでもある。

為に、わずか一刻半の合戦だったが、その日の両軍の死傷は、夥しい数にのぼっている。もちろんこれは後の調査によるものであったが——明智軍の死者三千余人、秀吉方の死者三千三百余名、負傷を加えれば算を知らぬ数であったという。以て、彼の意気にも劣らなかった明智勢の気魄も知るべく、しかも、敵の半数に近い寡兵と、不利な地に立っての戦いであったことを思えば、光秀の敗北は、決して世の嗤い草となるような敗北ではなかった。

小栗栖

淡墨のような雲の裡に、水無月十三日の月が滲んでいた。

離ればなれに先へ一、二騎、また少し後から数騎の武者が影をかさねて、点々十三騎ほど、淀川の北から伏見方面へ落ちて行った。

「ここは何処の辺りか」

やがて道の暗い山のふところに入ると、光秀は、比田帯刀則家を顧みてたずねた。

「大亀谷でございましょう」

帯刀の面にも、続く数騎の影にも、梢を漏る月の斑が、青い潮光のようにこぼれていた。

「では、桃山の北を越えて、小栗栖から勧修寺道へ出るつもりか」

「御意。——夜の白まぬうちに山科、大津近くまで辿りますれば、もうお案じはございませぬ」

——と。光秀の少し前をゆく進士作左衛門が、ふいに駒を止めて、

「叱ッ」

と、手を振った。

光秀も止まった。つづく駒もみな止まった。そして囁きもやめて、道のゆくてをずっと離れて、物見をしながら先へ先へと歩いていた明智茂朝と村越三十郎の二騎の影が眸に入った。その二騎は、谷川のほとりに駒を立てたまま、うしろの人々へ手を以って、

（待て）

と、合図をしながら、全身を耳にしていつまでも、佇んでいた。

（敵の伏勢ではなかったとみえる）

人々はやがてほっとした顔色にもどった。先頭の二人が振る合図に従って、ふたたび密々と駒を進めた。月も雲も真夜中の中天に寝まろんでいる相である。いかに忍びやかに進めても、馬は坂路にかかると石を蹴り、朽木を踏み折るので、小さい谿にも、寝鳥が立つ。そのたびに、

（敵か？）

と、光秀主従の影は、駒の脚を竦ませた。

大敗のあと、宵にいったん勝龍寺の城へ入って、終日のつかれを

休め、さて、
（どうするか？）
を議してみたが、結局、坂本へ落ちてゆくほか方策もなかったし、衆臣もみな光秀にその隠忍の道を選ばれたいと請うので、光秀もよういやくそれに方途をきめて、城の後事は守将の三宅藤兵衛にあずけ、自身は宵の頃すでに、そこを脱していたものであった。
――がなお、その勝龍寺を出るときまでは、彼に従う手勢は約四、五百人はあった。しかし、久我畷から淀をこえ、伏見の里に来るまでに、ほとんど、散々に脱軍して、残るは腹心の者ばかりわずか十三騎とまでなってしまった。
「多いは却って敵の目につく。死生を共にするまでの覚悟のない者はむしろ足手纏いだ。坂本にはなお光春様あり、三千の精鋭がある。ただただ、そこへ行き着くまでの御無事こそねがわしい。あわれ御主君のうえに、神助あらせ給え」
明智茂朝、村越三十郎、進士作左衛門、堀与次郎、比田帯刀などの腹心たちはそう慰め合っていた。
くわしくいえば、大亀谷は、山城の紀伊郡深草村の山中である。道はこれから宇治郡醍醐村の南小栗栖へ通じている。
谷といい、山といっても、この地方にはさして嶮峻な所はない。そして、この夜に限って、久し振りの水無月十三日の月輪を空に見たが、先頃から雨天がちに、木の下闇はじめじめ泥濘んでいるし、低い道には思わぬ流れが出来ていたりして、主従十三騎の落ちて行く道は、決して容易なものではなかった。
加うるに光秀も、その腹心たちも皆、綿の如く疲れきった心身を引きずっている。――山科はもう程近い。大津まで出ればもう大丈夫。――と励まし合って行くものの、各　の疲労感にうける感じでは、その間近な距離が、百里もあるような気がするのであった。
「オ。――部落へ出た」
「小栗栖であろう。ひそかにしたまえ」
「そうだ。静かに通ろう」
やがて面々は目顔で、戒め合っていた。草ぶかい山家の茅屋根がおちこちに見えて来たからである。そうした人里は努めて避けたいのであるが、道はおのずから家々の間へ入ってゆく。
――が、幸いなことには、何処をながめても、燈影一つ見えなかった。白い月の下、大竹藪に囲まれた山里の屋根は、世の騒乱も知らず、深々とみな眠り入っている気配だった。
厳密な眼を光らせて、はるか先の方を、物見しながら駈けていた明智茂朝、村越三十郎の二騎は、狭い村道の一とすじ道を、つつがなく通り越して、かの藪の曲がり道に佇み、あとから来る光秀たちのひと群れを待ちあわせていた。
その影と、二人の引ッさげている槍の白さが、半町ほど先の樹陰に、キラキラ見えたときである。バリバリツと、青竹でも踏み折るような響きと共に、ううむ――と野獣でも唸いたような声がどこやらでした。
「……や？」
光秀のすぐ前に立って、密やかに駒を歩ませていた比田帯刀は本能的にうしろを見た。
暗い竹叢に覆われた山家の柴垣に沿うている暗がりである。光秀の影は、十間ほど後に、釘付けになったように立ち竦んでいた。
「お館ッ……」

返辞もしない。

高い若竹の茂りが風もない空に揺れている。ばらばらと頬りにする地の音はそれから降る夜露だった。

「如何なさいました」

帯刀が引っ返そうとしたときである。いったん馬のたてがみに俯っ伏して脇腹を抑えているかのように見えた光秀は、胸の下となった手綱の手をうごかすと、急に面を上げて、トトトトトと、小刻みに駒の脚を早め出した。

ものもいわず、帯刀の前もサッと先へ駈け抜けてゆくのである。不審には思ったが、まだ何も気づかずに、帯刀はそこから後になってつづき、作左衛門や与次郎も、それに倣って駈けつづいた。

三町ほどは何事もなくそのまま駈けた。先に待っていた茂朝、三十郎の両名もひとつになり、光秀は一行十三人の六騎目にあって進んでいた。

すると、ふいに村越三十郎の馬が竿立ちになった。とたんに三十郎の抜いた白刃が鞍下がりに左の脇を払っていた。

かつん！

と鼓膜をつき徹すような音響は、その白刃と竹槍のあいだから発したものである。

穂先を斬り落された青竹の手先が、ガサッと、竹叢のうちに隠れたのが、実に迅くはあったが、明らかに他の人々の眼にも見えた。

「土匪か？　今のは」

「――らしいぞ。油断あるな。この大竹藪のうちに立ち廻っているとみえる」

「三十郎。何ともないか」

「なんの、野伏りどもの竹槍などに」

「構うな。いそげ、ただいそげ。構うてはうるさいぞ」

「……が、お館は？」

と見まわして、

「や。あれに」

と、人々は何か急に愕然と色を失った。

つい百歩ほど先に、光秀は落馬していたのである。しかもただならぬ唸きと苦悶に身を曲げて、ふたたび起ちも得ぬ容子であった。

「殿。お気を慥と遊ばして下さいッ」

「お館ッ。お館……」

「もう少し参れば山科です。お傷もさして深傷ではありませぬ」

「お心をたしかに」

すでに馬を降りて駈け寄っていた明智茂朝や比田帯刀などは、光秀を抱き起して、こう励ましながら、強ってでももう一度駒の背に掻い上げようと試みていた。

――光秀はすでにその意志もないようだった。ただわずかに顔を横に振っていた。

「あッ。如何あそばしましたか」

三十郎、与次郎、作左衛門など皆、われを忘れてそこに影を重ね合った。そして苦しむ光秀の唸きと人々の長嘆と、また嗚咽に似た声とが辺りに流れた。

空には、月一つ、そのときばかり殊さらに冴えていた。そして附近の大竹藪一帯の暗がりには、俄然、土民たちの露骨な跫音や喚きが、ざわざわ立騒いで来た。

「さきほど、物陰から竹槍をつけた土寇の徒が、なお尾け狙うてい

るとみえる。弱味を見せると、足下を見て、よけいに執念く寄って来るのは彼らの持前。――三十郎も与次郎も、ここよりは、辺りの土賊どもを――」

茂朝のことばに、人々は、急に前後へ立ち別れて、寄らば、と槍を持ち直すもあり、また陣刀をひきぬいて、

「こやつら」

と、大喝して、気配のする大竹藪の中へ、躍り入ったものもある。

ザザザザと、まるで猿の群れか、木の葉の雨のような音が、一瞬、小栗栖の夜半のしじまを破った。

「茂朝。……し、茂朝は」

「おりまする。こうして、確乎と、殿のおからだをお抱き申しあげておりまする」

「お。……茂朝」

光秀は、ふたたび唇をうごかした。そして自分を支えている彼の腕や肩を、探るように撫でまわすのであった。

夥しい脇腹の出血は、すぐ視力に影響して来たにちがいない。舌もあやしくもつれて来た。

「いま、茂朝が、傷口を巻いて、所持の薬をさし上げますから、しばらくお咏えを」

「……無用」

要らぬ――と首を振るのである。そして何か求めるように手をうごかした。

「……何でござりますか。……何ぞ？」

「やたて」

「矢立と仰せなされますか」

茂朝はいそいで鎧の袖から懐紙と矢立を取り出した。

おぼつかない指先に、光秀は筆を持たせてもらった。そして白い紙のうえを睨まえた。

（さては辞世を書きおくお心とみえる）

茂朝は胸の塞がる気がした。今ここで光秀にそんなものは書かせたくないと思い募った。大きな運命というものへ対して、彼の執着は無性な反抗を心のうちで試みていた。

「殿。殿。……かいないお筆をお取り遊ばしますな。大津まではもう一息、そこまで辿りつけば、左馬介光春様にもお迎えに見えられましょう。……さ、傷口を巻きましょう」

と、懐紙を地に置いて、わが帯を解きにかかると、光秀はふいに、愕くべき力でその手を振った。

そして左の手をつかえ、地上の白紙へ向って右手を伸ばすと、筆の腰も折れるばかりな力で、

順逆無二門

と書いた。

――が、次の文字は、もう手のふるえが烈しく書けないらしいのである。光秀は茂朝に筆を渡して、

「あとを書け」

と、云った。

「……」

茂朝の膝に凭れたまま、光秀は、面を天に向けた。一痕の月を凝視することしばしであった。その月よりも青い死色がみるまに面上へ漲って来たとき、ふしぎにも少しの紊れもない小声で、光秀は、偈のあとを、こうつづけた。

大道ハ心源ニ徹ス
五十五年ノ夢
覚メ来レバ一元ニ帰ス

茂朝は筆を投げて哭いた。

とたんに、光秀はわれとわが喉を短刀で掻き切っていた。

愕いて駈け戻って来た進士作左衛門や比田則家も、その体を見ると、

「いまは」

と、主人の屍に寄り添って、各 、自己の刃に伏した。——なお四人、六人、八人と、数を加えて、同じように光秀の死骸を繞って殉じた人たちの亡骸は、またたくうちに大きな一箇の血の花弁と花心を地上に描いた。

さきに大竹藪へ駈け入った堀与次郎と、一、二の者は、土民の群れと戦って、斬り死にして果てたものか、村越三十郎が闇へ向って、

「与次郎、戻れッ。与次郎、与次郎ッ」

と、いくら呼ばわっても、ふたたび帰って来なかった。

その三十郎も傷を負ったので、竹林の中をよろ這いよろ這い帰って来ると、すぐ側を摺り抜けて通る人影があった。

「あッ。茂朝どの」

「三十郎か」

「お館はいかが遊ばしました」

「御最期だ」

「げッ」

——仰天して、

「ど、どこに？」

「三十郎。お館はここにいらっしゃる」

茂朝は、馬の鞍覆に包んで抱えていた光秀の首級を彼に示し、暗然と面をそむけた。

「おおッ」

と、彼は烈しい勢いでそれへ跳びついた。主人の首級にむしゃぶりつくや否、おいおい声をあげて慟哭した。

「さいごのおことばは」

「順逆無二門——の一偈であった」

「順逆無二門——と仰っしゃいましたか」

「たとえ、信長は討つとも、順逆に問わるるいわれはない。彼も我もひとしき武門。武門の上に仰ぎ畏むはただお一方のほかあろうや。その大道はわが心源にあること。知るものはやがて知ろう。——とはいえ五十五年の夢、醒むれば我も世俗の毀誉褒貶に洩れるものではなかった。しかしその毀誉褒貶をなす者もまた一元に帰せざるを得まい。……そんな御鬱懐を吐かれて御自刃遊ばした」

「わかります。……わかります」

——三十郎はしゃくり上げながら、拳で顔じゅうの涙をこすった。

「戦巧者な斎藤どのの諫めもお用いなく、みすみす不利な地形と寡兵をもって、山崎に決戦を辞さなかったのも、その大道に拠られたためです。山崎を退いては京都を捨てることになるからです。御心事を察すると、哭いても哭ききれません」

「いや、敗れたりといえ、その大道をお捨てにならなかったことだけは、ひそかに本懐として死なれたにちがいない。最期の偈がそれを天にさけんでいらっしゃる。……お、時移しておると、また土寇輩が襲せ返して来るだろう。三十郎」

「はッ……」

「わし一人では御始末をする術もなく、あれに取り遺して来たお首級のない屍がある。あれをどこぞ人目に見出されぬ土中へ埋めてお隠し申しあげてくれ」

「余の方々は」

「みな御遺骸を繞って、いさぎよく死に就いた」

「おいいつけの役目をすました後、それがしもどこぞ死所を求めましょう」

「わしもこのお首級を、知恩院にある光忠どのへお渡し申しあげ、その後、身の始末をする所存だ。――では、さらばぞ」

「おさらば」

ふたりは竹林の中の小道で立ち別れた。こぼるる月の斑がきれいであった。

瀬兵衛御苦労

一方、勝龍寺城も、その夜のうちに陥ちた。

ちょうど光秀が小栗栖附近で最期をとげていた時刻である。

山崎、円明寺川の線に、明智勢を撃摧した南軍の堀、中川、高山、蜂屋などの諸部隊は野を吠え、草を掃いて、

「必定、光秀は、あれにこそ在らん」

と、勝龍寺を取り囲んで来たのであった。

だが、その光秀は疾くに、伏見方面へ落ちた後とわかって、寄手は失望したが、なお囲みは解かなかった。

城中からは、守将の三宅藤兵衛以下、数百の兵がいる様子だし、それらの者が、一時、矢弾のあらんかぎり烈しく撃ちつづけて来るからであった。

ところが、その猛射は、滅前の一燦だった。程なく、はたと止むと、城楼の一端から、ボウと赤い焔が映して、月の夜空へ濛煙を吐き出した。

「さてはみずから火を放って、城兵のこらず一手となり、城を出て斬り死にせんの準備と見ゆるぞ」

寄手は戒め合って、各部隊に異様な緊張をたたえていた。そして城門から殺出する敵を迎えたがさいご、一兵も討ち余すことではないとひしめいていた。

するとそのうちに、城中の焔は消えてしまった。墓場のようなしじまと暗い余煙だけが望まれる。――はてなと、寄手は怪しみにとらわれていた。

「寄手の将にもの申す。守将三宅藤兵衛は、所詮、支え得ぬところと覚悟いたして、ただ今、自刃して相果てました。罪なき部下は、それぞれ郷里に帰してやりとうござる。――この儀、お聞き届けあらば、直ちに開城いたすであろう」

人影が一つ、城門の上に見られた。そこから寄手の陣へむかって、こう呶鳴っているのである。

三宅藤兵衛の股肱、溝尾五右衛門であった。この申し入れは、もちろん寄手にゆるされた。五右衛門は、居る所から直ちに開門を命じ、城兵数百が事なく敵の手に接収されたのを見届けると、

「どれ、俺も行こうか」

と、そこから降りた。

しかし彼は、城外へは出て来なかった。間もなく櫓の下あたりか

ら再び火焔が立った。寄手は一斉になだれ込んだ。そして忽ち消火に当ったが、五右衛門はすでに腹を切って火中の白骨となっていた。

宵の頃、円明寺川の激戦にやぶれ、重傷の身を、駒の背に抱きあげられ、舎弟の藤三に守られて、辛くも戦場を脱した藤田伝五行政は、夜の明け方ちかい頃、ようやく淀の町はずれに辿りついていた。

「兄上。しばらくこれでお待ち下さい」

と、舎弟の藤三行久が、橋の畔をしきりに歩きまわるので、伝五は、

「行久。何を探すか」

とたずねた。藤三は答えて。——小舟を求めて、兄上をお落し申し上げんつもりですと云った。

伝五は、憤然と叱った。

「殿の御生死も知らぬうちに、我ひとり安き道に就けようか」

——が、そのうちに、勝龍寺城の落去も伝わり、光秀の死も聞えて来たので、兄弟は、淀の小橋のたもとに坐って、見事に刺し交えて果てた。

勝龍寺城へ南軍が混み入った後も、西ヶ岡方面や、久我、桂川一帯のひろい地域には、なお折々、ぱちぱちと遠い小銃音がしていた。

各所で掃討戦が行われているらしい。

一面、中川瀬兵衛、高山右近、池田勝入、堀秀政などの諸将は、一応みなここに部隊司令部を移して、大かがりを焚かせ、城門外に床几をならべて、神戸信孝と秀吉の到着を待つことにしていた。

その信孝は、程なくここへ臨んだ。

かがやく戦捷の入城だ。将士は旌旗を正してつつしみ迎えた。信孝は馬を降りて全軍堵列のあいだを通った。

「やあ。やあ」

彼はしきりに将士へ温顔をふり撒いた。とりわけ池田、高山、堀、堀尾などの面々へは、いんぎんに過ぎるほど、ていねいな会釈を与え、犒いの意を示した。

殊に、中川瀬兵衛へは、その手を取って、こういった。

「このたびの大合戦に、さしもの明智軍をも一日に撃ち摧き、亡父信長のうらみを散じ得たのは、まったく御辺たちの忠節と奮戦によるものであった。信孝、忘れは措かぬぞ」

高山右近へも池田勝入へも、同様な賞辞を呈した。

ところが、すぐその後から来た秀吉は、高山、池田などの前を通っても、何も言葉をかけなかった。のみならず彼は陣駕籠を用い、それに乗ったままでやや身を反り気味に澄まし返っているふうさえ窺われる。

荒武者の中でも、精悍無比な中川瀬兵衛は、小面憎く思ったか、

「清秀がここにおるぞ」といわんばかり、わざと大きな咳払いを一つひびかせた。

——と、秀吉は、駕籠のうちから、一瞥をくれた。そしてただ一言、

「瀬兵衛。御苦労」

と、云い捨てて通ってしまった。瀬兵衛は、足ずりして怒った。

「信孝様さえ、下馬して色代されたのに、駕籠のままで通るとは不遜極まるやつだ。——猿めが、もう天下でも取ったように心得おるか」

あたりの人へも聞えよがしに云い散らしたが、さて、それ以上には怒れもせず行為にも出せなかった。却って、自分が小さくなるば

かりだからである。

ひとり瀬兵衛だけではなく、丹羽でも池田でも高山でも、みな同列の織田遺臣のはずだったが、いつのまにか、秀吉は彼らを自分の麾下同様にあつかい、彼らもまた、意識しつつ秀吉の下風に在らざるを得なくなっていた。誰もみな割りきれない気持にちがいない。だが、さればといって誰もそれを拒むこともできないのであった。

城中に入っても、秀吉は焼け残りの建物に一瞥を向けたのみで屋内に身を休めようとはしなかった。

広庭に幕を張らせ、信孝と共に床几をならべて、すぐ諸将をここに会し、次の指令をさずけ始めた。

「久太郎（堀秀政）はただちに兵をひきつれ、山科から粟田口へ押し通れ。目的は大津へ出て、安土と坂本との通路を遮断するにある」

また、中川、高山の二将に対しては、

「瀬兵衛と右近とは、丹波路へむかって、急げるだけ急げ。敵の残兵の多くは丹波へ逃げたろう。それらの者が、亀山に籠って、備えをなす遑も与えぬようにだ。時おくれると、陥すにも手間どろう。明日中に亀山へ迫るぶんには、苦もなく陥ちるはずだ」

そのほか、誰は鳥羽、七条方面に急げとか。誰は吉田、白河方面へ先発せよとか。すこぶる明快なさしずであるが、傍らに、信孝をさし措いていっていることだけに、諸将の眼には、秀吉の態度が、甚だ不遜に見えてならなかった。

だが、この折には、最前、口に出してそれを立腹した中川瀬兵衛も、他の者も、

「心得申した」

と、云い、

「よろしい」

と云い、大様に命をうけて、たれもそれを色に出さなかった。そして、今朝から初めての軍糧を兵に解いて、酒を酌み、腹をみたし、ふたたび次の戦場へ立った。

人を自分の麾下に服せしめるにも、時と所があることを秀吉はよくのみこんでいた。誰も彼もこの勝軍に気を好くして沸き立っている時と場所こそつけ目であったといってよい。こんな中で瀬兵衛の如きムキになって怒ってみたところで、あたりの雰囲気は却ってその小心を嘲い消してしまうのが常例である。

が、秀吉は、そのつけ目だけを利用して、これらの万夫不当や、扱い難い猪勇の同僚を、敢えて麾下に見るの冒険を試みているほどの無分別でもない。

軍には絶対に、首脳がなければならないし、統帥は明確でなければ紊れる。身分上、信孝こそ主将たるべきだが、この軍には出おくれて来たし、戦陣に立っても果断、英邁、ともに欠けていることは、全軍の諸将もみな認めているところだった。

さればとて、秀吉を措いて他に人があるかといえば、これはまったくない。箇々の胸には秀吉の下風に甘んじきれない自負を持っていても、

（自分では他が納まらない）

ことぐらいは各　知っているからである。殊に、この弔合戦の主唱者が明確に秀吉であり、その糾合に応じて立った以上、今となって、

（ひとを部下扱いにするのは怪しからぬ）

などと、筋目立ってみたところで、自分の小量を自分で吹聴す

るようなものだし、かたがた、戦捷の陣営に組みしながら、みずから功を捨てて裏切りの誹謗を求めるような結果になろう。

で、諸将は各〻休息する遑もなく、命じられた新戦場へ向うべく、やがて、一斉に座を立ったが、それに対しても秀吉は、将座についたまま、

「大儀大儀」とか、

「いや、御苦労」

とか、極めてあっさりと、顎で会釈を送っているだけだった。

橋上橋下

秀吉もまた同夜のうちに淀まで進んだ。

ここで信孝と宿営を共にし、未明に立って京都へ入った。

六月十四日である。京都では何よりも先に本能寺の焼け跡を訪れて、亡主信長の霊を弔って、戦況を報告した。

――といっても、もちろんここの焼け跡には、燃え残りの伽藍の残骸と灰のほか何物も余されてはいなかった。

ただ一隅の池のほとりに、高台寺かどこかの法師達が来て石を積み重ねておいたという所に、誰とはなく花や水など供えていた跡があったので、仮に、そこを信長以下殉難の将士一同の霊地として、信孝と秀吉は、姿をそろえて、額ずいたのであった。

「ここに立ってもまだ、安土へ参れば、お目にかかれそうな心地がしてならぬ……」

といって信孝は落涙した。

秀吉も、去りがてに佇んで、

「御無念さ、いかばかりでお在したろう。――その六月二日から、ちょうど今日は十三日目、燃え残りの棟木や柱にもまだ火のにおいがするようだ。……おお。小袖の焼け布が落ちている。弓の折れも見える」

と、其処此処を見まわしなどして、うたた感慨にとらわれていた。

しかし彼が軍を駐めて、ここへ立ち寄ったのは、この日さらに、蹴上を進んで、大津にまで出る行軍の途中であった。

ゆうべ勝龍寺から直接立った秀政の隊は、すでに、今朝あたり、近江辺まで突出していたであろう。そのほか、昨夜以来の配置によって、醍醐、山科、逢坂、吉田、白河、二条、七条、洛の内外いたるところも、秀吉指揮下の隊が部署についていない方面はない。

今朝は、陽の色までが、何となく爽けく違って来たように仰がれた。

（妙心寺から大勢曳き出されたそうな）

（嵯峨でも捕まったという）

（本阿弥の辻で斬られるのを見て来た……）

町々の噂は、残党狩りで持ちきっていた。山崎から逃げ込んだ落武者や、ここの治安に当っていた明智方の兵は、ほとんどひとりも余さず捕斬された。

さきに二条城の戦いで負傷し、のちに知恩院に入って療養していた明智光忠も、この朝、

（はや秀吉の馬じるしが京都に入ってきました）

と侍臣に聞くと、すぐ一室を閉じて自刃してしまった。数名の家臣もみな殉じた。

なおまた。

昨夜来、丹波越えに向った高山、中川の二隊は、十四日朝、亀山城を包囲していた。けれどここにはもう光秀の家族はいなかった。一子十兵衛光慶が留守している筈と思われたが、それも見あたらなかった。老臣隠岐五郎兵衛は前日病死していた。そのほかこれという程な将士もいない。為に、ここではほとんど何らの抵抗もうけることなく寄手の入城を見ていた。

明けて十四日というこの日頃には、中央以外の地方諸侯は、どういう方策を決していたろうか。

まだ依然たる昏迷中にあったといっていいが、さすがに海道の徳川家康と、越前の柴田勝家とは、やや積極的な動きを示していた。

勝家は、養子勝豊、勝政、その他の諸将をすでに先発させ、自身も北ノ庄を出て、山越えに、近江へ急いでいる頃であった。——もちろん上洛を遂げて、故主のあだ光秀と一戦を果さんために。

家康の徳川勢も、同様の目的のもとに、今十四日には、すでに熱田まで来ていた。そしてなお京都へ向って続々行軍中であった。

すでに遅しというほかはない。光秀はすでに破られていた。しかもその光秀と同様な誤算を、家康もまた勝家も抱いていた。——秀吉の反転突進が、さまで鮮やかに迅速に、てきぱきとこの大世転を処理し終っていようとは、なおまだ思いもよらぬこととしていたのである。

世人もまたおなじだった。きのう一日で、明智の存在が泡沫のごとく、地上から抹殺されてしまった今朝、その起るときの急なるに愕いた世人は、ふたたび、その散滅の呆気なさに、茫然としているふうに見える。

しかしまだこの日となっても、まったく無傷な兵力を擁している明智方の一族があった。安土を占領してそこに拠っていた約一千余人と、坂本の城に在る千数百という人数である。そしてこの方面の将は光秀の従兄弟にあたるかの明智左馬介光春だったことはいうまでもない。

あわせれば二城で約三千の兵力はある。むなしくこれを近江口に置いたことは光秀として用兵上すこぶる下策であったと酷評する戦略家もあるが、光秀とて決してそれだけの軍をあそばせておくつもりではなかった。ただ秀吉の猛撃が余りにも一瀉千里の急潮をもって押して来たため、予備軍としていた安土、坂本の新手を加えて反撃に出るいとまもない結果となってしまったのである。

光秀が山崎へ臨む前に、急遽、従兄弟の光春へあてて早打した書面は、本来、遅くも十三日の朝には着いてよいはずだが、途中の聯絡が困難なために、これが光春の手にとどいたのは、すでに十三日の夜半を過ぎていた頃だった。

急を知ると、光春は、

「これに遅れたら取り返しはつくまい」

と観て、すぐ安土の一千余名にことごとく出軍を命じ、未明、城門を出て、陽ののぼる頃、瀬田の仮橋へかかった。

——もし光秀が小栗栖に死なず、もう数里を遁れ得ていたなら、この朝、山科から大津へ出て、たとえ勝てないまでも、光春と共に最後の一戦を華やかにすることができたであろうに。すべては全く手遅れだった。

ここ瀬田の橋口も、光春の最期を見るべき所ときめて、夥しい敵影が手具脛ひいて待ちうけていた。

橋は中断されていた。橋板を剥がして、桁と杭ばかりになってい

る箇所だの、放火して焼き壊した跡など見える。

「近くの民家を潰して、すぐ架け渡せ」

馬上の左馬介光春の面には、何のうろたえも見えない。

附近の民家はどしどし潰された。古材木の柱や戸板はわいわい担がれて来る。或る者は、瀬田の河流に身を沈めて、橋杭を補強し、或る者は、桁を這い渡って彼方から綱を投げ、長い板を引っぱっている。

頃あいを計っていたらしく、対岸の敵勢はこの機を見ると、銃を揃えていちどに弾丸を浴びせて来た。

「身を伏せろッ」

と部下へ命じながら、自分は毅然と立ったままで、敵の弾けむりを睨んでいた明智方の足軽頭は、こめかみの辺を撃ちぬかれて、橋桁からもんどり打って河中に墜ち、ドボンと、大砲の弾が落ちたようなしぶきを揚げた。

「怯むな、怯むな」

なおそこへ、長い棟木だの、床板だのは、絶え間なく運ばれて来る。一歩一歩、決死の修理をつづけて、味方の突撃路は作られてゆく。

屍は橋上を埋め、血は橋桁からしたたって、瀬田の流れを紅くした。

対岸の敵勢もなかなか重厚らしい。銃手が弾ごめに時を移している間には、弓隊が矢風矢唸りをたてて、これまた凄まじい鏃の数を射て来るのだった。

この一軍は、事変の初めから反明智態度をあきらかに示していた瀬田の城主山岡景隆の全家中と、さきに山崎から急派されていた堀秀政の先鋒の一隊である。きのう以来の勝ちいくさに続いて、光秀以下、敵の一族諸将の終りも聞き知って、いまや意気の昂りぬいている軍勢であるから、その矢弾といい、喊声といい、ほとんど、左馬介光春の率いる一千余の兵力の如きは、主を失って路頭に迷う敗残のあわれなる群を揶揄するような概でしかなかった。

「明智の者どもよ、まだ聞き及ばないのか」

「山崎の総敗軍を知らずに、ここを通ろうとするのか、知って通ろうとするのか」

「日向守光秀さえ、昨夜、小栗栖で相果てているぞよ」

「土民の竹槍で」

「悪因悪果の見せしめを身に示して」

「それとも知らぬか」

「知ってか。ばか者」

「うつけたる、うろたえ軍」

「何のために通るぞ」

「どこへ落ちる気で――」

こう口々に罵る敵側の弾けむりの裡に、時には、どッと笑う声すらするのである。

それに対して、光春の部下は、味方の作業隊のために、必死の掩護射撃を酬いながら、尺歩丈進、押し詰め押し詰め、味方の屍を塁として、徐々に大橋の半ば以上を踏み取り、やがて左馬介の号令一呼の下から、千余騎いちどに、対岸の敵陣中に突貫した。

それは橋上ばかりでなく、橋の下の急流を、馬で渡し、筏で進み、或いは、半裸体になって、泳ぎ渡ってゆく者もあったのである。

志賀の浦風

山岡景隆兄弟や、同苗美作守などの一族は、いわゆる甲賀武士の頭目だった。

こんどの大乱に際して、さきに旅行先の堺からあわてて本国へ帰った徳川家康の道中の難儀を、甲賀山中で扶けた一種の山ざむらいも皆、この山岡一族の配下に属する者どもだったといわれている。

この一族が、節義を立てて、当初から光秀の誘降をしりぞけ、断乎として、反明智を守り通したことは、筒井順慶などにくらべると、大いに偉としなければならない。――要するにこの瀬田城は、以前、瀬田掃部助の居城であったのを、信長の代に、山岡一族に与えられたことを、深く恩としていたことによる。

こういう山岡勢に加えて、堀秀政の先鋒隊が合しているので、その強さはいうまでもない。しかも、光春が安土から率いてきた手勢一千余に対して、彼は少なくもその三倍に近い兵力を擁していた。

辛くも、瀬田の大橋口は、遮二無二突破して、光春以下、その大軍のうちへ、面もふらず駈け入るまでの果敢は示したが――到底、それはみずから求めて苦戦の中へ自軍を投じたというしかない戦闘であった。

「散るな、崩すな、まんまると円陣をむすび、円を旋らしながら北進せよ。――味方の旗を離れて遠く戦うなよ」

光春は声をからして、その馬上すがたを、戦う喊声と馬けむりの中に、揉みに揉まれていた。

この場合、軍の分裂は、敵のねがうところで、光春にとっては、自滅を意味する。彼はあくまで千余人の力を一団として、颱風のごとく、旋回陣を取りながら、大津まで突破しようと試みたのだ。

しかし、その大津まで出ることに成功しても、それは決して勝利をつかんだことにもならないし、大勢の上に曙光を見ることでもなかった。

ここで勝っても、ここに敗るるも、彼のゆくてにはただひとつ。

死、

それあるのみだった。

山崎すでにやぶれ、一族みな四散し、主将光秀もまた非業の死を遂げたり！　と聞ゆる今、彼として赴いて何かせん、生きて何かせん――である。

とはいえ、その光春にも、なおまだ、これだけの苦戦をなしても果そうとする一つの望みはあったにちがいない。

それは、もちろん、

（ただは死なぬぞ）

であり、日頃からの覚悟と希いからも、

（こころよく果てたいもの）

とする生涯最高の場と時とに今や直面していることの自覚であった。

（――さむらいの道、一生涯の華も実も、成るか成らぬかは、ただ死に際の一瞬にあること。生涯のつつしみも守りも研きも、もしその死を誤てば、生涯の言行すべて真を失い、ふたたび生きてその汚名を拭い直すことはできない）

日頃、彼が家中の子弟にもいっていたことばを、彼はいま、我とわが身に云い聞かせながら、馬上、槍を横たえて、怒濤と怒濤の相搏つごとき血戦の中を、悠々、少しずつ、粟津の方へ進んでいた。

——こうして、ようやく、大津の町の東口まで突破して来たものの、ふと炎のような息のひまに、前後につづく兵を見ると、わずか二百騎ぐらいしか見えなかった。

多くは、途中で討たれたか、或いは負傷したものだろうが、粟津の辺で、有力な敵の部隊に味方を中断され、それからは四分五裂となって来た結果である。

「坂本へ。坂本までは」

左馬介光春は胸のなかで、不断にそこの目標を意識していた。行き着くまでは、死なぬぞと誓った。

坂本の城には、なお多くの家中の者と、そして亀山城から移した光秀の夫人や子達や、そのほかたくさんな老若男女の眷族が籠めてある。もちろん自分の妻子もいる。

「あれらの者にも、心安く逝けるように、よい死に方を取らねばならぬ」

光秀のなきあとは、当然、彼が一族の家長であった。光春はいちばん後から死のうと思っていた。

その坂本は程近い。もう一里半か二里である。

しかし大津の町へ入ると、町屋は煙につつまれている。光春の先に立って駈けていた荒木山城の子荒木源之丞、乙之丞の兄弟は、忽ち駒を返して、

「殿々。この道は通れませぬ。——道を変えねば」

と、手を振った。

兄弟に倣って、ほかの徒士勢も、どっと後戻りして来た。両側の家々から火を噴いているので、所詮、熱くて通れないのである。

「なぜ通れぬ」

光春は、先へ出た。

荒木兄弟が、

「新手の敵が、町屋に火を放けて、この先の辻に充満しております る」

と告げると、光春は、

「この小勢で、田や畑道を奔らば、それこそ、敵に迂回されて、よい獲物と包まれよう。敵の真っただ中を割って通るのが、どこよりもいちばん安いのだ。わしについて通れ」

と、やにわに、馬に鞭打って、焔の町中を駈け出した。

火ばかりではない。その姿を狙って、矢や弾丸も彼へ蔽まった。光春は、左の肱を曲げて、鎧の袖を額のまえに翳し、馬のたてがみに俯伏し気味に突撃して行った。

「それ、殿につづけ」

兄弟も、他の部下もわあッと、咽びながら、火の下を駈けた。

辻へ出た。

登れば逢坂、西は三井寺。また一方の道は柳ヶ崎の浜辺へ出る。

ここの要所を占めていたのは、堀秀政の本隊だった。もちろん久太郎秀政自身も、この中にいるはずである。当然、光春以下、明智勢はそれへぶつかってゆき、堀隊もまた猛然と邀え撃った。馬のうごきも槍の柄も意のままにならないほど道幅も狭い辻である。しばしの市街戦は、焼け落ちる建物のひびきと、人間の咆哮と、血の黒煙で、夜か昼かも分らなかった。

ここの辻は、坂の裾の三叉路なので、当然、坂上を取っている堀軍は、地形上からも有利であった。

そのほかすべての条件からも、光春主従の終りは、いまここが、

その時と場所であるとしか見えなかった。

けれど光春以下二百の兵は、その絶対的なものを、いわゆる「もののともしない」死にもの狂いをもって驚くべき勇戦を持ちつづけていた。

ここまで、光春を離れず、従いて来ただけでも、その兵は、尋常一様な兵数の質でないことはわかるのである。

――為に。

地の利をしめ、黒煙猛火を味方とし、あまっさえ数倍の兵力をもって、それを喚きつつんでいた堀隊も、却って、少数の敵に、まったく一泡ふかせられた形となった。刻々敵も討ち減らしてはいるが、味方もそれに数倍する死傷者を累々と路上に重ねている有様であった。

「あれが左馬介光春か」

堀秀政は指さしていた。

坂上にある彼の床几場は、燃えさかる町屋の煙のため、すぐ下の戦況すら透視できなかった。

「どれでしょうか」

側に彼をかこんでいる家臣の堀監物や近藤重勝は、眼をこすりながら、秀政の指のさきを見わたしていた。

「あれ、あの白地の陣羽織じゃよ。乗っているのも良い馬らしい」

「オオ、なるほど」

「光春だろう」

「慥とはわかりませぬが」

「光春ならで、あれほどの武者が、部下のうちにいるとは思われぬ。久太郎秀政の前に立たせて不足のない敵だ。どれ……」

いうや否、彼は、傍らの馬へとび乗って、坂下へ駈け降りていた。

堀久太郎秀政は、この年、ちょうど三十歳である。天王山、山崎などで、彼の名は、羽柴軍のうちでも断然重きをなして来たが、なおまだ帷幕にかくれて計謀に参ずるよりは、陣頭の勇将であった。

彼は、味方を押し分けて、敵勢の直前に馬を立てた。同時に、大音声で何か敵へ云ったが、あたりの叫喚や炎の音で、到底、ことばの意味はとどかない。

けれど、その態度や物の具などで、大将秀政ということは、すぐ知れた。明智勢の眼が、みなそれへ蔟まった。

「死ぬならあれと刺し交えて」

と、雑兵までが、どッと秀政のすがたの下へ寄って来た。

「われと見て、うしろを見せるか。左馬介、左馬介」

秀政は、馬前の敵を見ず、彼方の白い陣羽織を見ていた。およその敵は、馬蹄にかけ散らし、槍をもって叩き伏せた。そしてただ白い陣羽織のみを目がけていた。

光春は、煙の中から、ちらと此方をふり向いた。

――と、猛然、彼の影は、あたりの敵をふりすてて、秀政のほうへ馬首をめぐらして来たが、突然、前に立ちふさがった味方の若者の二人が、左右から主人の口輪をつかんで、ぐるりと、反対な方へ駈け出してしまった。

それは光春が、日頃目をかけていた二人の小姓だった。

うしろからは、堀秀政が、

「きたなし！」

と罵り、

「返せ」

と呼ばわり、

「――逃げんとしても、逃げ得る道もあるまいに、左馬介光春は、死に場所を知らないのか」

と、乗れる駿足にまかせて、その追撃は物凄いばかり急だった。

「堪りかねて、光春も、

「放せッ」

と、駒を止めて、二人の手を、馬の口輪から振り飛ばそうとしたが、二人の小姓はなお、

「いけませんッ。殿には、お落ち下さいまし」

「あとは、われら二人で」

と、必死に拒んで、しかも一人は槍の柄で、光春の馬の三頭のあたりを、力まかせに撲りつけた。

馬は愕いて、光春を乗せたまま、盲目的に彼方へ飛んで行った。ふたりの小姓は、もとの道へ取って返して、健気にも、堀秀政と槍を交え、枕をならべて戦死した。

――止まるを知らない奔馬の手綱をやっと締めて――光春が、田の畦の、湖に注いでゆく小川の縁から振り向いたときは、もうその二人も見えず、追って来る秀政のすがたも見えなかった。

そのかわりに、近くに望まれる街道にも、うしろの畑道の土橋や森の附近にも、百騎、二百騎ぐらいな敵の集団が、あだかも空から網の中へ翔けこんで来た鳥を眺めているように、そう物々しく動きもせず、此方を見ている様子であった。

危地は決して脱していない。むしろ反対に、光春の危険は加わった。混乱の重囲から、完全な重囲のうちへ移って来ただけのものである。

こういうとき慌てふためくと、後々までの語り草になされる。包囲している敵の意志も、

（左馬介光春が、どういう死にざまをするか、これは見ものである。見ていてやろう）

というような落着き払った意地悪さを示しているのだ。どう緩慢に放っておいても、所詮は檻の中のものに等しい。左馬介が逃げきれるものではない――という自信たっぷりな気持を前提としてであるということはいうまでもない。

「叱いッ……」

光春も悠々たるものだ。手綱の一方をぐいと挙げて、馬を叱った。無理にここで馬を止めたはずみに、馬の前肢がやわらかい田土にふかく入ってしまっている。その前脚を怪我なく抜かせておもむろに馬首をめぐらすためだった。

駒は、田と小川のあいだを、ゆるやかに湖のほうへ向って歩み出した。

軽い速度になって、しきりと鬣を振りながら、白い泡を口輪に吹いているのは、なお馬が悍気をしずめていない表情である。光春の手綱は、努めてそれを宥めながら歩ませていた。

びゅんッ――と、一矢、風を截って、彼の面と鬣のあいだを通った。

ぶすッと、そこらの畝にも、銃弾のもぐる鈍い音がした。

が、多くは、矢も弾も、田の面に落ちた。まだ彼の位置は射程圏外にある。

しかし彼の駒はどこへ出る気であろう。行こうとする道はすべて敵にふさがれている。それ以外は琵琶湖の水あるのみである。

そのうちにふと光春のすがたが見えなくなった。

遠巻きにしていた敵勢は、多寡をくくって見ていた自己の心理を遽かにたしなめて、

「逃げうせたぞ」

「どこかへ影をかくした」

急にあわて出した様子である。そして無性に、光春の姿の消えたあたりに向って、矢弾を盲射し出した。

各〻一騎打に自信のあるらしい武者が、東の森からも、西の街道からも、三騎、七騎、十騎と前後して駈け出した。もちろん光春に近づいて、雌雄を決する気ぐみにちがいなかった。その面々は馬上から味方のほうへ手を振って、

「射るな」

「しばし撃つな」

と、制しながら、何か、口々に呼ばわり呼ばわり駈け巡って、光春のすがたを捜しているふうだった。

すると、彼方の葭の茂りが、風でも分けてゆくように、一筋、際だって戦いでいた。――見ると、まぎれもない金鞍を乗せた馬の背と、その馬の背を降りて、みずから口輪をつかんで曳いてゆく白地の陣羽織の武者が――葭のうちに影を沈めながら、しかも極めて悠々と、湖水の方へ歩いてゆくのが見えた。

「おッ。あれだ」

「左馬介。待てッ」

十数騎の武者は、功を競った。われこそ、その獲物をと、争うかのように、面々、いずれも馬をおどらせて葭の中へ駈け入った。

そこの田圃道から、湖の波打際までのあいだ約一町ぐらいな幅は、いちめんな葭におおわれているのである。乗り入れた面々は、みな葭の根の生えているやわらかい湿地に気づかなかった。馬の脛は蘆の根よりも深く泥土を穿って、到底、その駿足をあらわすことはむずかしい。

「――いけない」

と覚って、何騎かは、馬の背を降りた。或いはまた、ふたたび畦道まで戻って、遠く、葭のない先の方へ迂回を試みた。

葭のあるのは、町はずれの、この附近だけであって、柳ヶ崎のてまえになると、松原つづきとなり、白砂青松の渚である。

「ここへ出て来る他あるまい」と、光春の方向を察して、先へ廻っていたのである。この辺から打出ヶ浜にかけても、羽柴方の軍兵は充満していて、三井寺方面から明智兵を掃討して来た堀秀政とその旗下もまた、附近の松林のなかで、一息ついていた。

――と。そこのみでなく、湖岸の全味方のうちから、何事かわあッと歓声に似たような動揺み声があがった。

見ると、彼方の蘆の岸から水面およそ半町ほど先をゆるい波紋が一すじ真っすぐに描かれてゆく。

それはまったく誰もが予想さえしていなかったことを、ふいに眼に見せられたときに出る敵味方なき驚嘆といえよう。

いま、琵琶湖の心をさして、一頭の馬は、鮮やかに水を掻いてゆく。そしてその波紋の中に浮きつ沈みつ見える白い陣羽織こそ、彼らがさっきから手に唾して求めていた左馬介光春のそれに違いなかった。

人間の想像力にはおよそどうしても一定の限界がある。あとでは当然その非に気づくことでも、事実のあらわれる瞬間までは、いつ

も十目十指的な常識の線から一歩も出られないのが普通らしい。

今、左馬介を逸した羽柴勢が、むなしく声をあげている心理も、われとわが常識を嘲けるに似ていた。

（甲冑を着、太刀を佩き、あまつさえ、今朝からの戦いに疲れ果てた左馬介が、騎のまま湖上にのがれ得るはずはない）

と、きめこんでいた考え方が、眼に見せられた事実によって見事にくつがえされたのであった。――鉄は水に沈むもの、という確乎不抜な通念のほうが顛覆を見てしまったのである。

大きな不覚にちがいないが、かくまで鮮やかに受けた不覚に対しては、戦国武者のあいだでは、敵ながら天晴なものとして、一時の歓呼を惜しまなかったのみか、

「さすがは、明智一族のうちでも、彼ありといわれていた男」

「見事哉、左馬介」

と、どよめきどよめき、私語を発して、それを賞め称えている者すらあった。

殊に、堀秀政や、その他、互いに名を惜しむ武門の将は、美しきものに見恍れるときのような眼で、湖の沖を凝視していた。

弾も矢もとどかない距離にまで――すでに左馬介は泳ぎ出していた。

「よも坂本までは、あの馬を泳がせきれまい」

「――どの辺で、溺れ出すか」

兵の多くは、なおまだ期しているものの如く、無駄矢も無駄弾も放たなかった。

――と。波打際を数町離れた左馬介光春は、やがて弛い半円の波紋を描いて、水面わずかに見える馬の頭を――西の方、坂本のほうへぐるりと向け直していた。

「改正三河後風土記」や、その他の諸書が記すところによると、その日の光春が装いは、白練絹の陣羽織に、時の名ある画匠が、水墨をもって雲龍を描いたものを着ていたという。

また兜は、二ノ谷と銘のある明珍造りの輝かしき物であり、馬も大鹿毛の雄で、よほど優駿であったろうことは、朝からの戦闘に耐えて、なおよく湖上遠くに出て、さかんに水を掻いている悍気を見てもわかることだった。

しかしどんな名馬でも、その馬をして長く疲れぬように乗りこなすには乗人の如何によることというまでもない。

弓太刀の表芸以上、当時の武将が騎馬を重んじていたことはいうまでもないが、特に光春は馬術熱心だった。このことについては、青年時代秀吉とのあいだに一挿話も遺しているが、いまはそれをいっている遑はない。――いま彼が馬首を向け直した湖上から斜めに見ても、彼方なる坂本の城は、なお目づもり約半里の余はある。そこまでよくこの馬が耐えるや否や。また、世の笑い草になるかならないかの衆目もある。光春としてもまさに畢生を賭していたにちがいない。

ただ見る眼には、いちめんの湖でしかない広さにも、その水底には深浅があるということはいうまでもない。

左馬介光春は、よくそれを弁えていた。

安土を出たときから、死を期していた今日ではあるが、彼は本来の性格としても飽くまで無謀や愚挙はやらない人である。その点、従兄弟の光秀よりは、彼のほうが遥かに徹底した理性家であったといってさしつかえない。なぜならば光秀は生涯の完成にあたって、

ついにみずから信ずるところの教養も忍耐も一挙に自身で破摧してしまったが、左馬介光春はといえば、なおこの期になってもその自己を――敵軍すべて取り囲む琵琶の湖中においてさえも――珠の如く愛でて持っている姿であった。

この湖上はいうもさらなり、この辺の地はみな自身の領土である。しかも坂本のすぐ城下である。光春が、田畑の畦道から葭蘆の茂りまで、どこはどうと、知りぬいていることは、当然であった。

水馬の技でもそうである。

彼が、湖に馬を泳がせたことは、彼としては、きょう初めてのことではない。

常に、居城の坂本の馬場から、この大津附近まで、水馬で渡ったことは何十遍も経験があるのである。従ってこの辺の湖底は、深いか浅いか、ほとんどそらんじている彼でもあった。

――馬の足の外れる深さにかかれば、身を馬の三頭に下げて、かるく手綱をくれながら馬を泳がせ、また、浅瀬にかかれば、しぶきを咬ませて駈けわたるのである。このようなことはあながち彼の創意でもなく、敵前渡河のときは、かく操るものと訓えている前人の貴い経験に基づくものであった。

ただし、これが非常な至難かのように考えられて、後世、説をなすものが絶えない。

いわく。

（左馬介の湖水乗切りというのは、派手がましく伝えた虚説で、ほんとは湖水の岸を駈け廻って坂本へ入ったにすぎない）

また、別説には、

（彼は、湖水と町屋とのあいだを駈けて通った）

ほかにもなお、小舟に乗って坂本城へ渡ったものである、などという説もある。

これらの説はみな、堀秀政やその他の羽柴勢が全然、その兵力を、湖岸や坂本への通路には配置していなかったもののように、あの戦局を見ているらしい。

用兵上、しかも敵に数倍する兵力と、時間の余裕をも充分に持っていた羽柴軍が、そんな一方抑えの作戦をする訳はない。

要するに、左馬介の湖水渡しを否定したがる史家心理には、そのことの至難に思われるのと共に、余りにも、事実そのものが劇的であり過ぎるということに却って、懐疑をもち、これを通俗中の巷説と片づけてしまいたいものがあるのではなかろうか。

けれど古来、身をもって歴史を描いた日本武士のすがたは、常におのずから最高な劇的の一天地を作っている。湊川、四条畷、桶狭間、川中島、高松城の一舟、松の間の廊下、雪の夜の本所松坂町、劇以上の劇でないところはない。

――が今、当の左馬介光春にとっては、そのことは決して、後の人が考えるような至難や無謀を敢えてしているものではなかった。彼はただ日頃の水馬の錬成をきょうはただ甲冑を着けてしている程度にしか思っていなかった。

そうして、悠々と、波間に馬を游ばせてゆく左馬介の白い陣羽織は、この湖に多く住む鴇の一羽が泳いでゆくようであった。

――依然として、なお、

「いまに溺れ死ぬだろう」

と、それを見ていた湖岸の羽柴勢は、やがてふたたび騒ぎ出した。固執していた自分たちの予想にまたも裏切られたからである。

左馬介光春の姿は、敵の矢弾の射程距離外を注意ぶかく迂回して、やがて難なく坂本城の東の浜へ、水を切って駈けあがっている——唐崎の一ツ松からその辺りは、いちめんにきれいな真砂と松原の渚だった。波打際のしぶきを離れるや否、彼はいっさんにその松原へ駈け込んだ。そしてしばらくその姿を緑のなかに没したと思うと、坂本の町屋と松原のあいだにある十王堂の前にふたたび姿が見えた。

——遠く、それを認めた羽柴方の兵は、われに返ったように、一時に鼓を鳴らし喊声をあげ合って、

「や、や。乗り抜けたぞ」

「城へ入れるな」

と遽かに、潮を作って、こなたへ奔突して来る様子であった。

振り向いて、それを見ながら、左馬介はにこと笑ったようであった。——なお一鞭当てて急ぐかと思うと、彼は十王堂の前でひらと馬を降りた。

馬の手綱を拝殿の廻廊柱につないでから、身をゆすぶって、鎧の袖やふところの水を走らせ、二ノ谷の兜を脱いで、神前に置いた。

そして矢立を取り出した。筆を持って御堂の前に立ったのである。やがてそこの白壁にこう書いた。

明智左馬介光春、ただいま湖水を乗り渡し候ふ馬也。年来の忠勤をいたはる暇もなく訣別をつぐ。誰にてもあれ、我に劣らぬもののふにこの大鹿毛を給ふべきなり。愛で給へかし。

筆を捨てて、階を降りると、左馬介は、大鹿毛の濡れ寝ている鬣を幾たびも撫でて、

「鹿毛よ。おさらばだぞ」

と、人に語るように云った。

大鹿毛は鼻をすり寄せて、彼の肩へ顔を載せた。あだかも甘え泣いているようである。光春はその頸を抱えながら、あなたの唐崎の松をながめて、ふとこう吟じた。

われならで誰かは植ゑん一つ松
こころして吹け志賀の浦かぜ

この一首は、かつて光春が、初めて坂本の城を領したとき、唐崎に記念の松を植えさせ、その折、それに寄せて詠んだ和歌である。

何で、その歌がいま左馬介の口に出たか、左馬介にもわからない。ただ、説明できることは、こんなとき人間は、何か無性に鬱懐を放ちたくなる。天地に向って慟哭したい感情を反対な形で現わそうとした努力が、思わず朗唱となったのかもしれない。とにかく左馬介は、愛馬を捨ててそこから身を翻えすと、たちまち町口の木戸へ駈けこんでいた。彼の味方は、わッと哭くような声をあげて、彼を坂本の陣営に迎え取った。

世々の物

光春は城に入ると、ここに留守していた全家の老幼男女から、そのすがたを、焦土に降った菩薩のように取り囲まれた。

坂本にとどまっていた光秀の夫人や一族の者も、かならず彼が一度はここへ来るものと信じて、必然、取らねばならぬ最期とは知りながらも、

「左馬どのがここへ見えられた上でも遅くあるまい」

と、待ちに待っていたのであった。

光春はすぐ令を下して、
「云い渡すことがある。将士はみな本丸へ集まれ。城外の木戸へ出ておる者も呼びもどせ」
と、下知させた。
やがて集まった頭数は三、四百に足らなかった。半数以上は、光秀の死を伝え聞くとともに、ゆうべのうち何処ともなく逃げ落ちてしまったものとみえる。
「よく今までここを支えていてくれた。しかし、事こころざしと違い、味方は山崎にやぶれ、大殿も昨夜小栗栖のあたりで敢なき御最期と聞く。すでにわれらの惟任日向守様のなき今日となっては、われらの望みも同時に終った。――かさねていう。この最後の最後まで、異心なく、踏みとどまってくれた各　の善戦にたいして、左馬介は、故光秀様を始め、御内方、ほか一族になり代って、心からお礼を申す。かくてこの一城は、わが明智一党の最後の墳墓と相成ったが、各　にはもう武士として恥なき本分を尽し果されたことでもあれば、この上、求めて死をいそぐにあたらぬこと、それぞれの郷土に帰って、さらに、士魂をみがき、今日の訓えを生涯に活かし、よいさむらいとして終ってくれるように。……これは光春が命じる最後の命令である。かならず守ってもらいたい」
左馬介はそう告げ終ると、やがて庫中の金銀から何くれとない器物や身廻りの物など、すべてをそれらの人々に頒ち、
「はやく落ちてゆけ。搦手を出て山づたいに、四明ヶ嶽を越えればなお遁れる先はあろう。とかくして、われら一族どもの足手まといになってくれるな。はやく、はやく」
と急いて、ほとんど、そのあらましの者を、追うように、搦手の一門から落してしまった。
あとの城中は、空洞のような広さだった。その寂寞のうちには限られた血縁の人々と、かしずく少数の女人たちと、そして極く内輪の近臣しか残されていなかった。
――すると、奥の丸の橋廊下を、幾人もの幼な子を、その母なる人や侍女たちと共に両手をひいて、こなたへ渡って来る老人があった。光春の叔父で明智光廉入道長閑斎という、あの面白いひとであった。
「じじ様。みんなして、どこへ行くの」
光秀の末の子、乙寿丸は八つであった。こうして、奥の者が揃って局を出ることはめずらしいので、ふしぎそうに訊いていた。
「さあ、いずこへ行きましょう。嵯峨の花見か、竹生島へお舟で月見か」
このひとの常として、洒々落々と子供相手に戯れている容子は、きょうも平生と少しも変りがなかった。夫人や侍女や乳人たちは、さすがに、折々面をそむけて、そっと涙をふいていたが、長閑斎のことばを聞くと、涙の中でも、ふと笑ってしまうことがままある程であった。
もちろんここには左馬介光春の妻子もいる。その上に、亀山から光秀の妻子眷族までここへ引き取っていたので、ひと口に奥の者といっても、縁類を加えた老幼男女の数は何してもずいぶん大勢である。光春は、それを皆、叔父の長閑斎に頼んで、騒ぎ乱れぬように、本丸の広い一間に寄せ集めさせたのである。長閑斎の役目はなかなか難しくて辛いはずだった。しかしこの老人は辛い顔も悲しい容子もしていない。例のとおり子らと戯れながら、何度にもわたって、

橋廊下を往復し、やがて滞りなく奥の者を全部、ひとつ広間にあつめた。

「賑やかなことじゃな。このような多数の道づれでは、どこへ参ろうと、淋しゅうない」

彼は、その真ん中に坐って、たえず何か喋舌っていた。

けれど多くの女性は泣きぬれている。それが子たちの童心をも異様にしめやかにするので、いつもなら彼の肩や膝に取りついて忽ち、よい遊び相手とせずに措かない子らも、各、その乳母やその母の側にすがって離れなかった。

「叔父上、みな、お揃いなさいましたか」

やがて光春はそれへ臨んで、光秀の夫人へむかい、

「はや敵は、城下近くに迫りました。いまはお心措きなく、お始末遊ばしますように。——光春もすぐおあとを慕うて参りますれば」

と、最期をうながした。

光秀の夫人は、わが子、身寄りの子など、幼い者を左右に置いて、光春の妻と並んでいたが、

「何かと、こまやかに、嬉しゅう思います。わけてお許にひと目でも会えたのは、またとない仕合せでした。ここには気づかいなく、お許の思いのままよい死に場所を取って、敵に嗤われないようにして下さい」

「ありがとうぞんじまする。……では」

今生これきりの一礼をのこして、

「叔父上。おねがいします」

「承知した」

「女房。みだれるなよ」

妻へも、一言いって、彼はすぐ去った。

城壁の外には、もう鉄砲の音が聞えて来た。それと、たった今、ここにいる者が立って来た奥の丸から突然、濃い煙が立ちはじめた。

これは光春の命によって、小姓の奥田清三郎と船木八之丞のふたりがみずから放った火であった。その火焔が橋廊下のある中庭を隔てて此方の広間の障子へ赤く映った。

「——怖いッ」

取りすがる子の叫びや、急に泣き立てる子の声がながれた。その中にも、長閑斎の声だけは、何となく明るく、

「泣くじゃない、泣くじゃない。さむらいの子は、泣かないもの。——じじも行きますぞ、母御も参ろうぞ。みなも来い。お手々をつないで死出の旅出じゃ。さあ、お行儀よく、おすわりなさい。順々に、じじが連れて行ってさしあげる」

黒煙の漂い出した障子いちめんに、こまかい血しおの霧が打った。みだるる黒髪の下から最期の息で子の名をよぶ母の声も洩れた。しかしすべては一瞬の震撼に似ていた。刺し交え、刺し交え、おくれる親も子もなかった。——ひとりなお生き残って、やがてそこから廊下へ出て来たのは、長閑斎だけであった。

その頃、大手の城門は、ぱりぱりと響きを立てていた。寄手の勢が破壊にかかり出したのだ。石垣の彼方此方からも、先を争う兵の影がよじ上って来る。

搦手からは火であった。

この方面の火は、さきに城中の者がみずから放った奥曲輪の火とつながって、忽ち半城を蔽うばかりの火勢となった。

「八之丞、清三郎。いちいち弾込めしていては手鈍い。鉄砲を取り

代え取り代え、弾のあるかぎり撃て」

光春は矢倉にのぼって、残り少ない左右の者に、なお下知していた。そして自身も、鉄砲を構えて、狭間から筒先下がりに敵兵を狙撃していた。

すでに城兵の大部分を逃散させたあとなので、武器だけは夥しく残っている。一弾放っては、またほかの鉄砲を取って撃ち、使い捨てに撃ちつづけていた。同じ矢倉にいる七、八名の小姓も部将もみなそれに倣って敵に猛射を浴びせた。

「左馬どの。居るか」

「居るッ。周防か」

「そうじゃ」

「申しつけた品々は」

「矢倉の下まで運ばせたが、如何なされる？」

「何でもよい。すぐこれへ運び上げさせてくれい」

「心得た」

階段口から半身だけあらわして、そこから光春の背へこう云っていたのは三宅周防守だった。周防守はすぐ矢倉の二階辺りまで降りて行って、下に待っているさむらいたちにむかい、

「上げろ。上がって来い。それらの品を持って、お矢倉のうえまで」

と、手を振っていた。

その間も、光春は、鉄砲を撃ちつづけていたが、程なく、三宅周防守と、ほか四、五名の味方が、何やら蒲団包みにした荷物や、莚ぐるみにした梱などを三、四箇ほど、すぐうしろまで担い上げて来たのを見ると、

「鉄砲止めッ」

と、四方の狭間へむかって、ふいに休戦を命じた。

なお漂う硝煙だけは立ちこめていたが、一令のもとに、そこはしいんと静まり返った。左馬介光春は、狭間から半身を乗り出すようにして敵勢を見ながら、

「寄手の大将、堀殿はあたりにおらぬか。かくいうは、守将の左馬介光春でござる。堀秀政どのに物申したい」

敵も急に喚声をひそめた。そして堀秀政の従兄弟にあたる監物のすがたが矢倉の下に立った。

「左馬介どのか。今ほどは寔にお見事であった。よい語草をおのこしなされたぞ。はや最期のお支度と察しるが、此方に物申したいとはいかなる儀か」

「やれ、監物どのか」

と、覗き下ろして――

「なお少々さし上げる矢弾はあれど、武門のごあいさつもはや打ち切る。やがて全城火となり申さん。そのあとでは、われらの骨すらお求めあるも難しかろう。ついては、可惜、灰となすにも忍びぬ品々を、貴公の手を経て、世にお戻しいたしたい。お受け取りあれや」

云い終ると、蒲団包みや、莚ぐるみの荷物を、細曳にからげて、狭間から下へするする降ろして来た。

堀監物は意外な感に打たれた。寄手の将士もみな一様な眼をそこにこらした。矢倉の下なる監物と、上なる光春とのあいだに、なお数語が取り交わされた。

光春はいう。

「いま、お手許へお渡し申した品々は、亡き光秀様が、故信長公より生前功あるごとに拝領いたした物ばかりでござる。――それに添

えてある目録を一見ねがいたい。——虚堂の墨跡、茶の湯釜、名物の茶入れ、ほかに太刀、その他数点」

監物は下で目録を見ていた。そして兵に荷を解かせ、照らし合わせて、すぐ答えた。

「お目録どおりたしかに受け取り申した。が、せっかくの御秘蔵を、憎き敵の手へお譲りあるとは、いかなる思し召しのことか。特に何人へお譲りありたいとかいうお望みでもあらるるか」

「何の」

と、光春は高き所から一笑を見せて、

「敗れ去れば天下さえ、次代の勝者に移ってゆくものを、一箇の茶器名刀の如き何かあらん——です。ただ、それがしの思うところは、かかる重器は、いのちあって、持つべき人が持つあいだこそ、その人の物なれ、決して、わたくしの物ではなく、天下の物、世々の宝と信じ申す。——人一代に持つ間は短く、名器名宝のいのちは世々かけて長くあれかしと祈るのでござる。これを火中に滅すのは、国の損失、武門の者の心なさを、後の世に嘆じられるを口惜しと、かくはお託し申す次第。——依って、その名器名刀が、やがて誰の御所有になろうと、左様なことは、ただ今、この世に暇する光春の知ったことではありません。——流玩転賞——それでいい。持つべき資格のある者に持たれ、世の流れにまかせてゆけばよいのです」

告げ終ると、光春は、はや死を急ぐらしく、そこの狭間から姿をかくした。

堀監物はあわてて、再び、矢倉の上へむかってこういった。

「左馬どの、左馬どの。なおお訊きしたいことがある。もういちど姿を見せられたい」

「おう、何事」

ちらと、また光春が、下を覗いた。

「ほかでもないが、いま受け取った数々の重器のうちにも、かねて明智衆にありと聞く、世に名高い吉広江の脇差は、目録にも見えぬが、お取り出しを忘れたのではないか。——もし御失念なれば、庫中からお持ち出しになる間、お待ちいたしてもよいが？」

すると、左馬介光春は、呵々と笑って、

「あれは平常、日向守様が、特に御鍾愛の名刀。わけて明智家には、由緒ふかい品でもあれば、やがて死出の山にて、光秀様にお会いしたとき、お手渡しいたさんものと思うて、わざと取りのぞいておいたのでござる。——はや火も本丸まで燃えついて来たようですから、余事を申しておる遑もない。監物どの、いざ、攻めかかられよ」

ことばの下から、ぐわんッと異様な音がした。光春は一閃の火光と黒けむりの裡にかくれ、矢倉の狭間のすべてから、同時に濛々と硝煙がふき出した。

次の一瞬には、轟然と、全楼ことごとく、一火となって崩れて来た。火薬を積んで自爆したのである。

坂本城は、明智方最後の一拠地だった。左馬介光春以下、一族とその股肱は、思い残りなく、生涯の終りを飾った。かくて地上にはこの日限り、明智方と名のつくものは、一城一兵もなくなったわけである。

自爆した矢倉の崩壊と共に、全城また火の海となったので、寄手の勢は、いったんその火勢から、囲みを開いた。

ところが、その焔の下から、まだ生きていた一人の敵が躍り出し

た。

「寄手の若い者に物申さん」

と、その老武者は、熱風の中から駈け出して、

「われは光春の叔父、明智 長閑斎光廉 である。欲しくば寄れ、この首をさずけん」

そしてりゅうりゅう槍をしごき、堀勢の一角へ猛突して来たのだった。

日頃、家庭の児女たちや、坂本の家中一般からも、「のん気なお方」といわれ「おひゃらくな御老人」と、まるで奥曲輪の玩具みたいに見られていた長閑斎は、この日、光秀光春の妻子から老幼すべての者の最期までを見届け終ると、やがて矢倉にのぼっていた。そして甥の光春に切腹をすすめて、その介錯をつとめ、さらにまた、三宅周防守らの将士が、すべて自害し終ってから、矢倉下の火薬に点火するという——最後の一役までもしていたのであった。

「やあ、口ほどもないぞ。当年六十七歳の老武者の槍先から逃げまどうような奴は、この先ともに世に生きていたところで、世の役には立つまい。われと思わん若い者なら、この首を取れ。取ってみよ」

長閑斎は、広言を吐きぬいていた。実際、彼の槍に立ち得る者もなかった。真実死をきめた人の働きには、老若の差もありとは見えない。まさに老獅子の奮迅に似ていた。

突き崩された寄手は、ついに鉄砲を揃えてこれを撃とうとした。すると堀秀政の旗本、薬師寺某は、

「さすがに、甥も甥なり、叔父も叔父なり、あわれにも、見事な死に振りよ。ねがわくは、あの入道首はそれがしに給われ」

と鉄砲組の狙撃を制して、一槍をもって立ちむかい、ついに突き伏せてその首級をあげた。

長閑斎は、さきに甥の光春を介錯した光春所持の刀を帯していた。首級はその品と共に、やがて、堀秀政の手から三井寺へ送られ、秀吉の実検に供えられた。

「死んだか。……この長閑斎も、おもしろい老人だったが、とりわけ、光春は惜しい男だった」

秀吉は、首と刀を前にして、左右の諸将にこんな思い出を語った。

「あれはもう——だいぶ以前のことになるが、光秀が初めて坂本城を拝領した頃、信長公のお使いで、この筑前が祝いに参ったことがある。そのとき、光秀は下へも措かずわしをもてなし、またしきりに、従兄弟の光春をも会わせたがって、何度も、左馬介を呼びにやったらしいが、ついに出て来なかった。——その帰りがけじゃ。わしが湖畔の道へかかると、松原の中で、茜の陣羽織を着た男が、余念なく、馬の稽古を励んでおる。この方の行列にさえ一顧もくれず馬ばかり飛ばしているのだ。——あとで聞くと、それが左馬介光春であったそうな。その時分から、わしもひそかに骨のある男と見ていたが、果たして今日、その真価を天下に示した。……もしこの男が、わしの麾下であったらと真実思う。しかしこう惜しまるるもまた人の華だが」

駄農

秀吉は三井寺に宿陣していた。十四日の夜はまたも大雷雨であった。坂本城の余燼は消え、墨の如き湖や四明ヶ嶽の上を、夜もすがら青白い稲光が閃めきぬいた。

もし、地上の現実を超えて、人の感情や幻想をも、歴史の影として書くことができるならば、この夜の凄い黒雲の中には、明智一党の軍馬がなお轡の音や喊の声を止めず、また本能寺方面にもただならぬ武者声が聞かれたであろう。そして叡山の根本中堂あたりには、かつてこの峰々で焼き殺された無数の僧侶、碩学、稚児、雑人たちの阿鼻叫喚もたしかに聞え、或いは哭き、或いは笑い、或いは闘い、それが電光と雷鳴をなしていたといっても、あながち過言ではないであろう。

なぜならば、京近畿の諸民は、明智氏の滅亡を知っても、なお明日の世がどう向いてゆくか、地上の修羅がいつ熄むか、大きくそれを見とおすことはできないのみか、むしろふたたび、信長以前の乱脈な風雲が世をおおうて来るのではないかと——夜の具をかぶりながら、この夜の雷雨に夜ッぴて脅えていたろうと思われるからである。

が、夜明けとともに、一天はきれいに拭われ、ふたたび暑い夏空となっていた。

この日は、十五日である。

三井寺の本陣から見ていると、湖の東岸に当る安土の方に、濛々と黄色を帯びた濃煙が揚り始めた。

「安土が旺んに焼けております」

哨兵の報に、諸将が廻廊に出て、秀吉以下、手をかざしていると、瀬田の山岡景隆から早馬があって、

「——今朝来、江州土山に陣しておられた北畠殿（信長の第二子信雄）と、蒲生殿の勢が一手になって安土へ攻めよせ、城下城塁に火を放たれましたため、火は湖の風をうけて、安土一円をつつんでおります。——が、すでに安土にはさしたる敵兵もおりませぬゆえ、合戦というほどな合戦は行われていないものと存じます」

こう情況を伝えて来た。

秀吉ははるかにその状を想像しながら、

「理由なき放火よ。信雄様はともあれ、蒲生までが、何をあわてて」

と、口のうちで、不機嫌な呟きを鳴らしていた。

しかし彼の眼はすぐ和んだ。信長が半生の血と財力をかけて築いた文化は、あらゆる意味において惜しまれはするが、秀吉にはやがて秀吉自身の力をもって、ふたたびそれ以上の文化や城廓を再現してみせる確信があった。その抱負は、このときはもう彼の肚にも充分な確信をもって描かれていた。むしろ今日を画して過去のものは過去に帰してゆく天意にたいして、新たな励みと感激を覚えた。

折ふしまた、山門の方から哨戒の将士が、一名の男を取り囲んでここへ連れてきた。

「小栗栖の百姓、長兵衛という者が、日向守の首級を、醍醐辺の畔で見つけたと申して、ただ今、それを持参のうえ、訴えて参りました。——この儀、君前までお取り次ぎを」

中門の守将は、直ちに駈けて、ちょうど縁に出て立っていた人々の下へ行ってひざまずき、そのまま秀吉の耳へ達した。

敵将の首を実検するには厳かな作法と礼をもってするのが慣わしである。秀吉は扈従に命じて、直ちに本堂の前に床几を設けさせ、やがて左右の人々と共に着席して、光秀の首を見た。

「……」

凝視するのみで、秀吉は何もいわなかった。ただ無量な感慨につつまれている姿であった。

この折、秀吉が床几を立って、

（主君信長を討った酬いを思い知ったか）

と、光秀の首級を杖で打ったなどということが、「豊鑑」には書いてあるが、嗤うべき筆者の臆測というしかない。

同じ臆測をするならば、秀吉が振り上げた杖は、むしろ首級の傍らにしたり顔して控えていた訴人の男に振り下ろされたろうと考えたほうが、まだ遥かに秀吉の心事に近い。

光秀の首を土中から掘り起してこれへ持って来た訴人というのは、年頃三十がらみ、風体から見ても、酒焦けのした、面構えもどことなく悪ずれている男だった。

当人の申したてでは、小栗栖村の百姓長兵衛と称えているが、元々百姓の家に生れ、農村の事に通じている秀吉には、ひと目見て、

（これは良農ではない。どこの村にもいる駄農というやつだ。かかる者に恩賞を与えて、郷土に誇らしめるのはおもしろくない）

と考えたことであろう。

事実、この長兵衛という男は、醍醐辺の百姓とも、小栗栖の庄屋の息子だとも、諸書に種々伝えられているが、いずれにしても真面目な農でないことは確からしい。今もむかしも、農村にはかならず一人や二人はいるぶらぶら者――怠け者で、すれからしで、屁理窟ばかりこねて、勤勉な農をダニのように邪げている――いわゆる駄農の類いには違いないようである。

従来の通説によると、とかく戦国期の百姓は、平常は田畑に出て働いているが、附近に戦争があると忽ち土匪化して、弱い落人を襲ったり、戦死者の持物を剥いだりすることを稼ぎとしていたかの如く伝えられている。しかしこれは史家の大きな誤認だと思う。日本の百姓の郷土における悠久なすがたを、他民族の百姓と同列に視、或いは唯物史観に陥ちた史家の誤謬にほかならぬものである。決して、過去の史家にいわれたような弊風と悪質な生態が、当時の農村そのものであったわけではない。

ただこういうことはいえるかと思う。

戦乱による「時の敗者」にとっても、悪質な闇の横行者や怠け者にも、当時の農村は全国的によい匿れ家にされていたという事実である。滔々とこれらの者が流れこんでいたには違いない。だが、こういう帰郷者や外来者と、祖先以来そこに住んで、黙々と土のみに天命を託して、五穀を祷り耕していた純然たる百姓とは、当然、区別して考えられねばならない。室町以来、一戦また一戦あるごとに、夥しい不純が純の中へ割りこんで来て農村の姿を殺伐化したが、その荒びきった時流の底にも、古来からの農は、依然粗壁の中に貧しい燈を細々ととぼして、時代の物音に脅えながらも、本然の勤めと農の心は失われていなかったことは確かである。――さればこそ時移れば、さしもの濁流も、ふたたびもとの純に澄むのであった。

「光秀の首はどこから持って来たか」

秀吉の問いをうけると、小栗栖村の長兵衛は、待っていたように幾つも頭を下げて、百姓に似げない弁舌で答えた。

「醍醐道の藪の畔へ、誰知るまいと埋めておいたやつを、後から掘り返して持って参りましたので。はい」

「どうして、そこに埋けてあったものが、すぐ分ったのだ」

「それや分るはずでございますよ。小栗栖村の大竹藪を、日向守やほか七、八騎が通るところを、こいつと見定めて、竹槍で一突きくれたのも、かく申す長兵衛でございますからね」

「おまえが竹槍で光秀を突いたというのか」
「へい、左様で」
「よく致したなあ」
「そりゃあ、大将様の前でござんすが、少しばかり腕にも覚えがありますから」
「百姓もし、腕にも覚えがあるとは、おまえはなかなか隅に措けないしれ者だな」
「しれ者たあ、何でございますか」
「百姓らしくもない、喰えん奴じゃと申すことだ」
「へへへ。土地の百姓どもときては、意気地なしの、腰抜けばかり揃っておりますから、たとえ、明智方の大将株が、落武者となって通ると分っても、こいつに、竹槍をつけるなんという度胸ッぷしのあるやつは一人だっていやしません。憚りながら、もしこの長兵衛が、音頭を取って、野伏りどもを集めなかったら、日向守はまだこうして、首になってはいなかったろうと存じます」
「仲間の野武士は多勢か」
「五十人の余も狩り集めてやった仕事なんで。へい」
「では、汝一名のてがらというわけでもないな」
「左様でございます。その五十人の奴らは、てまえが帰るのを村で首を長くして待っておりまする」
「ふム。何で待っておるのか」
「てへへへ」
と、長兵衛は、自分の頸すじを平手で叩きながら——
「御大将には、申し上げかねますが……その、御褒美の金の割り前をもらおうってんで……」
「褒美か」
「へい。何分、よろしく」
揉手をして、また平伏した。
秀吉は、左右に命じて、首を首桶に納めさせ、やがて云った。
「長兵衛」
「へい」
「汝は、酒好きだろう」
「すこしばかりは」
「遠慮するな。飲みたいばかりに働いたことだ。きょうは存分飲んで帰れ」
と、傍らの福島市松とほか二、三名の荒武者を選んで命じた。
「この男に、酒一斗与えて、飽きるほど飲ませてつかわせ。飲み切らぬうちはそちたちの刀にかけても帰すな。飲みほしたら門前から抛り出してやれ」
「かしこまりました」
「あ。……た、大将様。御褒美のお金は」
「追って、小栗栖村一同の村民へ施与いたすであろう。家臣をつかわして地頭名主へ手渡してやる。汝に持たしては、途中、一斗の酔でこぼしてしまうに違いない」
「さッ、立て。飲みに来い」
荒小姓の福島市松などは、左右から彼の襟がみをつかんで、面白半分に何処かへ引っ張って行った。

桔梗分脈

光秀の首は本能寺の焼け跡に曝された。水色桔梗の九本旗がここの暁に鼓譟してからわずか半月の推移であった。

もとより見るにまかせてあるので、市民は朝から夕べまで蝟集した。それだけで充分このことの政治性はあった。ひとたびは光秀の逆を道義に照らして罵った者も、いまは口の裡に称名を念じて帰った。稀れに腐屍の下へ花を投げてゆく者もあった。警固の武士もそれを見て咎めるようなことはしなかった。

京都を中心とする残党の詮議なども、極めて短期間にすまされて、より大きな意味の人心転換がはかられていた。生前、光秀と親交のあった吉田兼和や里村紹巴などの召喚されたことが、ちょっと民間の神経をとがらせたが、これも即日、

――咎めなし。

ということで帰されていた。

秀吉の軍令は簡にして明であった。職に励め、悪事はなすな、紊す者は斬る――の三則に尽きている。そしてまた光秀の場合とちがっていることは、京都に入ったからといって、すぐ地子銭の免税を布告したり、五山や公卿たちへ献金したりするような媚態のない点だった。いや彼はまだ正式に信長の葬いをしていないのである。この大葬はただ兵力によっては出来ず、また彼一名の名をもってするわけにもゆかない。

すべてはその後でという肚であろう。殊になお中央の大火はようやく鎮まったものの、飛火は各州の国々に及んでいる。

柴田、佐久間、前田。また徳川、滝川、毛利、長曾我部。なお信長の遺子たる北畠信雄とか神戸信孝とか、親族たちの意向から、さらに、その間に伏在する諸武門の心態など、これをいちいちつぶさな思考に糺して望見していたら、到底、手の下しようもない千波万波というほかはない。天下の相貌はまだまだ決して一旦の狂瀾からもとの平静に帰ったわけではないのみか、信長逝き、光秀去って、ふたたび全土三分の大分裂を来すか、或いは、室町中期のもっとも悪い一時代のような、同族抗争と群雄割拠の状が再現するにいたるかも知れないと思われるようなものすらある。

かかる中に、秀吉は数日三井寺からうごかなかった。

十七日には、ここへまた、明智方の老臣斎藤内蔵助利三が、捕われて引かれて来た。

秀吉は、この老虜将の白髪をあわれみ、

「望みは」

と訊いてやった。

「ただ、死のみ」

という利三の答えだった。

訊問によってわずかに彼が知り得たところによると、内蔵助利三は十三日山崎に敗れた後は子息の利光や三存とも別れ別れになり、江州堅田の民家にひそんでいたところを捕えられたものである。身には幾カ所かの矢傷槍傷を負い、毛髪は麻のように白く、見るからに憔れであった。

十八日、洛中を引きまわし、後、首級は粟田口に梟けられた。

ここに市井の一小事件があった。

首の紛失である。

粟田口に梟けられた斎藤利三のそれは、本能寺から移して来た光秀の首級と並べられていたが、曝されたのはわずか半日、その夜、何者かに盗まれてしまった。

「明智党の仕業であろ」

「まだ残党がいるのだ」

洛中の者は、詮議の苛烈を予想して恟々としていたが、このことについては、存外、その後さしたる余波もなかった。

ところが、それに安心し出した頃になると、だれいうとなく、

「首を盗んだのは、画家の海北友松らしい」

という噂がたった。

友松は当時洛北の一寺院に住んでいたが、そこを訪うた者の言によると、彼は依然たる貧乏と画三昧のうちに慎んでおり、それについて訊ねてみても、自分がしたともいわなければ、自分ではないともいわない。ただ笑っているのみであった。——ということであった。

前々から光秀とは心交を契っていた彼ではあり、内蔵助利三とは取りわけ親密だった友松なので、

（てっきり、彼が）

という当然な臆測が生んだ風説にはちがいないのである。けれどまた、当人がどこかそれを肯定している容子であるから、察しると、案外、世間の考えが中っているかも知れない——という者もあった。

しかし京都守護の軍から友松へたいしてべつに召喚もなく過ぎた。為に、洛の内外は、日ならずして、前にもまさる平穏に返っていた。

——これはずっと後の余談になるが、斎藤利三の末娘は、お福といって、やがて稲葉正成に嫁した女性である。

良人の正成は小早川秀秋に仕えていたが、関ヶ原の役にやぶれて牢浪の果て、妻のお福は二代将軍秀忠の息竹千代の乳人になって柳営にあがった。有名な老女春日局はこの女性なのである。ひと年、上洛して天顔にまで咫尺するの栄すらになった。そのおり、この春日局は、いまは亡きひとながら海北友松の遺族をたずねて、

（天正十年六月の父の忌日をまつるたびに、あなた方の御先代友松どののお情けも思い出され、その御芳志は今もって忘れておりませぬ）

と、手土産の金一封を置いて東へ帰ったということである。

これをもって見れば、いよいよ海北友松の——笑而不答——の態度には、その陰にひとつの事実があったことは確からしい。

明智氏は亡んだが、桔梗の根は諸家に分脈されている。そのうちにも妙なるものは、後に伽羅沙とよばれた細川忠興夫人である。父光秀が叛旗をあげた日から最期にいたるまで——いやその後々までも、夫人がいかに世の批判と家庭のあいだに立って人知れぬ苦悩をしたかは、想像に余りあるものがある。それは一篇の戦国女性史をもってしなければ到底語りきれないものであるから、ここではこれ以上及ばないことにしておく。

母の城

三井寺の秀吉は、その本陣をそっくり十数隻の兵船の上に移した。馬も乗せ、金屏風も乗せた。十八日のことである。目的は安土への移動だった。

陸路にも軍勢が蜿蜒と東進していた。微風にうごく旗幟を乗せて湖上を行く船列と、湖岸をすすむ陸の行軍と——両々相映じてゆくさまは壮観というもおろかであった。

が、安土はすでに焦土である。ここに到着するや、ひとりとして、

憮然としないものはなかった。

金碧の天守閣もない。外廊の諸門も総見寺の楼廂もほとんどあとかたなく焼けている。城下町はもっとひどい。野良犬の漁る餌もなかった。南蛮寺のばてれんがうつろな眼をして歩いている影が妙に目につく。

ここにあるべきはずの北畠信雄は、蒲生賢秀とともに江州の土山にたてこもり、いまなお伊勢伊賀の叛乱軍と抗戦中なることも来て見てわかった。

安土の放火は、直接、信雄が指揮したのでもなく、蒲生賢秀の意志でもないことが同時に判明した。一部軍隊の行為には違いないが、何か命令を穿きちがえたものか、敵側の流説に乗ぜられて、逸まったものらしく想像された。

「心ない業だ。取り返しもつかぬ。返すがえすも惜しいことを」

秀吉と同行の神戸信孝はしきりと嘆いたが、それでもこの放火が信雄の手でなされたものでないことが判明してからは、よほどその憤激もなだめられたようである。

秀吉はといえば、彼の志向はすでに江北から美濃方面へ転じている。

ここに着くとすぐに堀、中村、宮部などの諸隊に命じ、江北の山本山城へ急がせていた。明智の一将阿閉淡路守と、それに組みした京極高次一族などの逃げ籠っている小城である。

光秀の乱に呼応して起った若狭の武田元明は、丹羽長秀の佐和山の城を奪い、また、阿閉淡路守も同じ頃、秀吉の留守城を襲って長浜を占拠していた。

いくばくもなく、中央の戦況は俄然非となり、光秀も討たれたと知るや、長浜の阿閉淡路守はそこを出て、そこから約三里の地にある山本山城へ移ってしまった。もちろん京極一族と共に。

かくて猛烈な寄手の攻囲をうけると、山本山城は、脆くも一日半で陥ちてしまった。阿閉淡路守は斬られ、一子孫五郎は湖畔から船でのがれようとしたところを、里の者に妨げられた上、なぶり殺しにされてしまった。また京極高次も、坂田郡の寺内で捕われかけたが、ちょうど追手の堀秀政は、以前、京極家に仕えていた関係もあったので、その旧恩によって辛くも難をのがれ、これは越前の柴田勝家を頼って遠く落ちのびて行った。

安土滞陣もわずか二日だった。船列はふたたび湖を北した。秀吉はいよいよかつてのわが家たる長浜の城へその本軍をすすめた。

城は無事だった。敵影もなく、すでに味方の兵も入っている。

ここへ金瓢の馬簾が上がると、城下の民は狂舞して、彼が船から城へ通る道すじへ溢れ出て来た。女も子供も年寄も土下座して迎えた。涙して顔をあげ得ない姿もある。歓呼して手を振るもあった。われを忘れて踊り出す領民も見えた。

（よかったよかった。みな息災でうれしいぞ。お前たちもよく悴えた。わしもこの通り達者だぞ）

秀吉の眼はそういっている。領民の熱意にこたえるため、かれはわざと馬上で通った。こういうときの領民は国主の慈眼を読みとることに甚だ賢い。語らずといえども領主の心はよく知るのである。

が、秀吉には、重大な不安も残っていた。長浜城へ入ってからそれはなお濃いものになっていた。一刻も晏如としてはいられない寂しさと焦躁にかられていた。

「知れたか。――母上の御安否は？」

ここの本丸に坐ってからは、出入する諸将にたいして、彼はたえずこう訊ねた。――明智軍の襲撃にあうまでは、この城中につつがなく暮していた老母や妻などの身の上がにわかに案じられ出して来たのであった。

「百方、手分けして、お行方を求めさせておりますが、まだ確報もございませぬ」

と、いまも彼の前にひとりの将が復命していた。

「領民の内には薄々知っている者がおりはせんか」

と、秀吉はいう。

「――と、思われましたが、存外、その領民にも皆目得るところがございません。御一同して、ここをお遁れ遊ばす折には、極力、そのお行き先を秘して参られたもののようで」

「なるほど。それはそうかも知れんな。領内の者にそれが洩れていたようだったら、忽ち阿閉淡路の手勢があとを追って危害を加えたにちがいないからの」

秀吉はまた他の一将を迎えて、こんどはまったくべつなことを話していた。この日、佐和山城の敵もそこを放擲して、若狭方面へ逃走したということであった。で、そこも以前の城主丹羽長秀の手に戻ったという報告をいま耳にしたのである。

そして、夜に入ってからであった。

小姓組の石田佐吉と、ほか四、五名の同輩が、何処からかあわただしく立ち帰って来た。

秀吉の室まで来ないうちに、小姓溜りや廊下のほうで、何やら歓びあう声が沸いている様子に、心待ちに待っていた秀吉は、

「佐吉がもどったか」

と、左右にたずね、

「なぜ早くこれへ来ぬか」

と、叱りに遣ったほどだった。

石田佐吉は近郷の出生である。従って、浅井郡や坂田郡の地理にかけては誰よりも詳しい。そこで彼はこんなときこそ知識を生かすべきだと考え、みずから望んで、主君の母堂や夫人の落ちのびた先を昼から捜しに出ていたのであった。

心のふるさと

石田佐吉はやがて秀吉の前にかしこまっていた。

「ようやく、さる所で、みな様の御所在を訊きあててまいりました」

と述べる彼の復命によると、秀吉の母堂と寧子夫人などの眷族は、ここから約十余里もある山奥に潜んでいるというのである。長浜から供して行った家士や侍女などもみな一つ所にいて、今日まで敵の目をのがれ、からくも一同は生命を保っている様子であるとも云い足した。

「佐吉」

「はい」

「そちはどこでそれを訊き出して来たか」

「寺の者から聞いてまいりました」

「寺とは」

「幼時わたくしが稚児として養われていた真言寺の三珠院でございます」

「よいところへ目をつけおった。すると、母や寧子の潜んだ先も、

寺の縁つづきとみゆるな」

「仰せのとおり、浅井郡の大吉寺という山寺の由にござりまする」

「大吉寺とは、聞かぬ名だが、詳しくは、どの辺か」

「坂田郡の七条、鳥脇などを経て、伊吹の山裾へつきあたります。すると、北国街道が横たわっておりますが、これにならわず道を横ぎって、なおも伊吹の西麓へ登ってまいるのです。――その辺までも、お城からおよそ六里はございましょう」

「くわしいな、汝は」

「三珠院にいた時分は、あの辺をよく飛びあるいたもので、いわば童時代の古戦場でございますから」

「うム、うム」

と、うなずき続けて――

「そこからまだ山奥か」

「なお六、七里、めったに里人も通わぬ道を参ります。姉川の上流梓川の水は、渓をせき淵をなし、道に沿うておりますが、どこまで行っても水源に到りません」

「待て待て。そう聞いても呑みこめぬ。明日の道案内に従いて来い」

「おやすいことですが、わたしよりももっとよい道案内がおりまする。それを迎えにお遣り遊ばしては」

「たれだ、それは」

「美濃衆の広瀬兵衛にござります。あの辺は美濃ざむらいの広瀬が領地の由を、三珠院でも申しておりましたが」

「いや、美濃へ使いをやっている暇はない。明日にも秀吉はそこへ参りたい。広瀬へは挨拶だけを遣っておこう」

「明日、何刻ごろお出ましになりますか」

「朝立てば、夕には、母にも妻にも会えようが」

「たといお馬でも、一日では参れません」

「早立ちでもだめか」

「到底――」

佐吉が首を振ると、

「では。――今からすぐ出向こう。今からなら、あすの夕には行き着けよう」

秀吉はいうとすぐ座を立ち上がっていた。

やもたてもない気持ではあろうが、余りといえば急である。同席の諸将はあっけに取られた顔だし、扈従の家臣たちは、支度にあわてふためいて、その忙しなさは一方ではない。

「あとは、たのむぞ」

堀秀政などをかえりみながら、秀吉は小姓のかける陣羽織を背にうけていた。そしてなお云った。

「大津には彦右衛門をのこしてあるし、安土には神戸どのが止まっておられる。佐和山といい、この長浜といい、はや抑えは心配ない。――で、ちょっと母を迎えに行って来るゆえ、両三日のいとまをくれい」

「行っていらっしゃい」

諸将はそういうしかない。

総立ちで、城門まで見送った。そのあいだ、人々のつらつら思うには、いったいこの羽柴という大将はどこまで続くものだろう。背中から眺めても、いっこう見ごたえもない体格なのに、そのどこからこういう気力や体力が湧いて出るものか――という驚嘆に似たあやしみであった。

「――なんと大仰な。母を迎えにまいるのは秀吉のわたくし事。……そう大兵を供して参るには及ばぬことだ」

秀吉は城門を出るとすぐ大声でどなっている。須臾の間に勢揃いして待っていた六、七百の兵列をそこに見たからであった。山崎、坂本と連戦して来て、安土でもほとんど休むいとまもなく、早暁そこを立ってこれへ来たばかりの今夜である。兵の顔はまだみな泥の如く疲れきっているのである。秀吉はそれをも察してそういったのかもしれない。

「供は、五十騎もあればよい。ただし小姓どもはなるべくみな来いよ」

すでに馬上へうつり、松明を持つ人々が列の先に立つわずかな間を、秀吉はそう告げていた。あらかたの兵はあとに留むべしといった。

「それは危ない。五十騎では少なすぎる。この夜道――わけて伊吹の山近くにでもなれば、なおいかなる敵勢が潜んでおるかも知れぬに」

堀秀政も池田勝入も、口をきわめて諫めたが、秀吉には、その懸念はないとする確信があるものの如く、「案じるには及ばぬ」とのみで、やがて、松明の火光を先に、長浜の城門から東北方の並木道を一路遠ざかって行った。

宵から四更にかけて、秀吉はさして急がずも五、六里の道は捗どっていた。石田佐吉がさきに走って、七尾村の三珠院を叩いたのはまだ真ッ暗な時分であった。寺僧の驚きは一通りではあるまい――と思いのほか、何ぞはからん、山門をひらくと、寺内は煌々と燭をてらし水を打ち、清掃いたらざる所もない。

「たれだ、わしの立ち寄ることを、先触れしたものは」

「佐吉にございまする」

「そちか」

「はい。この辺で殿の御休息あるはまちがいなしと思い、足早な若党ひとり先へ走らせて、五十人前の弁当と、お湯漬の調えなど命じておきました」

この寺のお稚児だった佐吉が、秀吉に貰われて長浜城の小姓部屋に入ったのは、彼が十三のときだった。

それから八年目の今日である。石田佐吉も二十一歳の若武者とはなった。しかも事理に明るく敏才衆をこえている。秀吉も常に、

（市松も虎之助も助作も、みな武勇すぐれておるが、その中の佐吉はすこし異っておる）

と、いつもいっているほどである。

この佐吉を、親代りともいえるほど、幼時から育てた三珠院の住職は、いまなお健在だったので、今日の佐吉を見て、よろこぶこと限りもなかった。

同時に、久々な城主の来訪でもあったので、寺中をあげて款待につとめたことはいうまでもない。

けれど秀吉の気持は、唐突を知って、ほんの小憩を求めに立ち寄ったに過ぎないのであるから、従者の弁当を調えさせ、自分も湯漬の馳走になって、一碗の茶を喫し終ると、

「世話になった。いずれ沙汰するであろう」

と、直ちにそこを出発した。

この頃となっても、夜はまだ明けきっていなかった。ただ目のまえの伊吹山の線がほのかな暁紅と薄浅黄の空にはっきり浮き出して

見え、耳に小禽の声が聞かれて来たにすぎない。道の露はふかく、そして樹の下は暗かった。

住持のいいつけで、山にくわしいという若僧がふたり、わらじ穿きで、松明のさきに立ち、

「大吉寺まで御案内申しまする」

と、伊吹の腰へ上って行った。その僧が指していうには、

「伊吹に連なる彼方の山は国見といい、あのへんを東へ越えると、美濃の揖斐郡になります。——またこれから奥は草野ノ庄といい、むかし平治の乱に源義朝の父子が匿れたのもそこだと云い伝えられております」

秀吉は楽しげに見える。一歩一歩、母や妻に近づいていることを意識してであろう。道の嶮しさも身のつかれも知らない容子である。そして静かに明けて来た伊吹の西谷を行くほどに、ここはもう彼にとって母の懐かのような心地がするらしかった。

さきに石田佐吉がいったことばの通り、梓川の渓流は、それに沿って溯っても溯っても水源らしくならなかった。却って、行くこと数里にして豁然とあたりは展け、山奥とも思われない広々した谷あいへ出た。

「あれが、かなくそ山です」

つき当りの巍峨たる一峰を指して、案内僧がひたいの汗を押し拭った頃、陽もちょうど中天、真夏の暑さは昇りつめていた。

「まだよほどあろうか」

「この辺から東草野ですが、大吉寺までは、なお二里もございましょう。何しろひと口に草野ノ庄といっても、上草野、東草野にわかれ、東西二里、南北五里というひろい谷でございますからな」

僧はまた先に立って行く。道は狭まるばかりである。この辺からは騎馬では無理というので、秀吉も扈従の家臣も徒歩になったが、そのとき、何を認めたものか、左右の者は、にわかにどよめき立って、

「敵らしいが」

と、噪ぎはじめた。

良い息子

ひとつの山陰を旋って、次の視野へ出たときなのである。——見るとなるほど、彼方の山腹にひとかたまりの兵が屯していた。向うでも驚いたとみえる。遠くこちらの一行を知るととたんに総立ちになっていた。何か指揮するような表情を示している者だの、また幾人かの兵はわらわらと何処かへ駈け散らかってゆくらしくも見えた。

「伊吹へもだいぶ逃げこんだと聞く。その阿閉勢か京極の残兵どもであろう」

秀吉の供人たちは、あり得ることとして、直ちに、隊伍の中の銃手を前に繰り出した。すぐ打敷けと命じるのだった。すると前の方では、かの道案内の二僧が、

「敵ではありません。草野ノ庄を守っている哨兵です。大吉寺から出ている見張りの衆ですから撃ってはいけません」

と、手を振りぬいて後の者を制しながら、一方、あなたの山腹へ向っても、出せるだけの声を張って、何やら手真似で意志を送っていた。

すると、山腹に屯していた兵の影は、崖をくずれ落ちる石ころの

ように、一斉にそこを降りはじめていた。まもなく背に小旗を差した一将が此方へ向って駈けて来る。近づくに従って味方にちがいないことが確認された。味方である。長浜の留守にのこしておいた一家臣にちがいない顔を秀吉も思い出していた。

もとより山寺である。大吉寺は大吉堂ともいい、一宇の堂と、破れはてた僧房一棟しかない。

平治の頃、義朝父子が匿れたという頃には、この山中にも、四十九院の殿舎があったと古記はつたえているが、いまは野瀬とよぶ渓流に臨むそこの小部落をあわせてもそんな戸数はなかった。

雨が降ると、雨がもる。風がふくと、壁や梁の土がこぼれる。そうした本堂に、寧子は老母に侍いて住み、僧房のほうには、身内の幼い者や年寄や侍女たちを住まわせていた。また長浜からついて来た家臣やその郎党たちは、附近に小屋を建てたり、部落の農家に分宿したりして、ともあれ二百何人という大家族が、ここに半月以上の、きのうまで予想もしなかった必死の生活を体験していた。

六月始め、本能寺に！　――とあの乱が聞えたときにはもう長浜へも明智軍の急潮を目前に見ていたのである。――何をするまもありようはない。はるか中国にある良人にあてて、妻として、寧子が一書をしたため送ったのが、実にやっとの暇であった。老母を負い、眷族を伴い、家臣を励まし、城をすててのがれ出るにあたっても、もとより持物などは顧みていられなかった。老母の着換えと、良人が君公から拝領した品などを、馬の背に積ませたのがようやくであった。

この場合、誰よりも悲壮な覚悟と大きな責任を「女の道」に感じていたのは、いうまでもなく寧子である。家の留守をあずかり、良人の母に仕え、なお多くの召使を擁している身として、

（どうしたら戦陣にあるわが夫に、妻よ、よくやったと、欣んでもらえるだろうか）――を生命にかけて念じたにちがいない。きのうまでは、良人は戦場に在り、自分たちは国内にある、という観念でいたのが、一朝にして、そのけじめもなく、居る所いずこも戦場と化したのである。

が、これが戦国のあたりまえな相であった。戦国に生活してゆく人々にとっては、たとい一時の狼狽はしても、

（夢のような）

と、おろおろするようなことはなかった。あり得ぬことと嘆き沈んで、滅失に囚われてしまうような不覚者は侍女のなかにもいなかった。

ただ、母の身を、何処へ移しまいらせようか――それには寧子も心をいためた。一時、城は敵手にゆだねても、あの良人のことである。いつかかならず奪回する。その信も固かった。けれど万一、老母の身にひとすじの矢でも負わせたら取り返しがつかない。留守をあずかる妻として、良人にあわせる顔はない。それをのみいっぱいに思った。

「ただ母様を。――母様のお身を護って給も。寧子の身などかもうてくれるな。いくら惜しい物とて、財宝には心をひかれまいぞ」

寧子は、召使う女たちへも、一族の誰彼へも、こう諭したり励ましたりして、必死に道を東へ東へ急いだのであった。

長浜の西方一帯は湖だし、北は敵の京極や阿閉の与党が牽制しているし、美濃路の方面はまったく動静が知れないし、必然、伊吹の

山ふところを望んで逃げてゆくしかなかったのである。

勝者の一族たる場合は、よくぞ武人の妻にとあらためて思うほど曠れた幸にもつつまれるが、ひとたび敗者に立ったときの——わけても居城を逐われて落人になったときの——惨たる姿と心根とは、平常、野に働いたり、町に物を商っているものには、到底、想像もできないみじめさであった。

その日から食には飢え、野伏りや敵の斥候に脅かされ、暮れては雨露のしのぎにも困り、明けては血にそんだ白い足をたがいに励まし励まし逃げるのであった。

ただこういう辛酸のなかにも毅然として失わないものは、

（もし敵に囚われたら）

と、そのときの一つの覚悟と、

（時あれば、ふたたび、敵にものみせて）

と、ひそかに誓うやがての意気であった。不屈な女の一心だった。平常の臙脂や黒髪のうるわしさも、もしこの日にしてその芳香を心から発するのでなければ、ただ醜しさをかくす似而非のものと、女と女のあいだですら蔑み、卑しむ気風があった。

野瀬の部落は絶好な避難所であった。遠く哨兵を立たせておけば、まず敵の急襲にあわてる惧れはない。真夏なので、夜の具、食糧なども、何とか間に合う。

ただ佗しさは、余りに人里と隔絶されているため、以後の世情が皆目知れないことであった。

（使いもはや帰りそうなもの）

寧子は西の空へ想いを走せた。長浜を落ちる前夜、あわただしく一書をかいて中国の良人へ持たせてやった使いの消息もあれきりだった。或いは途中で明智の手にとらわれたか、ここの匿れ家を探し当てないものか。朝夕を千々に思うのだった。

ところが、それより先に、山崎に合戦があったと近頃聞えて来た。ひそかに里へ出した一家臣が三珠院で聞いて来たことである。それを耳にしたとき、寧子の血は皮膚の表にまで色になって出た。

「……さもあろうよ。あの子のことじゃ」

これは老母の言葉であった。さも当然としているかのようにである。とはいえ、髪もいつか真ッ白になりかけているこの母は、朝起きるから寝るまで、大吉寺の本堂にべたと坐ったままほとんど身うごきもせぬ姿であった。

ひたぶるに、わが子の戦捷を念じていた。いかに世は乱れても、自分の産んだ子が大道を踏みちがえるようなことのないことだけは固く信じているものの、いまなお寧子にうわさするときは、むかしの口癖をそのまま、あの子あの子と秀吉をよんでいるこの母であった。終日の祈念は一すじに、

（この年老いた身に代えても）

と、念じているにちがいない。——そして折々には、ほっと正面の本尊仏を仰ぎ見ていた。大吉堂のそれは立像丈余の聖観音であった。

「お母さま。何かしら近いうちに、ここへ吉報があるような気が寧子にはいたしますが、お母さまには……」

すこしの暇でもあれば、彼女も母のそばへ来て、ともに掌をあわせていた。ここへ移ってからの彼女は一切召使の手をからず、母の食事から夜の具の上げ下ろしまでみなしていた。また間には、家中の妻子や病者を見舞ったり、とかく意気銷沈しやすい郎党たちを

も励ましてまわるなど、まったくもう一度、秀吉がまだ貧乏時代であった頃の一主婦に立ち還っているすがただった。

「ほう。そなたもそう思うか。この母もそう思うてじゃ。何という故は知らぬが」

「わたくしは、この聖観音さまのお顔を仰いで、ふとそんな気がしてまいりました。おととといよりは昨日。きのうよりは今日。一日ましにはっきりと、わたくしたち母子へ御微笑を投げかけられてお在すような……」

朝、母子して、そんなことを話していた日であったのである。まことに虫の知らせというものであったかもしれない。

日没のはやい谷陰の部落は、もう御堂の壁に暮色をたたえ始めていた。

寧子は内陣の陰で、燭に燧石を磨っていたし、老母のすがたはただ一つ暮れ残ったもののように、聖観音の下にじっと祈りの姿をつづけている。

非常な迅さで来る跫音がそのとき外の方に聞えた。少なくも十名足らずの武者らしい。老母ははっとしたように振り向いた。寧子も御堂の縁へ出て立った。

「――殿がこれへお出でになりますッ。間もなく殿が見えられますッ」

境内中へひびけとばかり呼ばわるほどな声だった。毎日、二里ほど先の下流まで見張りに出ている哨兵の者たちである。みなのめるような姿勢をして、傾いた山門を駈けこんで来たものだったが、とたんに彼方の濡縁に寧子のすがたを見たので、そこまで寄る間も惜しい気もちで、みな口々にそこから叫んでしまったのであった。

「お供には、御家中の誰彼をひきつれ、およそ五十騎ほどで、お休みもなくこれへお急ぎ中です」

「殿をはじめ、供の衆も、みなすばらしいお元気で」

「とこうする間に、すぐお着きになりましょう。夢かのようですが、夢ではありません。まさに、中国から攻めのぼられて来たわが殿です」

かかる声々は、濡縁の前を去って、やがてまた、狭い寺中はおろか、裏の武者小屋から、部落の家々にまで伝わって行ったが、その伝わることの迅さは、たちまち大吉寺を中心に、野瀬の部落全体から、何ともいえない声が、わあッと一斉にわき揚ったのでもよくわかる。

「母さま」

「……寧子よ」

老母と彼女とは、その歓声をひとつの声とも思われず、相抱いてうれし涙にむせんでいた。

老母は聖観音へ額ずいた。寧子も心からひれ伏した。はや現もなげなその姿へ、母は母らしく促した。

「寧子。いかにこの時とはいえ、あの子も、久しぶりにそなたを見るのじゃ。そのすがたは余りに窶れ過ぎて見えよう。いそいで髪など撫でての……」

「はい。はい」

「そして、御門前まで出て、お迎えしたがよい」

寧子はいそいそと庫裡の水屋へかくれた。髪をなで、筧の水を掌に溶いて、瞬間に薄化粧をほどこし、帯、襟もとも直してそこから藁草履を穿いた。

一族の主なる者、家士はことごとく、すでに門前に出て、年の順、身分の順に、出迎えの列をととのえている。附近の木の間木の間にも、老幼の顔がいっぱいに覗いている。その多くは部落の者たちであった。何事が起るのかと眼をまろくしている様子である。

しばらくすると、また二名の武者が、先駆としてこれへ報らせて来た。——もうすぐそこへ殿を始め御一同お見えになります、というのである。寧子の前へ告げ終ると、その者たちもまた列の端に加わった。急にそこはひそまり返る。誰のひとみも一すじの道の彼方にさす影を待っていた。寧子はもう眼にあやうげな潤みをたたえ、瞼にほのかな充血を見せながら、求める人々の肩の陰に佇んでいた。

間もなく一団の人馬はこれへ着いた。汗と埃のにおいはまた、騒然たる出迎え人のどよめきに包まれて、大吉寺の門前は一時、馬つなぎにいななく馬の影と、相擁して無事を祝しあう人と人の影で埋まった。

秀吉もまたその一人だった。彼は、部落近くから背を借りて来た駒を、いま山門の前で降りると、それを従者にあずけ、すぐ右側の列の端に並んでいた幼い童のひと群れを見かけて、

「どうだ、山の中は。遊び場がたくさんあってよかろう」

と、はなしかけた。そして手近な所にいた少年や女童の肩を打ちたたいた。

これらは皆、家中の者の家族だった。で、もちろん、それらの者の母親や祖母、老父なども立ち交じっていた。秀吉はその顔を一つ一つ見てあるくように歩を山門の石段の方へ運ばせながら云った。

「よし、よし。みなつつがなくこれにおるな。筑前も安心いたしたぞ」

それから左方の列へ顔を向け直した。そこには家士一同が粛然と頭を下げていた。

秀吉はやや声を高めて、

「一同、いま立ち帰ったぞ、留守中の難儀、察し入る。御苦労だったの」

列をそろえていた家士たちは、膝までの手を、さらに、膝の下まで下げた。

石段の上、山門のふところには、親族の老幼と、主なる家臣だけが迎えていた。秀吉は、そこでは左右へ向って自分の健康を示す笑顔を撒いて見せただけだった。わけて妻の寧子へは、ほんの一顧を与えたのみで、ことばもかけず山門を通った。

けれど、そこから先の良人の姿には、たえずつつましやかな妻の影が添っていた。ぞろぞろと従って行った小姓たちも、また一族の誰彼も、寧子のことばによって、みな休息につくべく去り、或いは、

「後刻、また」

と、縁の上で、礼のみを送って、各　の居るべき所へ姿をかくした。

天井の高い御堂の中に、低すぎる燭台がただ一つぽつねんと燈っていた。そのかたわらに繭のように真白い髪の人が朽葉色のうちかけを着て、ひそと坐っていた。いうまでもなく秀吉の母である。後にやがて子が太閤となったときは大政所とあがめられたひとである。

「こちらにおいでか」

妻に導かれていま濡縁へ上がって来た子の声がその陰でする。老母は音もなく立ってその姿を入口の端近くへ移した。

秀吉は蔀の下で、陣羽織の埃を払っていた。尼ヶ崎の陣中で剃った髪はまだそのまま陣頭巾につつんでいる。寧子は良人のうしろへ廻って、そっと、

「お母さまが、板敷までお迎えに出ていらっしゃいます」

と、小声で注意した。

秀吉はあわてて母の前へ寄ってひれ伏した。どうしたのか何もいうことができなくなっていた。やがてようやく洩らしたことばは、

「母上。御難儀をおかけいたしました。おゆるし下しおかれましょう」

という一語に過ぎなかった。

老母はすこし膝を退げた。入口まで立って出迎えた礼を、もういちど繰り返して、わが子に手をつかえるのであった。わが子とはいえ、この際の礼儀は、凱旋した家の主を迎えるのである。こうするのが武門の家風でもあった。つね日頃の単なる親子としてではない。

けれど秀吉は、ここに無事な母の姿を見たとたんに、つい骨肉の情愛それだけになって、老母の膝へ寄りかけたのである。しかし老母の恭謙な礼儀はそれをそっと拒むかのようにして、こういうのであった。

「お許様もつつがなく、まずはようお帰りなされた。……けれど、この母の難儀や無事を問う前に、なぜ、右大臣様（信長）の不慮をお語りなさらぬか。また、憎い敵の光秀を討ったのか、まだか。……それを告げては下さらぬか」

「はい。まことに」

秀吉は思わず襟を正した。老母はかさねて、

「知りたや、如何あろうと、この老母までが、日々あこがれていたのも、お許という子の生き死にではない。右大臣家の臣、羽柴秀吉という大将のはたらき振りであった。御主君の亡きあと、どう御始末なされたか、尼ヶ崎、山崎あたりまでは、軍を返して、お上りなされたとは聞きながらも、その後のことは、いっこうまだこの山奥までは聞えて来ぬ。……この年寄は、ただそれのみを案じておりましたのじゃ」

「申し遅れました」

言葉は愛もなき他人行儀に似ているが、秀吉は体じゅうの血が沸り立つような嬉しさに揺すぶられた。

母の母らしい当然な愛に慰撫されるよりも、いまの老母のたしなめは、彼にとって、百倍千倍の大きな愛と、同時に、将来までの励みを与えたような気がしたのである。

子を膝にかかえ寄せ、子に数々のやさしい愛撫をすることならば、それは鳥獣の母もしよう——けれど人の母ならでは見られない真の愛は、時にその本能にも超えた高さのものである。秀吉はその大愛に五体を打たれた。——なぜならば、彼も人の子として、実は、心のうちで、

（母からそういわれたい）

と、希っていたことだからである。

なぜ、子は母に、そういう希いを抱くかといえば、いうまでもなく、戦場でも、いとまあれば、うしろ髪をひかれるのが情だからである。何は措いても、ひと目、母の無事を拝してと、万難を冒して、これへ来たのも、彼としては、決して帰って来た心ではない。——明日はまたすぐ、この母をも何ものをも捨てて、死生の中へ——と胸には期している身である。

いや、秀吉ばかりでなく、およそ大義に生き、高い生命に燃えようというものは、家ではさりげなく見せていても、みなそうした希いを、母にももち、妻にももち、また弟妹にも持つであろう。あとへ残してゆく弱い者を思えば思うほど、その心理は痛切である。だから、もしその弱い者たちの口から、健気なひと言でも聞けば、男子たるものは、それこそそれを無限の愛と受けて、同時に、顧みなき自己の雄魂を、弥が上にも強め得るのであった。

秀吉はまだかつて、ひとに向って、将来、大をなさんなどという壮語を弄んだことはない。亡き信長はよく彼を評して、大気者大気者といったが、おのずからな大気は辺りへ示しても、みだりな大言は放たない彼であった。けれど、彼を生んだ母は、誰よりも彼を知っている。きょうの言葉は、まさに、子を知る親の言葉にほかならない。

（――母は知っていてくれる。成るも成らぬも、母は覚悟していて下さる）

これは子にとって最大な強味であり恩愛でもある。秀吉は、中国以来連戦のつかれも、これから先の後顧も、いちどに取り除かれた気がした。今はただ、渾身の努力を天命に託して、天意の応えを待つのみとする清々しさがあるだけであった。

で、主君信長の死に会してから取って来たここまでの経過と、これからも貫かんとする大志望を、彼はこの老いたる母にもよくわかるように、噛みくだいてつぶさに語った。

老母は初めて涙をたれた。そしてまた、初めて、健気なことよと、子を称めた。

「よう短い日のうちに明智を討ち尽しなされたの。右大臣様の霊も、さすが致したと、御生前のおいつくしみも、お悔い遊ばすこともなく在そう。……実をいえば、この母とて、万一お許が、まだ光秀の首も見ぬのに、さきへこれへ来たのであったら、一夜とて、ここへ寝かすことではないと、心できつく思うていました」

「いや、秀吉も、それをすまさぬうちは、母上に合わせる顔はないぞと、つい二、三日前までは、一念ただ戦いのほかはありませんでした」

「それがこうして、無事を見合うことができたというのも、そなたの取った道が、神仏の御旨にかのうたからであろう。……さ。寧子もこれへ寄ったがよい。揃うて、お礼を念じましょうぞ」

老母はそういって、正面の聖観音へむかって坐り直した。

そのときまで寧子は、良人と母の間よりも、もっと離れて、ただつつましく坐っていたが、老母にそういわれると、はい、と静かに立って御堂の内陣へあるいて行った。

二つの吊燈明と龕の内へ燈を入れに行ったのである。そしてもどると、初めて良人の隣に坐った。

母子三人は姿をならべて、ほのかな明りへぬかずいた。秀吉は頭を上げて凝視したのち、ふたたび三礼をなした。聖観音の御厨子の側壇には、主君信長の俗名をしるした仮の位牌が仰がれたからである。

それがすむと、老母は初めて、心の重荷も降りたように、

「寧子よ」

と、やさしく呼びかけ、

「この子は、風呂好きじゃ、湯浴みのしたくはさせてあろうの」

「はい。おつかれを解くには、何よりはそれと思いまして、大急ぎ

で今、させております」

「そうか。ともあれ、汗など流させたがよい。母はその間に厨へ行って、何ぞ、この子の好物でも調理させておきましょう」

老母はふたりだけを残して立った。

「寧子」

「はい」

「そなたも、このたびは、何かと心労であったろう。が、前後の処置、誤りなく、よく母上をお護り申しあげてくれた。秀吉もそれのみ案じていたが」

「武人の妻には、これくらいな難儀は、いつあるか知れぬはずのものと、日頃、覚悟しておりましたせいか、さほどとも存じませぬ」

「そうか。総じて苦難というものは、そこを乗り越えて、苦難をうしろに振り向いてみると、おもしろい、何とも愉快なものだ。……ということがわかったろう」

「いま、こうして、わが夫のお無事を眺めていることが、ほんとに仰っしゃるとおりな心地でございまする」

「人生、その起伏がなくては、何の味もない。――夫婦の仲とて、同じようなものではないかな」

「ホホホホホ。左様でございましょうか」

「中国の長陣中、安土までは帰っても、長浜の家まではつい立ち寄るいとまもなかった。――が、こうして久しく見ぬ妻に久し振りで会うと、わが家の古女房も、何となく目にさやけく見え、そなたのつつましさまでが、花嫁の頃を思い出させる」

「ま。――」

と寧子は顔をあからめて、

「何を仰せ遊ばすかと思えば」

「いや、いや、ほんとだぞ」

秀吉は大真面目にいうのであった。

「ふたり限りで、この御堂の素莚に坐っておると、ふたりが祝言いたした清洲時代の――あの弓之衆長屋が思い出されるではないか。そなたの羞らう容子、また、良人を迎える心からな容子。すべてが、その頃の楽しさに返って来る。余りに馴れた夫婦というものは、時に二、三年ほどは別れてみるもよいものじゃ」

「それは殿方のお気持でございましょう。女房心はまた少しちがいまする」

「そうかな。……ふうム、どうちがう？」

そのとき本堂の袖部屋に、ざわざわと人のけはいがした。睦まじくはなしこんでいた夫婦はあいだを措いて向き直った。見れば一族近親の老幼たちであった。ともあれ殿様へ御挨拶をというので、各、多少衣服を改めてこれへ拝しに来ているのだった。

「おう。誰も達者よな。誰も無事でおったの。よかったよかった」

秀吉はそれらの者一同へ、いちいちことばをかけて、息災を祝した。やがて、一浴の後、べつな室に夜食のしたくが調うと、それらのうちの主なる者も加えて、賑やかな内輪の晩飯をたべた。

一家の者は、この主を中心として、心ゆくまで団欒の夕を過した。あすは早朝この山奥を引払って、ふたたび敵手から奪り返した長浜城へ帰る――というので、老いたるはいうまでもなく、女子供も嬉々として寝つかれないほどだった。

「あすは早いぞ。早起きだぞよ」

子をたしなめつつ、親たちは寺域の中のお小屋へもどった。大吉

寺の御堂も早目に燭を消していた。老母は、聖観音の前に臥し、秀吉夫婦は、聖観音の御背にある内陣裡の一房にやすんだ。梓川の渓谷の音と、ほととぎすの声が、夜もすがら聞えていた。

短夜もまだ明けぬうちから身支度や馬の用意に大吉寺は騒めいていた。長浜落ちのとき何もかも捨てて来たので、帰る日にも荷物は少ない。

秀吉は、寺へは寺領を寄進し、村長へは、村一同への恩賞を下げ渡して出発した。列伍は長々とつづいて行く。母堂は急づくりの山駕へ乗せられ、秀吉夫婦が側へついていた。

白い霧の海に、旭が映じている。梓川の渓谷に沿うて、道は狭くなってくる。騎馬の士は馬を降りて馬を曳いた。嶮しさに馬も耐えないのである。

駕も楽ではない。秀吉は老母の辛抱を察して、

「母上。お辛うございましょう。ちとお休みなされては」

と駕の外で、しばらく休息させてから、自分の背を向けた。

「こんな難路、あと半里か一里の間です。こんどは、わたくしが背負うてさしあげましょう」

老母はためらわなかった。老いては子に従え——ということばのまま、すぐ両手をさしのべて、秀吉の肩にすがった。

「あ。わたくしに」

寧子も求め、小姓たちもあわてて来たが、秀吉は、頭を振り振り母を負って立った。

「十年の不孝の罪を一日で償うのじゃ。秀吉にさせろ、秀吉にさせろ」

秀吉は坂道を降り出した。——あなたの子はまだこんなに元気ですぞ——と母へ見せるように歩いた。が秀吉は母のからだの余りな軽さに、ひとり母の年齢をかぞえていた。

途中まで来ると、長浜から幕僚の一名が、きのうからの戦況報告に来るのと出会った。長浜でも秀吉がこう早く帰って来るとは思っていなかったとみえる。

報告には、別条もなかった。

「さきに御当家から諸家へ向って、明智征伐の事終ると——疾く御通牒のあったためか、徳川殿の軍は、昨日、鳴海から浜松へ引っ返されたとのことです。一方、近江境まで来ていた柴田軍も、これまた、大事すでに去ると、茫然、進軍を見合わせておる様子です」

秀吉は黙笑のうちにつぶやいた。

「徳川どのも、この度はすこし慌て気味だったとみえる。間接ではあるが、この秀吉のために、光秀を牽制してその兵力を分散せしめる役をしてくれたような結果になった。いま、むなしく引っ返してゆく三河武士どもの無念顔が見ゆるようだ」

かくて、彼は、母を長浜へ安んじ終ると、翌二十五日、また直ちに、美濃へ進発していた。

一時、美濃も動揺しかけたが、彼が征くや、即日そこも平定を見た。彼は、故信長もいた旧山河、稲葉山の城を信孝に献じて、まず旧主家への誠忠を示し、つづいて、同月二十七日に開かれる予定となった清洲会議の当日を悠々、一睡のあとに待っていた。

柴田勝家

彼はことし五十三歳の武将としては千軍万馬の往来を積み、人間

としても、世路の紆余曲折をなめ尽して来ている。加うるに門地閥歴、並びにその麾下に持つところの実力といい、頑健な体格といい、この者こそは、時雲に選ばれた随一の男だと観るに誰も不審とはいうまい。彼自身ももとより深くそう任じている。——この六月四日、越中魚崎の陣にあって、本能寺の変を知ったとき、とたんに感じたこともそれであった。

（わしの動きは重大だ、ここぞ、万全を期さねばならぬ）——と。

為に、彼の行動は手間どった。その自重からである。——しかしまた、心は疾風のごとく、現地の京都へ急いでもいた。

彼とは、織田随一の出頭人、北陸の探題、柴田修理亮勝家のことである。彼はいまや、畢生の智と力と、そして、のるかそるかの一擲を賭けて——越中魚崎での対上杉軍との戦場を捨て——急遽、上洛の途中にあった。

急遽とはいえ、越中を離れるにも数日を要し、居城の越前北ノ庄でも幾日かを費やした。——が彼としては、決してこれを遅いとはしていない。ただ勝家ほどな者が、この大事に、ひとたび動くとなると、いわゆる不敗の万全を期すために、当然な自重が当然な時間を必要とし、その速度から時が差引かれていたに過ぎない。

越中で対陣中の上杉景勝の兵にたいしては、麾下の佐々成政と前田利家の二軍をのこし、北ノ庄にも部下を留め、勝家としては実に、超速度の転進とは見えたが、その主隊が、越前と近江の境、柳ヶ瀬を越ゆる頃、日はすでに十五日となっていた。そして主将勝家に遅れて、北ノ庄や越中方面からなお追いついて来る後続部隊と合し、全軍が峠で馬をやすめていたのは、もう行くてに望まれ出した江北一帯に夏雲高い、翌十六日の午頃であった。

十六日といえば、彼が信長の死を知った四日の日から数えると、十二日間を費やして来たことになる。何ぞ知らん、中国で毛利と対していた秀吉は、京都の飛報を入手した点では、勝家より一日程早かったにちがいないが、四日には毛利と和議の誓紙を交わし、五日そこを発し、七日姫路着、九日には尼ヶ崎へ向い、そして十三日には山崎の一戦に光秀を討ち、今頃はもう洛中近畿にわたる残兵の掃討から、戦後の布令まで掲示し終っていた時分であったのだ。

越中から京都への道と、備中高松からの道とでは、多少道路の嶮や距離の差に長短はあるにしても、秀吉が対していた局面と、勝家が向っていた戦局とでは、比較にならない難易があった。勝家の立場のほうがずっと有利であったことはいうまでもない。全面的転進を計るにも、戦場から離脱するにも、秀吉の場合よりは遥かに変じやすい事情にあったものを——なぜこう手間どって来たろうか。——要するに勝家の〝自重万全〟の観念が、この貴重なる〝時〟を代価としてあたら費やされて来たものというしかない。

かたがた、余りに彼が百戦の老巧だけに、その自信と体験が、いよいよ思慮分別の殻を厚くし、今次の如き天下一変の大転機に当っては、却ってそれが疾風的行動の邪げとなっても、常套的な作戦変更という形式からついに一歩も飛躍し切れなかったことの一因といえよう。

「やすめ。馬に水飼え」

「そのあいだに、全員は腰兵糧を解け。ただし、村口の哨戒に当っている隊は、交代で休息するように」

「また南条からこれまでのあいだに、途中から御陣列に加わった後入りの組は、さっそく到着を認めて、その人員名簿を、ここの出立

までに、本隊の祐筆まで差出しておくように」

柳ヶ瀬山中の一村は、いま人馬で埋められていた。

ここから西すれば京都方面へ。東すれば余吾の湖を経て、江州長浜街道へつづく。

全軍が駐まると、勝家の主隊から命をうけ立ち別れた部将たちが、声を張って、前後の部隊にそれぞれ令を伝えていた。

次から次、次から次へ、令は令を伝えて忽ち全軍に届いたように思われたが、なお未だ北の方の登りを、蟻のごとく陸続と、これへ向って行軍中の後続隊もあるらしく、前隊との聯絡をとるための法螺貝が遠く夏山のはるか下の方に聞えているので、ここでもたえず法螺貝をもってそれに答えていた。

この辺一帯の山地を総称して柳ヶ瀬といっているが、くわしくいえば近江伊香郡片岡村。そして今、大将柴田勝家が馬をとどめた所は、椿坂のほとりで、小さい神社の境内だった。

勝家は非常な暑がりやであるらしい。わけてきょうの山道と炎暑はこたえたもののようである。木蔭に床几を設えさせると、そこらの木から木へ幕を掲げさせ、その中で行儀悪く具足の緒を解いていた。そして養子の権六勝敏へ背を向けて、

「権六、拭いておくりやれ」

と、鎧をゆるめて、頸から背なかへ手を入れさせて、汗をふかせた。

二人の小姓は、大扇を持って、勝家の腋の下を、左右から煽ぎぬくのだった。汗が乾きかけると、勝家は身を痒がって、

「権六、もっときつくこすれ、きつく」

と、もどかしがった。

養子の権六は、まだ十六歳である。養父のそばにあって、行軍中も親孝行の体がいじらしく見えた。

勝家の皮膚には、汗腫に似たものがいっぱいできていた。勝家にかぎらず、皮革と金属で包まれた夏の軍士の皮膚には、具足病とでもいうべき皮膚病が非常に多いのであるが、勝家はそれが殊にひどかった。

こう夏弱くなったのは、天正七年からここ三年越し、ほとんど身を北国の任地において、北陸経営の任にあたり、居住も多く北ノ庄の城廓で過していたため——と彼はよく自語しているが、実は老いていよいよ強壮な、胆汁質ともいえるような体質からのものであることは否まれそうもない。今権六がいわれるまま強くこすっている所を見ても、すぐ毛穴から脂肪のような赤い血がふき出る程であった。

「大殿。ただ今、神官や村長どもが、御門出の祝いにと、この山の渓流で漁れた串魚やら餅など捧げ持って見えましたが」

幕の裾から武者のひとりが告げると、勝家はあわてて、もうよいと権六の手を退け、具足を纏い直していたが、傍らの佐久間玄蕃允盛政をかえりみて、

「お汝、村人どもの挨拶をうけてこい」

と、いいつけた。

玄蕃が立ちかけると、玄蕃と並んでいた毛受勝助家照が、その足もとを遮るように、

「いや、大殿」

と手をつかえて、勝家の大きな体を仰いだ。そして、

「村人どもの素朴な志、寸時なりと、大殿御自身、会釈をお与え遊

ばしては戴けますまいか」

と、わが事のように願った。

「玄蕃、立たんでもよい」

勝家は、毛受勝助の乞いを容れて、自身、そこで神官村人を引見して、祝いをうけた。

またすぐその後で、幕僚たちと共に、献物の串魚なども披いて兵糧をつかい始めたが、毛受勝助には、口もきかず、眼ざしも向けなかった。

勝助の諫言は、もっともなことだった。勝家も、それが頷けないほどの愚将ではない。しかし、二十五歳の若い一部将からそんな注意をうけたということが、鯉の胆でも噛みつぶしたように、勝家の内省の中にいつまでも苦いものが消しきれないでいるらしいのである。

ここにはなお、勝助の弟、勝兵衛もいた。兄が二十五、弟が二十一。勝家としては、柴田家にとっては功労のある毛受茂左衛門の息子たちなので、左右において重用もし目にもかけていたが、弟の勝兵衛の方はともかく、兄の勝助家照の方はどうも余り好きでなかった。——というのは、時々、今のような直言をするからである。

鬼柴田とか、瓶破柴田とか、彼自身の上に、若い頃からの剛勇の誉れが高かったせいか、その剛胆無双をもってみずからもゆるす風が常々の起居にもあって、ともかく勝家の日常には、粗暴というか、倨傲というか、不行儀をもってむしろ矜るようなところがあった。慎みという念が乏しく、僻地の陣中でも食いたいと思うときは「食いたい」といい、飲みたいときには「飲みたい」といい、痒いときには「痒いから掻け」と、誰にでもその皮膚病をこすらせる如くにである。

（大殿はまことに飾り気がなくてよい。今日のような御大身になられても、御若年の当時とお変りなく、われらを窮屈がらせぬようにお扱い下さる）

そう解して、主人の一面を、ひどく磊落な、またその人物の大きな所以であるとして、称めちぎる家臣もあるが、毛受勝助などは、それを阿諛の言として、強いても反対な苦言を呈している方だった。

越中の境に長陣の折、そのときも何か勝助として感じていたことがあったのであろうが、勝家から徒然に読む書があったら差し出せといわれたのを機に、三略の一部の紙中を折って、すぐ目につくようにして出した。

後で勝家が繰展げて見るとそこの一章にこういう文があった。

軍井未ダ達セズ、将渇ヲ曰ハズ。軍幕未ダ弁ゼズ、将倦ムヲ曰ハズ、軍竈未ダ炊ガズ、将飢エヲ曰ハズ、冬、裘ヲ暖ニセズ、夏、扇ヲ採ラズ、雨ニ蓋ヲ張ラズ。是ヲ、将ノ礼トイフ。

この時も勝家は、二、三日不機嫌な色をなしていた。しかし部下統率上のこれくらいな常識は充分わかりぬいている大将なので、為に、勝助を退けるなどという暗愚なまねは決してしない。ただ自分の持っている胆汁質な慾望と粗野な本質にたいし、彼自身としては、せっかく北陸探題の総大将たる威厳とにらみあわせて、極めて不調和なく、その矜持を保っているつもりなのへ、他の意志をもって水を割られると、甚だその節度が持ち難くなるらしかった。従って、一時は慎みもするが、すぐ以前の鬼柴田、乃至、瓶破柴田に立返ってしまうのであった。

きょうの不興にも、きょうの事ばかりでなく、三略の文句がまた

彼の頭に追加されていたかもしれない。何しろ、食事の席はあまり賑わなかった。ところへ折も折、秀吉からの早打がこれへ来合わせて、さすがの瓶破柴田の胆をも潰すような報告を彼に齎した。

使者は二人であった。ひとりは秀吉の家臣、ひとりは神戸信孝の臣。

各、主人の一書を持ち、二通を併せて、同時に勝家の前に呈した。

二通とも、大津三井寺に在陣中の秀吉、信孝の手で認められてあり、日附も同じ十四日とあった。

（――この日、逆将明智光秀の首級を検し、亡君信長公の弔い合戦、ここにおいて、首尾よく遂げ果し終んぬ）

と、秀吉の方には山崎以来の戦況が概略認めてある。そしてなお、

（――この由、在北国の織田遺臣一統へ、さそくに御披露ありたく、尊台まであらましを急達しておく、事あらためていうまでもなく、今次の変は、御同様悲歎にたえぬことながら、故主御さいごの日より十一日を出でぬうちに、逆将の首級をあげ、賊徒一兵もあまさず掃滅し得たことは、身の功を誇るにてはなけれど、いささか泉下の尊霊をお慰め参らせたものと信ずる。この儀、貴公におかれても、まず不慮中の歓びとして、同慶給わるものと思う）

というような文章であった。

秀吉が書中でいっているとおり、大いに歓ぶべきことにちがいなかったが、勝家にはどうしても、歓びとすることができなかった。

むしろ、反対なものが、まだ文面から眼を離さないうちに、彼の満面にみなぎっていた。しかし返書にはもちろん祝着この上もなしと書いた。そして自軍もこの柳ヶ瀬まで駈けつけて来たことを特に強調しておいた。

使者を帰すと、彼は、その使者の口から聞いた情報や書翰によって知った程度では、到底、次の行動にかかり得ないもののように、水野助三、鷲見源次郎、近藤無一などという健脚な若者をすぐって、大津方面から京都あたりまで、実状の探索に放った。そして、爾後の全貌が明確にわかるまでは、ここの椿坂に宿営するほかはないと肚をきめたもののようである。

「まさか？　……しかし、虚説であろうはずもなし？」

この日、勝家は、さきに信長の悲報をうけた時以上の驚きを喫したような容子だった。〝すでに光秀の首級をあげたり〟という厳たる報告に接してもなお頭のどこかで「まさか？」と疑惑する常識を一掃しきれなかった。――もし自分よりも先に光秀の軍へ向って弔い合戦の先陣をつける者があっても、それは神戸信孝か丹羽長秀か乃至、堺に滞在中と聞いていた徳川家康などを加えた近畿合体の織田遺臣軍であろうと見越している程度だった。そしてそのいずれに形勢がうごいても、勝敗は到底一朝一夕のものでなく、織田家において、自分以上の上席にある者のない自分がそこに臨めば、当然、明智討伐の総大将として、われを仰ぎ迎えずにもいられまいと充分思いこんで来たものであった。

そういう予見のあいだに、秀吉という者の存在が皆無ではなかった。秀吉が見たとおりつまらない男だなどとは決して思っていない勝家でもあった。むしろかなり秀吉の底を知っている者といってよい。秀吉の一将校時代からずいぶん意地悪くその擡頭を邪魔したこともあるからである。踏んでも踏んでも拉げない御小人の藤吉郎頃から、近年にいたっては、重臣の自分らと肩をならべ出して来た彼

の器量にたいし、白眼、常にゆるがせには視ていなかったのだ。——しかし、それにしても、どうして彼が、毛利軍を措いて、中国から一転できたか、そんな早業ができたか、勝家の常識では、ほとんど、奇蹟を聞くような気がしたのである。

宿営地の椿坂は翌日へかけて、本格的に警備が強化された。

往来は遮断され、京方面から来る旅人たちは、哨兵に留められて、悉く一応の訊問をうけた。

蒐め得た情報は、すぐ本陣の幕舎へ、部将から伝えに行った。それらの巷の説を綜合してみても、明智軍の全滅は疑う余地もなく、坂本城も陥ちたこと確実である。なお昨日今日あたりは、安土方面に炎々と黒煙が望まれる——といっている旅人もあり、羽柴筑前守殿は、一部の兵をひきいて、はや長浜へ向われたと機微を告げる者もあった。

一夜明けても、勝家の心は、依然として穏やかでない。「われは何をなすべきか」の問題が容易に決定しないからである。辱や体面を考えると、限りなく不愉快になった。北陸の軍馬をすぐってここまで臨みながら、拱手して、秀吉の大活躍を眺めているごときは、真に、彼の耐えうることではない。

それにしても、「この勝家は何をなすべきや?」がすぐ頭にのぼってくるのだった。織田家の大老たり、首脳部の首席にある者の当然な任は何よりも明智討伐にあったのだが、そのことがすでに秀吉の手で終った今日では、何が最大な急務か、また、秀吉の上わ手に臨みうる策か。——苦慮はそこなのである。

いつの間にか、彼の頭は全面的に、秀吉なる対象に占められていた。——しかも対敵感情に近い憎悪をもってそれが強く思考を左右してくる。古参の股肱を寄せて、昨夜深更まで凝議していたのもそれだった。その結果、きょうはこの帷幕から急使或いは密使として立つ者が八方へ急いでいた。国元の北ノ庄へも、越中魚崎の味方へも。

また遠くは、上州三国の嶮をこえて、越後春日山へ討ち入り、上杉勢の本拠をつくべく、すでに呼応の聯絡をとっていた滝川一益麾下の軍隊へも。同時に滝川一益個人へ宛てても、べつに懇ろな私書を送った。

特に神戸信孝にたいしては、きのう帰った使者に特に持たせてやった返書に追いかけて、さらにあらためてまた一書を認めた。使いの人物にも老臣の宿屋七左衛門をえらび、ほかに心の利く家臣二名を添えて立たせ、何か重大な内意を含ませてやったようである。

以上のほか、祐筆二人が、勝家のことばをうけて、半日書き通していた書状は二十余通の多きにのぼった。要旨は、七月一日を期し、清洲に会同、主家の継嗣のこと、明智の旧領処分の問題など、当面の重大懸案を議せん——というのであった。

勝家は、この会議の発唱者として、いささか宿老の体面をとりもどそうとした。また、自分を措いて、この重大懸案は一歩も解決に入り得ないことをも、充分承知していた。それを「鍵」として、彼は当初の方角を一転、尾張の清洲へと向った。

途上、聞くところによれば、また追々に帰って来た水野助三や近藤無一などの報告に徴しても、彼の廻状が届く前に、織田遺臣のあらかたは、期せずしてみな清洲へ向っていることがわかった。そこには、信長の嫡子信忠の遺子三法師丸がいる関係上、自然、安土以後の織田家の中心がそこに移されたかのような観をなしていたた

めであるが、勝家には、そのこともまた、何か逸早く、秀吉が僭越な音頭を取って事態をうごかしているように邪推された。

折鶴

清洲城はここ毎日、登城の列、下城の人馬で、凡ならぬ光景を見せていた。

かつては信長が起業の地であったここが、きょうは織田家の跡始末を議する会議地と目されている。

が表面、ここに集まった遺臣たちは、

（三法師君の御機嫌を奉伺するため）

と称して、お互いが、柴田勝家の飛状に接しているともいわないし、また秀吉の意によって来たということも表示していない。

しかし暗黙裡に、やがて近く城中に大評議がひらかれるという予定は、誰にもわかっていた。議題の内容も周知であった。ただ日取や時刻などの公的な通状がまだ達しられていないにすぎない。――で、三法師君への伺候をすませても、諸侯中、帰国する者とてない。各　多くの軍兵を擁し、城下の宿所に待機していた。

真夏の暑気に加えて、狭い城下町に、何倍もの人口が一時に入ったので、その混雑や喧騒はひととおりでない。厩の馬が町中へあばれ出したとか、御小人同士の喧嘩沙汰やら、頻々たる小火騒ぎやら、無聊を感じるひまもない。

月の末近くには、神戸信孝、北畠信雄の一門もそろい、以下、柴田勝家、羽柴秀吉、丹羽長秀、細川藤孝、池田信輝、筒井順慶、蒲生氏郷、蜂屋頼隆など、あらかた到着していた。

ひとり滝川一益が、まだ見えていない。それについて、

「信長公御在世中は、一にも滝川二にも滝川と、御重用をうけて、関東管領の重職をもさずけられておりながら、今次の凶変に、こう馳せつけに遅るるとは何事だ。さてもぶざまな漢よな」

と、巷の悪評は、かなり露骨であった。

「自体、あの仁は、経略家肌で、忠義一徹ではない。このたびもそのために、すぐ足が立てなかったものであろ」

などと評して憚らぬ者もある。

町中の酒亭などでも殊さら聞えよがしに、談じている仲間もあった。

「一益殿の取柄といえば、新しい武器に精を入れてよく用いるぐらいなところじゃろ。だから射術には明るく、滝川勢といえば、鉄砲撃ちはみな巧者じゃ。その点を、信長公にも買われていたのじゃろうが、なんの戦争はからッ下手だ。若いうちは常に先鋒隊に置かれ、相当、勇名を鳴らしたが、それも当時の織田軍全体に破竹の勢いがあったからで、何も彼が秀でていたわけじゃない」

「そうかもしれぬ。こんどのような場合に、立ち際の悪いところを見ると」

「立ち際のみか、頭も悪い。上州厩橋という遠方ゆえ、手間どったのは仕方もないが、途中、北条勢と勝目のない戦いなどして、神流川ではさんざんに敗北し、やっとのことで、居城の伊勢長嶋へもどって来たなどは、気のどくといおうか、近頃の笑いぐさといってよい」

公然な非難である。そのついでに、明智討伐に出遅れた柴田勝家にたいする非難もちらちら沙汰されていた。当然、これが滞在中の

諸家の耳にはいらないはずはない。羽柴家の家士もすぐこれを秀吉の耳にいれた。すると秀吉は顔をくずして頷いた。

「そうか。……もうそろそろやり出しておるか。柴田をも難じておるので、柴田から出た流説とは誰も思うまいが、それは皆、勝家がさせておる反間苦肉と観てまちがいあるまい。大評議前の謀略戦じゃよ。小細工はやらせておけ。いずれ滝川は柴田に抱き込まれる者、それでよいのだ」

信長亡きあとの、織田王国の縮図が、ここ数日の清洲に見られていた。

やがての大評議を前にして、その帰結を、各　の将来に予想し、おたがいの肚をさぐりあっているという形だった。そしてその間に、当然な黙契やら、反目やら、また流説を用い、誘惑を講じ、抱きこみ、切崩しなど、あらゆる謀略が行われつつあることも蔽うべくもない。

殊に、柴田勝家と神戸信孝との往来は、目につくものがあった。

一方は、宿老の上席、一方は故信長の三男。こう二者の公事を超えた親密ぶりは、時人の目につかざるを得ない。

「修理どの（勝家）には、御二男の信雄様を措いても、信孝様を、次のお世嗣に立てんの下心と思わるる。はて、一波瀾はまぬがれまいぞ」

誰も、直感した。

けれど、その信孝擁立の競争者は、誰もが、信雄であると信じていた。

信長の跡目は当然、信長に殉じて、二条城で戦死した嫡男信忠の次弟たる信雄か信孝にゆくであろうという見解には、何人も疑う余地のないこととしていたが、その二人のうちの、いずれが立つか、また、支持すべきかは、各　迷うところであった。

信雄、信孝。――共に永禄元年正月生れの今年二十五歳だった。同年にして兄弟というのもおかしなわけだが、この時代の上流家庭にはままあるというよりは普通のこととされていた母系のちがう兄弟なのである。その上、信雄が兄、信孝が弟となっているものの、本当の生誕月日からいうと、弟の信孝の方が、二十日も先に生れていた。故に当然、彼が兄であっていいはずなのに、信孝の母の生駒氏が賤しい家系の女子であったせいか、出産の届け出を怠っていたため、信長の第三子と定められ、遅く生れた信雄の方が、第二子にすえられて来たものであった。

従って、この兄弟は、兄弟とはいえ、骨肉の真情はうすかった。信雄は陰性であり、消極的な性情だったが、信孝に対してのみは、常に反撥を起すような感情をもっていた。従って、殊さらにでも、この弟を下風に見て、兄たるの上座をかりそめにも冒させなかった。

信長の後継者として、公平にこの二者をくらべてみるときは、誰の目にも、第三子の信孝のほうに多くの資質が認められた。戦陣に出しても、彼は、信雄よりもはるかに大将らしくもあるし、平常の言動にも覇気を示し、何よりはまた、信雄のようにひっこみ思案でない。

故に、父信長、長兄信忠の死に会したこんどの場合でも、山崎へ出て来て秀吉の陣に君臨して以来、とみにその覇気をあらわし、はやくも織田の相続者を以てみずから任じているふうが歴々と最近の言動にもあらわれて来ている。その包蔵をしめす顕著な一証としては、山崎の合戦後は、事ごとに、秀吉をいみ嫌い始めているのでも

およその想像はつく。

明智勢の襲撃にあわてて、自軍の手で安土の大城へ火をかけた信雄にたいしては、

「賞罰をあきらかにするなれば、彼にも責任を問わねばならぬ」

と、いったり、また、

「信雄は、ばか者だ」

と放言したこともあるという。ところが、そういう陰での言葉も、誰が伝えるともなく、いつか信雄の耳にも入るような空気が今の清洲には濃厚だった。目に見えない謀略の網目が、人間の凡非凡を嗅ぎわけている状態といってよい。

はじめ会議の開催は、月の内の二十七日と予想されていたが、滝川一益などの来着が遅れ、その後また、一日延びて、ようやく、七月一日の夕べ、在清洲の総大名衆へ、触状がまわった。

――明日、辰之下刻、総登城候へ、御城ニ於テ、各　申シ談ジ、天下人ヲ相定ムベク候也

というのである。

大評定触頭は、いうまでもなく柴田修理勝家。

一益が到着後も、なお何という理由もなく、一、二日のびていたことや、諸般のさしずなども、すべて彼の一存によるものらしく思われた。もとよりそれに対する不平の声などはあり得ない。なぜなれば、彼が、神戸三七信孝を立て、すでにその信孝と事前に結託していることは、隠密の沙汰ではなく、公然、知れわたっていたからである。

信孝は柴田を威とし、柴田は信孝をかさとして、圧倒的に会議を押しきろうとする気勢が表面化され出した。しかも大多数はそれに傾いているかのような形勢の下に大評定はひらかれた。

当日の清洲城は、数ある間ごと間ごとが、思いきってみな開け放たれていた。この日も、照りつづいて、暑さと人いきれに堪えないためもあったろうが、見方によっては、物蔭での個人的な談合はゆるさぬと、暗に制御しているようにも取れる。武者溜りの詰人を始め、要所の杉戸杉戸にいる控人も、悉く柴田の家来といってよいほど多くの外臣が入っていることもただの手助いとは見えなかった。

辰の下刻には、すべてそろい、巳の刻には、総大名衆すべて、大広間に着席していた。

席順から見ると、

柴田、羽柴、丹羽、滝川、と左右両座にわかれて向いあい、以下、池田勝入、細川藤孝、筒井順慶、蒲生氏郷、蜂屋頼隆など居流れていた。もちろん、正面の上座は、一門の神戸三七信孝と、北畠信雄の二人が、席をわかっていたが、なお一方の上襖へ寄って、もうひとりの幼い君が、傅人の長谷川丹波守に抱かれていた。

これが三法師君である。

うしろには、この遺孤の父信忠が二条城で戦死した折、信忠の遺命をうけて、敵中からこれへ遁れ落ちて来たという――遺臣前田玄以がつつましげに控えていた。ひとり生きてこれに在ることは面目ないというような彼の容子を衆目は見ていた。

三法師は、何といっても、まだ三ツなので、傅人の長谷川丹波守が膝へのせて正面へ向けていても、決してじっとしていなかった。手をのばして、傅人の頤を押しやったり、膝の上に立ったりしてしまう。

当惑顔な丹波守を扶けて、玄以がうしろから何か小声であやして

いると、肩越しに、その玄以の耳をひっぱった。玄以も弱って、意にまかせていると、さらに、うしろに身をかがめていた乳人が、そっと三法師の手へ色紙で折った折鶴を持たせて、玄以の耳を救った。

「……」

列座の諸将の眸はみなこのあどけない遺孤に注がれていた。微笑をふくむもあり、暗涙をたたえるもあった。ひとり勝家は大広間いっぱいに眼を放って、「困ったもの」とつぶやきたいような渋面をつくっていた。

きょうの清洲会議の胆煎人として、また議長として、いちばん威儀儼然として、先ほどから劈頭第一の口をきろうとしているのに、人々のひとみが徒らに散っているため、その唇が、発言の機を逸して、むなしくあることが堪らない不快となっているらしかった。

勝家はついに口をきり出した。

「筑州殿」

秀吉をさしてである。

秀吉は、向う側の席から正視を向けた。勝家は強いてその顔を笑い作りながら、

「どうであろう」

と、至極、談合的にはなしかけた。

「――何といっても、まだあの通りたあいない御幼少じゃ。傅人の膝に置かせて、お苦しい目におあわせ致さんでも、よくはあるまいかの」

「さようにも」

秀吉の答えは、どっちともつかないものだった。――折れて出ればそう出るかと、すぐ対立感をとがり立てたものだろう。勝家の全身にはすぐ威厳を交ぜた反感が硬直し出した。劈頭早くも甚だおもしろからぬ顔つきが露骨だった。

「……が喃、筑州殿。三法師君の御出座を求めたのは御辺とはちがうか。――修理は、いっこうに知らんが」

「されば、筑前がおすすめ参らせたには違いありませぬ。ぜひにと」

「ぜひにと」

勝家は大紋の衣服の皺を大きく揺りうごかした。午まえなのでまだ暑気もさしてではないが、彼には式服の厚着と例の皮膚の腫物とが人知れぬ苦痛らしかった。こういうことは些細に似ているが、時によると重大な意志表示にもふと語気の上へ大きな関りをもたないとは限らない。殊に、柳ヶ瀬を越えてから後は、彼が秀吉を見る気もちは、まったく一変していた。従来とて彼を後輩視して来た先入観が根本をなしているので、決して折合いのよい間がらではなかったが、山崎の合戦を境として、逐日、織田遺業の勢力圏に、秀吉なる名が、何とはなく、澎湃たる威勢をもって聞え出して来たことは、勝家として、到底、晏如としているに忍びない現象であるのだ。

そればかりか、秀吉が先君の弔合戦を果したというそのことの反動として、

（北ノ庄殿（勝家をいう）には、時遅れて、山崎にも参り合わず、さだめし手持ちぶさたなお心地であろうに）などという不面目も酬われている。近頃、何かにつけて、双者を対比する風潮が一般に表面化して来たことは何を意味するか。勝家にすればこれも苦々しい沙汰といわねばならぬ。筑前と自身とを、対等に視られることさえ、不愉快この上もないのである。いわんやその者のたまたまあげた一殊勲によって、数十年来の織田家における元老的地位を閑却され

て堪るかと思う。むかし清洲のお濠浚いや馬糞掃除をしていた御小人あがりの匹夫が、今日、衣冠して得々たるかの如き前に、何で柴田修理勝家ともあろう者が下風に置かれていようぞ――そう思うのであった。この日、彼の胸中は張りつめた強弓のように、そういう感情やら万策の懸引に緊められていたのである。

「きょうの評定を、筑州殿には、何とお考えかしらぬが、およそ列座の諸侯も、このような大事を議す場所に臨むは、織田家あって初めてのことと、みな臍を固めておられように。……何じゃ、三歳の幼君を、強いて、ぜひとまでこれに仰いで」

勝家はずけずけ云い出した。彼の言動は、ひとり秀吉にばかりでなく、辺りの諸大名へ共感を求めているという風だった。そして秀吉からいっこう冴えた返答も聞かれないと見ると、なお同様な語気をかさねて、

「追々、時刻もない。評議にかかる前に、御退座を願ってはどうじゃな。それとも、何か御辺の都合でもあるのか。筑州殿」

至極、風采のあがらない秀吉は、式服となっても、大紋の着ばえもせず、列座の中ではどう見てもやはり野生のものでしかない。

位置としてはすでに信長の在世中に、屈指の重職を与えられ、実力としては、中国征攻中も、山崎の一捷でも、充分示されてはいるが、実際に、会ってみると、

（この人が）

と、むしろ聞いていた名声や想像を裏切られるくらいなもので、深くその人間にふれてゆけばともかく、ただの眼で、いわゆる一見した程度では、この者と不測の時代を共に進み、生涯の大事を一緒にするなどということは、考えものだという気を起すほうが、むしろ常識として無理もないといってよい。

一見、直ちに、さすがはと、その人らしく見られる者では、滝川一益など風采奕々たるほうで、一流の武将とうけとるに誰も吝かとしないであろう。丹羽五郎左衛門長秀にはどこか枯淡があって禿げあがっている鬢づらなど、戦陣振りも頼もしげに思われる。蒲生氏郷は座中第一の若年ではあるが家柄のゆかしさ天性の気稟、どこか薫々たるものがある。重厚なる風格において、身なりは秀吉より小さいくらいなものだが、瞳光射るが如き池田勝入あり、また清雅温順に見えて、腹中何をつつむか分らないような大人的風格の持主に細川藤孝がある。

秀吉の風采が栄えないといっても、或いは、こういう人々の中だけに、よけい見劣るのかもしれない。何といっても、その日の清洲会議に列した程の者は、時代の一流級ぞろいである。ここには加わっていないが、北越の陣に残っている前田利家と佐々成政と。そして別格ではあるが、徳川家康とを加えしめれば、まず日本の中心的人物は網羅されているといってもさしつかえはなかろう。その中においての秀吉である。人品となっては、どうもまだ仕方のないものがどこかにある。

それを自分でも感じるが、ここでは秀吉もひどく慎しく、謙虚を旨としているふうであった。山崎で捷つや、戦後、諸軍の礼をうけつつ駕籠の上から、

（瀬兵衛、御苦労）

といって、彼奴、もう天下人に成りおわせたような気でおるか――と同輩の将を口惜しがらせたような不遜の態度は、今日はどこにも見あたらない。さっきから非常な真面目さであるのみだった。勝

家の口数にたいしても畏るるかのように寡黙であった。――が、勝家の執拗な言に、今はぜひなくというような容子で、

「いや宿老のおことばは、ごもっともです。三法師君の御出座を仰いだには、理由がないではありませぬが、なるほど、まだお無邪気なお年、長評議に、ああしておられては、御窮屈にちがいない。かたがた、今日の触頭たる宿老の御意とあれば、ひとまず、御退座をねがうことにいたしましょう」

と、穏当な語を返して、少し膝を上座に向け直し、傅人の長谷川丹波守へ、

「そのようになされるように」

と、立座を促した。

丹波守は頷いて、膝の三法師を、うしろの乳人の手へ渡した。三法師は、盛装した大勢の人々が居ならんでいる様が、何か無性に楽しいらしく、乳人の手をつよく拒んだ。それを無理に抱いて、立とうとすると、こんどは突然、手足を振って泣き出した。そして手にしていた折鶴を列座の諸侯のまん中へ抛ってしまった。

諸侯はふと、眼に涙をもった。

薫香散

土圭の間の点鐘は、午を報じていた。

それも耳に入らないように、大評議の広間は、ひそとした緊張にみなぎっていた。

「主君信長公の不慮の御他界は、おたがい何とも痛哭のほかはないが、すでに事定まった今日となっては、偏にお跡目を正し、御遺業をうけついで、御在世の日にまさる忠勤を励ましあうこそ、臣下の道でもあり、また一尊霊をなぐさめ奉ることとも存じて……かくは今日」

と劈頭に、議長格の柴田勝家から、主君を悼むの辞やら、爾後の報告などがあって後、

「さて、それについて」

と、予定の議題が、これも彼の発言の下に、提出されたものだった。

即ち、その一は。

（御遺族のうち、どなた様をもって、お世嗣とお定めするか）

の問題であり、二には。

（旧明智所領の配分如何）

であった。

まず第一の重大懸案について、勝家から列座一同へ、

「御意見もあらば」

と、訊ね。

「ほかならぬ儀。あとでとやかくのないよう、腹蔵なくお考えを述べられたい」

と再三にわたって、諸侯の発言を求めたが、誰も、顔見あわすのみで、押して私見を披瀝する者もない。

ないのは当然であった。

この場合、もし軽率に、自分の思うところを主張しても、万一結果において、その反対な立場の者が、織田の相続者として擁立されることにでもなれば、当然、その発言者の前途は危険なものにならざるを得ない。

で、誰もが、軽忽に口をひらくべきでないとして――じっと、沈黙をまもったまま、およそ大勢の定まるのを見ようとしているふうであった。

勝家は根気よく一同の慎黙を慎黙にまかせておいた。さもあろうと、およそはこの場の成行きを予察していたもののようである。そしておもむろに威儀をあらためて口を切った。

「方々に別しての御意見とてなければ、さしずめ、宿老として、この方が愚存を申しのべるほかおざるまいが……」

その時、上座にあった神戸信孝の容子に、ふと顔いろのうごくのが見えた。勝家の眼は、秀吉にそそがれ、秀吉は、滝川一益の姿と、信孝の容子とを、見くらべていた。

微妙なうごきが、一瞬、心から心へ眼に見えぬ波長を立てた。清洲一城、人なきかのような、異様な緊張としじまの中にである。

「この勝家が見奉るところでは、三七信孝様こそ、実に実にお年ばえと申し、生来の御器量、お跡目として、申し分なきお生れと存じ上げる。惑いなく、三七様をこそと、この方はすでに心に定めており申す」

ずばとした発言だった。というよりも宣言といったほうに近い。勝家はすでに、牛耳を取ったものと観たのだ。ところが、

「いや、それはいけますまい」

すぐ反対の声が出た。云い出したのは秀吉である。

秀吉は、勝家の提議を、まっ向から反駁した。

「何さま、お見立てとしては、宿老のお考えもよろしかろうが」

と、かろく一蹴しておいて、

「筋目から申すなれば、正しく御嫡男信忠様の跡は、三法師様こそ、御相続あるべきところではおざるまいか。国に法あり、家々にもおのずから家法はあること。下々においてすら、かような大事は紊さぬものを、まして」

勝家の面は、朱へ墨をにじませたように、感情をあらわしていた。

「アア待て、筑州」

「いや」

と圧して、秀吉はいうだけを云いつづけた。

「三法師様は、まだ御幼少と、仰せられるであろう。――が、御一門以下、柴田どの始め、宿老諸将がそろうて、お守り立ていたすからには、御幼少とて、何の御不足やあろう。忠勤をもて仰ぐ御方は、何もお年ばえの如何にあるわけではありますまい。――筑前においては、ぜひに、御筋目を正されて、三法師様をこそ、お跡目に仰ぐべきものと信じまする」

勝家は、ぐだっとしたように、懐紙を出して、衿くびの汗を押し拭っていた。大きな暗礁にのしあげたかたちである。しかも秀吉の主張は、家系の正法であり、常道であって、反対のための反対とは聞えない。

ここでまた、非常な失望を顔にあらわしていたのは、北畠信雄であった。彼はあくまで信孝を対象として、表向き信孝よりは兄となっているし、生母の家系もいいので、ひそかに自分こそ――と独り期していた気もちがあったことはいうまでもない。

それが、暗に相違したので、すぐ彼らしい卑屈が出て、居るに堪えないような容子をしていた。

三七信孝の方は、もっと覇気があるだけに、秀吉の横顔を、上座から凝視するの風を示していた。

「さあて、喃？」

勝家は、是ともいわず、非ともいわず、こう大きく呟いて、席上の空気から何かを観てとろうとした。

しかもまだ容易にその賛否を態度に示す者もいなかった。勝家も本音をふき、秀吉も肚を割って、二者の二説が、真反対に立って、はっきり対立をあらわすとなっては、いよいよそのいずれに拠るかは重大である——となすもののように、緘黙沈吟は、よけいに外皮の殻を厚くするばかりだった。

「筋目とな。……なるほど。……が、無事泰平の世とはちがい、先君の御遺業とて、まだまだ半ば、多難多端は、御在世の日にまして来ように。——さて、どうあろう」

勝家は頻りと、味方を誘った。彼がうめくようにこういうと、そのたびに、頷いてみせているのは滝川一益だった。しかし、その他の諸将の胸懐は、依然、見てとるにむずかしい容子ばかりである。

秀吉は、再言して、

「もし信忠様の御簾中に、御懐妊の方でもあれば、御産のひもの解かるるを待って、御男子か女子かの上までお見とどけ申しあげた上、さてと、かような会議も開かるべきに、まして歴乎たる若君がおありになるのに、何で異議や御詮議の必要があろう。三法師様こそ、即座にお定めあってしかるびょう存ずる」

飽くまでも主張した。余人の顔いろなどは問うところではない。一に勝家へ向っての反駁だった。

諸将の容子には、声にこそ出て来ないが、秀吉の説にうごかされて、

（それこそ道理である）

と、内心大いにうなずいたかの如きものが見えた。

この心理の傾きは、秀吉がいう嫡孫承祖の正論に肯定を余儀なくされたというだけのものではない。「理」の半面にもうひとつ「情」の裏づけがあったによるのである。

——といえるわけは、

会議の直前、諸将は、信忠の遺孤三法師のいたいけな姿を見ている。

ここにいる諸将は、例外なくみな子をもつ家の父であった。今日あって明日知れぬ武門の身には——三法師のいじらしい姿をながめて、誰もが、身につまされずにいられなかったにちがいない。

その情念の上に、理念からも、堂々たる正論を掲げて、衆判に問うたのであるから、さしも自主緘黙を持していた諸将も、秀吉の主張にうごかされたのは当然であった。

それに反して、勝家の主張は、一応尤もらしく聞えるが、根拠が弱い。方便主義であり、また、信雄の立場を完くなくしている。信雄とすれば、自分をさし措いて、弟の信孝が跡目に立つよりはまだ、三法師が擁立されるを望んでいるであろうことはいうまでもあるまい。

勝家は反駁に苦しんだ。

きょうの評議で、秀吉が易々として自分の提議を容れるものとは思っていなかったが、三法師を擁して、こう強硬に主張して来ようとも予測していなかった。また、秀吉以外の諸侯が、かくも易々と、しかも多数、三法師支持へ傾こうなどとは、なおさら、思っていなかった。

とはいえ、ここで秀吉にやぶれるなどは、何としても忍び難い。

「ふうむ。……なるほど、……理くつじゃな。理づめで申さば、まずそんなものであろうが、三歳の幼君をいただくのと、お年ばえもたのもしき将器豊かなる御方を仰ぐのとでは、われら重責を負う遺臣としても、その施政に士気に、将来の大計にも、やはり大きな違いがないわけには参るまい。毛利といえ、上杉といえ、なお安からぬものが多いところじゃ。三歳の若君でどうなろう。先君の御遺業も半途に止め、このまま縮もうという織田家ならべつじゃがの。――いや、守ろうとすれば四辺は、時こそ得たれと侵して来る。所詮ふたたび乱世じゃ。室町家の末路の轍を踏もうも知れぬ。いや、勝家には危ぶまれる。どうあろう？　諸侯」

座中を見まわして彼の眼は支持者をさがした。が、どこからも明瞭な反応がないのみか、偶然彼の眼とかちあった眸が、突として、

「御大老」

と呼びかけ、却って、横から斬りかけるような反勢を示してきた。

「おう、五郎左殿か、何じゃあ？」

勝家も反射的に、頼みをかけぬ返辞を投げた。五郎左――丹羽長秀は初めて発言した。

「だんだん御深慮は伺ったが、ここはまず羽柴殿の説を容れられては如何なものかの。羽柴殿の云い条、五郎左も至極と存ずるが……」

宿老格では、丹羽長秀もまた、宿老の一人である。

その五郎左が、緘黙を破って、秀吉方へ、自己の旗いろを明らかにしたので、この時、勝家の面色ばかりでなく、座中は俄に色めくものがあった。

「五郎左殿よ、それはまた、どういうわけでの？」

勝家は内心の忿懣を抑えながらなじった。――が、形勢ここにいたっては、秀吉との対立、もはやまぬがれ難しと肚のうちできめこんだものか、焦躁の半面に、瓶破柴田らしい傲岸不屈な体をも、わざと示していた。

多年のことだ。長秀は知っている。彼のそういう性情をよく心得ている。――でなだめるように、

「大老。お腹立てなさるなよ」

と、まず温顔を向けてから、自己の所存を述べはじめた。

「――何というても、羽柴殿は、最も先君の御意にかなっておる者ではござるまいか。右府様、御非業の節、すぐ中国より取って返し、倶に天を戴かざる無道人の光秀を討ったるは、われ人ともに、悲痛の中の面目、ありがたいことでおざった」

「……」

勝家の面色は惨たるものに塗られた。が依然、くずれないのは、その五体もあらわしている我意一徹な線であった。

長秀はなお云いつづけた。

「あの際、大老にも、越中の陣におかれて、右府様の御最期を知るやいな、たとえ手勢は揃わずとも、飛馬に鞭をあててお上りあらば、羽柴殿とくらべては、倍にも勝る御身上、明智ごときものの二つや三つは、立ちどころに踏みつぶされたであろうものを。……さてさて、御油断ゆえに、わずかの遅れ。惜しいことでおざった」

諸将、たれの胸にも、このことはあった。長秀の言は、諸将の感情を代表したものといえる。

同時に、これは勝家の大弱点であった。出遅れて、故君の弔い合戦に会さなかったという一事だけは、何としても弁疏の道がない。長秀は巧みにそこを衝いてから、秀吉の提議が正しくもあり、穏当

でもあるという、自己の賛意を忌憚なく述べ終った。

彼が口をつぐむと、ここ大評議場の空気は一転、険悪を孕みかけて来た。勝家の苦境を救おうとするかの如く、滝川一益が側の者に急に私語し始めたのをきっかけに、諸所において、低語歎息が聞え出した。――これはむずかしい。織田家の御運の別れ目は今。――と表面は片語の騒めきに過ぎなかったが、声なき底に勝家対秀吉の正面切っての衝突が、どうなることかと、より以上の関心となったのはいうまでもない。

この重苦しい空気のうちに、当の勝家はと見れば、茶道衆が、すでに午の刻を過ぎている旨をそっと伝えて来たのに対して、

「うむ。ウム」

と、うなずいたきりで、汗ぬぐいをくれといいつけ、同朋の者が、水絞りの白布を捧げると、大きな手にそれをつかんで、襟くびの汗を拭きぬいていた。

「……はて。当惑な」

その時、秀吉は、左の手をわき腹にあてていた。そして急に眉をしかめて見せながら、勝家に向っていう。

「これはどうもならぬ。……柴田殿。にわかに、虫気が起ったものとみえ、腹が痛む。失礼なれど、しばし中座する。おゆるしを」

つと立って、評議の席を抜けてしまった。

遠い、台子の間まで来ると、

「いたい。……いたい」

秀吉は大げさに腹痛を訴えながら、まごまごしている同朋衆へむかい、

「枕、枕」

と、よび、それから、

「薬をくれい」

と、すぐ横になってしまった。

大病人のようである。

しかし心得ている病人とみえ、書院庭から吹きこんでくる涼風へむかって枕をすえ、うしろ向きになり、汗に蒸れた襟元を自分でくつろいでいた。

が、典医や茶坊主どもは、あわてぬいている。侍たちも、こもごも見舞に来て、

「御気分は……？」

と、気遣ったが、秀吉は、

「そっとしておけ。そっとしておけ。……持病だ。やがて癒る」

うしろ向きのまま、蠅でも追うように手を振った。

同朋がとりあえず、薫香散を煎じて来て献じると、秀吉は起きて、

「これは、暑気中りにもよい」

呟きながら、喉も大いに渇いていたところか、熱いのを、ふうふう云いながら飲みほした。

そしてまた、横になった。

どうやら本当に寝ついてしまったらしいので、同朋衆も侍たちも、次へさがって、そっとしておいた。

大評議の広間とここことは、幾つもの間数をへだてているので、秀吉が立った後、どうなったことか、気配も知れない。

だが、ちょうど同朋衆が、頻りと午を告げていた折でもあったから、秀吉の中座を機会に、どうやら午食の休憩に入ったらしくも思われる。

一刻ほどの時が経った。

そのあいだ、七月の真昼は、かんと照りつけるのみで、一城の広さは、事もなげに静かである。

そして、次の風雲を孕み、明日の世代を分つともない一朶の夏雲が、清洲の上に、じっと、動きもせずあった。

「筑前どの。御気分はどうじゃ。……落着かれたかの」

いつの間にか、枕許に、丹羽長秀が来て坐っていた。うしろに清洲の侍もひかえていた。

「……ウム？　……おう」

秀吉はむくと肱を立てて、長秀の顔を見、急に気がついたかのように、

「やあ、失礼を」

と、坐り直した。

「柴田殿が、迎えて来いといわるる。……はやお越しあるがよい」

「評議は」

「貴公が座にいなくては、評議にもならぬ。——ともかく参られてからと、柴田殿のことばだが」

「それがしの申し条は、はや尽しておる」

「いや、あれから各　の詰所へさがり、半刻ほどの休息の間に、風模様は変った。柴田殿も、考え直したらしくみえる」

「参ろう」

秀吉は立った。長秀は思い入れの微笑を見せたが、それにニコともせず、秀吉はもう先に台子の間を出ていた。

勝家は、眼でじろと彼を迎えた。

座中一同も、ほっとしたかのようである。議場の空気は前とちがっていた。勝家は折れて、秀吉の提議を容るべし、と確言した。ここに、三法師を相続者と定める議案は一決した。

勝家の譲歩によって、

「めでたい、めでたい」

と、一瞬、大評議場は、危雲を払って、解けあう和気に醸された。

「三法師君を、天下人と仰ぎ奉ること、各　にも御同心、勝家にもはや異存なし。祝着、祝着」

彼もしきりにいっていた。自説の形勢悉く非なるを見て、にわかに前言を撤回し、からくもこの場を切り抜けたというかたちである。

がなお、彼として、ひそかに期すものはあった。

それは次の議案——旧明智所領の処置——つまり領土分配をどう割り振るかの問題である。

これが直接、諸将の利害にかかわる実質的懸案だけに、相続問題以上、ひと揉めはまぬがれまいと予想されていたが、案外そうでなかった。

「そのことは、ひとえに、宿老方のよろしきように」

と、さきに一捷を掴した秀吉から、謙譲を示したことが、まず非常に、会議の進捗を円滑にしたのである。

「では、一応、大老のお考えを……」

と、宿老格の丹羽、滝川などが、ここで前にはまるつぶれとなった柴田勝家の顔をたてて彼を中心に合議して原案をまとめにかかった。

しかし、すでに秀吉の存在は、何となく、冒し難いものになっている。纏められた原案は、やはり一応は、秀吉の前にも送られて来て、

「御意見、どうあろうか」
と、彼の内見を求めざるを得なかった。
「――筆を」
秀吉は同朋からそれを求めて、原案を一閲していたが、筆に墨をふくませると、無造作に三、四項へ棒を引き、かつ、私見を書き加えて、
「かようにされては、如何」
と、訂正して返した。
ふたたび勝家の手に廻されてくる。勝家は苦々しい容子である。黙思久しかった。勝家の望みとしていた項目にベタベタ墨が引かれているからである。けれど、秀吉は自分へ割りあてられて来た江州坂本の知行分にも自分で棒を引いて消していた。そして秀吉自身は、ふつうの諸将並に、わずか丹波一国を書き入れているに過ぎないのである。
寡慾を示して、勝家にも、寡慾をすすめて来たものだ。そして信雄、信孝に多くを割当て、あとは山崎の甲合戦の功によるかの如き分割案の振り当てだった。
「……明日もあること。暑中の長評議とて、各　も疲れたろうが勝家もちとつかれた。この議は、あすとしてはどうか」
ついに勝家は保留として即答を拒んだ。それには、異議はない。夕陽もさして来て暑さはいよいよ苛烈だ。第一日は閉じられた。
次の日。大評定第二日目。
勝家は、妥協案をもって、
「かようでは、どうじゃな」
と、宿老たちに諮った。
夜前、勝家は、自身の家臣たちを集めて、宿所で鳩首談合して来たものだった。
が、秀吉は容れなかった。
きょうもまた、この分割案を挟んで、両者の対立が激化するかとみえたが、大勢はすでに秀吉に加担している。どう粘ってみても、結局、秀吉の云い条に拠らざるを得なかった。
午、ひと息入れて、やがて午すぎの未の刻を期し、その決定が諸将へ披露された。
配分に付せられた領地は、明智の闕国のほか、信長の直領地もふくまれている。
国分けの筆頭は、
信雄卿　尾州一円
信孝卿　濃州
の、ふた筆であった。
一は織田家の発祥地として、一は岐阜在城の地として、共に、適切な処置とされたが、これも秀吉の意で、勝家の初案を直して、こうさせたものだった。
滝川一益の五万石加増、新付北伊の一部、蜂屋頼隆の三万石加増等には、何らの筆を加えなかったが、
池田勝入父子、大坂、尼ヶ崎、兵庫十二万石
丹羽長秀、若州、並びに江州二郡
の二項には、原案よりも、加封を多くした。
その代りに、秀吉は、自分への割当を削って、丹波一国を獲るにとどめ、また、勝家の取分も減らして、
――江州の内、長浜六万石

だけを彼に付与した。

長浜は現に、秀吉の城地となっている所である。

しかしそこは越前から京都へ通ずる咽喉の要地であった。

勝家はそれへ目をつけたにちがいない。強引にもこれを需めた。

そのほか三、四郡の地をも望みに加えていたが、ほかは秀吉が抹消してしまった。そして長浜六万石だけは、きれいに彼へ渡してやったのである。

もっとも、それにも条件が付いていた。勝家の養子、柴田勝豊へ持たすという確約の下にされたのであった。

前晩、柴田家の家中は、勝家を囲んで、こういう屈辱的な分け前にたいし、大不服をとなえ、秀吉のやり口を、

（思い上がった下郎の専横沙汰、断じてお容れあるべきではない）

と、一蹴し去るべきことを励していた程だったし、勝家もきょうここへ来るまでは、家臣と同じ気もちでいたが、評議の席へ臨んでみると、おのずからまた自我のみを強調し得ない諸将の大勢というものがここにはある。

（――自分を小さくしてはならない。我慾一点と見られてもなるまい。多数が可とする以上はやはり順応せねば却って後に悪かろう）

などと座中の空気とにらみ合わせては、自然、彼の我意もこう牽制されてしまわざるを得なかった。――で結局、

（長浜の要地さえ、秀吉から取り上げて、わが掌中に収めておけば）

と、他日を底意に期して、とうとうその条件付にも甘んじて受諾したものであった。

彼の狐疑鈍渋に反して、秀吉の態度は淡々たるものに見えた。

中国以来、山崎の快捷まで、戦政両略の主動を取って来た筑前守こそは、必ずや誰よりも多くの獲得を欲するであろうと人々はみな予想していたに関わらず、彼が受けたのは、諸将並に丹波一国にすぎず、既得の長浜も譲ってしまい、当然取ってよいものと人皆がゆるしていた江州坂本の地も、丹羽長秀にやって顧みなかった。

坂本は京都の関鍵だ。

（自分には、天下をうかがう意などはない）

それを秀吉は敢えて衆に示すべく、わざと取らなかったものか。

或いは、

（いずれ帰すところに帰すしかないもの）

と、眼前の小事として、群議にまかせておく気であったものか、なお未だ、彼の大腹中を真に知る者はなかった。

虎口

一時は決裂のほかあるまいかのような危局を孕んだ清洲会議も、二つの重大懸案が、ともかく議決されたので、あとの小問題は、一瀉千里に片づいた。

信長の跡目を承けた新君三法師の食邑として、近江の内三十万石をあて行う事――も異論なく決定した。

傅役には、従来どおり長谷川丹波守と前田玄以の二人のほかに、なお秀吉が輔佐すること。

また、安土は焼失したので、安土に仮館ができるまで、三法師の座所は、この岐阜としておく事。

信雄、信孝の二叔は、幼主三法師後見人たるべき事。

等々の事項のほかなお、施政体制の面としては。

京都に織田代表の四将を置く。柴田、羽柴、丹羽、池田の四家がその任にあたり、各自、家中から役人を派して、洛中の庶政を合議裁決せしめる。

という案も即決された。ここにすべての解決は終った。閉会の式として、

（いずれ協力一致して、幼君を奉戴、異背あるまじき事）

の誓書を納れ、これを故主信長の霊前に供え、併せて、評定の結末を直ちに報告することになった。

その日は、七月三日。

信長の月辰――月の命日は、昨日の二日であった。もし会議が順調にすすめられていたなら、このことは、きのうの命日に行われるはずだったが、勝家の保留で一夜越したため、忌日追福の営みも、ついに一日延ばされてしまったわけである。

諸将は、詰所へさがって、まる三日間の緊張から解かれると、やれやれといいたげに、各 、夕風に涼を入れて、家臣たちの宵わりに寛いでいた。

多くの同朋衆は、手分けして、各詰所の小部屋で、一筅をそそぎ、茶を献じ、香を薫じて、犒いを扶けていた。

その間にもう清洲の臣が、

「御小憩がおすみに相成りましたら、酉の下刻のお土圭をあいずに、二の丸の御仏殿までおわたり下さるように」

と、触れあるいていた。

汗をぬぐい、喪服にあらためて、諸将は刻を待っていた。

蚊うなりのする大殿廂に、新月の影がほそい。

遠く土圭が鳴っていた。

喪服の武将たちの影が、もの静かに、二の丸へ渡っていた。

雲母襖に紅白の蓮花が描いてある仏間の裾に沿うて、勝家以下、ひそと着席した。

次々に、一人来ては坐り、一人来ては、また加わった。

ひとり秀吉だけが見えない。

「はて……？」

と、いぶかりつつ眸をこらして正面の仏龕ほのかな辺りを見ると、厨子、位牌、金壁、供華、拈香などの厳かなものの影のうちに、さきの誓書一束が供えられてあるのが一しお目につく。

が、より以上、衆目をそばだてしめたのは、壇下に接して、筑前守秀吉が、喪服した三法師を膝にのせ、けろと、とり澄ましていることだった。

（これは――？）

と思わぬ者はなかったらしい。

けれどよくよく考えてみると、長谷川、前田などの傅役のほかに、秀吉も幼君の輔佐たるべしとは、昼の会議でみなが衆判の下に認めていたことである。僭上なり――とは咎められない。

そうして、臣座を超えた別格の位置に坐っている秀吉にたいし、何ら咎める理由が見出せないだけに――勝家のおもしろくない顔つきは非常なものだった。

「……いざ、お順に」

二叔の信雄、信孝へむかって、こう促すのさえ、頤のさきで、声こそ低かったが、業腹の沸りが息になって洩れたような語調だった。

「お先に」

信雄は、信孝へ云って、さきに立った。これがまた、信孝には不

興なこと夥しい容子だった。少なくもこれだけの列将を前にして、信雄の次にされたことは、彼として、将来まで下風におかるることを無言のうちに確定づけられた気がしたのであろう。

信雄はと見れば――父信長と兄信忠の位牌にむかい、瞑目合掌して香をささげ、ふたたび厨子壇を拝し、静かに、そのままうしろへ退がりかけていた。

――で、すぐに自分の座へ戻りかけるかのような物腰に見えた時、秀吉は、咳一声して、自分の膝に三法師君が在ることを――

（ここに新君おわすぞ）

といわぬばかり屹となって、信雄の関心を促した。

秀吉の意識的な身じろぎに、はっとしたらしく、信雄はあわてて膝を向け直した。自体、気の弱いこの人のことである。それが気の毒なほどぎまぎと見えた。

「……」

三法師を仰いで、信雄は、ごていねい過ぎるほど、恭しく拝礼をした。

「うむ」

うなずいたのは幼君ではない。秀吉である。

どうしたものか、秀吉の膝にあっては、駄々でおむずかりやの三法師も、人形のように端然としている。傅役の長谷川、前田、乳人たちは、遠い末座に、ただひれ伏しているのみで、ほとんど、その人たちの手を焼かすこともない。

信孝が立つと、同じく、父信長、兄信忠の霊を拝し、これは信雄の前例を見ているので、諸将に笑われまじとするかの如く、まことに挙止正しく、新君三法師にも謹んで伏礼をして退った。

次が柴田勝家であった。

彼の大きな姿が塞がるように厨子壇の前に坐ったとき、障壁の紅蓮白蓮も、ゆらめく仏灯も、悉く瞋恚の焔のごとく、その影を赤々と隈どった。

会議の報告、新君擁立の誓いなど、胸中の万感を交えて、長々と信長の霊に告げているものか、黙拝拈香、いと重々しく、さらに合掌久しゅうしていた。

そして退座七尺、いちど胸を正して、三法師のほうへ向い直した。すでに、信雄と信孝すら、三礼をなしているので、彼として怠ることはできなかった。ぜひなくではあったろうが、そのまま、腹中いっぱいの苦情を嚥んで拝礼をした。

秀吉は彼へもひとしく、

「ウム」

と、頷くかのような眉目を示した。――勝家は、ぐいと猪首を横に曲げて、ばさばさと自席へもどった。その後、唾でも吐きたいような顔をしていた。

丹羽、滝川、池田、蜂屋、細川、蒲生、筒井など順次に拝儀は終った。――そして人と席とはそのまま、この夜――故信忠卿の御簾中より被下――とあるお斎の間へ移って酒宴となった。

ここには、会議後、遅ればせに着いた金森長近や、菅屋九右衛門尉、河尻肥前守なども、席に加わっていた。

また両日中、城外の治安や城中の守備聯絡などに助力していた諸侯の家臣中の一族とか老臣格の者も、各一、二名ずつ列席をゆるされ、清洲直臣の側からは、前田玄以、長谷川丹波などがつらなった。

信雄、信孝の在るは、もちろんのことである。配膳は四十客以上

の多くに供えられた。すでにして杯は廻り燭は夜涼にさやぎ、人々はこの二日間に初めての歓語とくつろぎの中に各　酔いを覚えていた。

　酒宴と茶会とは、この時代の戦国社会では、流行り物のようであった。陣小屋の雑器としている備前壺に、一輪の野の花を生けて、物の具のまま一碗を喫し、また、陣後の往来や城中の諸会にも、昼に夜に、酒宴のひらかれるのはめずらしくない。百事の儀礼はみな酒宴の形式でされるといってもよいほどである。

　これはもとより当時の世態と武門生活の要求から自然になされて来た風習であった。信長といい、柴田、羽柴、その他、当年の先駆者や中堅はすべて皆、この世に、生れた時から世は戦国であり、長じて四十、五十となった今でも、なお世の中は戦国である。

　極言すれば、この時代の人間すべては、

（世の中とは、即、戦国のこと。戦国以外に、どんな世の中があるか）

　を、まだ自分の生涯中には見てもいず味わってもいない人たちばかりであったといっていい。

　故に、戦いは、日常であった。

（いつかかならず身をもって、天日うららかな平和を四海に回らし、万民をして和楽の地に安んぜしめん）

　とは、武門の上に立つ大将としては、誰もがいだいている理想のうちの大なるものだったし、民土一般も、その日の来ることを生涯の憧憬としていたことはいうまでもないが、さりとて、

（いつから始まった戦い、いつ頃になれば終るか）

　などと月日から割り出した儚い観測などに無為な日を暮している者はなかった。――この世は戦国、戦国は日常――という通念が徹していた。生活一切もそれに順応して、何の不自然もなく、苦しみも楽しみも、焼土も建設も、死別も生別も、涙も笑いも、悉く、人生の毎日にあり得る常のこととされ、しかもその中になお、この世に対する大きな希望と、苦しい日にも、愉快にあらんとすることを忘れなかった。

　諸将のよくやる酒宴は、その積極性のあらわれの一つだった。戦陣の寸暇、甲冑を解いて、身をくつろぐと共に、心を寛くし、和楽のうちに、心身を養うことであった。

　しかしまた宴楽のあいだには、外交の詭計、私交の虚実、人物の試胆、戦不戦の打診など、善悪あらゆる機微のものも美味声色を仮りて入り交じっている。燭は麗しといえどここもまた観ずれば刃なき戦場なりといえないことはない。――しかもそれは深く秘して交杯談笑のうちに各　が魂の素肌まで示しあうところにまた、人と人との交わりの微妙な味も醸されるのであった。

　だから当時の武将はみな何か酒宴のときに振舞う芸能を持っていた。信長の幸若舞も有名だったが、あの真面目くさい徳川家康にしても、自然居士の曲舞はおはこの芸であったし、その家臣の酒井忠次といえば、蝦すくいの名人として、その珍なる踊りは、四隣にまで鳴っていた。

　こよい、ここの宴は、常の場合とちがい、仏餐を賜わっていたのであるから、誰も演舞までやり出すような大酔はしていないが、しかしここの顔ぶれの中でも、演ればずいぶん演り得る隠し芸の持ち主はいそうである。

　わけて池田勝入の槍踊りは、自他共にゆるすものだった。

まだ信長の在世中であったが、或る折、甲府の使者を迎えて、安土に大酒宴の催されたとき、主客の使者が列席の武将のなかに、一きわ背も低く、足も跛行の小男が、人からうけた大盃を乾してそれを返しに立ってゆくのを見て、

（あれよ、盃より小さい侍が、盃を漕いで、海をわたって行くわ）

と、一寸法師の噺に事よせて、座興をいったつもりであろう、遠慮のない笑いかたをした。

すると勝入は、――この頃彼はまだ髪もおろさず名も勝入と変えていなかったが――黙って次の間へ退ったと思うと、ふたたび現われ、携えて出た見事なる朱柄の大槍を座のまん中に立てて主客の方にむかい、

（客人にもの申す。末座にまかりある者ゆえ、わざと御挨拶をひかえていましたが、お目にとまったようにござれば、かくは推参申してござる。……したが、客人の御眼には、この男、いたく小男のように御覧ぜられたかのようなれど、父母より賜える五体、幸いにして、五尺ほどはこれあり、今日までの戦場においても、いまだいかなる強剛に会うも、身の丈の不便というものはかつて覚え候わず。……とはいえ客人は小さいと仰せられ、それがしは大きいという。いずれが是やら、いずれが非やら、篤と、見ていただきとう存ずる）

云い終ると、信輝は武者ぶり作って、りゅうりゅうと槍をふるい出した。あだかも四面鉄桶の乱軍を駆けくぐし、その悉くを槍にかけて、宙に大地に、突き投げ突き伏せて熄まざるかのような大演技を演じて見せたのである。

信長を始め安土の同僚は、手をたたいて興じ入ったが、甲州の使者は、演舞の槍先がしばしば胸元近くまで閃めいて来たので、酔もさめたような顔していた。

そして、その後のてれかくしに、傍らの者へ、

（今のは、誰ですか）

と訊ねたところ、

（あれこそ、御当家の池田勝三郎信輝です）

と聞かされて、ふたたびふるえ上がったということである。

以来、信輝の槍踊りは、著名になって、折あるごとに見られたが、本当はそんな烈しい荒芸ではなく、虫の居どころによりなかなか優雅な舞い振りのものであったという。

――が、さて。

その池田勝入も、今夜の席に、居ることは居るが、こよいは亡君のお斎の賜膳である。酔うには酔うても、まさか槍踊りというわけにもゆくまい。

他の諸将も、同様な行儀であった。

しかし多少、酒気のあがるにつれて、あなたこなた、座をくずして、寄々に談笑の声はわき出している。

殊に秀吉の前には、杯と人とがかたまっていた。

そこへまたひとり出て、

「おながれを」

と、改まって乞うた者がある。柴田勝家が自慢の臣、佐久間玄蕃允盛政であった。

玄蕃の驍勇無双なことは、北越の戦陣で久しく鳴りとどろいているものだった。

（――佐久間玄蕃に二度出会った敵はない）

と、いうことばすらあるほどである。

勝家の愛し方は一通りでない。何かといえば、

（わが家の玄蕃は）

と、口癖にいい、

（甥めが、かように働いて）

とか、自慢たらたら、彼の武功を吹聴すること、他愛ないくらいであった。

勝家には、甥もたくさんいるが、彼が、「甥めが」といえば、それは玄蕃をさすことであった。

そして、その玄蕃盛政は、まだ二十九という若さであるに関わらず、柴田一族の上将として加賀の尾山城に住み、ここに在る諸大名とくらべても、何ら遜色ないほどな封地と待遇をうけていた。

「……おう、筑州どの。ひとつその男に遣わされい。――甥めが、お杯を所望と申しおる」

勝家は側から云い添えた。

それに初めて気づいたように、

「甥御とは？」

と、秀吉は見まわして、

「やあ、これは」

と、玄蕃の男振りを見まもった。

さすがに音に聞えた偉丈夫とは見えて、玄蕃の逞しい筋骨は小がらな秀吉を圧するに充分だった。しかし彼は叔父勝家のようなあばたの瓶わり面とちがい、白皙の美丈夫にして、見るからに虎眉豹身の気にみちている。

秀吉は、杯をあげながら、

「なるほど、匠作（勝家のこと）にはよい家の子をお持ちではある。……どれ、ひとつ参らそう」

すると玄蕃は、首をふって、

「いや、どうせ戴くなら、そちらの大きいのを所望申す。大杯を賜りたい」

「これか――？」

それにはまだ酒がたたえられていた。

秀吉は無造作に器物へあけて、

「誰ぞ、酌してやれ」

といった。

朱のさかずきの縁へ、蒔絵の銚子の注ぎ口が当てられた。銚子が空になっても杯はまだ余地をのこしている。酌人は、べつな銚子を取りよせて、さらに、それへ満々とついだ。

虎眉豹身の美丈夫は、眼をねむって、盃を仰いだ。そしてなお余滴まで舌なめずるごとく飲みほして、これを懐紙で一拭し、

「いざ」

と、返した。

秀吉は、笑って、

「わしは、だめだめ。その芸はできない」

手を振られると、玄蕃は、ひと膝つめた。

「なぜ、受けて賜わらぬか」

「弱いためだよ」

「なんの、これしき」

「それは、戦のときのことばよ。酒はのむが、大酒はようせぬ筑前じゃ。ゆるせ、ゆるせ」

「あははは っ。あははは っ」

腹の底から玄蕃は笑った。そして満座へ聞えよがしに、

「ひとの噂にたがわず、なるほど羽柴どのは謝り上手だ。まことに、お腰が低うていらせられる。むかし――二十余年前には、この清洲のお城で、馬糞を掃き、お草履をつかむ御小人であった時代もある。その頃をわすれぬためとか。さても殊勝なお心がけよの」

今日の羽振りをもつ秀吉を前において、これほどのことがいえる者は、この玄蕃を措いてほかにあるまい――と、みずから誇るかのような彼の放言だった。人もなげな哄笑であった。

はっとしたのであろう。

あちこちの談笑は急にやんで、人々の眼はみな玄蕃の姿にそばだてられた。

そして玄蕃の前にある秀吉の顔いろと、勝家の容子とを見くらべもして、

「すわ、また何事か起りはしないか？」

と、一瞬みな、酔いと杯を忘失していた。

秀吉はにやにやと玄蕃を見ているのみである。四十七歳の眼から、二十九歳の若さを見やっている眼であった。

いや年齢差だけでなく、秀吉が生れて二十九年をかぞえていた頃の人生と、玄蕃盛政が経て来た二十九年の歩みとでは、その境遇でも心態でも、たいへんなちがいがある。要するに、それすら思いいたらないほど、玄蕃は実世間的な苦労は知らないお坊っちゃんであったといえよう。為に、剛勇無比の名と共に、すぐ驕慢をも持ってしまうのであった。当代の代表的人物が一堂にある今夜のような畳の上の場合のほうが、戦場以上に実は危険な場所であるという戒心などはまったくないかの如き彼であった。

「――だが、筑前。ひとつ玄蕃の腹にすえかねることがあるぞ。やい、聞け筑前。……耳はないのか」

もう呼ぶにも呼び捨てである。酒くせよりは腹の虫が云っているらしく見える。しかし秀吉は酔態を眺めて、むしろ愛するごとく、

「お汝。酔うたな」

微笑でなだめると、玄蕃は、

「なんの」

大きく首を振って、

「事は、酒興ですむような、そんな小さい問題ではない」

と、大きく構え直して、さらに云いつのった。

「聞けばだ。――最前、お仏殿において、羽柴筑前には、信雄様信孝様以下の諸侯が、尊堂へ拝をなすにあたって、本来下賤の成上がりの身をもかえりみず、三法師君をわが膝にのせて、ずんと上座にかまえ、しかもいちいちおのれの方へも、拝礼を執らせたということではないか」

「は、は、は」

「なにを笑う。筑州、なにがおかしいか。――三法師君を飾りものに抱いて、実は羽柴筑前というつまらぬ男に、御一門や諸侯の辞儀を故意に強いたる汝の奸策であったにちがいあるまいが。……いや、そうだ。もしこの玄蕃允盛政がいあわせていたらば、その座をも去らせず首のねを引きぬいてくれたであろうものを。――さてさて、わがお館の匠作といい、並居る歴々の衆といい、みな歯がゆいほど、お人のよい方々ばかり――」

秀吉の席から二人ほど隔てて上座にいた柴田勝家は、そのとき急に杯をほして、他の顔をも見廻しながら云った。

「これこれ、玄蕃。何でそのように人の心事を猥りに口にするか。いや何、筑州どの、甥めは、こういう男でな。……ははは、悪気ではないのだ。聞き流してくれい」

秀吉は、怒りもし得ない、笑いもし得ない、いわば微苦笑のほかない羽目におかれていたが、こんな場合、彼の特有な容貌はまことに都合のいいものを持っていた。

「ふ、ふ、ふ、ふ。柴田殿よ。そうお気をもまれるな。よいわさ、よいわさ。……この方までが間が悪うなる」

判じのつかない態度でいうのだった。感情の揺れからのぼる顔色を見ても、大人の表情のようでない。

玄蕃のために、あたまからがんと喝破されて、手痛く参ったようにも見えるし、反対に、冷眼一瞥、相手を歯牙にもかけていないとも見られるのである。

なおいえば、児童が爪を噛んで何かに拗ねているような稚態と、老僧が山月に嘯いて世にとぼけているかの如き狡いものとを、猿面郎と綽名されているその類の少ない顔にぼかして、巧みに微酔の体を作っているものと思われぬこともない。

「なに、間が悪うなると。嘘をいえ。何の、猿が……猿が……あははは」

こよいの玄蕃もまた、日頃の玄蕃に輪をかけた傍若無人ぶりである。燃えない物にむりに火をつけて烈火を誘おうと努めているようなところもある。

「猿。……これは失言だった。しかし二十年来世上の通り名、一朝にしてはあらたまらぬ。——左様、その猿で思い出した。むかし、この清洲のお城に、猿に似た御小人が、雑用にくるくる追い使われていた当時、そこにおるわが叔父も、まだ権六勝家と申されて、折々、宿直なども勤められていたそうだが、……或る夜、つれづれのまま、猿を招いて酒をのませ、酔い疲れて横になったついでに——猿よ、すこし足腰を揉んでおくれぬか——と申したところ、おやすいことと、猿は如才なく、権六の足腰を根気よく揉んだそうな」

「……」

秀吉はともかく、衆はみな酒気を失って蒼白な面に生唾をのみ合った。——事態、これはただ事でない。この宴席からいくらも隔てない壁の外、木蔭、床下など、悉く柴田の手により剣槍飛弓が匿されているのではあるまいか。そして執こく秀吉の怒髪を誘っているのではなかろうか。——そんな邪推や臆測から生じる一種の衆の鬼気が、満座にゆらぐ燭の影と、墨のごとき夜風となって、夏ながら背すじも寒い心地に襲われ出していたからであった。

と、秀吉は、玄蕃のことばが終るも待たで、からからと打ち笑っていた。

「いや、北ノ庄の甥どの。それは誰に聞かれたか、めずらしい思い出を語られるの。——いかにも二十余年前には、権六どののお腰はおろか、猿めは、導引が上手いとて、御一門の衆などには、わけてよう揉ませられたものじゃった。そして、お菓子など賜わると、うれしくてなあ。……わははは。今はなつかし、あのお菓子の味はなつかしいものぞ」

「叔父上。聞かれたか」

と玄蕃は大げさに勝家のほうへ伝えて、

「筑前に、何かよいものをお遣りなされ。今でも、揉めといえば、揉んでくるるやも知れぬ」

「あまり座興の度をこゆるな。――お戯れだわ、のう、筑州どの」
「いやこの頃でも、折々は、ひとの足腰を揉んでおるにはおる」
「ほ。……誰の」
「ことし七十余歳に相成る老母の腰を揉むことは、この方が楽しみの唯一でおざる。しかしここ幾年は戦陣にある方が多く、近頃はとんとその楽しみにも会い得ませぬ。……そうそう、俄かに思い出されて来た。おさきに失礼する。各　には、まずごゆるりと過されい」
秀吉は先に宴を辞した。
そこを立って、大廊下へ出てゆく間も、たれも止めてはいなかった。
諸侯は、彼が席を立ったのを、むしろ賢明と思い、たえられぬ危うさを感じていた鬼気殺気も、それによってまず、ほっとするを得たからであった。
「……殿っ」
「お退がりでございましたか」
大玄関に近い溜りの一間から、つと出て、彼のあとに従ったのは、片桐助作と石田佐吉の二小姓であった。
城中二日の空気は或る程度ここの詰所からでも感知することができた。が、秀吉は多くの家臣を城内に入るをゆるしていない。――で、二人の若者は、主人の無事を仰ぐと、各　うしろからこう云った。
「お疲れでございましたでしょう」
「……が、何事もなくて」
秀吉はうなずくのみで、後の二人が小走りになるほど大股な歩みであった。
そしてすでに、外へ出て、助作と佐吉が、供の家中や馬を呼びたてていると、
「羽柴どの羽柴どの」
あわただしく追いかけて来て、空に三日月の見える宵闇の広場に、彼の姿を求めている者があった。
「ここじゃよ。ここじゃよ」
秀吉はもう馬上にあった。
そこで鞍つぼを叩いている音を知って、滝川一益は駈け寄って行った。
「何か」
秀吉は一瞥くれていう。
その容子は、主君が臣下を見るのと、同じであった。
一益は、寄り添って、
「察し入る、察し入る。さだめし今夜は、お腹が立ったであろう。……が、酒のうえのこと。それに、北ノ庄の甥は、あのとおりまだお若い。ゆるしておやり下さるように」
頻りになだめる。
そして、次に告げた。
「既定の事。おわすれあるまいが、明四日の昼、三法師君のお世継御披露の祝事には、ぜひ御参列を欠かされることなきようにと、柴田どのが特に、あなたの立った後ですぐ案じるごとく申されておられた」
「そうか。……うム」
「必ずおわたりあるように」
「わかった」

「くれぐれも、こよいのことは、水にながされよ。——北ノ庄殿へはわしから申した。なんの、大腹な筑前どののこと、若い者の一場の戯言などに気を悪うするものかと」

「叱ッ——」

馬がうごいたのである。一益が馬の後肢を避けて身を転じると、

「老人。あぶない」

秀吉は一顧して、さらに馬をぐるぐるまわし、黒々と寄って自分を見まもっている供の人数へ、

「参るぞ」

すでに多聞を出て、大手の唐橋を通っていた。

彼の宿舎は町の西端れで、小さい禅寺と隣地の一豪家を借りていた。寺坊には人数や馬匹をおき、秀吉はその農家の中二階ともいえるような所に起居していた。ここが気軽でいいというのである。

簡易な彼の旅営にしても、兵員は約七、八百名も連れている。——が、少ない方で、柴田などは出陣そのままの装備と兵力を擁して来たので、無慮一万にちかい麾下を清洲に入れているだろうという噂であった。

宿へ戻るやいな、秀吉は、

「煙い煙い。窓を開けい。梯子口も開け放しでよい」

それと、暑さとで、桐紋の式服やら長袴やら、蹴るように脱ぎすてて、

「——風呂は」

と、早や裸体での催促だった。

もう宵の五刻だが、八百の兵員の炊煙はまだ濛々と旺であった。

ここの中二階の下の部屋には、堀尾茂助、一柳市助、木村隼人佑などの近衆がつめ、身辺の世話は、小姓たちが勤めていた。

隣地の寺坊の方にはなお、年長けた部将たちが兵と共にいたが、その中のひとり加藤光泰がこれへ来て、

「殿は、どちらに？」

と、さがしぬいていた。

裏の風呂場と分って、光泰は廻って行ったが、豪家といっても、田舎家のことである。板屋根の、それも壁も羽目もない吹きぬきに桶風呂一つすえてある所に、秀吉の首が、湯気の中に浮いている。

「——作内光泰にござります。何か、急に来いとの仰せの由、憚らずに参りましたが」

湯の流れてくる垣の元にひざまずいた。

「作内か」

と、秀吉は見て、

「寺内の者どもは、今ごろ飯をくうておるらしいが、なぜ晩いのか」

と、訊ねた。

光泰は答えて、

「城中に万一の変もあらばと、きょう一日中、みな案じておりましたので、殿の御無事なお帰りを知って、初めて炊煙をあげ出したわけにございまする」

「無用無用」

秀吉は湯から出て、小姓の石田佐吉に背中を洗わせながら、

「兵どもに、いらざる苦労をさせるお汝らは、ちと拙ないぞ」

「はっ」

「兵には早う飯をとらせ、馬にも充分飼糧をくれて、こよいは早目に眠らせておけ。——火の用心ぬかるな。時ならぬ沙汰あるも、す

ぐ打ち立てる心しておけや」
「かしこまりました」
「何している。蚊にくわれるぞ。……用はそれだけだ。はやく行け」
光泰は去った。
これはごきげんがよくないらしい。——佐吉はそう思いながら、小桶にすくった湯をおそるおそる秀吉の背になが した。
が、秀吉は、湯桶の中で、あくびを一つしていた。そしてその中で四肢の筋肉でもいっぱいに伸ばしているのか、ううむ——と鼻でうめいて、
「……すこし解けた」
と、二日の凝りを唸っていた。
「蚊帳は吊ったか」
浴衣を捧げた小姓たちが、
「吊っておきました」
「よしよし。お汝たちも、早寝せよ。——詰の者にもそう申せ」
秀吉は蚊帳の中から云った。
戸は閉てられてあるが、窓は風を呼ぶためにあいていた。宵月のほの明りが揺れてくる。——と、眠りかけたかと思われる頃、
「殿……」
「なんじゃ。茂助か」
「はい」
と、堀尾茂助の声が外からいう。
「有馬法印が見えられて、そっとお目にかかりたいと申しておりますが」
「なに、有馬法印が」
「はやお寝みと申しましたが、それでもと、強って申されますので……」
しばし、返辞がない。
秀吉は蚊帳のうちで、しばらく考えているふうだったが、やがて、
「では、梯子を上がった所まで通せ。秀吉、ちと疲れ気味にて、お城よりさがるやいな、薬湯を服んで臥せておりますれば……と断ってな」
「承知仕りました」
静かに、茂助の足音が、中二階の段を降りてゆくと、間もなく、ふたたび上がって来る人の気配が、そこの狭い板の間にうずくまった様子であった。
「筑前どのには、お寝みのようでございますが」
「オ。法印か」
「……どうぞ、そのまま」
「蚊帳の中に臥せったままじゃ。無礼はゆるされよ」
「なんの。今、御近衆にうかがえば、お城より帰らるるとすぐお茶を召されてお籠りの由。お案じいたしましたが、火急、お耳へ入ればやと、夜中を冒して参りましたので」
「何ぶん二日の会議で、心もいため、体もちと無理をしたのでな。……が、夜中、急に来たとは」
「はい。……羽柴どの」
法印は急に声をひそめ、
「明日、御城内での、三法師さまお跡目立ちの御祝宴には、お出ましのおつもりでございまするか」
「さ。……何せい、きのうもきょうも、薬を服んでは、悩えて来た

ような体の調子。多分、暑気あたりかとも思わるるが……さりとて、登城を欠けばまた、うるさかろうしの」

「左様に御気分のすぐれぬのは、それこそ虫の知らせというものでございましょう」

「ほう。……とは、なぜか」

「先刻、宴のなかばに、御退席なされましたが、あの後にて、柴田党の方々ばかりなお残られ、頻りと、秘事の談合です。――解せぬ色よと、前田玄以などとも案じ申し、ひそかに窺いまするに……」

ふと、口をとじて、法印は秀吉が聞いているのか否かをたしかめるように蚊帳のうちを覗いた。

青い虫が、蚊帳のすそでキチキチと啼いていた。秀吉は依然、仰けに寝たままである。

「法印。――それから？」

「詳しい謀みはさぐり得ませぬが、あらましを察するに、柴田党の面々は、どうしても、筑前殿を生かしておけぬとしておりまする。――で、明日の登城を機に、一室へ拉し、罪状の数々を挙え立てて、いやおうなく腹を切らせん。切らずば無下にも抑えて刺し殺さん。……それには、ああしてこうしてと、城内の兵のくばりから城下の抑えまで、残るくまなく、肚黒い密事を凝らし、しかも明日は、いとさりげなく、あなた様を清洲に待とうと致しておるものにござりまする」

「ははあ……。怖いのう」

「実は、玄以がお告げに参ろうと、気を揉んでおりましたが、玄以がお城を出ては、人目につく惧れもあり、かくは法印がそっとお耳に入れにまいりました。……折ふし、御発病とあれば、これも天の御庇護、どうぞ明日の御参列は、お見合わせ遊ばしますように」

「さあ。どうしたものだろう」

「ぜひにも、お取り止めなされませ」

「ほかならぬ、新君の御祝事ではあるしのう。……が、法印、好意は謝すぞ。ありがとう」

降りてゆく梯子の跫音へ、秀吉は蚊帳の中から掌を合わせていた。

離り

彼は、眠ることが上手な人であった。

眠ろうと思うときに、どこでもすぐ眠れるということはやさしいことのようで実はむずかしい。

場所を問わず、また眼前の何事にもとらわれず、まつ毛をとじさえすれば、ごろりとなっても、物に倚りかかったままでも、すぐ寝られるのでなければならぬ。

しかも、ごくわずかな時を限って、思いのままに、眼をひらくと、直ちに、百年の眠りから醒めたるごとく、頭脳も肉体も一洗されて、いざ。

と立ちどころに、大事小事を、行く水のごとく処理してしまうというような習性は――習性というよりは、ひとつの禅である。

秀吉の絶倫な精力と健康とは、彼の「眠り上手」にもあるといってもさしつかえなかろう。

努めるともなく、これに慣れたのは、年少放浪の頃、家なき子として、草の上でも、荒寺の床にでも、いわゆる大地を褥としていた当時の賜ものと思われる。

――が、長じて、かつ世の指導的な一方に立って、いかなる逆境や困苦の重囲にも煩わさるるなく、その少時の鍛練を、よく生かして、

即睡即覚

ともいえる悟道に近い妙生を身にもつようになったのは、彼自身がその戦陣軍務の多忙と健康の必要から考え出したところの、ひとつの座右銘から得たものであった。

室町中期頃から、世上の騒乱暗澹たる半面に、心ある武門のあいだには、各がひそかに、

――われらは、これでいいのか。

という反省がよび起されて、その結果、武家の一門に、或いは、武士個々に、当時の座右銘ともいえる――家憲、武士道訓、或いは、壁書――などというものが大いに行われ始めて、その道義的風興は、戦国期に入って、いよいよ磨かれ競われているのであった。

で、秀吉にも、何がな日常の心養に、そういう座右の師語は幾つか心にあったであろうが、彼がひとりひそかに珍重している座右銘は、むしろ路傍で会ったつまらない旅の禅坊主からふと聞いて忘れ得ないものとなっている――

離

という一字であった。

これが、彼の座右銘ともいえる護符だったのである。

離。はなれる――

何でもないようだが、彼の眠り上手のこつも離れ心であった。

焦躁、妄想、執着、疑惑、早急――あらゆる事々のきずなをも、一瞬、両の瞼で断ち切って、一切白紙の心になって寝てしまう。――また、瞬時にして、ぱっと醒める。

これが思うままにできるようになると、醒めるも快、眠るも快、百事、この世は快ならざるものはなくなってくる。

のみならず彼は――彼とても巧い戦や思いどおりな計画ばかりではなく――ずいぶん周囲に間の悪いような失策も度々だったのであるが、そんなときも、その失敗失戦にくよくよとらわれている風は少しもなかった。こんな場合、彼が胸のなかで思い出していることも、

離

の一字だった。

よく人のいう臥薪嘗胆とか、一念没頭とかそんな程度の懸命は、彼にとっては、特別な心がけでなく、日々当然にしている生活だった。――故に、彼にはむしろ、一瞬でも、それから離れて、大生命を息づかせる「離」の心がけの方がはるかに必要だったのである。惹いては、生死ももちろん「離」一字にまかせていた。

わずかな間だった。――半刻も眠ったろうか。

秀吉は起き出した。

階下の厠へ降りてゆく。――と、すぐ詰の間の者が紙燭を掲げて板縁にひざまずいた。間もなく、彼が雪隠から出てくると、なおべつの一名は、小柄杓に水をたたえて待ち、傍らに寄り添うて、秀吉の手へ水をかけた。

秀吉は、手を拭きながら、軒ごしに月の位置をながめ、佐吉、助作の二小姓を顧みて、

「お汝らも、寝たか」

と、訊いた。

実は――眠る間などなかったのであるが、そういっては、きげんの良くないことを知っているので、

「はい。まどろみました」

と、答えると、秀吉は縁を五、六歩すすんで、そこの詰の部屋へ、

「権平も居るや」

と、直かに声をかけた。

平野権平が、答えて出ると、秀吉は中二階のはしご段へ足をかけながら振向いて、

「寺中へ参って、光泰に、出かけるぞと、合図して来い。――兵の分かちよう、道々の推行（行軍のこと）などは、夕刻下城のせつ、書きものに認めて、浅野弥兵衛に渡してあるゆえ、浅野弥兵衛について、さしずを聞けと申せ」

「はっ」

「待て待て。もう一言いいわすれた。大島雲八に、ちょっと来いといえ」

裏の雑木林から寺の方へ、権平の走ってゆく跫音が遠ざかってゆく。そのまに秀吉は小姓たちに介添えされながら、手早く鎧具足を着けていた。

身支度さえすめば、さッさと先に出て、他の者に猶予していないのが彼の性分である。自然、まごついている者は置き残されてしまう。けれど扈従もよく馴れていて、秀吉の身世話は、刻々に顔をかえて行われ、支度のできた者が来て代ると、前の者が退いて、忽ち、物の具を引っかつぎ、われおくれじと、後について来るといったふうであった。

宿の前は、伊勢路と美濃の往来になっている。秀吉は納屋の横を通って、そこへ向っていた。

――と、さきに召しをうけた大島雲八光義が、よたよたと追いすがって来て、

「光義、参りました。御用の旨を承りまする」

と、立ちどまった人影の前へまわってひざまずいた。

大島雲八は七十六の老武者であった。一子の茂兵衛光政は丹羽長秀に仕えていたが、この老父は早くから秀吉に傾倒していた。その持城が美濃の関にあった関係もある。

「老人か。御苦労御苦労」

秀吉はその老体をいたわりながら、雲八が若い者に負けず、早くも甲冑を着けて来たのに目をとめて、

「やれやれ、物の具までには及ばなかったものを。――頼みおく用は明朝のこと。お許は、後に留まっておれ」

「明朝。清洲のお城へ参りますので」

「それよ。さすがは年の功、よう察した。――筑前こと、持病に悩み、昨夜、にわかに長浜へ帰国、残念ながら御祝事には列し難ければ、諸事よろしくと、城中へも、柴田へも申し入れておくのだ。……いずれは、勝家、一益などがくどくど申すであろうが、お許の耄碌こそ倖せ、耳の遠い顔して、何事も聞きながし、そのまま関へ立ち帰るがよい」

「お云いふくめの儀、よう分りましてござりまする」

老齢七十六の武者大島雲八は、海老のように曲った腰にも、なお一筋の槍は手離さず、一礼して立つと、大鎧にかためた身を重たげに旋らして、そこからゆさゆさとあとへ引っ返して行った。

山門前の往来には、寺中あらましの人数がもう出揃っていた。一

旗一旗の指物を目じるしとして、部隊は幾組にもわかれ、その組先には、各部将が馬を立てている。

火縄の火はチラホラしているが、一火の松明も点じていない。

それに、その夜の月影も、いと細く。

並木つづきに、七百の兵馬は、渚の波のように、静かに、黒々と、たゆとうていた。

「弥兵衛やい。――弥兵衛やい」

秀吉は、呼ばわりながら、将士の列のすぐそばを歩いて行った。並木の蔭なので、人影もさだかでない。わずか、六、七名をうしろに連れた背の低い小男が、竹の杖で地を叩いて通るので、小荷駄の組頭か――ぐらいにみな思っていたが――秀吉であったと気づくと、さらに粛となった兵馬が、彼のためにみな少しずつ馬蹄を避けた。

「あ。――弥兵衛、これにおります」

あなたの石段の下で、何か、一かたまりの人影へ向って、さしずをしていた浅野弥兵衛は、秀吉の声に気づくと、早口にそれを終って、こなたへと、駈け出して来た。

「いいのか。いいのか」

秀吉は、彼に、ひざまずかせる遑も与えず、こう性急に云って、

「――よかったら出かけい」

「はっ。よいのです。――では光泰、先に立て」

弥兵衛は、後ろへいう。

うしろにいた加藤光泰は、

「では」

と、山門のわきに立てていた金瓢の馬簾を預って、列の中へ持ちこみ、自身もすぐ馬上になって加わった。

秀吉はそれを離れた。そして小姓たち数名と、堀尾茂助、浅野弥兵衛、その他三十騎ほどの者に囲まれて、山門から揺ぎ出す兵列を見ていた。

貝を用うべきところであるが、貝の音も松明も戒めてあるものらしく、浅野弥兵衛が、秀吉から金采を受けて、秀吉に代ってそれを一颯、二颯、三颯――打ち振った。それを合図として七百の兵馬は、先頭から徐々行進し始めた。

列の首端は、方向を一転、道を旋って、秀吉の前を通って行く。――各隊先導の部将には、生駒甚助同三吉の父子、中村孫兵次、山内猪右衛門、木下助左衛門、弟の勘解由、小西弥九郎、一柳市助など、いわゆる中堅の旗本のみだった。古参老練の顔があまり見えないのは、その多くが秀吉の城地たる長浜、播磨、その他の占領地などに、なお残されているものと思われる。

こうして、その夜半。

秀吉の人数は、あたかも、秀吉も共に、その主隊にあるかのごとく見せて、清洲の城下を離れ、美濃本道をとって、一路、長浜へ立ってしまった。

また、当の秀吉も、その直後、同じくここを去ったが、扈従はわずか三、四十騎にすぎなかった。しかも道はまったく別方面をとり、わざと津島を迂回して、まし江、いもらの渡りなど、人も気づかぬ田舎をいそぎ、美濃の長松で一夜を明して、やっと長浜へ帰ったのであった。

同夜、いや、もう翌る日といってよい、払暁だった。

柴田勝家の宿所と、附近の玄蕃盛政の宿所などへ、どこから引き

揚げて来た兵馬なのか、霧や露に濡れびたった夥しい甲冑のなだれが、幾回となく隠れこんで、その後、市人の目を惧れるもののごとく、門をとざしていた。

「ぬかったのう、玄蕃」

「いや、ぬかりはなかったつもりですが」

「なかったということがあるものかよ。どこかに手抜かりがあったればこそ、せっかくな網の魚を、むざむざ取り逃がしたのであろが」

「だからこの玄蕃も、いわぬことではなかったでしょう。討つなら討つと、初めから堂々と鼓を鳴らして、彼奴の宿所へ襲せかけるならば、今頃はもう二人のあいだに、秀吉の首級を置いて見ていられたものを。……それをば、叔父上が、やたらに、密かに密かにとばかり仰せられ、この玄蕃の策をお用いなさらなかったゆえ、こんな無駄骨に終ったのでござる」

「若い若い。そちは下策を取っていう。わしは計の上策を思うのじや。――最上の策は、秀吉の登城を待って、一室に監禁し、罪状を云いかぶせて、詰腹を切らせる。……これに如く良計はない。ところが、夜に入って、細作（密偵）どもの告ぐるを聞けば、秀吉は急に宿を引き払って、帰国する気配あり、夜立ちの動き見ゆ――とのことに、これはいかぬと思い直し、万一、彼奴が夜のうちに清洲を離るるがごとき場合あれば、むしろ天の与え、無断当地を離脱なさば、その罪を鳴らすにも名分の立つことと、急遽、そちに伏兵の策をさずけて、途中において、彼奴を撃てといいつけたのじゃ」

「それがそもそも、叔父上の手落ちでござる」

「なんで、わしの」

「あの猿めが、こちらの思うつぼにはいって、御祝事の今日、登城するだろうなどとお考えになっていたのが、不覚のひとつ。二つには、夜に入って、それがしに、兵を伏せて途中で撃てとおさしずなされたはよいが、他の者にも、手勢をさずけて、本道以外の抜け道にも充分兵を配しておくべき当然な御用意が欠けていたのではございませぬか」

「たわけめが。――それくらいなことは、そちの一存でも、抜かるはずはあるまいと信ずればこそ、そち一名に申しつけ、他の将には、玄蕃の指揮によれとのみ、いうておいたのじゃ。……しかるに、本道のみに兵を伏せて、ついに秀吉を逸したことを、まるでわしの手落ちのようにぬかしおる。すこしは、己れの不つつかも省みたがいい」

「……ではもうこのたびは、玄蕃の失敗として謝りますが、叔父上にも、以後は余りに、智謀を弄す癖はお止めください。智を弄す者は、智に溺れる。またせっかくの機を逸しまする」

「なんじゃと。わしが智謀を弄ぶというのか」

「いつものお癖です」

「ば、ばかな」

「いや、世間でも、よく申しおりますぞ。――柴田どののお癖が出たといえば、又候、底に底があることのようにみな用心して」

「……」

白髪交じりの太い眉を重たげによせて、勝家はおし黙ってしまった。

日頃は、主従以上、親子以上、仲睦まじい叔父甥であったが、狎るるに過ぎて、ひとつ蹉跌が生じると、ふたりの仲には、威令や尊敬を持とうとしても持てなかった。

何しても、この朝の勝家の渋面といったらない。

〝複雑なる不機嫌〟さである。生理的には、ゆうべは一睡もしていないし――それもある。

玄蕃にいいふくめて、途中に兵を埋伏し、夜逃げの秀吉を急襲して、一挙に後の禍を絶ち、ここ腹いッぱい溜っている鬱を晴らせるものと、夜明け方まで、

（今か。今に）

と、首を長くしていた吉報が、やがて戻って来た玄蕃自身の口から、

（通ったのは、羽柴の家中だけで、秀吉のすがたはその中に見え申さぬ。――秀吉も居ぬ行列へ、不意撃ちを仕掛けたところで、獲るものはなく、却って、後日の不利と存じましたゆえ、むなしく引き揚げ申してござる）

とあったので、勝家は夜来の気づかれと共に、まったく心を腐らせてしまったものであった。

その揚句は、玄蕃にまで、「いつもの癖」だとか「智を構えてみずから智にやぶるる者――」だなどと、あげつらわれたのであるから、今朝の彼が怏々としてすぐれないのは無理もなかった。

しかし、そうしてはいられない。きょうは三法師の承祖披露の祝日である。朝飯後、一睡一浴して、勝家はまた暑くるしい大紋烏帽子を身にまとっていた。そして、たてがみ飾りをした馬に乗って城へ向っていた。

ひとたびは気を腐らせても、腐ったままでいるような柴田修理勝家ではない。きょうは曇天となって、暑さも一倍むし暑かったが、途上の彼のすがたには、さすがに、清洲城下の何物よりも高いような威風があったし、その面には胆汁質特有なあぶらが光っていた。

ゆうべは――

甲の忍び緒をしめ、鉄槍鉄砲を草むらに匍わせて、秀吉の生命を道にうかがった猛者どもも、きょうは烏帽子して、素襖、小素襖、天正袴などを美しく着つらね、弓は袋に、槍薙刀も鞘に、何くわぬ行装のもとに蜿蜒と城へさしてゆく。

柴田家ばかりでなく、丹羽、滝川、その他、諸家の列も、前後して登城していたことはいうまでもない。

きのうまで見えて、きょうのみ見えなかったのは、羽柴筑前の列だけであった。

「宿老。お待ちしていた。――筑州の代人として、老臣の大島雲八が、早朝より参って。――筑前守こと、病気のため、本日は不参とやらで、おわびの旨を三法師君へお届けに及び……柴田どのにもお目通りしたいとかいうて、最前から待っておるが」

滝川一益は、城中に勝家のすがたを迎えると、すぐそう告げた。

勝家は苦りきって頷いた。

念入りにしらばくれている秀吉よと、肚には怒りながら、彼もまた、とぼけた顔して、使いの大島雲八を引見した。

そして、秀吉の病気とは何病であるか――とか、急に帰国するならば、なぜ昨夜のうちにわが宿所へでも沙汰してくれぬか。さすれば自分もすぐ出向いて病状を見舞い、諸事打ちあわせも遂げたのに。……などと意地の悪い質問のみ発したが、老来、至って耳の遠い大島雲八には、その半分もよく聞きとれないらしく、

「はい。はい。……さればで。いかにもな」

何をいっても、馬耳東風である。そして独り合点を繰り返してい

るばかりの相手だった。

まるでのれんに腕押しである、とは思いながら、勝家は、表向き重大な使者に、こういう耄碌武者を向けて来た秀吉の底意にたいして、何とも業腹でならなかった。

いくらなじっても、なじりがいのない相手ではあったが、その業腹の余憤をもって、立ちがけにこう訊ねた。

「使者。——いったいおぬしは、幾歳になるのか」

「さればで。……はい」

「年をきいておるのじゃよ。——おぬしの年齢を」

「御意で」

「なに」

「ははは」

まるで揶揄されているような気がする。憤ツとした顔を雲八の耳のそばへつき出して、勝家は破れ鐘のような声でいった。

「汝は、今年、何歳に相成るか。——そのことを訊ねておるのじや」

すると雲八は、大きく何度もうなずいて、しかも暢んびり答えた。

「ははあ。それがしの年をおたずね給わってか。世に聞ゆるほどな武功もなく、お恥かしいことでおざるが、当年七十六になり申す」

勝家は唖然とした。

きょうの多忙を目の前に、しかも一日も晏如たるは得ない刻下にあって、こういう老人をつかまえて癇を尖らせていたことの何たる愚ぞや——と自嘲を覚えるとともに、秀吉にたいする敵意は、倶に天を戴かざる者とまで誓われていた。

「立ち帰れ。もうよい」

顎を振って、促したが、雲八は腰へもちでもつけたように落着きすまして、

「何ぞ。御返書でもあらば」

と、勝家の顔をおっとり眺めこんでいた。

「宿老はどこにおいでか。北ノ庄殿には、どこにおわすか」

そのとき誰やら、自分をさがしている声がしたので、勝家は、それを機に、

「ない、ないっ。返辞など、何もない。いずれ会うところで会おうと、筑州に伝えておけ」

云いすてて、廊下も狭しと歩いてゆく彼の大紋姿は、本丸の方へ去ってしまった。

大島雲八も廊下へ出ていた。老いの腰に片手をあてて勝家の影へ振り向いているのである。やがて独りげたげた笑いながら、これはお表の方へ歩いて行った。

その日、三法師の祝事は終った。

さらに、きのうに勝る盛宴がそのあとで催された。新君戴立の披露というので、席は城中の広間三カ所でひらかれ、人はきのうに数倍していた。座間、もっぱら話題にのぼったのは、羽柴筑前守こそ怪しからぬということだった。仮病をかまえこの大事な日に欠席するなど、言語道断、彼に真底からの忠なく信もなきことは、はやくも今日に見えたり——という者などあった。

勝家はみずからなぐさめた。

(秀吉が帰国したことは、考えようでは、却って、この勝家に有利であった)——と。

この紛々たる秀吉非難が、滝川や佐久間などの徒の作為から生じたものであることは、充分、承知していたが、勝家はなお、この空

気をもって、爾後の形勢を卜す上に、自己に有利なものとして、強いてひそかにほくそ笑むの小快感をむさぼっていた。

会議、月の忌、祝日と、多事な日がつづいたあと、清洲は、毎日の大雨だった。

諸侯のうちでも、細川、蒲生、池田などは、祝日のすぐ翌日、帰国の途についたが、爾余の諸侯は、木曾川増水のため、足どめにあい、

（きょうは？　明日は？）

と、霽れを待って、なお無為な日を宿所に過ごしているほかなかった。

が、この無為は、柴田勝家にとっては、あながち無意義でもなかったらしい。

彼と神戸信孝との間には人目立つほど日々往き来が交わされていた。

といっても、こう二人の頻繁な会合が、直ちに、政治的な意味をふくむものとは云い切れない。――なぜならば、今は勝家の愛妻として、世にかくれないお市の方は、いうまでもなく、故信長の妹であり、信孝には、叔母にあたるひとである。

しかも。――近年のことにはなるが――そのお市の方を説き、信長にも乞い、彼女を勝家の室へ再嫁させることに運動した者も信孝であった。こうして信孝と勝家とは、その頃からすでに単なる姻戚以上の関係にあり、いわば切っても切れぬ仲だったのである。

で、そう二者の往来が、二者のあいだに止まっているなら、世人も何らこれを疑う理由もあるまいが、ふたりの会合ごとに、必ずそこには滝川一益も加わっていることが記憶されるについて、

（また何のお顔寄せか）

と、意味ありげにそれを見、

（秀吉退治の相談が、ぼつぼつ進んでいるものとみえる）

などと早くも、不穏なうわさと、その実現が、この夏中にもあるようにいわれ出していた。

折も折、その月の十日に、滝川一益は、宿所の待月軒に釜をかけて、朝茶の会の招きを諸侯へ出した。

趣旨には。

頃来の長雨も霽れ、各　にも近く御帰国と思わるるが、兵家の常、またの再会はいつとも測り難い。先君をお偲びいたしながら、朝露のまに、粗茶一ぷくさしあげたいと思う。長い御滞在で帰途もおいそぎの折ではあろうが、御来駕を待ち申しておる。

――というのであって、至極、あたりまえな催しに過ぎなかったが、

（さては、密々の軍議でも？）

と、その朝の出入りには、特に清洲の人の目がそばだてられた風だった。

朝茶には、蜂屋、筒井、金森、河尻などが参会した。信孝、勝家のふたりは当然お正客であったろう。――しかしこの催しが、趣旨どおりな茶事であったか、密事であったかは、当日の主客以外、窺い知るすべもない。

同日以後、これらの諸将も、やがてみな帰国した。そして柴田勝家は、さいごの十四日夜、越前への帰国を発表し、十五日朝、清洲を立ったが、木曾川を渡って、美濃に入るやいな、自己の予感と、

途上の風説との一致に、愕然たる脅威にさらされた。

（垂井から不破の山間の通路を扼して、秀吉の精兵が長浜を出て、昨夜以来、勝家ござんなれと、待ちかまえている）

と、もっぱらな噂なのだった。宿駅でも聞くし、旅人もいうし、物見もそう告げて来るのである。

大物見

さきに、秀吉の帰国の途を襲おうと謀った勝家が、きのうと立場を逆にして、今日は自身の帰国に、薄氷でも踏むような途を、悒々と歩まねばならない羽目にいたっていた。

彼が、越前へもどるには、どうしても江州長浜を通らなければならない。長浜には、先に帰った秀吉がいる。秀吉がだまって彼を通すか否か？　――これは大きな疑問としなければなるまい。

（滝川一益の領地を通過し、伊勢から鈴鹿を越え、江州の西を廻って御帰国なされては……）

という意見は、清洲を立つ前からあったが、それでは、世上にたいして、みずから、秀吉を恐れるものと触れあるくようなものになろう。勝家としては忍び得ない恥だ。玄蕃盛政とてもとより同意するはずもない。

しかし事実の問題として、美濃路に入ると、面々は一歩一歩、

「彼方の山に、伏兵の気配はないか。彼処の煙は、敵勢ではないか」

と、前後に心を疲らせたり、情報の確かめられるまで行軍を駐めたり、隊伍を戦闘形態に改めたりなどして、寸時も、万一の変を思うことなくしては進めなかったのである。

ところへ。

秀吉の麾下らしき一軍が、不破附近に見えるといい、見たという噂なので、勝家以下、柴田幕下の輩が、馬上、身の毛をよだてて、

「来たか」

「――居るか」

と、ゆくてに待つ敵の量や策を想像して、忽ち、墨のごとき殺気にまみれたのはむりもない。

にわかに、揖斐川てまえの牛牧附近に兵馬を駐めた。そして勝家と幕僚たちは、村社のある林の中で、

――当るか。退くか。

を急に軍議した。

ひとまず退いて、あくまで清洲城と三法師を擁し、秀吉の非を鳴らして、諸侯を糾合してから堂々とそれに当るのも一つの対策。

また、ここにこれだけの軍勢はあり、何の鎧袖一触と、一気に蹴ちらして押し通るのも武門の快。

結果を考えると、前者は攻略戦に多く拠ることとなり、後者をとれば、即戦即決だ。――或いは一挙に、秀吉を挫き得るかもしれぬ代りに、味方にとっても、万一の敗れなしとはいえない。

なぜならば、関ヶ原以北の嶮隘な地形は、埋伏して待つものにとっては甚だ都合がいい。加うるに、いったん長浜へ引き揚げた秀吉の手勢は、きのうの如き寡勢でないことはもちろん、江南から不破や養老地方には、小城、土豪、散在のさむらいどもまで、羽柴家と気脈のある者が多く、柴田家に縁故の者といっては稀れである。

「どう思案するも、ここで秀吉に当るのは、策を得たものではない。彼奴が、一日早く帰国したのは、この有利に立つためであったのだ。

その注文に乗って戦う不利を敢えて冒すべきではない」

勝家や老臣の考えはこれに傾いた。それにたいして、玄蕃盛政は、あざ笑った。

「それ程、秀吉が恐いかと、世の笑いぐさになるのもお覚悟ならば、左様になさるがよろしかろう」

いつの軍議の場合でも、退くという意見は弱い。進むという意見は強い。結果の如何をべつにして、その場の気勢において、一方は消極に見え、一方は積極に見える。

殊に、玄蕃の意見は、幕僚を左右する力があった。彼の比類なき武勇、一族中の地位、それに勝家の寵というようなものも言外に作用する。

「一矢も交えず、敵を見て退くなどということは、柴田家のお名折れでしょう」

「まだ、清洲から立たぬうちなら、ともかくのこと」

「玄蕃どののいわるる通り、ここまで来て、引っ返したと聞えては、末代、世上のわらいぐさだ」

「一戦の上で、退くまでも」

「なんの、猿の手下どもが」

若い武者輩は、口をそろえ、玄蕃のことばのあとから玄蕃を支持した。

ひとり黙って、口を発しなかったのは、毛受勝助家照ぐらいなものだった。

「勝助は、どう思う」

めずらしく勝家が彼に意見を求めた。——日頃、玄蕃のようでなく、何となく主君から疎まれていることを知っている勝助は、常に口数を慎んでいるふうであったが、このとき、

「されば、玄蕃どのの御意見、至極と思われます」

と、神妙に答えた。

血気はみな、戦意に燃えている中で、若いくせに、水のように冷やかでいる勝助の容子は、勇に乏しく、ただこの場合、ぜひなくそう答えたように見えた。

「勝助までが、左様にいうなれば、玄蕃の意にしたごうて、このまま、押し進むといたそう。——が川を打ち越えたら、直ちに、大物見を出し、うかつに、道を急ぐな。足軽多くを先に立て、槍隊をすぐ続かせ、鉄砲組は、後陣の先へ置け。——伏兵の起る際は、得て、鉄砲は近すぎて、咄嗟の用にはたたぬものよ。——敵ありと、大物見の合図あらば、すぐ押太鼓を鳴らし、寸毫乱れをみせるな。組頭どもは、勝家が麾の手もとに眼をあつめよ」

方針はきまった。

人数は、揖斐川を渡り出した。

何事もない。

赤坂方面へとなお進む。

敵影まだ見ず——である。

大物見（斥候隊）は、ずっと離れて、垂井の宿附近まで出ていた。この辺にも何の異状も認められない。

旅人が来た。

怪しいと見、すぐ物見の一兵が駈けて、つかまえて来た。物見頭が脅して訊ねた。旅人は、何でもしゃべった。脅したのが張り合い抜けするくらいである。

「羽柴様の御人数を途中で見たかと仰っしゃいますので。……へい、

たしかにお見かけいたしました。今朝早く、不破の辺で。——それから、自分は遅れて、たった今、垂井を通って来ましたが、垂井の宿は、先に行った羽柴様の人馬でいッぱいでございました」

「人数は、どのくらい？」

「わかりませんが、何百という御同勢で」

「何百？」

物見は、顔を見合わせた。その男を突っ放して、すぐこれを後方の勝家に伝令した。

案外な——と思われた。敵は余りにも小兵力だからである。為に、なおさら危惧されたが、騎虎の勢いだ。押せと、行軍をつづけて行った。——時に、彼方から羽柴家の使番がただ一騎でこれへ来るという報らせがあった。

やがて近づくを見れば、その一騎は、甲冑の武者ではなかった。紗の摺箔の小袖、藤色の天正袴、手綱まで装いをこらし、目を奪うような姿の若者であった。

「御案内をいただきたい。それがしは羽柴秀勝様の近侍伊木半七郎です。——お使いに参りました。北ノ庄殿の御前まで」

途上、はたと出会った大物見の武者たちへ、駒の上から会釈して、半七郎はもう駈け抜けてゆく。

大物見は、あっ気にとられた。物見頭ひとりが、何か狼狽した声をかけながら、半七郎の駒の後を転ぶように追いかけた。

柴田勝家と幕僚の一群は、

「何者か」

と、猜疑の眸をあつめて自己の陣列にこの若者を迎えた。

眼前に、一戦は必至と、われとわが殺気に昂ぶり立っていたところだけに、駒を降りて楚々、慇懃な礼をしつつ、静かに進んで来た伊木半七郎の優美な身なりが、あたりの鉄槍や火縄のにおいに比して、妖しいもののようにまで眼をひいた。

「丹波殿の近侍というはまことに解せぬが。——ともあれ、連れて来い、会ってみよう」

勝家は路傍の雑草をふみこえて樹蔭の下へ寄った。そこへ床几を置かせ、物々しい麾下の——いや彼自身の硬ばった緊張をも一先ず潜めて——

「何事のお使いかの」

と、さあらぬ容子を使者に示し、その使者へも、まずと、床几を与えた。

「この暑中、遥かまでの御帰国、おつかれでございましょう」

半七郎の言は、まるで平時の挨拶であった。そして、紅の紐で、胸に懸けていた文筥をとり外し、

「筑前守からも、よろしくとお申し伝えでございまする。なお、詳しくは、御書中に」

と、勝家へそれを手渡した。

勝家は疑って、なお書面はすぐ披きもせず、まじまじと半七郎を見てたずねた。

「お身は、丹波どのの近侍と申すが」

「はい」

「丹波どのには御健固かの」

「おすこやかにいらせられまする」

「御成人なされたろうな」

「はや、十五歳にお成り遊ばされます」

「ほ。もうそうならられるか。——早いものよな。久しゅうお目にかからぬで」

「今日は、お父君のおいいつけを奉じ、垂井の駅までお迎えに参られておられまする。後刻、お宿において悠々お話し下されませ」

「な、なに……？」

勝家は、吃った。

床几の一脚が、小石を噛み外して、彼の重い体と一しょに、心までを、がたと驚かしたのであった。

いうまでもなく、羽柴丹波守秀勝は、信長の子の末のほうの一男だったが、幼いうちに、秀吉が乞うて、養子としていた者である。

「迎えにとは、誰を？　……。誰をな？」

勝家は訊き直した。

「もとより、あなた様を」

半七郎は扇面を顔にかざして笑った。相手の瞼や唇が余りに複雑な痙攣をしてやまないので、微笑を悩えきれなくなったものとみえる。

「わしをな？　……この勝家を迎えにとな」

勝家は唸きつづけていた。

「まず、御書面を。——御一見くださいませ」

半七郎は、促した。

茫然たる余り、勝家はそれをすら、手にしたまま忘れていた。

「いや、そうか。……ウム、ウム」

何か、わけも分らぬ頷きをくり返した。勝家のひとみは、文字を辿り出すと、なおさら心理の変化を、露骨にまで、顔じゅうに湛え出した。

書面は、秀勝からではない。まぎれなき秀吉の筆だ。そして、率直に、こういっている。

——江北から越前への道すじは、度々、お通りの地で、御不案内はなかろうと存ぜられるが、このたびのみは、養子の秀勝を、御案内にさしむけた。

とるに足らない世間のうわさであるが、わが長浜が、尊公の御帰国の足もとを取るに絶好な要地にあるため、世上とかくの臆測が撒かれておるらしい。そういう卑劣な風説を打ち消すために、養子秀勝を、お迎えに上げたが、これを取って、質子と召され、安心して、御通過をねがいたい。

一夕、長浜で酒茶でもあげたいが、あれ以来、筑前事なお病中にござれば、御道中のおつつがなきのみを、蔭ながら祈り申しておる。

使者のことばといい、またこの書面といい、勝家は自分の猜疑や小心をかえりみずにいられなかった。何か、あんぐりと、秀吉の腹のなかへ呑まれたようなここちもする。——が、ほっとした。正直、ほっとした思いである。彼は以前から策略家と観られて、何かやるとすぐ「また、柴田どののお癖が出た」といわれるほど陰謀に富むかの如く定評されているが、今、こんなときの感情をさりげなくつつむことすらしないほど事実は正直者であった。——こういう性情は、死んだ信長がよく見ぬいていて、その勇も、その謀も、その正直さも、みな勝家の特徴として巧みに使いこなし、北陸探題の重任をも、多くの将士をも、また宏大な領土をも授けて、もって、充分な信頼をもかけていたものなのである。——最もよく己れを知ってくれていたその主君も今はなしと思う彼の心事には、もはや本当に

信をつなぎ得る者はたれもないような気持でもあった。

ところが、今ふと、秀吉の書面にふれて、彼は、この日までの、秀吉に抱いていた感情を、一瞬、まったく覆された。すべては自分の邪視と、小心によるものだったと、正直に反省した。そして、

（故君のないこの後は筑前守こそ、信じあってゆける男だ）

と、偽りなく考え直した。

この考えは、その夜、垂井の駅で、親しく秀勝に会って、楽しく語り、また翌日、秀勝とともに、相携えて、不破を越え、長浜の城下を通るまでも変らなかった。

――が、その長浜で、自己の重臣たちを添えて、秀吉の城門まで、秀勝を送り返してからすぐ後になると、ふたたびぐらつき出していた。

というのは、秀吉はもうとく長浜にはいないことが分ったからである。秀吉はあれ以来、京都へ上って、中央の枢機で大いにうごいている。また、山城の宝寺の城をも大改築にかかっているなど、勝家の耳には毒のような取り沙汰が、頻々、聞えて来たからであった。

（かくては、またも秀吉にしてやられん）

と、彼は忽ち元の焦躁に返って、さらに帰路を急いでいた。

大五と書け

七月の下旬。

秀吉はかねての約束を履んで、長浜の城地を、柴田側へ明け渡した。

柴田側でも、その際、秀吉から付せられた条件を履行して、秀吉の希望による勝家の養子――柴田勝豊をそれへ入れることにした。

勝豊は、養父の命によって、越前坂井の城から、長浜へ移った。

なぜ秀吉が、

（勝豊を入れるならば、長浜を譲ってもよい）

と、清洲会議のときに言明したかを、愚かにも勝家は、まだ気づかずにいたのである。

いや、勝家ばかりでなく、その周囲も、世間一般も、何らこれを異として、ふかく秀吉の心事を窺ってみる者はなかった。

そのくせ、次の事実は、およそ柴田家の一族で、心ある者どもは、みな憂いていることだった。

（御養父と御養子とのお仲が、あのようにお冷たくては、柴田家の末も案じられる）

勝家には、もうひとり、ことし十六になる養子があった。

柴田権六勝敏だった。

情愛にも、日常の感情にも、とかく偏しやすい性格の勝家は、

（勝豊は因循で、はきはきせぬやつじゃ。子のような気心がせぬ。それにひきかえ勝敏は、邪気もなく、飽くまでわしを父としてよう馴つきおる）

これを、口にもいうのである。

けれどなお、その気に入りの勝敏にも増してもっと偏愛していたのは、甥の玄蕃盛政だった。

玄蕃を愛することは、甥とか子とかいうものを越えて、

「甥めは、わが家の至宝じゃて――」

と、その凡情に溺るるような傾きさえあった。

従って、玄蕃につながる弟の久右衛門安政や三左衛門勝政などまで、よく目をかけて、まだみな二十五、六の若さであるのに、各へ要地の一城一城を持たせていた。

これらのお覚えめでたい鍾愛の親臣中にあって、ひとり養子の勝豊のみは、養父からも忌まれていたし、佐久間兄弟からも冷やかに視られていた。

或る年の正月のごとき、親臣の輩が揃って勝家の前に年頭の祝いをのべに出た際、勝家から最初の盃がさされたので、勝豊は、当然、自分に向けられたものと思い、

「お盃、めでたく戴きまする」

と、謹んで膝を進めかけると、勝家は膠なく手を逸らして、

「そちではない。――玄蕃、受けい」

と、彼へ先に与えて故意に、勝豊を後にさし措いたりなどしたこともある。

このことは、勝豊の不平として、外部へまで洩れていたから、他国の隠密なども耳にしたろうし、従って、秀吉なども這般の消息には通じていたにちがいない。

その柴田勝豊へ、長浜を譲り渡すためには、秀吉は事前に、従来ここに住ませておいた家族たちを――老母や寧子などを主とする家庭の老幼を――他へ移さなければならなかった。

「冬も暖かいし、内海の魚もある。しばらくは、姫路がよかろう」

と、秀吉のさしずに、老母や彼の妻は一家をあげて、播磨の持城へと引き移った。が、秀吉は行かなかった。この間、寸暇もなかったのだ。

山州宝寺の城を彼はしきりに改築していた。山崎合戦の際には、光秀が牙城としていたところである。ここへ母や妻を入れなかったのも、彼には深慮のあることだった。

山崎の宝寺城から、彼は隔日のように京都へ出向いた。帰っては、工事を督し、出ては中央に政務を見ていた。

皇城の守護も、市政も、地方の経綸も、彼はみずから身をもって任じていた。

本来、清洲会議での決議では、ここの京都政治所の閣臣は、柴田、丹羽、池田、羽柴の四人がひとしく庶政を宰することになっていて、決して、秀吉のみの中央舞台ではあり得ないのであるが、柴田は遠く越前にあって、もっぱら地方的勢力の結集と、岐阜や伊勢やまた、神戸信孝などと何やらの暗躍にせわしく、丹羽は坂本の近くにあっても、これはすでに秀吉に一切を一任のかたちでいるし、池田勝入は軍議ならともかく、庶政とか、公卿づきあいなどは、

（本来、わが才に非ず）

として、名目はあっても、関わらざるを潔しとしているような風であった。

その点では、秀吉は実に器であった。

生れながらの彼の能は、何よりも経綸にあったのである。今なお世人は彼を目するに武将として観ていなかった。

本来、戦は彼の本技ではない。しかし戦は経綸の車軸であることを知っている。いかなる大理想をかざそうと、戦にやぶれては、その大経大綸も一尺として進み出さないことをよく知るところから、彼は、戦に絶対を賭し、ひとたび戦陣を展けば、権化となって、戦いを戦い切るのであった。

京都は盆地の小山水に過ぎない地だが、政治的には、全日本を俯

瞰するに足る所だし、思想的には、草莽の心の根という根は悉くここにつながっており、ここを根としていない家々なく華々なしである。

なおまだ、一介の奉公人にすぎなかったが、秀吉は、京都政治所でする日々の時務が実に楽しかった。忙しければ忙しいほど楽しまれた。その頃、彼が左右の者に、

（この筑前にも、時来って、ようやくほんとうのお勤めが与えられて来たようであるぞ。お汝らも心せよや）

と、本懐のほどを洩らし、同時に側臣たちへも精勤をうながしたとのことであるが、春潮盈ちて船出を想うような彼の心事は、まさに、成るも成らぬも、われ世に会せりとして、時代に結ばれたる身のいのちを、今さらのごとく驚歎の眼で省みていたにちがいない。

従って彼の部下も京都にあっては著しく人品を磨いていた。いやしくも恥あるを行わなかった。時務は私心なくきびきび決裁した。箇々が小秀吉のごとく明朗だった。わけて皇城の守護には、誇りをもって任に当った。

朝廷は、彼の武勲を賞して、右近衛中将たるべしと御沙汰あらせられた。彼は寸功を顧みて拝辞した。が、かさねて優渥なお沙汰を賜うて、従五位下、左近衛少将に叙任せられた。

よいことをする人間と見ると何か悪いけちをつけたがる。正しく働く者にたいし、卑屈な働かぬ者が何のかのとあげつらう。

いつの世にもあることだ。大きく世の変動しているときは特に清濁の飛沫もはげしい。

「秀吉は早や専横を現わしおる。部下どもまでが、権をとって」

「柴田どのをさし措き、他の奉公人など、有るか無しじゃ」

「きょうこの頃の羽振を見れば、まるで、信長の相続者は、筑前にて候といわぬばかりな……」

翁然として、非難は彼を中心に喧ましい。――が、誰がという、火元の弾劾者の知れないのも、こういう場合の常である。

聞えても、聞えなくても、秀吉には頓着がない。そういう陰性の声は彼の多忙な心はおろか茶間の耳を傾けさすにも足りなかった。

何しても忙しいのである。

六月、信長逝き、中旬、山崎に戦い、七月、清洲に会し、下旬、長浜を撤去し、家族を姫路に移し、八月、宝寺城の工を起し――この間、京都政治所と山崎とのあいだを隔日に往来しつつ、朝に禁闕に伏し、昼に市井を巡察し、夕べに庶政を見、答使を発し、賓客を迎え、夜半の燈下に遠国の文書を閲し、払暁、部下の訴えに裁決を与えて、飯を噛み噛み一鞭またどこかへ出かけてゆくというような毎日だった。

行く先も頻りと多い。

公卿の第宅、会合、視察、そして近来は、紫野へと度々出向く。そこでも尨大な工事をやらせていた。寺である。大徳寺の地域のうちに、新たにもう一寺を興しているのだった。

「十月の七日までぞ。八日には掃除片づけを終り、九日には式事一切の調えをすませ、十日の朝方には何もすることないようにしておけや」

蜂須賀彦右衛門と弟の羽柴秀長にはかたくこういってある。何の工につけ、期限は二言とないものだった。

やれ、といわれたら、否といえず。はい、と受けたら、爾後の云い訳はゆるされない。

秀吉のすがたが見えても、ここの奉行や督励している侍たちは、彼をふり返る者もない。また、何千の木工、土工、左官、石工、あらゆる工匠や人夫たちも、一顧しているすきもなかった。

秀吉は、かんな屑を、足にからませながら、そこここと、木の香のあいだを一巡し、

「できる。できる」

独りつぶやきつつ上機嫌に馬へ移って立ち帰ってゆく。帰るや否、そこにも訪客や政務や――また、今とりかかっている総見院建立と、故信長の葬儀準備の用向きが山積して待っている有様だった。

「由己。はようせい」

「はい」

「認めたらすぐ、使いを走らすのじゃ。文言はざっとでよい。はやく書け」

「はっ」

祐筆の大村由己は、今、秀吉の口述をうけて、一書を代筆していたが、ふと、醍醐という文字をどわすれして、頻りと、筆の穂を噛みつつ思い出そうとしていた。

秀吉は焦れったそうに急いていたが、横からのぞいて、それと知ると、

「由己っ。何しているか」

と、寝ている者でもよび起すように、

「大五と書けやい」

と、呶鳴りながら、手をもって、虚空へ大きく、大の字と、五の字を書いて見せた。

大村由己は、驚いた。

醍醐と、大五では、まるで字がちがう。

宛字にしても、ひどすぎる。醍醐を――大五と書いたのでは、てんで意味をなさないではないか。そう思った。

「……は。恐縮にござります。……がそんな文字ではございませぬ。どわすれいたしましたのは」

「何をまだ。……これ由己。そちが先程から眉をしかめて思い出そうとしているのは、だいごと申す文字であろうが」

「御意で」

「じゃからよ――」

と、秀吉は、ふたたび指をもって、空間へ手習いするように大きく書いた。

「大五と書け。それで分るではないか」

「……はっ、はい」

ぜひなく、急かれるまま、由己はそう書いて、代筆の書翰を終り、秀吉はすぐ、それを小姓の手から、使番に持たせて、公卿の邸へ走らせてやってしまったが――由己は何とも後味が悪くて、

（さだめし、あの手紙をうけた人は、無学にも程があると、嗤っているだろう）

とか、

（祐筆ともある自分が、いかにも物を知らないようで、末代まで恥かしい。何とかして、あの手紙をもらい戻して、焼いて捨てたいものだ）

とか、いつまでも、恋々とこだわって、気にかかる顔をしていた。

秀吉はたくさんな客に会い、また以来不沙汰の毛利家へ、その夕、使いを出したりしていたが、煩事一掃のあと、やっと由己をあいて

に一※の茶をのみながら、

「どうした？　由己」

と彼のすぐれない顔つきを質した。由己も、こういう時ならと、彼の気色を察して、先刻の、無茶な宛字の愚痴を述懐すると、秀吉は、途方もない声して、いつまでもおかしがった。

「なんじゃあ？　祐筆の身として、あのような無学な書面が残っては恥になると。……ははは。由己よ、そちでも、自分の筆蹟が、千年も世に残ってゆくと思うておるのか。安心せい、お汝あたりの筆では、まず百年も世にあるまい。おまえが生きている間だけでもどうかな？　……よくしたものぞ、世は滔々と、無用の文字は塵に流して余しはせぬよ」

そしてまた、云った。

「お汝らのように、醍醐とは、こう書いたやら、ああ書いたやら……などと首をひねったり、筆の穂をなめたりして、この多忙な一日を暮していては、何と、今日のように、日月も世情も、車輪のごとく早く移り変りゆく時勢にあって人寿一代の限りある身をもち、いったいどれほどな業ができると思いおるぞ。秀吉には到底、そんな暇はない。――醍醐と書くべきところを、大五といたしても、たいがい、書面をうける方の者には、読み心があるゆえ、用向きの見当はつくであろう。……それでいいのだ。今の世はな」

「なるほど。承れば、まことにごもっともで」

「苦しゅうない。あれでいい。――見ろ、もう最前の使いが、どうやら返辞を持って帰って来たらしいぞ」

こんな日常の心事だった。大村由己はまもなく、故信長の葬儀を紫野に執行のため、織田有縁の近親や諸州の遺臣に、その期日参列の場を報ずる会状の代筆に多忙を極めた。

むらさき野

何か盛儀が行われれば洛中洛外は賑わい立つ。そして労銀が下層にまでゆき渡るほど、町々の灯や炊煙にも、庶民の謳歌があらわれてくる。

この秋。紫野において執り行われるという故信長の葬儀と十七日の大法事は、どれほど貧しい者たちに、事前の布施となったかしれなかった。

六月以来、本能寺、山崎と打ちつづいた戦乱に、家を失い、職に離れ、なお屋根も壁も持たない人がたくさんいた。

討ち洩らされた明智部下のうちには、領主の代った丹波へ逃げ帰るよしもなく、すがたを変えて、市の裏や橋の下に、日の目も見ず、流民となって潜んでいる者もなお少なからずあった。

捕え尽すはいとやすいが、秀吉はそこまでの詮議だてはしなかった。光秀の首級ひとつに一切の解決を負わせ、時の彼方に投げやっていた。のみならず、戦後の窮民とそれらの者をひっくるめて、これに、更生の仕事を与えた。

総見院建立と、信長の葬儀とが、それだった。

「これも、御供養のひとつ」

と、彼はひとり呟いた。

信長の攻めるところは草木も枯れる――と恐れられたその人の冥福の営みをいまなそうとするに当って、秀吉はみずから、故主信長と自分との性格には、戦をするにも、経綸を行うにも、必然な相違

があったことを、あらためて思いみずにいられない。

近頃、世人はややもすると、秀吉のやり口を評してこういう。

（筑前は、何事にも、信長の手口を真似、信長の行き方を、師として習んで、やがてその相続者となろうとしている）――と。

これは、秀吉の耳に、おかしかった。

信長があるうちは、信長は主君である。どこまでもその性格に副い、指揮に従い、日常も呼吸をあわせて、大道一貫の歩をそろえていたのは当りまえである。――が、すでにその人亡き今日、何ぞ先人の規矩にとらわるるの要あろうや――である。秀吉にはおのずから秀吉の資質がある。信長の長所に習ぶところあったにしても、それすら彼というべつな器に入って新たな経綸として現われてくるものは、まったく信長的な戦法や施政とはその趣を一変していた。どこまでも秀吉独自のものだった。

（まず窮民に仕事を）

と考えたことも、秀吉が、かつては、その窮民の子であった思いが、すぐ施策にも出たのであるし、なおまた、みすみす旧明智党の組子と知れている流離の者をも、大法事の工事に使うなどという寛度は、到底、信長には見られなかったところである。

かくて、紫野の工はすすみ、準備もほぼ調い、祐筆大村由己の手から、同日の招き状は、諸国へ発せられていた。

故信長の近親者はもちろん、清洲に会した日の宿老以下諸大名への招きも漏るるところなかった。そのほかおよそ有縁にして主なる公卿、武門、町人、諸職にまで、案内状はゆきとどいた。

が、秀吉は、近親であり宿老であるからとて、特に、鄭重なとか、或いは執拗な書状などは出さなかった。それらの人々には、来るもよし、来らざるもよし、としている風に見えた。

果たして、風当りは強い。

不参か参列かの返辞もない代りに、柴田勝家からは長文の抗議が来た。神戸信孝からも嫌味たっぷりな書面が来た。共に、大不満なのである。

秀吉には、要意がある。こんどのことも、柴田や信孝へたいして、決して、唐突に参列の通知を出したわけではない。

事前に、養子の秀勝の名をもって、書面で相談はしてあった。

けれど、勝家も信孝も、

（於次ごときが、何の小才な）

と、返辞もせずにいたのである。――於次丸とは、秀勝がまだ信長の第四子としていた頃の幼名である。功労を経た宿老勝家の眼からも、ずっと兄の信孝の眼からも、秀勝はまだ乳くさく見えた。おかしくて――と、それに真面目な返書もせずに打ち捨てておいたのもあながち無理でない点もある。

殊にまた。

この九月から十月にかけては、勝家にとっては、多忙な吉事があった。そのよろこびにも取り紛れていたのである。

お市御料人は、かねてからもう甥の信孝の斡旋で、北ノ庄へ再嫁することに内輪はきまっていたが、先夫浅井長政とのあいだに生していた三人の子もあるので、身がらはなお織田家のうちにおいていた。

ところがここ四囲の情勢は、勝家と信孝との、両者の緊密を急速に強化するの必要にも迫られ、かつは、世上にたいしても、この際、公然と、

（柴田殿こそ、故信長様も、生前よりゆるされていた妹聟である）

ことを一度盛大な華燭をもって披露するも急務なりと考えられて来た。その結果、曠れて輿入をとにわかに、お市御料人の北ノ庄入りの盛儀が運ばれ出していたのである。

小谷の城の落ちた年からすでに十年になるが、お市の方はまだまだほんとうに美しかった。年も三十四、五でしかない。まだ信長の生きていた頃から、世間では、しきりと、その人を、勝家と秀吉とが恋い争っているなどと、あらぬ噂をもしたものだった。が、それほど彼女の容色が時人に記憶されていたのは事実である。

けれど、当のお市御料人の胸としては、何としても、気がすすまなかったはなしであったにちがいない。それをしも拒みきれない環境の中にある彼女でもあった。兄の信長のない後はなおさら自分の意志は口にもいえなかった。信孝は初めから勝家のために運動していたが、今では自己の将来の計として叔母を用いる気になっていた。清洲会同の以後、彼や勝家も、策謀連携の往来に寧日なく、勝豊を長浜へ入れたり、滝川ともしばしば会ったり、何かと心忙しかったが、信孝はその中で、同族のことばや四囲の事情を措いて、どしどし事を運んでしまった。十六になる長女の茶々をかしらに女の子のみ三人を連れたお市御料人は、それこそ、王昭君の遠きへ行く日にも似るかなしき綾羅錦繍につつまれて、五彩の傘輿は列をなして北越の山をこえ、九月には、すでに北ノ庄の館に入っていたのである。

老木に花が咲いたように、五十三歳の聟殿は、国中の被官を連日招いて、披露の祝宴に満悦を見せていた。——こういう折に、羽柴家の一養子たる於次秀勝から、紫野に一寺の建立と、故右府の法事の相談が書面で来たのである。つい怠ったまま打ち過ぎてしまったのもむりはない。

しかし、十月に入り、重ねて今度は、秀吉が名をうたっての正式の招き状に接してみると、

（これは黙視できぬ）

と、彼は事の重大と、瞋怒の焔にわなないて、烈しい抗議の一書を、秀吉へぶつけたのであった。

歳月は人間を対象として流れてはいない。

が、人は往々、歳月をあてにして歩む。

あだかもいつも歳月は味方のような片思いを抱いて。

雲無心。歳月の光輪響輪もまた、大虚の車に過ぎない。

だが、同じ歳月を同じ時代のもとに持って、これを、どう用いるかは、人々の意志によるのである。ここに生態の分野が生じ、人間社会の隔差ができ、興る国、亡ぶ国、——千載までの歴史も、天地間一瞬のまに、決定づけられてゆく。

とかくして、十月だった。

勝家がそれまでに用いた日数と、秀吉が費やして来た日数と、天は同じ運行のもとに施与していた。本能寺の日から指折っても、まる四カ月。——清洲の会合からすれば、まだわずか百日たらずの歳月でしかない。

しかも両者が、その歳月をもって、自己の上へ具顕して来たところの差は、今日——十月半ば——余りにも大きな差を結果していた。

即ち。秀吉が主唱し、また全力を傾けて実行した信長の大法要は、やがて、全日本の耳目をあつめ、

（彼こそ、右府の遺業を継ぐ人と見ゆる）

という印象を与えたばかりでなく、ひいては中央の庶政も、秀吉を措いては行われないような感じを民心の中にふかく植えこんでいた。

この点、勝家がその権翼の拡大を、以後、同列の宿将や、織田家との婚姻による緊密化などに恃んでいたのとは、雲泥のちがいであった。秀吉が対象としていたものは、丹羽長秀でもないし、池田、細川、筒井の輩でもない。いわんや織田信雄や女子供の遺族達でもなかった。実に民衆であった。彼は百姓の子だ。土と熱を知りぬいている。

その月、十一日から十七日にわたって行われた紫野大徳寺の法要が、言語に絶す大規模なものであって、荘厳万華の大光演を極めたのも、単に、彼の大気や亡主を慕う真情の溢ればかりではなく、民衆をも会葬者とみなし、民衆にも親しく見せ、この善奉行を、衆と共にするという彼の大布施心によるものであった。

――十一日より御わざ始まり、様々に尊き限り尽し給ふ。十刹の僧ども経を捧げ諷経をなせり。十五日には野辺の送りの御わざ始まり、蓮台野には火屋れいがん堂など厳めしく作り、竹垣をゆへり。大徳寺より道の警固きびしく、武士どもかためたり、弟美濃守秀長奉行をなせり、棺槨のよそほひ金繍をかざり、玉の瑶珞をかがやかせり。轅のさきは、池田古新（輝政）あとをば次丸（羽柴秀勝）これを舁く。

「豊鑑」の筆者はその日の模様をこう記している。

「惟任退治記」にも、

羽柴小一郎、警固ノ大将トシテ、大徳寺ヨリ千五百軒ノ間、侍三万バカリ、道ノ左右ヲ護リ、弓箙、槍鉄砲ヲ立テ、葬礼ノ場ニハ秀吉分国ノ徒党ハ云フニ及バズ、諸侍、悉ク馳セ集リ、見物ノ輩、貴賤雲霞ノ如シ――

と、叙し、輿の轅は輝政と秀勝。信長の位牌は、秀吉自身が、それを持ったことを明らかにしている。

正親町天皇には、この機会に、臣信長へ、従一位太政大臣を、贈位贈官あらせられた。

また、宣命を賜うた。

即ち、謚して

総見院殿大相国一品、泰厳大居士

という宣名のうちには、故信長にたいして、

〝惟朝の重臣、中興の良士なり〟

との勿体ない詔旨が宣らせ給うてあった。これを拝し、泉下の信長は、望外の光栄と身の本分に泣いたであろう。

善不善、凡非凡、人間としての信長はどういわれようと、彼の弓矢は、まさしく九重の御階に立ち匂い、彼の臣子一片の忠誠は、はしなくもこのありがたい宣に浴して、千載、国土とともにあるものとなった。

あわせて彼は、父織田信秀の、皇室中心の祖承をも完うしたものといえよう。まぎれなく、忠誠と臣道において、織田父子も、二代をかけた。信長は父逝く日まで、父にひとかたならぬ心案じをかけていた不孝の子であったが、今日、その父へも、大孝の子となったのである。

四十九年ノ夢一場

威名什※カ存亡ヲ説カン
請フ看ヨ火裡の烏曇鉢
吹イテ海花ト作ッテ遍界ニ香シ

これは笑嶺和尚の偈である。

大葬礼の式場は、百二間の火屋霊堂のうちに執り行われた。五色の天蓋は目にきらめき、千万の燈明は星に似、沈木のけむりは、幢旛の翻るあいだから流れひろがって、数万人の会者のうえに、むらさきの雲を作していた。

僧侶だけでも、五岳の碩学、洛中洛外の禅律、八宗の沙門、余す者なく集会して、九品の浄土、五百阿羅漢、三千の仏弟子、目前にあるがごとし——と当時の目撃者はその状況を誌している。

諷経、散華などの式のあと、さらに禅門各大和尚たちの、起龕、念誦、奠湯、奠茶、拾骨、——などこもごもな礼拝が行われ、さいごに宗※笑嶺和尚の、偈辞が読まれ、笑嶺が満身から、発した——喝つ——の大声に一瞬、寂とし——また仏音楽の奏せられるあいだに、蓮華降り、香木薫じ、会者は還り巡りつつ、順次、焼香をささげていた。

が、その会者の中に、ぜひいなくてはならないはずの、織田近親者の半分は来ていない。第一に、三法師も見えなかった。信孝も列していない。柴田、滝川、その他、彼も見えぬ、誰も見えぬ、と思い出される当然な顔がたくさんに欠けていた。

それらは悉く、無視と黙殺をもって、すでに秀吉へむかって、抗争の布陣をあきらかにしたものと誰にもすぐ感じられた。

（このままでは治まるまい）

という思いは、期せずして、大法要の十七日がすんだ直後の人心に残されていた。

近畿の諸将はあらかた会し、毛利輝元も代参を上せているが、柴田勝家翼下の前田、佐々、金森、徳山の諸将、また神戸信孝一類の滝川以下、みな云いあわせたように、上洛もしなかった。とりわけ無気味なのは、徳川家康の存在であった。いや彼の意中である。本能寺以来、まったく特殊な位置に拠って、この時流奔々たる外にあった彼の意志ばかりは、白眼、今日をどう観ているのか、誰にも皆目、推し測る材料がなかった。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（八）」吉川英治歴史時代文庫、講談社
1990（平成2）年7月11日第1刷発行
2009（平成21）年2月2日第20刷発行
初出：太閤記「読売新聞」
1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日
続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙
1949（昭和24）年
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。
入力：門田裕志
校正：トレンドイースト
2016年3月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記
第八分冊

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　吉川英治
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/